

デトロイト総領事便り

在デトロイト日本国総領事館

総領事 片山和之

2013 年 9 月 - 2015 年 8 月

The Consulate-General of Japan in Detroit
Detroit, MI
August 2015

デトロイト総領事便り

私は、2013年9月から2015年8月まで約2年間、在デトロイト日本国総領事として、その管轄地域であるミシガン及びオハイオ両州と日本との経済、政治、文化、広報、教育、領事そして各方面の人的交流拡大を促進するため努力してきました。1993年に総領事館が開設されて以来、私は第10代の総領事に当たりました。日本の外交政策や基本方針を、これら中西部の米国人に理解してもらうべく広報活動のために地元政府をはじめ各地の企業、大学や日本語補習校、日米協会、日本人会等の各種団体を足繁く訪問しました。この間、オハイオ訪問66回、メトロ・デトロイトを除くミシガン訪問45回、大学訪問43回、企業訪問24回、日本語補習校訪問14回。講演・スピーチ回数約110回に及びました。また、総領事公邸にも多くの関係者を招き約200回にわたり日本食や日本酒も供しながら交流に努めました。

これらの活動を通じて地元の米国人に日本が信頼に値する真のパートナーであることを確信させること、そして、在留邦人には良質の公共サービスを提供し総領事館が頼れる存在となること、が私の最も重要な2つの使命であったと考えています。その目標がどれ程達成できたか自信はありませんが、多少なりとも先達の努力に加えるものがあつたとするならば、望外の喜びです。

この度、総領事及び総領事館の活動を地元の米国人及び日本人に理解してもらうため、Facebookを通じ任期中に日本語及び英語で各々300回以上に亘って発信した「総領事便り」をここに取りまとめました。私の活動の一端を御理解頂ければ幸甚です。

米国生活は、86～87年のパロアルトとボストン留学、99～02年のワシントンDCでの大使館勤務、そして今回のデトロイトと合計3回、通算6年に亘りました。特に、今回の滞在は、米国のハートランドと言われる中西部、そして、再生に向けて変化するデトロイトを間近に眺めることのできた貴重な機会であり、米国の強さの最大の源泉である多様性と進取の気性を経験した日々でした。それと同時に、製造業を中心に両州に日系企業拠点数900余り、雇用数11万人余り、在留邦人数約2万6千名という民間の方々の活動と貢献が当地での日本の大きなパワーになっていることを痛感する日々でもありました。この場をお借りして改めて米国及び日本の関係者の皆様に感謝致します。

ミシガン・オハイオと日本との関係の今後の益々の発展を祈念しています。

在デトロイト総領事
片山 和之

目次

第1話:日本・米国中西部会.....	1
第2話:いよいよデトロイト着任.....	1
第3話:デトロイト日本商工会設立40周年記念行事.....	2
第4話:参議院調査団の来訪.....	3
第5話:デトロイト日本商工会(JBSD)常任委員会.....	3
第6話:ルネサンス・センター.....	4
第7話:デトロイトの破産.....	4
第8話:トレド美術館の「新版画展」.....	5
第9話:「ジャパン・フェスティバル」.....	5
第10話:ミシガン国際親善サッカー大会.....	6
第11話:ミシガンでの初めての運転.....	7
第12話:デトロイト・タイガース惜しくもリーグ優勝を逸す.....	8
第13話:フィギア・スケートのグランリ.....	8
第14話:スナイダー・ミシガン州知事表敬.....	9
第15話:JETプログラム参加者の帰国歓迎会.....	10
第16話:ホロコースト・メモリアル・センター.....	11
第17話:ウェイン州立大学学長とミノル・ヤマサキ.....	11
第18話:シンシナチ訪問.....	12
第19話:フリーアハウス.....	13
第20話:ある明治女性の世界一周日記.....	13
第21話:架け橋プロジェクト.....	14
第22話:ランシング市長との会見.....	15

第23話: バトルクリーク日本語補習校のオープンハウス.....	15
第24話: 天皇誕生日レセプション.....	16
第25話: ナイアガラの滝.....	16
第26話: デトロイト空港.....	17
第27話: 東京オリンピックとデトロイト.....	18
第28話: サンクスギビングと博物館巡り.....	19
第29話: デトロイト市への連邦破産法適用の確定.....	19
第30話: JBSD 基金.....	20
第31話: デトロイトりんご会補習授業校.....	21
第32話: フィンドレー訪問.....	22
第33話: 日米協会のクリスマス・ディナー.....	23
第34話: 在シンシナチ名誉領事の任命.....	23
第35話: スポーツ観戦.....	24
第36話: グレイターズ・アイスクリーム.....	25
第37話: フォックス劇場でのバレエ.....	25
第38話: デトロイトのイースタン・マーケット.....	26
第39話: デトロイトのカジノ.....	27
第40話: カレッジ・フットボール.....	27
第41話: アジア系米国人団体との交流.....	28
第42話: 北米国際自動車ショー(デトロイト自動車ショー).....	28
第43話: 日本人少女ピアニスト.....	30
第44話: 日本人会新年会.....	30
第45話: グレーターシンシナチ日米協会主催シンポジウム.....	31
第46話: デイトン訪問.....	31

第47話: ラフカディオ・ハーン.....	32
第48話: 庄野潤三の「ガンビア滞在記」.....	33
第49話: 浮世絵版画デモンストレーション.....	33
第50話: 日本語スピーチ・コンテスト.....	34
第51話: 初釜茶会.....	35
第52話: 中西部の大寒波.....	36
第53話: ソチ冬季オリンピックのフィギア・スケートとデトロイト.....	37
第54話: クリーブランド美術館日本近代美術展.....	38
第55話: デトロイト剣道トーナメント.....	38
第56話: イースタン・ミシガン大学日本学生会主催行事.....	39
第57話: 「そして父になる」.....	39
第58話: 領事サービス向上のためのアンケート調査結果.....	40
第59話: 日本語スピーチ・コンテスト(その2).....	41
第60話: 「夢を生きる」.....	42
第61話: 日系進出企業調査.....	43
第62話: 東日本大震災への建築家の対応.....	43
第63話: デトロイト美術館サムライ展.....	45
第64話: セントラル・オハイオ.....	45
第65話: オハイオと日本研究者.....	46
第67話: いけばなインターナショナル&雛祭りの集い.....	47
第68話: ミシガン大学美術館.....	47
第69話: 日本料理を味わう集い.....	48
第70話: クリーブランド州立大学訪問.....	49
第71話: ロックの殿堂博物館.....	49

第72話:マウント・ユニオン大学での講演.....	50
第73話:内田光子&クリーブランド管弦楽団.....	50
第74話:シンシナチ日本語補習校入学式.....	51
第75話:ボーリング・グリーン州立大学での桜祭り.....	51
第76話:ジョン・キャロル大学訪問と日本のビール醸造.....	52
第77話:アラブ系アメリカ人コミュニティー.....	53
第78話:マウント・プレザントと岡谷.....	53
第79話:ダブリンの桜祭り.....	54
第80話:デトロイト・タイガース.....	54
第81話:デトロイトの春.....	55
第82話:ダガン・デトロイト市長往訪.....	56
第83話:米国の文化力.....	57
第84話:アジア太平洋系米国人商工会議所(A P A C C).....	58
第85話:フリア・ハウス・レクチャー.....	58
第86話:NAACPの年次ディナー.....	59
第87話:マッキノン・デトロイト副市長.....	60
第88話:ホーランドのチューリップ祭り.....	61
第89話:いけばなインターナショナルの行事.....	62
第90話:C A P A主催文化の夕べ.....	62
第91話:石州流茶道デモンストレーション.....	63
第92話:メイド・イン・デトロイト.....	63
第93話:スマート50授賞式.....	65
第94話:グランド・ラピッズと日本庭園.....	65
第95話:マッキノー政策会合.....	66

第96話:ダブリン・メモリアル・トーナメント・レセプション.....	66
第97話:歩こうアメリカ、語ろうニッポン.....	67
第98話:ホワイトパイン春のファミリーコンサート.....	68
第99話:日本語補習校連絡協議会.....	68
第100話:日米協会年次ディナー.....	69
第101話:JANOさくら植樹記念ピクニック.....	69
第102話:オハイオ大学.....	70
第103話:オハイオ州知事との共催レセプション.....	70
第104話:デトロイトりんご会補習授業校大運動会.....	71
第105話:デトロイト川クルーズ.....	72
第106話:ミシガン領事団フォーラム.....	73
第108話:スロベニア総領事主催ナショナル・デー・レセプション.....	74
第109話:日米野球交流とデトロイト・タイガース.....	74
第110話:ヴァーノン・アルデン氏.....	75
第111話:アッパー・ペニンシュラ旅行.....	76
第112話:アーニー・ハーウェル.....	77
第113話:豊田市とデトロイト市の姉妹都市交流.....	78
第114話:デトロイト市長と領事団との意見交換.....	78
第115話:野洲市とクリントン・タウンシップの姉妹交流.....	79
第116話:ハイデルバーク・プロジェクト.....	80
第117話:カラマズー市訪問.....	81
第118話:図書館交流.....	81
第119話:豊田市高校生のデトロイト訪問.....	82
第120話:ピュアビック陶器工房訪問.....	82

第121話：JET壮行会.....	83
第122話：トシコ・シモウラ氏の米寿のお祝い.....	84
第123話：インターナショナル・チャンピオンズ・カップ(サッカー).....	84
第124話：CAR(自動車研究センター)主催経営セミナー.....	85
第125話：「恋するフォーチュンクッキー」デトロイト版完成！.....	86
第126話：ジャスティン・アマシュ連邦下院議員との会見.....	86
第127話：ジェラルド・フォード大統領博物館.....	87
第128話：デトロイトの集中豪雨.....	88
第129話：オリンピック・フィギアスケート選手.....	88
第130話：サギノー訪問.....	89
第131話：ヒストリック・ベース・ボール.....	90
第132話：滋賀県友好親善代表団の来訪.....	90
第133話：アーミッシュ.....	91
第134話：ローレンス工科大学入学式.....	91
第135話：日本的経営.....	92
第136話：タイガース対ヤンキース.....	92
第137話：デトロイト国際ジャズ・フェスティバル.....	93
第138話：アラブ系アメリカ人博物館.....	94
第139話：レイバー・デー.....	95
第140話：上田埼玉県知事の来訪.....	95
第141話：日本・米国中西部会.....	96
第142話：サウスフィールド市と日本.....	96
第143話：「9. 11」と「3. 11」.....	97
第144話：米国のカントリー生活.....	98

第145話: メキシコ・ナショナル・デー	98
第146話: ポーランド芸術センター	99
第147話: オークランド郡と日本	99
第148話: 赴任1 周年	100
第149話: サギノー日本祭り ..	100
第150話: ミシガンの自動車産業	101
第151話: 外務大臣表彰	102
第152話: タイガース地区優勝	103
第153話: トヨタ訪問教授プログラム	103
第154話: クランブルック美術館	104
第155話: デトロイト・ボクシング・ジム	104
第156話: 領事団サッカー大会	105
第157話: ジャパン・フェスティバル2014（ノバイ）	106
第158話: タイガースのシーズン終了	106
第159話: 米国市民としての宣誓	106
第160話: パラモデル展	107
第161話: アンティーク・ショー	107
第162話: クリーブランド管弦楽団ガラ	108
第163話: カナダ・ウインザー市	109
第164話: カラマズー訪問	109
第165話: 白山谷喜太郎	110
第166話: グレイター・シンシナティ日米協会ガラ・ディナー	111
第167話: 地元コミュニティー誌の表紙を飾る！	111
第168話: ETJ プログラム	112

第169話: F L I C S 訪問.....	113
第170話: 文化交流使 林英哲氏来たる.....	113
第171話: フリアー・ギャラリー.....	114
第172話: LET' S GO BLUE.....	115
第173話: ガーデニングのワールドカップ.....	116
第174話: 日系企業のデトロイト美術館への寄附.....	117
第175話: ノバイ市の新しいシティー・マネジャー.....	117
第176話: デトロイト再建計画案を連邦判事承認.....	118
第177話: J E T 帰国者のためのネットワーク・レセプション.....	119
第178話: フランケンムース.....	119
第179話: モータウン: ザ・ミュージカル.....	120
第180話: 恩師との再会.....	121
第181話: デコ・ジャパン展.....	122
第182話: ミシガン大学ビジネス・スクール Global MBA プログラム.....	122
第183話: クリスマス・キャロル.....	123
第184話: サギノーとサイモン&ガーファンクル.....	124
第185話: 天皇誕生日レセプション.....	124
第186話: セントラルオハイオ日米協会主催セミナー.....	125
第187話: オペラ「蝶々夫人」.....	126
第188話: レバノンのナショナル・デー・レセプション.....	126
第189話: サウスフィールド市主催の日系企業ビジネス朝食会.....	127
第190話: オハイオ州立大学ビジネス・スクール.....	128
第191話: 感謝祭.....	128
第192話: ウォルヴァリンズ対バックアイズ.....	129

第194話: シティー・クラブ・オブ・クリーブランドでの講演.....	130
第195話: デトロイト公共テレビ放送局.....	130
第196話: デトロイト・ライオンズ.....	131
第197話: 都市再生.....	132
第198話: スタジオジブリ・コレクション上映会.....	132
第199話: バトルクリーク訪問.....	133
第200話: バトルクリークとデンソー.....	133
第201話: バトルクリーク補習校30周年.....	134
第202話: 領事団ホリデー・ガラ.....	134
第203話: IEJ プログラム2014.....	135
第204話: 日米協会年末ディナー.....	136
第205話: エイドリアン訪問.....	136
第206話: ホンダ・ヘリテージ・センター.....	137
第207話: 2015年(平成27年)年頭所感.....	138
第208話: 元旦の大学フットボール.....	138
第209話: 映画“Unbroken”	139
第210話: バトルクリーク日本人会新年会.....	140
第211話: 北東オハイオ日本人会新年会.....	140
第212話: カレッジ・フットボールNO.	141
第213話: 北米国際自動車ショー(デトロイト自動車ショー)	141
第214話: デトロイト日本商工会幹部とスナイダー・ミシガン州知事との会見.....	142
第215話: デトロイト復活の胎動(日本の雑誌への寄稿)	143
第216話: デトロイト自動車ショー・チャリティー・プレビュー.....	143
第217話: トリド日本人会新年会... ..	144

第218話：日本語補習校の悩み.....	144
第219話：ブラッドリー・リチャードソン博士の逝去.....	145
第220話：JBSD新年会.....	145
第221話：滋賀の光彩日本文化展.....	146
第222話：JAPIA女子部会.....	146
第223話：グランド・ラピッズ新年会.....	147
第224話：心のプラカード日米架け橋バージョン from Michigan & Ohio」完成.....	148
第225話：埼玉県知事往訪.....	148
第226話：滋賀県知事往訪.....	149
第227話：ミシガン州立大学連合日本センター訪問.....	149
第228話：豊田市訪問.....	150
第229話：燃料電池自動車「MIRAI」（ミライ）.....	150
第230話：日本・米国中西部会茂木議長往訪.....	151
第231話：オハイオ・ウェスリアン大学.....	151
第232話：トシコ・シモウラ氏の逝去.....	152
第234話：JETRO主催「ものづくり」セミナー.....	152
第235話：木村慶應大学教授の来訪.....	153
第236話：オハイオ日本語スピーチコンテスト.....	153
第237話：領事サービス向上のためのアンケート調査結果.....	153
第238話：第18代大統領ユリシーズ・グラント.....	154
第239話：デトロイトりんご会補習授業校卒業式.....	155
第240話：第22回ミシガン日本語クイズボウル.....	156
第242話：「過越」のディナー.....	157
第243話：大学での講演.....	157

第244話：チリコシー市訪問.....	158
第245話：ローゼンバーガー・オハイオ州下院議長との朝食会.....	158
第246話：コロンバス日本語補習校の卒業式.....	159
第247話：在留邦人数・日系企業進出等調査結果.....	159
第248話：トシコ・シモウラ氏のメモリアル・サービス.....	160
第249話：ミシガン日本語スピーチコンテスト.....	160
第250話：ノバイ教育基金ガラディナー.....	161
第251話：スティーブンソン高校（リボニア）日本語コース設置20周年.....	161
第252話：領事団サッカー・トーナメント関係者を招待したレセプション.....	162
第253話：クリーブランド日本語補習校入学式.....	162
第254話：ミシガン州立大学、惜しくも準決勝で敗退.....	163
第255話：マキノー島のグランドホテル.....	163
第256話：オハイオ州立大学での講演.....	164
第257話：内田光子&クリーブランド管弦楽団（昨年につき）.....	164
第258話：デトロイト公共図書館.....	165
第259話：トリド日本人補習校入学式.....	165
第260話：中部州日本語教師会年次会議.....	166
第261話：オペレッタ「ミカド」.....	166
第262話：JASCO年次レセプション.....	167
第263話：ラビの講演.....	168
第264話：在外公館長表彰.....	168
第265話：BGSU 桜祭り.....	169
第266話：ACCESS 年次ディナー.....	170
第267話：DACクラブハウス100周年.....	170

第268話：山中商会とチャールズ・フリーア	171
第269話：フリーアと光悦	171
第270話：アルデンB. ダウ科学美術博物館の展覧会	172
第271話：田中欣二氏への叙勲	172
第272話：カナダ総督の来訪	173
第273話：アジア太平洋系米国人月間	173
第274話：オハイオのアーミッシュ村	174
第275話：トマス・エジソンとオハイオ	174
第276話：オペラ「ファウスト」	175
第277話：安倍総理の米国公式訪問	175
第278話：ベル・アイル島の桜	176
第279話：ホーランドのチューリップ祭り	177
第280話：ホーランドの美術館と最初の日本人留学生	177
第281話：グレイター・シンシナティ日米協会の桜祭り	178
第282話：いけばなインターナショナル・デトロイト支部50周年	179
第283話：スティーブ・フォーブズ	179
第284話：今シーズンのタイガース初観戦	180
第285話：共和党の歴史とミシガン州ジャクソン	180
第286話：ワインズバーグ・オハイオ	180
第287話：シンシナティと「武士の娘」	181
第288話：ミゲル・カブレラ	181
第289話：CAPA とAPACC の行事	182
第290話：松山英樹選手との朝食会	182
第291話：ジェラルド・フォード図書館	183

第292話:ヘミングウェイとミシガン.....	183
第293話:メアリーズヴィル友好庭園のオープニング.....	184
第294話:オハイオ沖縄友の会20周年.....	184
第295話:ニューアーク日本庭園の再開式典.....	185
第296話:日系人収容所写真展.....	185
第297話:ミシガン・南西オンタリオ日米協会25周年.....	186
第298話:マイヤー庭園・彫刻公園日本庭園のオープニング.....	187
第299話:デトロイト・シティFC.....	187
第300話:米日カウンスル.....	188
第301話:スロベニアのナショナル・デー・レセプション.....	188
第302話:アルデン・ダウ・ホーム&スタジオ.....	189
第303話:藤田浩之氏への総領事表彰授賞.....	189
第304話:経団連ミッションのオハイオ訪問.....	190
第305話:バーミンガム・シニアメンズ・クラブでの講演.....	191
第306話:独立記念日の野外コンサートと花火.....	191
第307話:フォード・ハウスでの野外コンサート.....	191
第308話:アメリカン・フットボール世界選手権.....	192
第309話:米国西海岸への旅行.....	192
第310話:デトロイト市長の訪日.....	192
第311話:東北大学とケース・ウェスタン・リザーブ大学の学術協力協定調印式..	193
第312話:JET参加者の壮行会.....	194
第313話:豊田市ジュニア・オーケストラ親善代表団の来訪.....	195
第314話(最終回):離任レセプション.....	196

第1話: 日本・米国中西部会

デトロイトへの着任は9月20日でしたが、それに先立つ9月8日～10日まで、ちょうど東京の帝国ホテルで第45回日本・米国中西部会日米合同会議（年次）が開かれ、許可を得て当時勤務していたベルギー・ブリュッセルから出席のために一時帰国しました。管轄地域のスナイダー・ミシガン州知事をはじめ、米側は、5名の中西部州知事、日本側は、嘉田滋賀県知事（ミシガン州姉妹県）、上田埼玉県知事（オハイオ州と姉妹県）を含め5名の姉妹提携知事、更には東日本大震災に対する支援への感謝と復興の現状につき説明するため達増岩手県知事も出席されました。

私も開会のセッションで挨拶をさせていただきました。NYやLA、ワシントンを見ただけでは米国の本当の姿は分からないとよく言われます。米国のハートランドといわれる中西部ですが、デトロイトにまだ一度も行ったことがない身としては大きな期待感と少しばかりの不安感が事前にはありましたが、中西部会で接したミシガン及びオハイオの官民学関係者は、とても親切で優しく、暖かみのある人々でした。赴任前に地元関係者にこれほど歓迎されたのは本当に嬉しい驚きであり、改めて地元根ざす日系企業および在留邦人の方々の日頃のご努力と貢献に思いを馳せた次第です。150枚も名刺を交換し、まだ、顔と名前の一致しない新しい友人も多いですが、デトロイト総領事としての、幸先の良いスタートを赴任前に切らせてもらいました。次はいよいよ現場です。



写真：日本・米国中西部会事務局提供

第2話：いよいよデトロイト着任

9月20日朝、3年余りを過ごした前任地のベルギー・ブリュッセルを妻とともに車で立ち、一路パリへ。シャルル・ド・ゴール空港を予定より少し遅れて出発したエア・フランス375号便は、約8時間半のフライトの後、同日午後6時前、デトロイト空港に降り立ち、新しい赴任地での私の第一日が始まりました。空港には日本語の表示もあり、日本企業・在留邦人の貢献度やプレゼンスの高さを表していると心強い限りです。イミグレーションでは2、3の質問がありました。日本国総領事として着任したことを告げても、担当官は今一つ「総領事」という言葉にピンと来ないせいか、きょとんとした反応をされたのは少し悔しかったですが、無事、何の問題もなく入国しました。ブリュッセルと比べると到着した時の気温は少し暖かい感じでした。総領事館迎えの車でとりあえずは公邸へ。これから、総領事館の各種交流活動の拠点となり、私の住居ともなる場所です。しっかりと有効活用したいと思います。

実は、公邸生活2日目にいきなり、警察を呼ぶ羽目になってしまいました。警報装置の扱いに慣れておらず、外出先から戻った際にアラームの解除方法がわからなくて、そうこうするうちにアラームを聞きつけた警察官2名が公邸に現れました。デトロイト市内ではパトカーが到着するのに平均58分かかるとはありますが、ここでは、直ぐにやってきました。安全が守られていることがわかり安心しました。警察官には前日夕方到着したばかりで不慣れなため警報装置の使用方法がわからなかったことを平謝りしました。警察官から、「ブルームフィールド・ヒルズによろこそ」と言われ、うれしいやらはざかしいやら。

デトロイト、そしてミシガン及びオハイオのみなさん、そして在留邦人のみなさん、よろしくお願いします。官民一体、オールジャパン体制でお役に立てればと願っています。

第3話：デトロイト日本商工会設立40周年記念行事

9月22日午後、Noviにある中学校の講堂を借りて行われた腹話術いっこく堂の公演に出かけました。仕事というのも変ですが、総領事として着任後、初めて出席する行事でした。デトロイト日本商工会（JBSD）の設立40周年記念行事の一環。総領事館ができて20年ですから、その倍も当地で貢献されてきたことに改めて敬意を表します。腹話術者は英語で ventriloquist というそうですが、いっこく堂さんによれば起源的には天のお告げを語るところから始まったそうです。日本語のみならず英語も交えた腹話術の話と歌には本当に驚き魅了されました。海外公演先に応じて中国語、韓国語、独語等7か国語を駆使されるとか。上海では、公演の機会に地元のテレビ局の外国人芸能対抗番組に出演して得意の腹話術を披露し2度も勝ち抜いたそうですが、帰国日程の関係でその後を断念したとか。公演後は、JBSD 会長宅でいっこく堂さんも交えレセプション。ここでも、多くの当地邦人関係者とお会いしました。長い方は、20年、30年と滞在されている方もいらっしゃり、しっかりと根をおろして生活されていることを伺いました。それにしても、車がないと何もできない米国の郊外生活を実感しています。これまでの赴任地では、都市に住み、公共交通機関がそれなりに利用できる場所でしたが、米国の郊外は車社会ということを感じています。



第4話：参議院調査団の来訪

9月24日、末松信介参議院外交防衛委員長を団長とする超党派の参議院議員代表団（5名）がデトロイトを訪問され、サウンティール・ジェンキンス市評議会議長とデトロイト市の連邦破産法9章に基づく破産手続や今日の状況に至った原因等につき意見交換され、地元マスコミの取材も受けました。一言で言えば、人口、そして税収の縮小にも関わらず、年金や医療保険等歳出に手を付けて来なかった長年のツケが180億ドル（約1兆8千億円）という返済不可能な借金の累積に至ったということでしょうか。その後、一行は、議事進行中の議場に案内され、各評議員から歓迎を受けました。また、放棄されたビル、あるいは歯抜け状態のように更地が点在する街の一角を安全に十分留意しつつ視察されました。日米両国の地方自治制度の違いはあれ、デトロイトの破産は、国・地方公共団体がGDPの2倍を超える借金を抱える日本にとっても対岸の火事ではなく、真剣な議論が交わされました。夜には、杉デトロイト日本商工会会長他経済関係者に集まって頂き、議員の先生方と当地の投資環境、日系企業の進出状況等につき有意義な懇談をして頂きました。



デトロイトと聞くと日本ではとにかく犯罪の多い物騒で荒んだ都市というイメージがあり、確かにそういう危険な地域があるのは事実ですが、ほとんどの日本人が暮らすデトロイト郊外の町は米国の中でも緑に囲まれ、安全で豊かな場所であることは余り知られていません。今次参議院調査団のご来訪は、着任直後の私にとっても、デトロイトの事情を理解する上で良い勉強の機会となりました。従来、デトロイトに日本の国会議員の先生方が訪問されることは稀であったと聞いていますが、このタイミングでお迎えでき、総領事としても光栄かつ意義深く感じています。

第5話：デトロイト日本商工会（JBSD）常任委員会

9月27日、リボニア（Livonia）で開かれたデトロイト日本商工会（JBSD）常任委員会に初めて出席しました。当日は約30名近くの委員が参加されていました。2か月に1回開かれている会議で、総領事はJBSDの名誉会長を務めている関係もあり、従来より、同会議に定期的に出席し総領事館報告を行っています。その時々議案の承認の他、会長、商工部会・広報部会等各部会、デトロイトりんご会日本語補習授業校、青年委員会、ウィメンズクラブ等の報告が順次ありました。JBSDは、1973年に設立された前身のデトロイト日本人会（JSD）から数えると今年2013年は設立40周年（1993年7月

1日にJBSDに組織変更)に当たります。2013年1月現在、邦人会員数は253社、総登録会員数は約1,600名です。本来のビジネスに加え、当地邦人社会の生活環境の改善、親睦、日本人学校補習校の運営支援、地域社会への貢献等に時間、資金、人材を長年割いて頂いている各企業の皆さんに改めて感謝と敬意を表するとともに、このような場も通じて総領事館としても安全情報等の有益な情報を提供していくとともに、邦人社会の要望等を集約して必要に応じて地元関係当局に働きかけを行う等邦人社会と二人三脚で連携を強化していきたいと思います。

第6話： ルネサンス・センター

総領事館はデトロイト市内ダウントウンのルネサンス・センター、通称レンセン(Ren Cen)に入居しています。自分が働いているビルをもっとよく知ろうと、10月1日、無料の見学ツアーに参加しました。平日の正午及び午後2時の2回ガイド・ツアーが出発し1時間弱で72階の展望レストランやウインター・ガーデン、ウォーター・フロントGMショールーム等を案内してくれました。私が参加した組は15名ほどいました。レンセンは、デトロイト川に面し対岸にはカナダ・オンタリオ州ウインザーの町が見えます。もともと、フォードの会長(ヘンリー・フォード2世)が、デトロイトの復興のためにダウントウンの再開発を計画し、1977年に第一期の工事が完成。中央の73階建てのホテル(当時はウエスティン、現在はマリオット)を囲むように39階建てのオフィス棟が4つあり、その一つに総領事館が入っています。81年にさらに21階建てのツイン・ビルが加わりました。フォードが使用していたこのビルを96年にGMが買収し、本社をここに移転して今日に至っています。デトロイトの「復興」を願って作られたこのビルも36年を経過しましたが、まだまだ道遠しという感じでしょうか。破産申請を機に再生を果たしてほしいと願っています。

第7話：デトロイトの破産

デトロイト市は7月18日、連邦破産法第9章の適用申請を行い、実質破綻しました。管財人によれば、負債総額は約180億ドル(1.8兆円)、主な内訳は市債償還・利払いが約90億ドル、退職した市職員年金・医療費負担が約90億ドルだそうです。2012年の失業率は18.6%で全国平均の2倍以上。人口は、1950年には180万人を超えていたのが2012年には68万人余とピーク時の約37%に激減。殺人発生率は全米トップレベル、警察が駆けつけるのに要する時間は、平均58分、街灯の約40%は故障中という、凄まじい状況です。他方、ブルーア・デトロイト商工会議所会頭と9月に東京でお会いした際には、次のような前向きな説明がありました。

- ・破産は状況改善のための機会であり、将来の成功のための法的な手続である。
- ・破産はビジネスや市民生活に影響しない。
- ・デトロイト市のサービスはこれまで同様継続する。

また、2006年以降、120億ドルの投資が行われたこと、2010年以降、1万2千の雇用が新た

に創出されたこと、２００９年７月以降、失業率は１２％低下したこと、２０１２年７月以降、住宅価格は２５％上昇したことも強調されていました。更に、邦人企業および在留邦人の活動の場であるグレイター・デトロイトを眺めると、フォーチュン５００企業の１３企業が所在、エンジニア集中率全米一、９０マイルの中に３つの研究大学が集中、全米で博士号取得率が７番目、IT産業の成長度で２番目、４番目に大きな輸出基地、といった競争力のある地域であることを数字の入った資料を提示し、説明してくれました。つまり、破産申告はデトロイトの終焉ではなく、再生への新たな出発だということでしょうか。注視していきたいと思います。

第８話：トレド美術館の「新版画展」

１０月３日、オハイオ州トレド市にあるトレド美術館で来年１月１日まで開かれる特別展「新版画展」のオープニング・レセプションに出席しました。トレド市は、デトロイトから南に車で約１時間のところにあるミシガン州との州境近くにある町で、人口は約３０万人、ガラス産業で発展した町です。同美術館に収蔵されているガラスコレクションも有名だそうです。個人の篤志家によって設立され、美術館は今も寄付や会費で運営され、入館料は無料です。今回は、日本人版画家の新版画展開催のために訪問しました。同美術館ではかつて１９３０年及び３６年に、橋口五葉、伊東深水等明治から主に昭和初期にかけて活躍した版画家１０名の展示会を開催した経緯があり、それらの作品を約３４０点所蔵しているそうです。今回、更に買い増しをして、ケネディー館長やキュレーター等美術館側の周到的な準備とそれを支える篤志家や企業の寄付等の協力を得て、８０年の時を超えて特別展として改めてまとまった新版画展示を行うに至った訳です。この過程で総領事館もネットワーキングの支援をさせて頂きました。中西部のこのような場所で、このような素晴らしい美人画、風景画、役者絵等日本の新版画が鑑賞できるとは信じられない驚きでした。併せ、根付の展示や茶道、日本舞踊の披露もありました。浴衣を着て参加した地元の米国人女性もあり、地元の関係者の暖かい歓迎とともに忘れられない一時でした。ぜひ、みなさんも機会を見つけて訪問下さい。



第９話：２０１３年１０月６日「ジャパン・フェスティバル」

１０月６日（日）の午後、ノバイ高校を借りて、「ジャパン・フェスティバル２０１３」が開かれ、私も出席してきました。デトロイト日本商工会（JBSD）、ウイメンズ・クラブが主催し、地元の日米協会、滋賀県が協賛、ノバイ市、ノバイ地域学校区、日本総領事館が協力して毎年開催している行事です。日本食コーナー、輪投げや金魚すくい、射的場等の縁日、茶道、生け花、書道、折り紙のデモンストレーション、歌や踊り、太鼓のパフォーマンス、JETのコーナー、領事の出張窓口等が設けられた会場には、ところ狭しと地元の米国人や日本人駐在員家族等約３０００名の人たちが集まり、大盛況でした。ノバ

イは、市長によれば在留邦人が3千名近くを数え、ミシガン州最大の日本人居住区です。一部では、「リトル・ジャパン」、「リトル・トーキョー」とも呼ばれているとか。現場では、ノバイ市長代理、地元教育長、高校関係者と懇談した他、会場のあちこちで、来場者が新しい総領事と知ると私に声を気軽にかけていただき、それぞれの日本との関わりを情熱を持って楽しく話してくれました。地元のみなさんは、日本人生徒及び家族を暖かく隣人として迎えていただき、同時に、在留邦人もこのような活動を通じて地元感謝し、溶け込み、そして交流を深めており、非常に良好な関係を構築していることを日米双方の関係者から再確認しました。同高校の廊下に毎年の卒業生の集合写真が年代ごとに掲示されていました。1970年代は、ほとんど全員が白人の生徒でしたが、最近では卒業生数が拡大するとともにアジア系（在校生の19%）を含め人種・民族が多様化していることが見て取れます。また、多くの在留邦人の皆様が生活されている地域であるところ、総領事館としても引き続き、ノバイの地域の皆さんとの関係を大切にしていきたいと考えています。ジャパン・フェスティバルで多少なりとも在留邦人の皆さんは故郷を懐かしみ、米国人の皆さんは日本の雰囲気を楽しむことができ楽しい秋の週末の一時となったのではないのでしょうか。



第10話：ミシガン国際親善サッカー大会

10月12日及び13日にポンティアックの室内サッカー・アリーナで第5回ミシガン国際親善サッカー大会が開かれ、日本チームも他の15か国・地域のチームにまじり戦いました。最初は、4グループに分かれ総当たり戦。各グループの2位までが翌日の準々決勝に進み、準決勝、三位決定戦、決勝と進みます。私も応援のため開会式に続いて行われた第一試合のAグループ日本・レバノン戦を観に行きました。レバノンは、昨年優勝した強豪でしたが、次のアルバニア戦を含め2試合引き分け、PL0に5対1で勝利して、翌日の準々決勝までコマを進めました。残念ながら昨年第3位のイエメンに2対0で敗退しましたが、サッカー熱の高いこの地域でよく健闘しました。企業の駐在員主体のチームだそうです。コーチの下、趣味を超えたレベルの活躍ぶりに敬服しました。ご苦労さまです。優勝は、イラクで

した。メキシコ領事館、ウエイン州立大学他主催者の皆さん、そして地元関係者の皆さん、ありがとうございました。



第11話：ミシガンでの初めての運転

当地に着任して3週間、やっと、運転免許及び自動車のナンバー・プレートが届き、コロンバス・デーを含めた3連休の週末、初めてミシガンで自家用車を運転しました。前任地のブリュッセル、その前の北京と異なり、とにかく自家用車がなければ、何一つできなかつただけに、ほっとしています。生活・仕事のための一連の手続きが連邦政府のシャット・ダウンの影響をかなり受けるかと思っていましたので、3週間は許容範囲でしょう。早速、週末、いくつかのショッピング・モールでの買い物や食事の他、フォード博物館とデトロイト動物園に行ってきた。また、地元名産のリンゴの季節ということでフランクリンにあるサイダー・ミルに立ち寄り、出来立ての冷えたアップル・サイダー（ここでは、いわゆるアップル・ジュースをこう呼びます。アルコールも炭酸も通常入っていません）を小ぶりのアツアツのドーナツとともに美味しく頂きました。葉も色づき、日本の秋晴れのような爽やかな天気で、前任地ブリュッセルと対照的です。

フォード博物館はフォードの創始者ヘンリー・フォード（1863－1947）が生まれたディアボーンの町にある自動車の歴史を中心とする博物館です。ヘンリー・フォードが生まれて今年150周年に当たります。博物館内には1963年にケネディ大統領がダラスで暗殺された際に乗っていたリンカーンのリムジンカーや、1955年に黒人女性ローザ・パークスがアラバマ州モンゴメリー市で公民権運動のきっかけを作ったバスも展示されています。50年代に粗悪品の代名詞だった「メイド・イン・ジャパン」の自動車が今日の地位を築いた歴史も断片的ですが各国の自動車展示の中で紹介されています。自動車ファンには見逃せない場所でしょう。隣接しているグリーンフィールド・ヴィレッジではかつての建物や店が再現され、1920年代に製造されたT型フォードに乗って村内を見学しました。T型

フォードは1908年から約20年間、計1500万台余り生産されたそうです。自動車を米国中産階級の乗り物にし、大量規格生産方式を作り出した今日に続く自動車産業の記念碑的な車と言えましょう。



第12話：デトロイト・タイガース惜しくもリーグ優勝を逸す

10月19日のアメリカン・リーグ優勝決定戦第6戦、デトロイト・タイガースはボストン・レッドソックスに2対5で逆転負けを喫し、通算成績2勝4敗で惜しくもリーグ優勝を逃しました。私は、赴任したばかりで、コメリカ・パークに足を運ぶ機会が今シーズンはありませんでしたが、テレビでタイガースを応援していたのでとても残念です。タイガースは1901年のア・リーグ発足当初からのチームで、ちなみに阪神タイガースは同じ産業都市の縁からチーム名を借用したとか。また、20世紀初頭には「球聖」タイ・カップ（Tyus Cobb）がデトロイト・タイガースに所属していました。これまでに4度ワールド・シリーズを制していますが、最後にチャンピオンになったのが1984年ですから、もう30年近く前です。10年以上前には木田優夫、野茂英雄の両投手が一時期籍を置いていました。最近では3年連続地区優勝を果たし、昨年はその上に6年ぶりのリーグ優勝にも輝いていたので、今年はワールド・シリーズまで駒を進めて是非ワールド・チャンピオンになってほしかったのですが、それは来年の楽しみにしておきます。レッドソックスは上原浩治投手、田沢純一投手の両日本人選手が抑えて大活躍し、上原投手は、シリーズのMVPに輝きました。おめでとうございます。タイガースが負けたのは悔しいですが、日本人選手の活躍は誇りです。

第13話：フィギア・スケートのグランプリ

10月18日～20日、デトロイトのダウンタウンにあるジョーリス・アリーナでフィギア・スケートのグランプリ・シリーズ第一戦スケート・アメリカ2013が開催され、20日行われたペア及び女子のフリーをアリーナに観に行きました。フィギア・スケートを現場で観るのは初めての経験でしたが、最も華のあるスポーツだと実感しました。19日の男子で町田樹選手が優勝したのに続き、20日の女子は浅田真央選手が優勝。最初トリプル・アクセルの着地に失敗し転倒したのにはひやりとしまし

たが、終わってみると貫禄勝ちか、前日のショート・プログラムに加え、フリーでも1位で合計200点を超える成績（204.55）と快勝しました。メトロ・デトロイトの在留邦人の方々に加え、日本からも応援に駆け付けた日本人の方々が掲げる日の丸の旗は星条旗にも負けないくらい多くみられました。浅田選手の表彰式では、「君が代」がアリーナに響き渡り、感動しました。来年2月にロシアのソチで開かれる冬季オリンピックに繋がる大事なシーズンを日本選手は幸先の良いスタートを切りました。米国は、オリンピックのフィギュア・スケートでこれまで各国最多の計46個のメダルを獲得しています。古い話ですが、個人的には米国人選手では1972年の札幌オリンピックで銅メダルを取ったジャネット・リンが印象深く記憶に残っています。「銀盤の妖精」と呼ばれ、しりもちをついても終始愛くるしい笑顔を絶やさない姿は多くの日本人を魅了しました。ソチ・オリンピックでの日米両国選手の活躍を期待しています。



第14話：スナイダー・ミシガン州知事表敬

10月24日、ミシガン州の州都ランシングに出張し、リック・スナイダー知事に挨拶してきました。米国の各州の州都はあまり知られていない町が多いのですが、ここもそうかもしれません。人口は約12万人、1847年にデトロイトから州都が移りました。主要な雇用は政府関係の他、郊外に自動車関連工場があるようです。ランシングは滋賀県大津市と姉妹提携を結んでいます。実は9月に東京で日本・米国中西部会の年次会合が開催された機会に、知事とは一度会っているのですが、今回は着任後の正式な表敬でした。知事は、2011年1月に就任したミシガン州48番目の知事です。1958年に同州内のバトルクリークで生まれ、公認会計士やコンピュータ・ブランドのゲートウェイ会長等を務めたビジネス精神旺盛な知事です。共和党員です。ちなみに、ミシガンは州議会の上下両院及び連邦下院は共和党が多数派、連邦上院は2名とも民主党、そして、2012年の大統領選挙ではオバマ民主党候補が勝利しています。お隣のオハイオ州のようにスイング・ステイトではありませんが、興味深い政治状況です。在留邦人が1万2千名、日系企業の拠点も480を超え姉妹提携も28、また、主要大学での日本研究・日本語教育も活発であり、このような良好な関係を維持・強化していくために緊密に協力していくことを知事と確認しました。なお、日本はミシガン州への最大の投資国の一つですが、ミシガン州の輸出先で見ると、中国は既に日本の2倍以上あり、また、最近では、自動車関連産業やデトロ

イト市内の不動産への中国からの投資も活発になりつつあり、知事は中国との経済交流にも力を入れています。



第15話：JET プログラム参加者の帰国歓迎会

10月26日、公邸で今年夏に帰国した JET プログラム参加者の歓迎会及び当地の日本語教育者ネットワークのためのレセプションを開きました。帰国した JET 関係者に加え、JET 同窓会関係者、ミシガン及びオハイオ両州にある大学で日本語教育に従事している教師、日系企業代表、人材会社、地域情報誌関係者等約60名の参加を得ました。総領事館現地スタッフの中にも JET プログラム参加者が複数います。また、私にとっては、着任以降初めて公邸で行う記念すべき行事となりました。両州から派遣され今夏戻ってきた JET プログラム参加者は16名、ちなみに、今年送り出した第27期 JET プログラム参加者は39名です。JET プログラムは日本政府・地方自治体の国際交流事業の中でも、特に若者に異文化経験の機会を与え、日本人との忘れがたい心のふれあいを残し、相互理解を増進する上で最も成功しているプログラムだと思います。



それは、今回の帰国者一人一人の思いが詰まった挨拶の中でも感じ取ることができました。帰国者の中には、東日本大震災発生時に、気仙沼に派遣されていて数日間行方が確認できなかった青年もいました。彼は、引き続きその後も現地に留まり任務を全うして今回帰ってきました。ヘミングウェイは、その作品「移動祝祭日」の冒頭に、「もし、あなたが幸運にも若い頃パリで生活した経験があるなら、その後どこに行こうが一生パリはあなたについて来るだろう。なぜなら、パリは移動祝祭日だから」という一節

がありました。レセプションの際の挨拶の中で、私は、この言葉を引用して、帰国者たちにとり、彼らが数年を過ごした日本のそれぞれの町が、彼らにとってヘミングウェイの言うパリにきつとなることを望む旨を伝えました。日本での貴重な経験、あるいは、当地大学での日本語の専攻を、彼らの将来のより良い仕事のキャリアにどうつなげていくのか、総領事館としても、JET 同窓会、大学日本語学科の先生方、日系企業等とネットワークを強化する中で、可能な支援を検討していきたいと思います。

第16話：ホロコースト・メモリアル・センター

10月27日、ファーミントン・ヒルズにあるホロコースト・メモリアル・センターを訪れました。米国内に40か所ほどあるホロコースト博物館の一つで、1984年に設立されました。年間12万5千人を超える訪問者があるそうです。ホロコーストの犠牲者は約600万人とされていますが、館内には、ヨーロッパ社会に根強くあった反ユダヤ主義の伝統、そして、ナチス・ドイツ下のホロコーストの歴史が展示・紹介されています。その中で、ユダヤ人の支援に尽力した世界の正義の人の中には、当時在リトアニア日本領事館に勤務して6千名のユダヤ人に通過ビザを発給した杉原千畝も紹介されていました。私は、当地赴任前にベルギーに勤務していた関係でポーランドのアウシュヴィッツ収容所、ドイツのダッハウ収容所、ベルギーのメッヘレン郊外にある収容所等を訪問したことがあります。ホロコーストについて考える時、近代文明を先導し人類の知性を代表する文化、芸術、思想、哲学、科学を作り出した欧州の風土の中にナチズムというあだ花が生まれたことは、人間の「知性」と「狂気」の関係を深く考えさせられます。また、かつて読んだ فرانクル (Viktor Frankl) の「夜と霧」(Man's Search for Meaning) が衝撃的な印象として深く残っています。彼は、精神科医で収容所に送られたユダヤ人等の9割、約100万人が亡くなったというアウシュヴィッツの生き残りです。そのような過酷な状況の中でも明日への希望を失わず持ち続けることが生死を分ける上でいかに決定的な意味を持っていたか、そして、絶望的な極限状況の中でもなお精神の自由は誰にも侵すことのできない個人の領域として残されていたことへの言及（例えば、わずかばかりの自らの食事を弱っている者に分け与えるか否か、言い換えれば人間として如何に生きるべきかの判断と行動）は強烈な印象として今も心の中に残っています。

第17話：ウェイン州立大学学長とミノル・ヤマサキ

10月29日、デトロイト市内にあるウェイン州立大学を訪ね、今年8月に学長に就任したロイ・ウィルソン医学博士に挨拶をしてきました。彼は、母親が日本人で、幼少を日本で過ごしたこともあり、日本語もお話になります。日本料理、特に天丼がお好きだということなので今度公邸でごちそうすることを約束しました。米国で日系の大学学長は珍しいと思います。同大学と総領事館とはこれまでも交流がありましたが、同学長の就任を機に、更に具体的な学術・文化交流を進めていきたいと思います。同大学は1868年に設立され、学生数3万に上る州内で三番目の規模の総合研究大学です。ちなみに、同大学キャンパスにはNYの世界貿易センタービル設計者である著名な日系米国人建築家ミノル・ヤマサキ氏の設計した代表的な建物が4つあります。日系移民の子供として20世紀初めにシアトルで生まれ、デトロイトに事務所を開設して活躍、1963年には日系米国人として初めて雑誌Timeの表紙を

飾りました。飯塚真紀子著「9. 11の標的をつくった男」（講談社）によれば、彼が戦後デトロイトに移ってまもなくの頃、郊外のブルームフィールド・ヒル（注：総領事公邸もこの町にあります）に家を購入しようとしたところ、不動産屋から「日系人お断り」と言われたとのこと。隔世の感があります。



左：ウェイン州立大学学長に就任したロイ・ウィルソン博士（出典：Wayne State University
(<http://president.wayne.edu/>)

右：マクグレガーセンター（同大学キャンパス内）

第18話：シンシナチ訪問

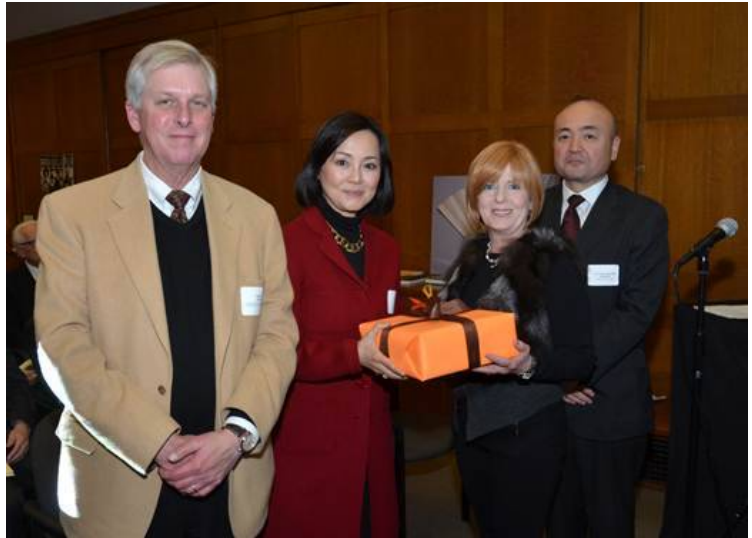
10月30日から11月2日にかけてシンシナチを初めて訪問しました。オハイオ州の中央部にある州都コロンバス、北東部のクリーブランドとともに3Cと言われ、オハイオ州南西部の中心都市でありオハイオ川を挟んでケンタッキー州と接しています。人口は約32万、P&G、デパートのメイシーズ等の本社があり、MLBのレッズ、NFLのベンガルズの本拠地です。この周辺には日系企業の進出も盛んで、トヨタ、花王、マザック、三菱電機等が投資を行っています。11月1日に当地グレイター・シンシナチ（シンシナチを中心にその周辺の地域（ケンタッキー、インディアナの一部を含む））の日米協会25周年ガラ・ディナーが、約250名の出席者を得て盛況に行われました。主賓としてシンシナチ大学日系人学長サンタ・オノ博士及び佐々江駐米大使を迎えスピーチを頂きました。私も、新任総領事として地元の米国人及び日本人に挨拶する機会を得ました。東日本大震災で被害にあった石巻に支援の手を差し伸べてくれた人たちとも会えました。オハイオ州は「大統領の母」とも言われ、これまで7名の大統領を育てています。その内の一人、タフト大統領の生家が近くにあり見学しました。彼は1909～13年の間、第27代大統領を務めました。アジアにも縁が深く、1901～03年には民政長官として植民地フィリピンに駐在、陸軍長官時代の1905年に訪日し、いわゆる桂・タフト協定を結んでいます。後に最高裁長官にもなりましたが、大統領と最高裁長官をとともに経験した人物は彼だけです。1912年には日本から桜の苗木が3000本贈られ、現在ワシントンのタイダル・ベイズンを賑わしていますが、これはタフト大統領時代に大統領夫人等の尽力により実現したものです。日本と縁がある地域です。



写真：タフト大統領の生家にて

第19話：フリーアハウス

11月3日、デトロイト市内フリーア・ハウスで、同ハウスとミシガン・南西オンタリオ日米協会主催による私たち夫妻の着任歓迎レセプションがありました。フリーア・ハウスはワシントンのスミソニアン博物館の一部として有名なフリーア美術館の収集家チャールズ・ラング・フリーア(Charles Lang Freer: 1854-1919)が住んでいた建物です。デトロイト美術館の北にあり、現在はウェイン州立大学の一部となっています。彼は、デトロイトが自動車産業で繁栄する前の19世紀末に鉄道車両の製造会社を当地に設立して財をなし、後に日本にも5回訪問を重ねて東洋の美術品を収集しました。その中には、尾形光琳や俵屋宗達の国宝級の作品も含まれています。収集作品をデトロイトでは鑑賞することができないのが少し残念ですが、その代わり、ワシントンのフリーア美術館は有数の東洋美術コレクションを誇っています。昨年は、NHKの取材班が訪れ、明治時代に日本美術を収集した人物としてフェノロサ等とともにフリーアを取り上げ、ちょうど1年前の文化の日に放送されたそうです。私は、デトロイトに来て1か月半ですが、いろいろなところに日本との繋がりを発見して嬉しく感じます。このような繋がりを広く日本人及び米国人に伝えていきたいと思います。



第20話：ある明治女性の世界一周日記

前回、フリーアハウスのことを紹介しましたが、その際に聞いた野村みちという明治生まれの日本人女性の著した旅行記「ある明治女性の世界一周日記--日本初の海外団体旅行--」（神奈川新聞社）を取り寄せて読みました。彼女は、夫洋三（後にホテルニューグランド会長に就任）とともに横浜で外国人相手の日本古美術店「サムライ商会」を経営していましたが、1908（明治41）年、朝日新聞主催の

「世界一周会」に他の55名の日本人とともに参加し、96日間の世界旅行を行いました。上記の本は、その時のことを書いていますが、道中、米国そしてデトロイトにも立ち寄っています。日本美術収集の関係でフリーアとも懇意にしていた関係で、一行と一時離れフリーアハウスに宿泊したことも書いています。先日、日米協会が私の歓迎会を催してくれた会場「孔雀の間」には当時まだホイッスラーの「陶磁の国の姫君」が掛かっていたようです。みちは、このフリーアハウスに来て、日本を離れてから初めて熟睡したと記しています。「デトロイトは人ごみの多いシカゴと違い、閑静で優雅な街です。砂埃が目に入ることも騒音ありません。緑樹の陰に家々が連なっています」、「デトロイトは静かで落ち着いた土地柄で、火災や盗難は極めて少ないそうです。それでいてシカゴやニューヨークなどへの鉄道の便がよいので、住宅を構えるなら全米最高の都市といわれています」とデトロイトの街の印象を述べています。100年前のデトロイトは旧知フリーアの歓待とともに非常に良い印象としてみちの記憶に残りました。それから100年経ちましたが、今後の100年に続く日米の交流の芽をまた、ここデトロイトで作ることができたらと願っています。

第21話： 架け橋プロジェクト

11月9日、オハイオ州ケントにあるケント州立大学で行われた北九州大学学生との交流行事に参加してきました。これは、外務省が企画し国際交流基金と協力して実施している「架け橋プロジェクト (KAKEHASHI Project - the Bridge for Tomorrow-)」の一環です。架け橋プロジェクトは、日本の価値やクールジャパンといった魅力への国際理解を増進させることを目的に本年度開始され、日本の青少年2300名、米国の青少年2300名をそれぞれ相互に10日～2週間派遣し、各地を訪問して交流事業やホームステイ、文化・歴史遺産や最先端技術の視察等を行うものです。今回、北九州市立大学の学生25名が訪米日程の一環としてケント州立大学に立ち寄ってくれました。ちなみに、ケント州立大学の学生もこのプロジェクトで既に訪日しています。北九州大学の学生は、米国の教師・学生や地元の人たちを前に、「老舗」、「寿司製造機」、「伊勢神宮の式年遷宮」、「駐輪場」、「ウォッシュレット」等身近な日常生活の興味深いテーマを切り口に、判りやすい資料や映像を使い、日本の伝統と現代の関係、日本人の自然や環境への調和等についてよく準備された印象的で説得力のある日本文化のプレゼンテーションをしてくれました。少し緊張していた学生もいましたが、みなさん総じて英語のプレゼン能力が高いことに感銘を受けました。沢山の優秀な学生さんが参加しているのでしょう、ますますグローバル化する世界にあって日本の次代の担い手となる若者を頼もしく思いました。これら若者が切り開いていく未来の日本は決して暗くはないでしょう。(写真提供：ケント州立大学)



第22話：ランシング市長との会見

11月13日、ミシガンの州都ランシングに出張し、ベルネロ市長に挨拶して来ました。イタリア系の民主党员で、最近行われた市長選挙で三選を果たしたまだ50手前のエネルギッシュな政治家です。滋賀県大津市と姉妹提携にある関係で、同市を訪問しホームステイの経験もあり、日本への暖かい思いを持って頂いている政治家です。ランシング市自体は日系企業の進出も10社程度で特段多いとは言えませんが、これら日本の経済関係者との繋がりも市長は大変重視しています。今年の春には、地元で桜の植樹も行われたとか。企業投資に加え、地方自治体同士の長年に亘る心と心の触れ合う地方交流が、草の根レベルで日米関係を堅固に支えていることを目の当たりにしました。その後、市長とともに昼食を一緒したランシング地域姉妹都市委員会のメンバーの方々からも総領事就任を歓迎して頂きました。デトロイトには日本を含め7つしか（総）領事館がありませんが、その利点を活かして地域とのきめ細かい交流を展開していきたいと思います。



第23話：バトルクリーク日本語補習校のオープンハウス

11月16日土曜日、ミシガン州バトルクリークにある日本語補習校のオープンハウスに行って来ました。3年ぶりの開催だそうです。私にとりバトルクリークを訪問する初めての機会ともなりました。同校は幼稚園から高校まで計70名余りの生徒が学んでいます。地元の理解を得て高校の校舎の一部を借りています。1984年に開設され、一時は生徒数が100名を超えていた時期もあったようです。校長先生は文部科学省から派遣されていますが、他の先生は地元在住の日本人や留学生たちです。生徒数の関係で校長先生の後任が引き続き日本から派遣されるかどうか、また、現地での教師の安定的な確保等悩みも多いようです。当日は、新たに選出された市長も駆け付けて頂き、地元バトルクリークの皆さんに授業参観や茶道、書道、折り紙、展示等の日本文化体験、子供たちの踊る炭坑節への飛び入り参加、最後は、昼食にカレーライスを提供して、補習校を支援して頂いている地元関係者との交流の楽しい一時を過ごしました。新市長からは、引き続きバトルクリーク市として補習校への支援を惜しまない旨暖かいメッセージを頂きました。在デトロイト総領事館管内（ミシガン及びオハイオ両州）にはバトルクリークを含め8か所に補習校があり、生徒数は合計900名近くで、これは補習校の生徒数では世

界1位です。教育は、日本そして世界の次代を担う子供たちを創り上げていく国家百年の計です。日本語補習校が直面する諸問題に総領事館として学校、地元当局、日本人会・商工会と連携・協力しながら取り組んでいきます。



第24話：天皇誕生日レセプション

11月18日夜、デトロイト市内の美術館で一足早い天皇誕生日レセプションを開き、地元ミシガン・オハイオ両州の米国人官民関係者、在留邦人関係者、領事団関係者等200名近い方々に参加頂き、盛況の内に参加者全員で天皇陛下80歳の誕生日をお祝いしました。12月23日がクリスマス休暇に近いため、キリスト教国ではこの時期を避け12月上中旬に開催するのが通例ですが、今回は種々の理由で11月中旬の開催となりました。私の30年の外務省生活の中でもこれほど早い天皇誕生日レセプションは初めてです。世界の中でも最も早い天皇誕生日レセプションの一つだったのではないのでしょうか。本来であれば、総領事公邸を活用するところですが、収容能力の関係でデトロイト美術館での開催となりました。デトロイト市が破産申請を行い再生の一步



を踏み始めようとするこの時に、日本として市立美術館を開催場所を選択したことは、デトロイトに対する熱い友情を示してくれたものとして地元の方々から高く評価頂きました。日本料理でのもてなしが十分できなかったのは残念でしたが、著名な芸術作品に囲まれてのレセプションは貴重な経験でした。また、来年3月から同美術館でサムライ展が予定されており、総領事館や日系企業も協力することから、その前宣伝の良い機会となりました。レセプションでは当地日本人グリークラブ(White Pine Glee Club)

による両国国家の合唱も素晴らしかったです。妻と私にとっては、着任後2か月足らずで、多くの関係者に挨拶させて頂く絶好の機会ともなりました。ミシガンとオハイオを合わせると日本に近い面積があります。遠路はるばる各地から出席頂いた皆さん、本当にありがとうございました。

第25話：ナイアガラの滝

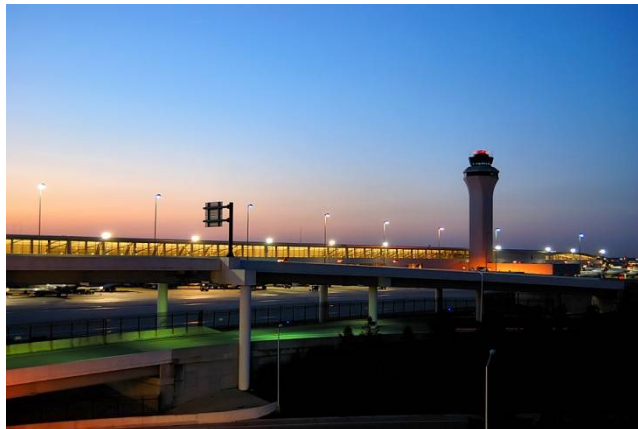
私の管轄地域を少し離れる話になりますが、11月23～24日の週末（土・日）を利用してナイアガラの滝をカナダ側から見学のためドライブ旅行をしてきました。危機管理の観点から、総領事が管轄地域を離れる際には事前に外務本省にも届けておく必要があります。次席にこの間、残ってもらい、1泊2日の小旅行を楽しませてもらいました。とは言え、冬も近いこの季節、カナダ領に入っただけで、雲行きが怪しくなり途中、激しい吹雪に遭遇してしまいました。安全運転でなんとか切り抜けたと思ったら、高速道路が急に渋滞しはじめました。後で判明したのですが、前方500メートルほどの場所で車約60台の玉突き事故が発生。現場の復旧まで約2時間、外気零下の路上に車を停止してひたすら待ちました。大破した車が複数レッカー車で運びさられるのを見ながら、2時間待機させられた不運より、玉突き事故に巻き込まれなかった幸運を感謝すべきだと思いました。幸いにも、死者はでなかったようです。これからの季節、皆様もくれぐれも運転に気を付けてください。肝心のナイアガラの滝は壮観ではありましたが、零下の強風吹きすさぶ中、凍えそうでゆっくり楽しむことができなかったのが残念でした。それでも、以前の米国生活の折に米国側からは2度見学したことがありますが、今回、初めてカナダ側から大瀑布の雄姿を眺めることができ満足です。



第26話：デトロイト空港

このフェイスブックの最初の頃に、デトロイト空港（正式には、デトロイト・メトロポリタン・ウェイン・カウンティ空港）について、表示やアナウンスにも日本語が含まれていて親切だと書きました。資料によると、同空港は6つの滑走路を備え（成田空港は2つ）、敷地面積は約2900ヘクタール（同940ヘクタール）、昨年の乗降客数は約3224万人（同3279万人）、航空機の発着回数44万3千回（同20万9千回）で、2009年の時点では、乗降客数で見ると米国で16番目、世界で44番目に忙しい空港だったそうです。アトランタに次ぐデルタ航空の主要ハブであり（当空港を利用する航空便の79%を占める）、成田、名古屋や北京にも直行便が就航している等アジアへのゲートウェイにも

なっています。しかしながら、最近の地元紙デトロイト・フリー・プレスによれば、2005年に比較して、同空港は、国内フライト便数で22%、座席数で27%減少しているとか。オハイオ州を含めた周辺の空港も軒並み減っているようで、中西部経済がまだ相対的に十分回復していないことを示していると同紙は伝えています。前任地ブリュッセルは、サベナ航空が破産して以来、直行便が途絶えてしまい、そのため帰国にはアムステルダムやフランクフルト、ミュンヘン経由か陸路でパリまで行く必要があったのを思えば、直行便があるのはとても便利です。但し、競合他社がおらず、ビジネス客中心のせいか価格設定が少し高い感じがします。デトロイト市内・近郊の観光資源の更なる開発とともにシカゴやナイアガラ、あるいはミシガンの自然環境資源とも連携して、トランジットのみならず、観光客の当地誘致を更に図る余地は十分にあると感じます。



(写真：ウェイン郡航空局より)

第27話：東京オリンピックとデトロイト

雑誌「WEDGE」12月号のデトロイト特集記事の冒頭に、1964年東京オリンピック招致をデトロイトと争ったことが紹介されていたので少し資料を調べてみました。ご承知の通り、戦前の1940年（昭和15年）に東京でオリンピックが開催される予定でしたが、日中戦争が激化したことにより結局中止となり幻のオリンピックとなりました。戦後、日本は、1952年のヘルシンキからオリンピックに復帰。そして、1959年、西独（当時）ミュンヘンで開かれたIOC総会で、東京が遂に1964年夏季オリンピック開催地として選ばれました。立候補都市は、東京の他、ウィーン（オーストリア）、ブリュッセル（ベルギー）、そしてデトロイトの計4都市でした。同じ総会で1964年冬季オリン



ピックがインスブルック（オーストリア）に決まったことでウィーンは不利に。ブリュッセルは総会のわずか半年前に立候補したため準備不足、したがって、デトロイトが最大のライバルとなりました。投票の結果は、東京34票、デトロイト10票、ウィーン9票、ブリュッセル5票。第1回目の投票で東京が過半数を獲得し、日本、そしてアジアで初めてのオリンピック開催となった訳です。2020年東京夏季オリンピック・パラリンピック招致が決定し、東京そして日本全国は、56年振りの東京オリンピック開催に向け再び元気と夢を取り戻しつつあるようで何よりです。そして、いつの日かデトロイトも再生を果たしてオリンピックを開催する時が来ることを期待しています。

第28話：サンクスギビングと博物館巡り

11月28日は感謝祭（サンクスギビング）の休みでした。明け方から雪が積もり、白一色の世界となりました。感謝祭は11月の第四木曜日で、翌金曜日にも休みで4連休となります。1620年、英国からプリマス植民地に移住したピルグリム・ファーザーズの翌年の収穫を祝ったことが始まりとされています。感謝祭の家族揃っての食事の定番は、七面鳥の丸焼きに克蘭ベリー・ソースとグレービー・ソースですが、七面鳥の料理はクリスマスにとっておいて、ブラック・フライデー（翌金曜日。クリスマス特別セールが始まりで店屋にとって収支が黒字になることから名付けられたとか）の買い物にも目をくれず、古くからの友人である米国人家族との再会を楽しんだ他は、デトロイト市内の博物館・美術館を巡って過ごしました。まず、デトロイト美術館。館長への着任挨拶や天皇誕生日レセプションの打ち合わせでこれまで3回訪問しましたが、作品をじっくり鑑賞するのは今回が初めてでした。米国人芸術家の作品の他、天皇誕生日レセプション会場となったホールに描かれたディエゴ・リベラの巨大壁画、ブリューゲル、モネ、マネ、ゴッホ、ルノワール、ドガ、モディリアーニ、ピカソといった世界的画家による作品を楽しみました。デトロイト市再建の過程でこれらの芸術作品への影響の有無が気になります。次に訪れたのはデトロイト歴史博物館。デトロイトの発祥から、その栄枯盛衰、そして未来に向かう姿が興味深く展示されています。デトロイトについて書かれた最新の本も何冊があったので2冊購入しました。最後に訪れたのが、アフリカ系米国人歴史博物館。米国でも最大規模だとか。アフリカ系米国人がアフリカ大陸からどのような経緯で新大陸に連れて来られ、その後、どのような歴史をたどって今日に至っているかを興味深いジオラマで展示されています。奴隷船内での劣悪な環境もリアルに再現されています。帰り際、展示に資金協力している企業名が掲示されていたのを見ましたが、日系企業が含まれていたのを発見し、とても嬉しく思いました。



写真左：デトロイト美術館（ミシガン州立大学ニュースメディアより）

写真中：デトロイト歴史博物館（同館ホームページより）

写真右：アフリカ系米国人歴史博物館（10 things to know about visiting Detroit より <http://n4sa.com/arkiv/108320>）

第29話：デトロイト市への連邦破産法適用の確定

7月に連邦破産法第9章適用申請が行われて以降、その是非を巡って公聴会が開かれていましたが、12月3日には、連邦破産裁判所が適用のための要件を満たしている旨の判決が出ました。これにより、

デトロイト市は公式に破産法の適用を受ける米国史上最大の自治体となることが確定しました。ミシガン州憲法によれば、公務員の年金は保障されとの主張が債権者からありましたが、裁判所は、年金は契約上の権利であって同法9章の適用に当たって特別な保護を受けるものではないと結論づけました。これで基本的な方向は定まりましたが、10万人を超える債権者がいる中、労働組合を中心に訴訟は続きそうですし、退職公務員の年金削減は今後も紆余曲折が予想されます。また、債務削減のために米国でも有数の所蔵品を誇るデトロイト美術館の作品の取り扱いも気になるところです。ケヴィン・オー破産管財人は、今後再建計画を提出し、来年9月末までに破産法の保護から抜け出せるように努力するとコメントしました。リック・スナイダー知事も破産法適用は苦渋の決断であるが、市の再生のためにやむを得ない最後の選択肢であり、判決を肯定的に受け止めています。私の総領事任期中に将来への楽観論が正しかったことを確認して離任したいものです。

第30話：JBSD 基金

12月5日、ノバイのホテルでJBSD（デトロイト日本商工会）基金助成金授与式があり、出席しました。JBSD 基金は、1991年の発足以来毎年40程度のメトロ・デトロイトを中心とするミシガン州の各団体に対してその活動を財政的に支援しており、これまでの助成金総額は170万ドルに達します。これとは別に、2000年から日本に留学する高校生・大学生に奨学金を提供しており、既に120名が対象となりました。今回の授与式は前者についてですが、教育、文化、友好交流関係団体を中心に約50の団体が助成金受給対象となり、これら団体の代表が出席して各々の活動を簡単に紹介するとともにチェックを受け取りました。各団体の受け取る額は千ドル～数千ドルですが、当地で活動する日系企業が一体となって地域の草の根活動を支援することは、日米の相互理解を促進し、在留邦人社会ひいては日本を地元米国人により近いものとして感じてもらうためにも非常に重要な意義深い活動であると思います。JBSD 基金の長年に亘る地道な社会貢献活動に敬意を表します。助成対象に相応しい団体の更なる開拓とともに、これら各種団体と邦人社会とのネットワーク強化を総領事館としてもお手伝いしていきたいと思っています。



(写真提供：JBSD 事務局)



第31話：デトロイトりんご会補習授業校

12月7日、デトロイトりんご会補習授業校を訪問しました。同校は1973年に邦人企業関係者によって設立され、その後、校長先生及び教頭先生が日本政府より派遣され、現在は、90名近い教職員が現地で採用されています。12月4日現在、幼稚園149名、小学部570名、中学部110名、高等部31名の計860名の生徒が学んでおり、補習校ではNYに次ぐ規模です。総領事はりんご会補習授業校の名誉会長を務めていますが、本日は理事長や校長他学校関係者からの説明を伺い、幼稚園から高校までの授業参観をさせてもらいました。幼稚園では時節柄、ちょうど餅つきをやっており、幼稚園児とともに特別参加させて頂きました。高学年ではなかなか難しい学習内容に、自分が同じ年齢の頃にこんなことを勉強していたかなと少し驚きました。平日、地元の学校に通い、更に土曜日に補習校に通うことは、高学年になるほど予習・復習を含め生徒たちには大変な物理的・精神的な負担かもしれませんが、きっと将来、彼らはそれに耐えたことを感謝する日がくるでしょう。地元小学校の校舎を借りており、常時借りている職員室や倉庫もありますが、週末だけ利用している教室や廊下では、生徒の作品や案内書きを授業前に掲示し、授業後に取り外したり、教室内の机と座席のアレンジと復元といった大変な作業をボランティアの留学生の協力も得て毎行っています。また、保護者の方々が輪番で授業中の学校の安全当番を要所所でされていました。地元関係者、教職員、保護者、日系企業関係者、ボランティア等の多くの方々の理解と支援があつて初めて円滑に機能する学校運営だということを2時間程度の短時間の視察ながら十分認識しました。陰で支えて下さっている関係者の皆さん、本当にありがとうございます。先般のバトルクリークの補習授業校オープンハウス参加の際にも伺いましたが、先生の安定的な確保がりんご会補習授業校でも課題となっています。また、高等部になれば、日米どちらの大学を選択するかによって進路指導も異なりますし、駐在員子弟と永住邦人子弟では学校に求める教育内容にも違いが出てくるでしょう。総領事館も補習校の運営が更に改善されるよう二人三脚で対応していきたいと思います。



(写真提供：デトロイトりんご会補習授業校)

第3 2話：フィンドレー訪問

12月9日、デトロイトから南へ車で約2時間のところにあるオハイオ州フィンドレー市を訪問しました。まず、ロータリー・クラブの昼食会合にゲストで呼んで頂き、約150名の出席者を前に「日米関係と中国の台頭」と題して講演しました。オハイオにおける中国の投資は日本に比べるとまだ目立ちませんが、地元企業の対中投資や対中輸出が増えている関係もあり、熱心に聴いて頂きました。午後は、若い女性市長のミハリク氏にわざわざ同行して頂き、市内を巡り、町誕生200周年を記念して昨年植樹された桜の木を見学し、当地最大の企業でフォーチュン500企業にも入っているマラソン・オイルを訪問。その後、市長と別れ、フィンドレー大学へ。9月に東京での会議でお会いしたフェル学長と再会。ここは1882年に創立されたキリスト教系のリベラル・アーツのカレッジです。日本語科には30名程度の学生が学んでおり、埼玉県や福井県から日本人留学生も定期的に派遣されています。学生代表として日本語で挨拶してくれたマイク君は岡山の吉備国際大学に留学経験がありますが、その日本語のレベルは相当高く驚きました。しばし、先生や学生たちと懇談し、夕方、地元日系企業の中で最大の雇用（約1000名）を創出しているニッシン・ブレーキ（自動車・二輪車制動装置等の製造・販売）の工場を視察。同社は日本人留学生のインターンシップも受け入れています。夜は、Friends of Findlayという地元日系企業代表を中心とする団体との夕食意見交換会に出席して、日本語補習校を含め地元在留邦人や日系企業が取り組んでいる課題につきお話を伺いました。フィンドレーは人口4万人余りの地方都市ですが、市長以下市当局や大学、日系企業の間には緊密な連絡があり、よくまとまっている印象を受けました。全日程アレンジをして頂いた川村フィンドレー大学教授、大変ありがとうございました。



(写真提供：フィンドレー大学)

第33話：日米協会のクリスマス・ディナー

12月11日、当地ミシガン・南西オンタリオ日米協会（JASMSO）主催のクリスマス・ディナーに妻と参加しました。場所は、オークランド大学の中にあるメドールブルック・ホール。この建物は、自動車のダッジ・ブランドの共同創立者の未亡人が莫大な遺産を元に、1926～29年にかけて、当時の価格で約4百万ドルの費用を使って建てた大邸宅です。邸内にはなんと110もの部屋があり、この季節には各部屋が美しいクリスマスの飾り付けで幻想的な雰囲気を出しています。ちなみに、この未亡人はオークランド大学の共同創立者でもあります。グリークラブのクリスマス・ソングを含め、関係者と1年を回顧し、楽しい一時を過ごしました。11月初めの歓迎会の際は、デトロイト市内の歴史的な建物であるフリーア・ハウスに招待して頂きましたが、JASMSOはセンスの良いしゃれた場所をいつも選んでくれます。JASMSOは会員企業約70社、現会長はチャールズ・リトル氏（INOAC USA 社長）、総領事はカナダ総領事とともに名誉会長を仰せつかっています。日米協会は全米に38あるそうですが、私の管内（ミシガン、オハイオ両州）には、その他にセントラル・オハイオ日米協会（JASCO）とグレイター・シンシナチ日米協会（JASGC）と合計で3つの協会があります。それぞれが、日米両企業や篤志家の支援を得つつ、地元で日米の草の根文化交流を支えています。私が着任してこの2ヶ月半の短期間だけでも、JASMSOの着任歓迎レセプションとクリスマス・ディナー、JASGCの25周年ガラ・ディナー、JASCOの経済セミナーを始め各種の日米協会が関係する行事に参加しました。総領事館としても、日米交流促進を図る上で強い味方である各地の日米協会との連携協力を強めていきます。



（写真：メドールブルックホール（オークランド大学 HP より））

第34話：在シンシナチ名誉領事の任命

日米両国政府部内の調整が完了し、12月16日、外務省は、シンシナチ大学のサンタ・オノ学長を正式に在シンシナチ日本名誉領事に任命しました。当館は、ミシガン及びオハイオの両州を管轄しており、私もよくオハイオの各地域に出張していますが、総領事館がデトロイトに位置することから、従来より、

オハイオ州の現地米国人に名誉領事となって頂き、日本とオハイオ州との文化、教育、経済交流の支援をお願いしています（なお、ビザや旅券等の発給は行っていません）。州内の日系企業の進出約420カ所、創出雇用数約6万6千、在留邦人数約1万2千名、日本が最大投資国、日本語補習校5カ所、日本語コースを持つ大学26、履修学生2500名という、日本と非常に深い関係にある州です。オノ学長は、カナダ・バンクーバーの生まれ。医学者として優れた業績を修め、昨年学長に就任しました。同大学病院の医療レベルは極めて高く、全米10指に数えられています。シンシナチ大学では初のアジア系米国人学長だそうで、全国的にも日系の学長はめずらしいと思います。グレーター・シンシナチ日米協会の活動にも積極的に参加されています。また、twitterやfacebookで積極的に外部への発信やコミュニケーションを図り、学生にも非常に人気の高い教授です。このような素晴らしい人物に日本の名誉領事としてシンシナチ、更にはオハイオ州で支援を頂けるのは総領事として心強い限りです。オノ学長、一緒に頑張りましょう。



サンタ・オノ在シンシナチ名誉領事（写真提供：シンシナチ大学）

第35話：スポーツ観戦

米国の4大プロスポーツと言えば、MLB(メジャー・リーグ・ベースボール)、NFL(ナショナル・フットボール・リーグ)、NHL(ナショナル・ホッケー・リーグ)、そして、NBA(ナショナル・バスケットボール・アソシエーション)ですが、その内、オフ・シーズンの野球を除いた3つのスポーツ・ゲームを一週間で集中的に楽しみました。デトロイトは4大プロスポーツのチームの本拠地がすべて揃っている、スポーツ・ファンにとっては願ってもない場所です（注：バスケットボールは郊外のアーバンヒルズが拠点ですが、残る3つはすべてデトロイト市内ダウンタウンにあります）。まず、12月14日、ジョー・ルイス・アリーナで行われたデトロイト・レッドウイングスとピッツバーグ・ペンギンズのアイスホッケーの対戦を見に行きました。アイスホッケーリーグは30チームの中にカナダも7チーム加わっており、全体の選手の半分がカナダ人と言われるくらいカナダで最も人気の高いスポーツです。レッドウイングスはNHLの頂点を決めるスタンレーカップで過去10回も優勝しています。試合結果は、1対4で残念ながらレッドウイングスの負け。精彩に欠けました。次に見たのは、16日、フォード・フィールドでデトロイト・ライオンズとボルチモア・レイブンズのアメリカン・フットボールの試合でした。フットボールは1チーム年間16試合しかなく、1試合平均観客動員数は6万7千人。2012年のテレビ視聴率トップ10の内、NFL中継が8つを占めたとか。人気が高いのでチケット入手も容易でない聞いていましたが、幸い、アーチャー元市長（当地の日米協会前会長）から招待を受け、夫妻どうして観戦することができました。外は雪が降り積もっていましたが幸い室内スタジアムで快適でした。現場でフットボールの試合を見るのは始めてでしたが、とても迫力がありました。ルールを詳しく理解していなかったので事前に本を買って基本知識を詰め込んで行きました。ライオンズはまだスーパーボウル優勝の経験がありません。スタジアムはライオンズのチーム・カラーである青色一色。緊迫した目の離せない好ゲームでしたが、最後に再びひっくり返され、結局16対18でライオンズの負け。去年のスーパーボ

ウル覇者はやはり強かったです。最後に、21日、パレス・オブ・アーバンヒルズでピストンズとヒューストン・ロケットスのバスケットを観戦。ピストンズはNBA ファイナルで3回優勝した古豪。結果は97対114でこれも敗北。ことごとく、デトロイトが負け、悔しい思いの1週間でした。3つのスポーツを観戦して改めて痛感したのは、これらの分野では、野球と異なり、なかなか日本が立ち向かうことができないほどの彼我の実力差でした。



(写真左：レッドウィングス、写真中：ライオンズ、写真右：ピストンズ)

第36話：グレイターズ・アイスクリーム

シンシナチの知人がグレイターズ (Graeter's) アイスクリームの詰め合わせをクリスマス・プレゼントに贈ってくれました。ハーゲンダッツやバスキン・ロビンスのように全国区ではありませんが、シンシナチに行ったら必ず食べるように勧められる地元では超有名なアイスクリームです。アイスクリームは、一説には3千年以上前に中国で作られた氷菓子がマルコ・ポーロによってイタリアに伝えられ、今日の原形になったとか。日本では1869年(明治2年)に「あいすくりん」という名前で横浜で売り出されたのが始まりだそうです。グレイターズは1870年にシンシナチで操業した家族経営の店で、現在は4代目。シンシナチの14店をはじめとして周辺の州を含め2010年現在、45店という小規模の地域性の強いアイスクリーム屋です。味は濃厚で確かにとても美味しいです。たくさんあるフレーバーの中で、私は特に定番のブラックラズベリー・チョコチップが好きです。大量生産とは異なり、「フレンチ・ポット」方式と言われる製法でじっくりと丹念に作られます。有名人では、サラ＝ジェシカ・パーカー、ジョージ・クルーニー、ケヴィン・コスナー等がこのアイスクリームのファンだとか。みなさんも、シンシナチに行く機会があったら是非お試し下さい。



(写真：グレイターズ・アイスクリーム ブラックラズベリー・チョコチップ味)

第37話：フォックス劇場でのバレエ

クリスマス前の22日、デトロイト市内中心部にあるフォックス劇場でモスクワ・バレエ団による「くるみ割り人形」を見に行きました。地元のオーディションで選ばれた可愛い子供たちもたくさん登場し、この季節に相応しい大人も子供も楽しめるバレエでした。開幕後も席に着いていない観客が劇場内の暗闇を自分の席を求めて彷徨い、客席が落ち着くまで暫く時間がかかりましたが、これもアメリカ的な大らかさでしょう。フォックス劇場は、もともと大恐慌の前年1928年にフォックスの劇場チェーンの旗艦映画館の一つとして営業を始めています。その後、改築を経て今日に至っており、1989年には国の歴史的な建造物に指定されました。この地域はフォックスタウンと呼ばれ、市内の主要な劇場やオペラハウスが集中している場所です。収容人員は5千名を超え、当時から残る劇場としては最大級だとのこと。このような文化施設が全体として更に活性化し、人々が文化や娯楽を求めてデトロイト市内に足繁く通うことになれば、市の再生にも一役買うのではないのでしょうか。都市の魅力に文化力は不可欠の要素だと思います。



写真右：フォックス劇場外

写真左：フォックス劇場内

写真：<http://www.broadway.org> より

第38話：デトロイトのイースタン・マーケット

年末年始はデトロイト郊外の自宅で過ごすこととなり、如何に有効な時間を過ごそうかと考えた結果、着任後3か月でまだ訪れたことのない近郊の名所旧跡を回ることを考えました。2013年最後の土曜日である12月28日、早速、デトロイトのダウンタウンの東側にあるイースタン・マーケットに行ってきた。初めて行く地域で一抹の不安もありましたが、市場の中心にある駐車場に人通りを見て一安心。イースタン・マーケットが現在のような農家のマーケットになったのは1891年。現在、市場の広さは17ヘクタールで米国内でも有数の巨大マーケットだそうです。野菜、果物、肉類、花卉、パン、ジャム、チーズ、ワイン、アンティーク、周辺にはレストランも軒を並べています。値段は総じて安かったです。約250の店が出店し、土曜日には数万の客が集まってくるとか。私が訪れた

日は、そこそこに賑わっていましたが、寒いせいか露店はほとんど出店しておらず、建物内の店も賑わっているのかいないのか微妙な感じでした。でも、周辺地域を含め、もう少し明るくきれいに再開発すれば大きな集客力と貴重な観光資源にもなるのではないかと思った次第です。



(写真 : Move_to_Detroit.org より)

第39話：デトロイトのカジノ

デトロイト市内には、MGM Grand Detroit、Greektown Casino Hotel、MotorCity Casino Hotel と3か所にカジノがあります。私自身、カジノを楽しむ趣味はありませんが、1996年にデトロイトでのカジノを解禁する法案がミシガン州で通過し、99年に営業が開始されました。報道によれば、デトロイトは、毎月カジノから千百万ドルの税収を上げているそうです。事務所の窓からはデトロイト川を隔てて対岸のカナダの町、ウインザーが目の前に見えますが、ここもカジノで有名な都市です。現在、世界120か国以上でカジノが合法化され、米国でも1931年にネバダ州で認められて以来、ネイティブ・アメリカン自治区での営業を含めると36の州でカジノが合法化されていると言われています。カジノと言えばラスベガスが有名ですが、現在の売り上げでは、マカオがトップ。マカオ政府の最近の発表では、2013年のカジノ収入は日本円で約4兆7620億円で前年比18.6%増。4年連続の2桁成長で、推計ではラスベガスの約7倍に達しているそうです。2位は、2010年に解禁されたシンガポール、ラスベガスは3位だそうです。世界のカジノ市場もアジアに重心が移っているということでしょうか。日本も、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを睨みつつ、カジノ解禁の動きも見られますが、どうなるのでしょうか。

第40話：カレッジ・フットボール

正月は、米国のカレッジ・フットボールのシーズンを締めくくるビッグ・ゲームが次々に行われる興奮する時期です。NFLもレギュラーシーズンが終わりプレーオフが始まりました。外は零下10度を割り、雪がしんと降っているので寝正月と決め込み、テレビで大学フットボール観戦を楽しみました。BCS（ボウル・チャンピオンシップ・シリーズ）は、従来ローズボウル、シュガーボウル、フィエスタボウル、オレンジボウルの4つをBCSボウル・ゲームに指定し、4年に一度の持ち回りでチャンピオンシップを決めていましたが、最近では、更に別途独立してBCSナショナル・チャンピオンシップ・ゲームを開催しています。BCSランキング1位と2位の大学が対戦し、全米大学チャンピオンを実質的に決める試合です。同時に、4つのBCSボウルも主要なカンファレンス優勝校の出場する引き続き超人気のスポーツ・ゲームです。我が総領事館の管内からも、元旦のローズボウル（パサデナ）にミシガン州立大学が、3日のオレンジボウル（マイアミ）にオハイオ州立大学がそれぞれ出場しました。ミ

シガン州立大学の対戦相手はスタンフォード大学。スタンフォード大学（カリフォルニア）は28年前、6週間のサマー・スクールを学生寮で過ごした青春の思い出が詰まった大学ですが、現在応援しているのはもちろんミシガン州立大学。24対20で見事ミシガン州立大学が勝利。元旦から良い気分です。オハイオ州立大学については、昨年11月、コロンバスを訪問した際、収容能力10万人を超える巨大なスタジアムを外から眺めたことがあります。対戦相手はクレムゾン大学（サウス・カロライナ）。白熱したシーソーゲームでしたが、最後に相手のタッチダウンで逆転を許し、35対40でオハイオ州立大学が惜しくも破れました。残念。なお、6日に行われたBCSナショナル・チャンピオンシップ・ゲームでは、ランキング1位のフロリダ大学と2位のオーバン大学が対戦し、歴史に残る名勝負を34対31で前者が制し、見事今シーズンの大学チャンピオンとなりました。

第41話：アジア系米国人団体との交流

1月15日、公邸にて当地アジア系米国人団体との交流を兼ねた食事会を開きました。具体的には、MAPAAC（ミシガン・アジア太平洋系米国人委員会）、CAPA（アジア太平洋系米国人協議会）、APACC（アジア太平洋系米国人商工会議所）、APIA Vote Michigan（ミシガン・アジア太平洋系米国人決議）JBSD（デトロイト日本商工会）の各代表夫妻及び総領事館関係者計約30名の出席を得て、日本料理と日本の飲物で楽しい一時を過ごしました。出席者からも暖かい感謝のメッセージとともに、今後、日本人コミュニティとも更に連携を深めていくための具体的な行動を起こしたいとの言葉もいただきました。当地デトロイトでは、1982年に結婚を控えた中国系米国人ヴィンセント・チンが日本人と間違えられてクライスラーを解雇された労働者にバットで殴られて死亡するという痛ましい事件がありました。当時は日米自動車摩擦が激しく、ほとんどの日本車が米国で生産されている現在とは貿易・投資構造が大きく異なっていますが、いずれにせよ、アジア系全体が一致団結して立ち向かうべき深刻な問題でした。日系を含めアジア系米国人は米国人であり、その点で日本人である我々と同一視することは適切ではありませんが、日本としても、彼らの米国社会での貢献を誇りに思うとともに、苦労や悩みにはアジアの一員である日本としても関心を寄せるべき共通課題もあると思います。彼らの経験から学び、彼らとの交流と協力を広げることは邦人社会にとっても重要なことであり、ネットワークを強化するために総領事館として果たすべき役割が大きいと感じました。東アジアでは、最近、歴史や領土を巡る緊張が高まり、安全保障環境も厳しさを増している現状があるのは残念なことです。当地アジア太平洋系コミュニティ内では、共通課題対処のため、一致団結を図っていききたいものです。

第42話：北米国際自動車ショー（デトロイト自動車ショー）

1月13日～26日まで北米国際自動車ショー（デトロイト自動車ショー）がダウンタウンのコボ・センターで開かれました。東京、フランクフルトとともに世界三大モーター・ショーとも、あるいは、ジュネーブ、パリを加えて五大モーター・ショーとも言われています。最近、年間販売台数2200万台を超え世界最大市場になっている中国上海や北京のモーター・ショーも重要性を増しています。私

は、前半の報道・産業関係者への公開期間に足を運び、チャリティー行事に参加しました。今回のデトロイト自動車ショーでは、日本メーカーは、トヨタ、ホンダ、日産、マツダ、スバル、デンソー、アイシン・グループ及びパナソニックが参加していました。トヨタのコンセプト・スポーツ・カー「FT-1」や、北米仕様のホンダ「フィット」、インフィニティの「Q50 Eau Rouge」コンセプト・カー等々初めて見学する自動車ショーは童心に返ったような夢と興奮を与えてくれます。自動車ショーに合わせて、著名な政治家も沢山やって来ました。ワシントンからは、バイデン副大統領、プリツカー商務長官、フォックス運輸長官、ペレス労働長官、マッカーシー環境保護庁長官等の高官、ミシガン州からはスナイダー知事や州選出議員、周辺自治体からは、ケーシック・オハイオ州知事、ダガン新デトロイト市長、パターンソン・オークランド郡長、フィカーノ・ウエイン郡長、ハッケル・マコーム郡長等が来られました。その内、多くの方々をお見受けしたり、あるいは短時間お話をする機会を得ました。副大統領のスピーチは、自動車産業を含め再び製造業において米国が世界をリードする時代が到来したというメッセージでした。父親がGMのディーラーであっただけに、自動車産業やその象徴であるデトロイトへの思いも人一倍であると感じました。スナイダー知事は、複数の日本メーカーのブースを視察され、そこで記者会見まで行いました。私の方から、ミシガンに投資している日本企業への強い支援を要請しましたが、知事は言われなくても当然であるという反応で心強い限りです。商務長官やデトロイト新市長に対しては、私から、日本がデトロイトに総領事館を設置している数少ない国の一つであり、いかにこの地域との関係を重視しているかを強調したところ、先方は頷いて聴いていました。オークランド郡長は、当地最大の在留邦人社会を抱える郡として、日系企業の強い支援者です。自動車産業が復活し、自動車ショーが賑わいを見せているのは、破産手続で再生を目指すデトロイトにとり明るいニュースです。



第43話：日本人少女ピアニスト

1月18日、自宅近くにあるプロテスタントの教会で開かれたピアノ・コンサートに招待頂き出かけました。ピアニストは、なんと山口奈央未ちゃんという9歳の日本人少女。ミシガン生まれで、演奏のみならず作曲でもいろいろな賞を獲得している天才少女です。オーケストラとの競演やチャリティー・コンサートも何度か経験しているそうですが、今回のコンサートが実質的なソロ・デビューだそうです。コンサートでは、奈央未ちゃんの音楽の師であるキャサリン・ローリン先生との連弾を含め、バッハ、ベートーベン、シューベルト、ドビュッシー、ハイドン、ショパンの作品や自分の作品を愛らしく見事に弾いてくれました。教会関係者によれば、日曜日の礼拝でも座席がいっぱいになることはないそうですが、当日は、2階席を含め立ち見ができる程の人気でした。笑顔の素敵な奈央未ちゃんが、今後もその能力を着々と開花させていってくれるように、応援していきたいと思います。日米の交流がこのような所で開花していることを見るのは、本当に素晴らしいことです。小さな「外交官」奈央未ちゃん、頑張って！



第44話：日本人会新年会

年明けの1月は、ミシガン、オハイオ両州各地の日本人会新年会に招待頂き、参加してきました。具体的には、バトルクリーク（11日）、クリーブランド（12日）、トレド（19日）、ダブリン（24日）の各日本人会です。それに加え、シンシナチ日米協会（23日）、デトロイト日本商工会（26日）の新年会にも出席させて頂きました。年初は、20年振りの寒波でしたが、皆さんとともに、それぞれ各地で元気に新年をお祝いすることができました。日本料理店からの仕出しや各家庭の持ち寄りで用意したおせち料理や日本料理を囲み、ゲームや出し物、太鼓、踊り等で楽しい一時を過ごし、一年の幸せを願いました。今は、テレビ・ジャパンで日本語番組が視聴でき、インターネットで簡単に日本の情報に触れることができ、10数時間のフライトで帰国できる便利な時代ですが、それでも、外国の地で日本人どうし新年を迎えることには、厳粛な気持ちとある種の感慨があります。数えてみると、私にとり、連続して海外で迎える8回目の正月となりました。同じ日本人会と言えども、場所によっては規模の大小もあり、財政基盤も異なり、それぞれの課題にも直面されていますが、各地域ともボランティアで日本人会のために奔走されている方々や進出企業によって支えられていると感じました。また、各地に20年、30年、場合によっては50年以上も住まれ、邦人企業の投資に当たって面倒を見て来られた永住邦人の方々がいらっしゃることも知りました。皆様にとり、2014年が干支の馬のように飛躍の年となりますように祈念します。総領事として、米国人には日本が真に信頼に値するパートナーであることを

理解してもらい、日本人には総領事館が頼りになる存在になることを目指して引き続き尽力して参ります。本年も宜しくお願いします。

第45話：グレーターシンシナチ日米協会主催シンポジウム

グレーター・シンシナチ日米協会主催のシンポジウム「米中西部における日本の展望(Japan in Mid-America: Renewal, Challenges and Opportunities)」が1月23日、シンシナチ大学で開催され、スピーカーの一人として参加しました。私の方からは、米国中西部における日本の投資につき、70年代から80年代、輸出主導による日米貿易摩擦激化そしてジャパン・バッシングと言われた時代から、その後、日本の自動車・部品メーカーを中心に輸出から投資への戦略転換が行われ、今日如何に中西部に雇用の機会を生み（オハイオ州では日本事業所423か所、雇用総数約66000）、地元の発展に寄与するまでに至ったかの歴史を回顧するとともに、我々は今日の成功物語を当然視することなく、経済関係の維持及び更なる発展のためには日米双方の意識的な努力が必要であることを強調しました。シンポジウムには、アイラ・シャピロ氏（全米日米協会連合会長、元USTR大使）、クライド・プレストウィッツ氏（経済戦略研究所（ESI）所長）といった日米通商摩擦の時代によく名前を聞いた方々や、ボブ・タフト氏（元オハイオ州知事。タフト大統領の曾孫）、チャールズ・ブラウン氏（北米トヨタ経理担当副社長）、井口武雄氏（三井住友海上シニアアドバイザー、元会長・社長）、西津幹雄氏（弁護士）といった各分野の専門家が出席されました。最近、日本の名誉領事に任命されたシンシナチ大学のサンタ・オノ学長も参加されました。興味深い話者が集まり過ぎて、時間が足りなかったのが少し残念でしたが、今後の日本と中西部との関係について示唆に富む話を伺いました。

第46話：デイトン訪問

1月24日、オハイオ州出張の一環で、デイトンに立ち寄りました。デイトンは州西部に位置する人口14万人余りの都市です。ライト兄弟が育った場所であり（但し、1903年にライト兄弟が初めての有人飛行を成功させたのは、ノースカロライナ州キティホーク）、ライト・パターソン空軍基地があります。また、1995年にはボスニア・ヘルツェゴビナ紛争停戦のための「デイトン合意」が締結された場所としても知られています。地元当局、商工会議所、日本人会等の幹部の皆さんと昼食をとりながら歓談しました。ボブ・タフト元州知事（タフト大統領の曾孫）にもご多忙中出席頂きました。彼らは、地元の「オペレーション1000チェリーツリー計画（桜1000本植樹計画）」の中心人物でもあり、タフト元州知事はその名誉会長を務めています。タフト家と日本そして桜との深い繋がりを感じます。午後、その植樹の場所を見学させて頂きました。更に、空軍基地にある国立空軍博物館(National Museum of the United States Air Force)を訪問しました。3つの巨大な格納庫に米国をはじめとする各国の大小400以上の各種航空機が展示されていました。戦時中の日本の零戦や紫電改もありました。日本人として重い気持ちになったのは、長崎に原爆「ファットマン」を投下したB-29の実機の展示です。日米関係は、19世紀後半のペリー来航以来、多くの試練と努力、そして交流を経て、今日の偉大な同盟関係を築くに至ったことを改めて思いました。

デイトン訪問日程アレンジでは、地元日本人会のアレックス・ハラ氏に大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

オペレーション 1000 チェリーツリー計画のホームページも併せてご覧ください。こちら：

<http://www.operation1000cherrytrees.com/>



第４７話：ラフカディオ・ハーン

ラフカディオ・ハーン（日本名小泉八雲）といえば、「耳なし芳一」など昔の物語に題材をとった日本文化紹介者として日本人には有名です。１８５０年、アイルランド系の父親とギリシャ系の母親の間に現在のギリシャで生まれました。日本には、１８９０（明治２３）年にジャーナリストとしてやってきて、日本人女性と結婚。松江、熊本、神戸、東京に住みながら、英語教育と日本文化紹介の執筆活動を展開、日本に帰化し、１９０４（明治３７）年、日露戦争の年に東京で逝去しました。在デトロイト総領事の私が、ラフカディオ・ハーンの事を書いているのは、もちろん理由があります。来日前の１８６９年、ハーンは、欧州から米国に渡り、オハイオ州シンシナチの新聞社インクワイアラー社に入社して８年ほどシンシナチでジャーナリストとして生活していたことがあります。日本と中西部オハイオとのもうひとつの縁とも言えるでしょう。最近、彼の「Kokoro（心）」（１８９６年）という作品を読みました。日清戦争に勝利した直後の日本人の生活態度や日本女性の心、西洋文明への対応振り等についてのハーンの捉え方は今読んでも興味深い内容です。この本の中で印象に残った箇所を１、２紹介すると、西洋の技術を学んだ日本が製品の国際競争力を高めつつあることにつき友人が、いずれ中国が同様に学び始めると世界市場で日本製品を駆逐するのではないかとの見方を披露したのに対して、ハーンは、廉価品はそうなるかもしれないが、日本の技術と趣味の優れている点は安価な労働力に依存した競争を寄せ付けられないものであり、高価でも素晴らしい物を日本は作り続けていくだろうと予想しています。また、日清戦争勝利の後に、日本がその将来の国家の偉業達成に「何らの怖れも疑いも」抱いていないことに対して、「日本の将来の危機は実にこの途方もない、大きな自負心にあるともいえるだろう」と喝破して

います。彼の日本語能力や日本の見方については様々な評価があるようですが、これらの文章には、彼が鋭い鑑識眼を持って日本社会を眺めていたことがうかがえます。

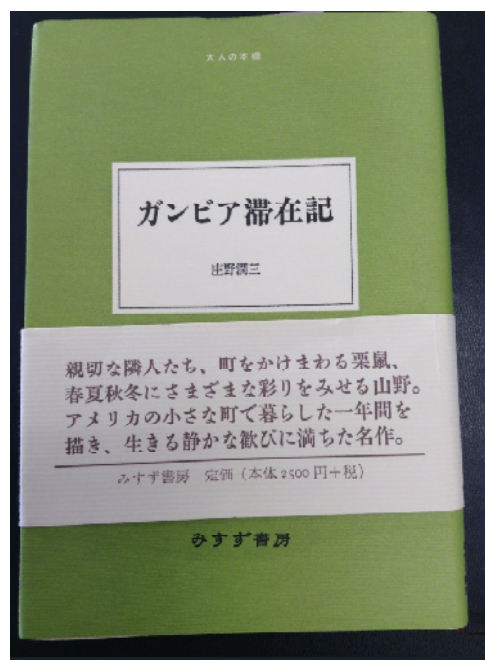
なお、当館ホームページに「日本とのゆかりの地を訪ねて」と題し、当地ミシガン州及びオハイオ州にある日本との繋がりについて紹介しています。ラフカディオ・ハーンについても紹介しています。

是非、目を通してみてください。リンク：

<http://www.detroit.us.emb-japan.go.jp/jp/kankatsu/0H%20place%20associated%20with%20Japan1.htm>

第48話：庄野潤三の「ガンビア滞在記」

オハイオ州の州都コロンバスから北東に1時間程車で走ったところにガンビアという小さな町があります。私もまだ訪れたことがないのですが、今から57年近く前の1957年の秋から翌年夏にかけて、小説家の庄野潤三が家族とともに1年間暮らした町です。「プールサイド小景」で1955年に芥川賞を受賞した有名な作家です。経済白書が「もはや戦後ではない」と表現したのが1956年。ロックフェラー財団の招聘で1年間家族を帯同して留学した訳ですが、公務以外の日本人の外国渡航が厳しく制限され、第二次大戦後の復興から経済成長への舵を切ろうとするこの時期に米国で生活するのは大きなカルチャー・ショックの毎日ではなかったかと想像します。彼は、その経験を「ガンビア滞在記」という随筆に著しています（初版は1959年、中央公論社から出版）。ケニオン大学と一体となっているガンビアの町は当時、人口600名、戸数200戸だったそうです。そのような田舎の小さな町に日本人一家が1年とは言え引っ越してくるのは、町始まって以来の出来事だったでしょう。でも、町の人々は日本からきた庄野一家にとっても親切に接してくれました。郵便局は速達以外は郵便物を配達せず各自が局内のボックスに取りに来ていたこと、町には食堂と食料品店が2軒ずつしかなかったこと、隣人であるムンバイ出身のインド人研究者ミノーと米国人夫人ジューン夫妻との交流、米国人大学生ジニーとトムを自宅に招待して日本風の料理でもてなしたこと、散髪屋ジムとの床屋談義等1950年代オハイオの田舎町のほのぼのとした人々との暖かい交流が描かれています。今のガンビアはどのような町になっているのでしょうか。機会があったら是非訪れてみたいものです。



第49話：浮世絵版画デモンストレーション

国際交流基金の事業により、2月3日から11日にかけてボストンとデトロイトに伝統木版画版元高橋由貴子氏と摺師の平井恭子氏2名の専門家が派遣され、当地でもミシガン大学（ディアボーン校）及びデトロイト美術館等でレクチャーとデモンストレーションが行われ、総領事館も全面的に支援させて

頂きました。その内、私自身はミシガン大学での行事に参加しました。ダニエル・リトル学長もわざわざレクチャーにお越し頂きました。高橋氏のパワーポイントと浮世絵版画の現物を使っての非常に分かりやすい説明を伺い、平井氏の実演を見る幸運に浴しました。葛飾北斎「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」のレプリカの木版で異なった色やぼかしが加わり、見事な完成品になる過程を見ることができました。この世界は体力も必要で伝統的に男性中心の世界だったと思いますが、お二人そろって女性専門家であることも嬉しいことです。学生他計50名程の参加者は熱心に話を聞き、実演を真剣な眼差しで見っていました。個人的にも、浮世絵版画には欧州で生活していた頃から関心を持って美術館や骨董美術商によく通っていましたし、米国でもボストン美術館や最近ではオハイオ州トレド美術館の新版画展を鑑賞する機会がありましたが、実際に版画が作製される過程を見るのは初めてで、とても印象的で勉強になりました。江戸時代、浮世絵版画はいわば当時の情報誌で、かけそば一杯の値段で庶民が購入できていたそうです。欧州の印象派画家を魅了しジャポニズムを生み、ゴッホなどは模写までしています。ボストン美術館を始め欧米のコレクションの方が日本国内の所蔵よりむしろ有名なものは、日本人として少し恥ずかしいですが、せめて浮世絵版画の歴史と製法くらいはしっかり勉強して外国人に説明できるようにしたいものだと思います。



第50話：日本語スピーチ・コンテスト

2月8日、ミシガン2014日本語スピーチ・コンテストがヒノキ・インターナショナル・スクールで開かれ、私も審査員の一人として参加しました。国際交流基金によれば、2012年に世界各地の教育機関で日本語を学んでいる外国人の数は約400万人、米国では15万6千名、ともに2009年

に比較して約10%の伸びです。ミシガン州では、60のK-12、17の大学で計6500名の学生が日本語を学習しており、日本語学習熱の高い州です。言葉は相互理解の基礎であり、日本語学習者の増加は日本を理解してもらうためにも非常に重要です。コンテストは、高校生の部11名、大学生の部12名が、それぞれが選んだテーマで3～5分のスピーチ、その後、質疑応答を行いました。日本の文化や、料理、昔話、日本人の性格、日米の比較、日中関係、人種差別や、更には心象絵図といったテーマまで実に多彩に個人の日本語や日本人との出会いの経験を題材に興味の尽きないスピーチを拝聴しました。特に、大学生の日本語スピーチの水準の高さには本当に驚きました。また、米国に留学しているアジア人学生の中に日本語を勉強している若者がいることも嬉しい驚きでした。総領事館の他、デトロイト日本商工会、ウイメンズクラブ、ミシガン・南西オンタリオ日米協会、ミシガン日本語教師会、国際交流基金、デルタ航空にも協力を頂きました。この場をお借りして関係者に改めて感謝します。スピーチ・コンテストの参加を契機に更に日本への関心を強め、将来日米関係を担う人材がこの中から生まれることを願っています。



(写真左：片山総領事による冒頭挨拶)

(写真右：コンテスト出場者と審査員の集合写真)

第51話：初釜茶会

2月9日、茶道裏千家淡交会のミシガンでの初釜茶会に正客としてご招待頂き、ご亭主の鍋田宗友先生ご夫妻、そして他の客人とともに楽しい一時を過ごさせて頂きました。31年前、外務省に入省した直後、研修所で裏千家千宗室家元（15代）の講義を拝聴し、京都研修旅行では「今日庵」をお伺いする貴重な経験をさせて頂きましたが、その後、外交活動の場で茶の湯との接点は何度かあったものの、ほとんどお点前を勉強することもなく今に至り、当日も作法を知らず、正客として恥ずかしい限りでした。また、久しぶりの正座に足が痺れてしまい、途中から失礼ながら胡坐をかかせていただきました。正式の茶事にご招待頂き改めて感じたのは、茶道が総合芸術であり、様々な日本文化と深い関わりを持っているということでした。心のこもった一碗の濃茶や薄茶を美味しく頂き、一期一会の出会いや会話を楽しむ中に、茶器や掛軸、花瓶等の選定や取り合わせにご亭主の趣向や心配りが表れ、これら多岐にわたる日本文化への造詣と鑑賞力も要求される非常に奥の深い世界だと痛感しました。茶道が外国人に

も大きな関心を持たれ学ばれている背景には、日本の生活文化の粋を彼らがそこに見ているのではないのでしょうか。米国でこのような日本文化のエッセンスに触れた貴重な初釜茶会でした。



第5 2 話：中西部の大寒波

今年の中西部の冬は、20年ぶりの記録的な大寒波です。東京も2月に45年ぶりの大雪に見舞われたようですが、私の家があるデトロイト郊外では、昨年末から雪が断続的に積もり、ホワイト・クリスマスを経験した後、年明けの御用始めの頃には大寒波が押し寄せ、学校や各政府機関が閉鎖状態。路面が凍り自動車の運転も危険な状態になり、また、大渋滞を引き起こしました。通常は自宅から事務所まで30分強で到着するところを、そのような時は2時間近くかかります。寒波はその後も何度か雪を伴ってやって来ました。雪が一定以上積もると、地元自治体から除雪車が出動して自宅の庭や周辺道路の雪を排除してくれるのですが、道端や家の門の両側には除雪された雪が1メートル以上も積もったままです。気温は何度か摂氏零下20度を割り、通常でも零下のままです。お陰で、事務所の横を流れるデトロイト川もご覧のように氷で覆われています。零下20度を割る経験は、これまでの人生の中で北海道塩狩峠、モンゴル・ウランバートル、そして中国ハルビンと経験しましたが、生活の拠点を置いた場所としては今回が初めてです。先日は、同僚が出張から夜戻る途中、高速道路上で乗っていた車が故障してしまい、レッカー業者も多忙で短時間では駆けつけてくれず、危うく凍えるところでした。しかし、このように厳しい冬を経験するからこそ、春、そして夏が一層待ち遠しくなるのでしょう。ミシガン北

部の夏は旅行に最適だと、地元の人によく勧められます。今は、それを楽しみに、この厳冬を耐えていきたいと思います。



(写真：氷で覆われたデトロイト川。対岸はカナダのウィンザー市)

第53話：ソチ冬季オリンピックのフィギア・スケートとデトロイト

ソチ冬季オリンピックのフィギア・スケートのアイス・ダンスで、メルル・デビス/チャーリー・ホワイト組が195.52の歴代最高得点でアイス・ダンスでの初の金メダルを米国にもたらししました。おめでとうございます。ソチ・オリンピックには13名のミシガン出身者が出場しました。また、フィギア・スケート米代表選手24名のうち、15名がメトロ・デトロイトで練習を重ねてきたそうです。2人はともに地元ミシガン州デトロイト郊外にあるロイヤル・オークという町に生まれ、10分しか離れていない場所でそれぞれ育ちました。1997年以来パートナーを組んでいます。2010年のバンクーバー・オリンピックでは銀メダルを獲得しています。同大会で優勝、今大会で2位となったカナダのペアも同じコーチに付いていました。日系米国人ペアのシブタニ兄妹もアナーバーがホームタウン。更に、日本のペア団体戦に出場した高橋成美・木原龍一のペアは、佐藤有香コーチの元で当地で練習を重ね、オリンピック直前にここからソチに向かいました。その他、多くの日本のフィギア・スケート選手が当地を重要な練習拠点にしています。今回、フィギア個人でメダルをとれなかったのは残念ですが、デトロイトはフィギア・スケート、アイス・ダンスにおける中心地といえるでしょう。ミシガンに関するいわゆるメイド・イン・ミシガンの今回のメダル受賞者は、米国人4名（アイス・ダンス、フィギア団体、ボブスレー）、外国人12名（スウェーデン、カナダ）（アイス・ホッケー、アイス・ダンス、フィギア団体）だったそうです。日本選手では羽生結弦がフィギア男子個人で見事金メダルを獲得しましたが、デトロイトに対する日本人の関心がこの方面でも更に一層高まることを期待したいものです。

第54話：クリーブランド美術館日本近代美術展

2月15日、クリーブランド市東部の文教地区（ユニバーシティ・サークル）にあるクリーブランド美術館で翌日から5月11日までの期間、開催される日本近代美術展(Remaking Tradition: Modern Art of Japan from the Tokyo National Museum)の前夜祭行事に参加しました。最近増築工事が終了し更に立派になった同美術館での今回の日本近代美術展は、デトロイトから車で日帰り往復6時間の旅でしたが、十分にその価値のある素晴らしく、印象的な美術展でした。東京国立博物館、国際交流基金の協力により実現した展示で、東博からは、黒田清輝の「舞妓」、岸田劉生の「麗子像」、横山大観、下村観山の作品等6つの重要文化財を含む50を超える作品が提供されました。平櫛田中作の彫刻も飾られていましたが、同氏は広島県福山市にある私の通った小学校の大先輩で、今から約45年前、同氏が母校を訪ねて来られて講演されたのを今でもよく覚えています。当時すでに100歳近かったと思います。今回の美術展は、東博所蔵の近代日本美術海外展示では最大規模だそうです。銭谷館長もわざわざ東京から来られた他、国際交流基金関係者もNY事務所から出席されました。ちなみに、東京の東博では少し前の1月15日から2月23日の間、「クリーブランド美術館展一名画でたどる日本の美」が実施され、ボストン美術館やNYメトロポリタン美術館等と並ぶ全米屈指の規模と質を誇る同美術館日本美術コレクションより、平安から明治に至る日本絵画40余件をはじめ、中国や西洋絵画を加えた約50件の紹介に多くの入場者を集めました。ちなみに、銭谷館長に教えて頂きましたが、森鷗外は東博の前身帝室博物館総長（館長）を大正時代に務め、現役のまま亡くなったとか。是非、皆さんも時間を見つけて期間中にクリーブランド美術館を訪れ素晴らしい作品を堪能下さい。



（写真左：クリーブランド美術館日本近代美術展） （写真右：クリーブランド美術館改築部分の様子）

第55話：デトロイト剣道トーナメント

2月16日、ノバイ高校の講堂で第16回デトロイト・オープン剣道トーナメントが開催されました。当地に在住されている田川順照（よしてる）教士8段（デトロイト剣道道場会長）の長年の尽力により同大会は毎年、回を重ねてきました。今年も、小さな子供から高年者まで、また、全米各地のみならずカナダからも参加者を得て活気に溢れていました。3年に1度開かれる全米選手権を除けば、米国での最大規模の剣道大会に発展しています。今年は、中部管区警察学校で指導されている山崎尚（まさる）教士8段も日本から駆けつけて来られました。剣道の米国での普及は、戦前日系一世が二世に日本の心

を伝えていきたいとの願いから始まったと仄聞します。占領期の苦難の時期を経て、その後、日米の剣道交流が再開し、1970年には国際剣道連盟（IKF）が創立され、同年第1回世界剣道選手権大会が開催されました。3年に1度の同選手権大会は、既に米国でも何度か開かれ、男子団体では2度準優勝しています。柔道が1964年の東京から正式のオリンピック種目となり、階級制、ポイント制、青色柔道着の導入等「柔の道」から国際スポーツの道へとグローバル化を進める中で、ある種の変容を余儀なくされているのに対して、剣道は、それを通じて心身を練磨し、礼節や信義を尊ぶという日本人の基本精神を堅持しようとしています。それぞれにそれぞれの進み方があると思いますが、当地でも、日本人や日系人だけでなく、その他の米国人や外国人が、剣道を通じて日本人のものの考え方や精神のあり方を更に深く理解してくれることを期待します。

第56話：イースタン・ミシガン大学日本学生会主催行事

2月16日、デトロイトの西約55kmに位置するイプシランティ（Ypsilanti）という町にある州立イースタン・ミシガン大学日本学生会主催の「ジャパニーズ・ディナー・ショー」に招待を受け出席しました。今年のテーマは、「明日があるさ：There is always tomorrow」でした。日本学生会は日本人留学生及び日本語を学ぶ米国人学生等約80名からなる組織で、過去15年に亘ってこの行事を主催してきました。行事の実施には、大学日本語学科の教員や、デトロイト日本商工会、日本人会ウィメンズクラブや個別日系企業からの協力も重要な支えとなっています。同大学の日本語学科には現在220名の学生が学んでおり、ミシガン州にある大学の日本語教育の重要な拠点の一つとなっています。最近、日本人学生の海外留学が減少し、米国内でも中国人留学生数が24万人に対して、日本人留学生は2万人で、この内向き志向は懸念材料ですが、本日の行事を楽しませてもらった上での感想を述べれば、イースタン・ミシガン大学の日本人留学生は、米国人学生と協力して、茶道、ゲーム、ビデオ、スピーチ、ダンス、歌、食事等のそれも質の高いプログラムを周到に準備し、実行する組織力、コミュニケーション能力、パフォーマンス能力をもった素晴らしい学生たちであったことに、非常に勇気づけられました。学生の皆さん、招待ありがとうございました。楽しい一晩でした。勉強引き続き頑張ってください。

第57話：「そして父になる」

週末、日本映画「そして父になる」（Like Father, Like Son）をロイヤル・オークの映画館で観る機会がありました。ハリウッドのエンターテインメント映画が席卷する中で、このような日本映画を自宅近くの映画館で観られるとは思ってみませんでした。映画館は比較的大きかったせいか、席は残念ながらガラガラでした。ハリウッドの人気映画という訳にはいかないですね。2013年制作の是枝裕和監督、福山雅治主演の映画です。昨年カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞したので皆さんもご存じだと思います。社会的地位も生活環境も異なる2組の家族が、それぞれの息子が生まれた際に同じ病院で取り違えら



れ、6年間我が子として相手の子供を育てていたことが判明したことで、どうすべきか葛藤する親子の思いや両家族間の関係を描いた、「家族の繋がり」という普遍的なテーマを取り上げた映画です。昨年、日本で上映された際は、作品の内容に加え、カンヌ受賞作品であり、かつ、人気俳優の出演作品ということもあってか、興行収入30億円を超え、この種の映画としては異例のヒットだったそうです。スピルバーグ監督も同作品に興味を示し、ハリウッドでのリメイクも決まったとか。先ほど、普遍的なテーマと言いましたが、米国人がこの映画をどうとらえたか興味深く、観た人に聞いてみたい気持ちです。というのは、「血のつながり」の問題を含めた家族の在り方は、特に欧米社会で最近かなり多様化しているのも事実だからです。米国の家庭では、人種の違う子供を含め養子をもって育てるのは決して珍しいことではありません。血のつながりを重視する東アジアの家族制度においても、中国や韓国は、それを極めて重視するのに比較して、日本は、どちらかというと血のつながりよりも「家」の継続を重視し、子供がいない場合は、養子を迎えて家系を絶やさないようにすることも抵抗なく行うといった違いがあります。家族の在り方が多様化している中で、この映画の見方も各種各様ではないかと思います。

（“Like Father, Like Son” 上映時間等の情報はこちらからご覧いただけます：

http://events.detroitnews.com/royal_oak_mi/venues/show/39174-landmark-main-art-theatre)

第58話：領事サービス向上のためのアンケート調査結果

皆様の協力を得て、2013年10月1日現在、300名以上の邦人が居住する地域を管轄している150在外公館を対象に領事サービスに関するアンケート調査を実施し、16,412件の回答を頂きました。当館管轄内には25,000名余りの在留邦人が居住されていますが、アンケート回答件数は627件と、150在外公館の中で6番目に多い数でした。多くの利用者に回答を頂き、この場をお借りして感謝申し上げます。ちなみに、1位から5位は、英国、NY、上海、中国、マレーシアにある大使館乃至総領事館です。在外公館全体についての結果概要を申し上げますと、前向きに評価する回答が、「公館がどこにあるかすぐわかりましたか」に対して79%、「入館時の対応」につき67%、「領事窓口の対応」につき78%、「電話の対応」につき73%、「ホームページの内容」につき63%、「メールマガジンの配信内容」につき73%といった結果でした。当館の結果も設問によって凸凹がありますが、大体において似たような結果でしたが、領事出張サービスへの評価が高かった反面、場所のわかりにくさで皆様にご迷惑をおかけしているようです。私も、着任後、暫くは地上階から事務所に辿り着くのに苦労したのでご指摘の点はよく理解します。ビルの構造上の問題がありますが、少しでもわかり易い工夫を今後ともしていきたいと思います。また、今回の調査結果を踏まえ、窓口や電話対応を含め、領事サービスの一層の改善に努力していきたいと存じます。個別のご意見について対応可能なものは意識的に改善していきます。なお、今回の調査結果概要については、外務省のホームページに掲載されていますのでご関心のある方はそちらもご覧下さい。

外務省：領事サービス向上・改善のためのアンケート調査結果のページ：

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/questionnaire/index.html>

第59話：日本語スピーチ・コンテスト（その2）

2月のミシガンに続いて3月1日、オハイオ州ダブリンで行われた日本語スピーチ・コンテストに審査員として参加しました。JASCO（セントラル・オハイオ日米協会）による行事で今年が第15回目となります。総領事館の他、地元ダブリン市、COJAC（セントラル・オハイオ日系企業懇話会）、国際交流基金、オハイオ州立大学日本研究所、オハイオ州立大学日本学生会、地元日本料理店や商店等から支援を頂きました。スピーチは、大学生9名、高校生10名が高水準の戦いを繰り広げました。オハイオ州立大学日本学生会の日米の学生たちが、ボランティアで受付や司会、裏方作業を支えてくれました。ありがとうございます。国際交流基金の調査によると、2012年現在、全世界で約4百万人、米国では15万6千人が学校等の教育機関で日本語を勉強しています。その内、オハイオ州での日本語学習者は、16の初等・中等教育機関、29の高等教育機関で計3100人に上ります。スピーチ・コンテスト高校の部では、今年3年目の挑戦をしたナタリーさんが見事過去の雪辱を果たし優勝、本人もご両親も大喜びでした。また、ミシガン同様、オハイオでも中国系、韓国系学生の中に日本語を学んでいる若者を少なからず発見しました。学生や保護者から日本語学習への理解を深め意欲を高めるため、会場横に日本語教育プログラムを持つ州内各大学や学生リクルート企業のブースが設置され、日本語教育と就職とを繋ぐネットワーク化努力への初の試みも行われました。市当局からは市役所の会議場を無料で提供頂きました。1月に就任したばかりのキーナン新市長とも、昼休みの短時間ですが挨拶し、在留邦人（同市はオハイオ州随一の約2000名の在留邦人居住地です）や日系企業への日頃の支援に対して謝意表明を当方から行うとともに、今後の協力関係強化につき確認しました。朝6時過ぎにデトロイト郊外の自宅を出発し、雪の中午後7時半に戻るという強行軍でしたが、参加した高校生、大学生から大きな元気ももらいました。



第60話：「夢を生きる」

東日本大震災3周年がやってきました。3年前の3月11日、私は、前任地の在ベルギー日本大使館に早朝出勤し、仕事をしながらNHKの番組をつけたままにしていたら、急に地震と津波速報の緊急ニュースとなり、その後に続いた映像に大きな衝撃を受けたことを昨日のように思い出します。3月4日、イースタン・ミシガン大学で、津波の犠牲となったJET(Japan Exchange and Teaching Programme)の米国人英語教師、テイラー・アンダーソンの勇気と犠牲を描いたフィルム”Live Your Dream”(夢を生きる)の上映会がありました。彼女は、当日、勤務先の小学校で児童の家族への引き渡しを見届けて自転車で学校を離れた後に二度と帰ってきませんでした。津波では2名のJET英語教師の尊い命が犠牲となりました。今回、同大学と当地のJET同窓会が主催し、津波の犠牲となったテイラー(当時宮城県石巻在住)の父親アンディとモンティ・ディクソン(当時岩手県陸前高田在住)の姉シェリー、そして、フィルムのプロデューサー兼監督であるレジェー・ライフ氏も来られました。約140名の観客(学生そしてJET同窓生もたくさんいました)とともにフィルムを鑑賞し、その後、遺族そして監督との質疑応答がありました。フィルムを見るとテイラーがいかに地元の子供たちや大人たち、そして同僚たちに慕われ、尊敬されていたかがよく分かります。アンディは震災後、既に5回も石巻を訪問し、今回も日本での上映会を行ったばかりです。石巻に「テイラー文庫」を寄贈して、テイラーが日米交流に注いだ熱意を継承しています。シェリーは、アラスカからかけつけてくれましたが、イースタン・ミシガン大学は彼女の母校でもあります。フィルムでは、モンティの誠実でひょうきんな人柄が滲み出ていました。私の方からは、米国、特にミシガンの米国人に対して「トモダチ作戦」を含めた日本人への支援と義援金に改めて感謝するとともに、テイラーやモンティが身をもって示した日本への深い愛情と犠牲の精神を日本人は決して忘れない、JETは既に30年近くの歴史があり、最も成功している草の根交流事業のひとつであること、つい最近も総領事館で今年の派遣につきミシガン及びオハイオ両州の志願者約100名に対して面接を行ったばかりであり、二人の遺志を継いで日米間の友情と心と心の絆を更に強めていきたい旨挨拶しました。二人の死に向き合うことはとても心の重く辛いことですが、彼らの残した日米の友情の種は決して絶えることなく、両国関係者の間に更に広がっていくことを信じています。遺族の方々の前向きなプレゼンテーションと日米交流にかける情熱に本当に心が救われるとともに、私も頑張らなければならないという思いを新たにしました。皆さんも是非この感動的なフィルムをご覧ください。



関連ウェブサイトは以下の通りです。

テイラー・アンダーソン記念基金：www.TaylorAndersonMemorialFund.org

フィルム及びテイラーについての記事：<http://jetwit.com/wordpress/?s=taylor+anderson>

フィルムの注文：<http://transitmedia.net/searchtitle.lasso>

J E Tについて：www.jetprogramme.org www.jetaausa.com



第6 1 話：日系進出企業調査

2013年10月1日現在の当館管轄州であるミシガン及びオハイオ両州における日系企業進出調査結果が判明しました。詳細は、総領事館ホームページの該当箇所をご覧ください幸いです、簡単に紹介しておきます。まず、ミシガン州ですが、日系企業事業所数は469（対前年比－12）、雇用数は37,020（＋1,232）。事業所の55％は製造業関連、うち64％は自動車関係です。雇用者の95％は現地採用職員です。州内事業所の81％は、ノバイやファーミントン・ヒルズ等南東ミシガンに集中しています。州内在留邦人数は12,027名（ノバイ（2,941名）、アナーバー（1,584名）、ウエスト・ブルームフィールド（974名））で近年増加傾向にあります。オハイオ州に目を転ざると、日系企業事業所数は425（－1）、雇用数は69,138（＋2,852）。事業所の60％は製造業関連、うち51％は自動車関係です。雇用者の98％は現地採用職員です。日系企業は州内の広い地域に所在していますが、コロンバス、シンシナチ、クリーブランドを中心とする各地域に比較的集中しています。州内在留邦人数は12,320名（ダブリン（2,002名）、コロンバス（705名）、シンシナチ（501名））でここも近年増加傾向にあります。日本は、オハイオでは最大の、また、ミシガンでも最大級の外国投資国です。両州において日系企業や在留邦人による経済・文化交流活動を通じて地元社会に大きな貢献をしていることがこれらの数字に示されています。

当館ホームページにて詳しい調査結果をご覧ください。

<http://www.detroit.us.emb-japan.go.jp/jp/kankatsu/index.htm#investment>

第6 2 話：東日本大震災への建築家の対応

3月7日～21日にかけてデトロイト市内のウェイン州立大学の図書館で、国際交流基金の海外巡回展「3.11 東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」が開かれています。7日、その開幕レ

セプションに出席しました。大学からは日系のウィルソン学長夫妻以下、大学の幹部の方々が来られ、今回の展示への大学側の強いコミットメントを感じました。大震災発生から3年が経過しましたが、これは、発生から1年の節目に企画された建築の展覧会です。建築プロジェクトを、「緊急対応」、「仮設住宅」、「復興計画」の3段階に整理し、各プロジェクトの概要、図面、写真をパネルにし、模型や実物大のダンボール・チャルター等も展示されています。海外建築家も参加しており、前任地で知り合ったベルギー人建築家の仕事も展示されていました。彼の夫人が日本人で石巻出身ということもあり、被災地の復興計画に強い関心を持ち、石巻で開かれたワークショップで町作りの提案を行いました。ベルギーに住んでいた時に夫妻どうしの付き合いがあったので、彼のパネルを見つけた時は嬉しい驚きでした。パネル展の監修者である五十嵐太郎東北大学教授は、震災等非常時に対して建築デザインに何ができるかということを建築家は考えなければならないこと、被災した日本人をまるごと引き受け移住させる「日本人村計画」という壮大な提案をしたアフリカの国をはじめ多くの海外建築家からの提案があったこと、東日本大震災を契機に、日本の建築家が世界に向けて建ち上がっているとのメッセージ発出になったこと、そして、建築の立場で各国が災害への対処方法を改めて考え直す必要性をこの展示は示しているとの趣旨を書かれています。パネルには文章が多く、素人には最初は少しとっつきにくいかもしれませんが、多くの示唆に富む内容ですし、実物大の展示もあります。是非、お立ち寄り下さい。

展覧会会場等のご案内は、当館ホームページのイベントカレンダーをご覧ください。

<http://www.detroit.us.emb-japan.go.jp/jp/culture/event.htm>



第63話：デトロイト美術館サムライ展

3月9日から6月1日の日程で、デトロイト美術館（DIA）において「侍と美術」（Samurai: Beyond the Sword）特別展が開催されています。DIAでの日本美術展覧会は25年振りだそうです。今回の展示では、武士の芸術を、鎧兜や刀剣といった剛健さの面ばかりでなく、武士階級によって育まれた茶道や能面、禅画等優美な面を含めた作品が約130点展示されています。DIA所蔵の日本美術コレクションの他、NYメトロポリタン美術館、ネルソン・アトキンス美術館、個人所蔵作品等が集められました。DIAと日本総領事館とは長年の協力パートナーの関係にあり、1993年にデトロイト総領事館が設置された年に開かれた最初の天皇誕生日レセプションをここで開催しています。私も昨年9月に着任して初めての同レセプションをこれまたDIAで行いました。その他、総領事館主催・後援の各種日米文化交流行事をDIAと協力しながら実施しています。このサムライ展関連でも今後いくつかの文化行事を予定しています。私が当地に転勤して以降のわずか半年間で、トレド美術館の現代日本版画展、クリーブランド美術館の近代日本美術展、そして、今回のDIAでのサムライ展と貴重な日本芸術を集中的にここ米国中西部で堪能する機会を得たのは本当に幸運です。皆様も是非、この展覧会に足を運んで下さい。それから、今回のサムライ展実現のためにスポンサーとして貢献頂いたトヨタ、デンソー、矢崎の各日系企業及びE. Rhodes and Leona B. Carpenter 基金に改めて感謝致します。



第64話：セントラル・オハイオ

3月13日、朝9時自宅発、夜中1時帰宅という強行軍で、セントラル・オハイオに出張に行ってきました。この半年で5回目のセントラル・オハイオ出張になります。今回は、ホンダ・メアリーズヴィル工場見学及びコロンバスでのJASCO（セントラル・オハイオ日米協会）の年次レセプション出席です。ホンダが少し前に作成したパンフレットによれば、オハイオの4カ所の工場で1982年以来1530万台の自動車、1900万台のエンジン、1500万台のトランスミッションを生産し、1万人を超える雇用を生み出しています。今は更に増えているでしょう。昨年はずいぶん、米国からの純輸出メーカーとなりました。日本の工場の3倍はある広大なメアリーズヴィル工場で米国人労働者が次々とホンダ車を作り出していく行程を見学しました。30年を超える歴史に裏付けられた物づくり現場での日米協力の姿を見させて頂きました。近い将来、スポーツカーNSX生産工場も稼働する予定のようですが、ホンダの「夢」がまた開花することを祈っています。その後、コロンバスに場所を移し、JASCOのレセプションへ。キンザー会長は長年に亘って日系企業に法的なアドバイスをしている法律事務所のパートナーであり、レセプションは同事務所が入居するビルのロビーで行われました。Columbus2020会長や元名誉総領事ははじめセントラル・オハイオの日米関係者が集まり、楽しい一時を過ごしました。セントラル・オハイオは日系企業が創出している約7万人の雇用の30%以上が存在している場所です。JASCO関係者の力も借りながら、日本と同地域との交流を更に広げて行きたいと思います。

第65話：オハイオと日本研究者

米国の日本研究の泰斗二人がともにオハイオと深い関係にあることを最近知りました。一人は、エドウィン・O・ライシャワー氏。宣教師の息子として1910年（明治43年）、東京生まれ、1927年、米国に戻ってオハイオ州のオーバリン大学に入学しています。クリーブランドの西にあり、名門のリベラル・アーツのカレッジです。桜美林大学は、創設者がここの卒業生でオーバリンにちなんで命名したとか。その後、ハーバード大学院に進み、再び訪日して当時の東京帝大や京都帝大で研究を続けました。戦後はハーバード燕京研究所所長、ケネディー政権の駐日大使、ハーバード日本研究所長等を務めました。私は、大学時代、彼の著した「The Japanese」を読み、日本への造詣の深さに感銘を受け、日本にやって来たばかりの米国人の友達に日本理解のため1冊寄贈したことを覚えています。彼のいた燕京研究所は、80年代中頃、私のハーバード留学時代にその図書館に専用机をもらい連日通った場所です。残念ながらご本人に生前お会いする機会はありませんでしたが、夫人のハル・マツカタ・ライシャワー氏が1986年に「Samurai and Silk」という、父方と母方の二人の祖父を中心とした家族史を書かれた際に、ボストンでのサイン会で夫人から購入した本に署名をもらい、会話を交わした体験があります。

エズラ・ヴォーゲル氏は、1930年、オハイオ州デラウェア（コロンバス郊外）に生まれ、同市にあるこれまた評価の高いリベラル・アーツのカレッジであるオハイオ・ウェズリアン大学を卒業し、ハーバード大学で研究を続け今も旺盛に東アジア研究の成果を発表しています。数年前には、鄧小平に関する大著を出版しました。クリントン大統領時代、政権に入り東アジア地域の情報分析担当もしていました。私が日本での大学時代の1980年頃に、ちょうど彼の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がベストセラーとなり、教養課程の国際政治学のゼミで同書をテキストに議論したことを記憶しています。その後、ハーバードに留学した際の私の指導官になるとは当時思ってもみませんでした。既に著名な東アジア研究者で多忙を極められていましたが、彼の研究室や自宅に伺い、修士論文の指導を受けたことを懐かしく思い出します。このお二人との繋がりが巡り巡って、オハイオでまたクロスするのも何か不思議な縁を感じます。

オーバリン大学：<https://home.oberlin.edu/>

オハイオ・ウェズリアン大学：<http://www.owu.edu/>

第66話：デトロイトりんご会補習校卒業式

デトロイト総領事館管轄のミシガン、オハイオ両州には合わせて8つの補習校があります。その中でもデトロイトりんご会補習校は最大で、3月15日に来賓として出席した卒業式では、小学生59名、中学生32名、高校生7名の計98名が卒業しました。その他、午前中に行われた幼稚園の卒園式では91名の園児が卒業しました。以前赴任していたクアラルンプールやブリュッセルでも全日制日本人学校や補習校の卒業式に何度か出席したことがあります。そのたびに、海外の慣れない新しい環境の下で親子ともども苦労を重ねながら、その中で国際性を育みたくましく育っていった生徒たちひとりひとりが卒業証書を壇上で受け取る姿を、他人ながら感慨を持っていつも拝見しています。3年前のブリュッ

セルでは、補習校の卒業式がちょうど東日本大震災の翌日にあり、不安をかかえて卒業生が旅立ったのを思い出しました。補習校の場合、平日は地元の学校に通い、土曜日に日本語で日本の授業を受けるという厳しいスケジュールが年中続く訳ですが、それを乗り越えれば、子供たちの将来にとって大きな財産となることは間違いありません。日本と国際社会との関係が更に深くなる今後、まさに彼らのような人材が世界で活躍してくれることが求められています。卒業式には、地元ノバイ学区のスティーブ・マッシュューズ教育長も出席頂きました。地元関係者の理解と支援あつての補習校です。8つの補習校の卒業式・入学式の日程が重なっていて全部の学校の行事に参加できないのは非常に残念ですが、調整しながら子供たちの人生の各過程で一回限りの大事な日をできる限りその場でお祝いしたいと思います。

第67話：いけばなインターナショナル&雛祭りの集い

3月14日公邸にて、いけばなインターナショナルの方々をお招きし、少し過ぎてしまいましたが雛祭りの集いを開催しました。いけばなインターナショナルとは、「花を通じた友好」をモットーに、国籍、所属流派の多様な生け花愛好家たちで組織する会です。1956年 Mrs. Ellen Gordon Allen によって東京で設立され、今では世界60か国、7800名の方々が所属しているそうです。ここミシガンでもサウスフィールド、ランシング、アナーバーと3つの支部があり、ランシングは昨年45周年を、サウスフィールドは来年50周年を迎えるという伝統ある組織です。当日は、池坊の下浦先生による、春を彩る生け花のデモンストレーション、それに続いて、9歳の才能あふれるピアニスト、山口奈央美ちゃんのミニコンサートと公邸は春爛漫の陽気に包まれました。自然と人との調和を表現する生け花の基本精神は、国境をこえた普遍的な価値であると同時に、相互理解や友好を深める大切な基盤となっていることにも改めて気づかされました。



第68話：ミシガン大学美術館

3月25日、ミシガン大学美術館（UMMA）を訪問しました。同大学を訪れるのは3回目ですが、毎回、雪のチラつく寒い日でした。UMMAはデトロイトやシカゴの美術館よりも古く、1856年の開館以来、既に160年近い歴史を持っています。2009年には拡張工事も完成して従来の2倍の広さになったそうです。1万8千点の芸術作品を擁する大学付属の美術館としては有数の規模を誇ります。アジア美術担当のキュレーターである及部奈津さんに館内を案内して頂きました。西洋美術では、モネ

やピカソの作品も展示されていました。アジア関係の美術所蔵品は約6500点、その内、日本関係が約1800点、中国関係が約2000点、朝鮮半島関係が約400点だそうです。中国絵画、江戸期の日本絵画、東アジアの陶磁器がコレクションの中心になっています。その内、展示されているのは約1割で定期的に入れ替えているとか。他方、それぞれのコーナーは、中国及び朝鮮半島関係は個人や企業・団体の寄付を受けているせいか、日本のコーナーに比較すると少し展示面積が広く、日本も官民協力して戦略的に対応する必要を感じました。その中で日本人女性がキュレーターとして活躍しているのは頼もしい限りです。鑑賞後、ジョセフ・ロザ館長と懇談する機会がありました。UMMAは大学内の日本学研究所とも協力関係にある由です。日本関連では、去年は、イサム・ノグチと中国人画家齊白石の戦前の中国での出会いをテーマにした特別展の開催、今年は、京都から現代作家ユニットであるパラモデルの展覧会、2年後には浮世絵展と歌舞伎の実演の企画もあるとか。館長とは、今後、同美術館と日本総領事館との連携強化についても話し合いました。皆さんも、アナーバーを訪問される機会があれば、是非UMMAにもお立ち寄り下さい。開館時間等詳細は、同美術館のホームページ(<http://www.umma.umich.edu/>)をご覧ください。

第69話：日本料理を味わう集い

3月30日、トリド大学でTaste of Japanの集いがあり、招待を受け妻と出席してきました。同大学日本語学科とトレド市・豊橋市姉妹都市委員会の共催行事です。トレドと豊橋は、外務省の仲介もあり、2000年に姉妹提携を開始しました。今回は、豊橋市にある日本料理店から若い料理人の野呂光平氏を特別に招き、魚の活き造りのデモンストレーションを来客の前で披露するとともに、同



氏が腕を振るった日本料理を堪能しました。(1) 大根やナス、高野豆腐等の炊き合わせ、(2) マグロやサーモンのお造り、(3) 鰯西京焼き、こんにゃく、枝豆、エビ等の焼八寸、(4) 温そうめんの椀物、(5) 牛ヒレのたたき、(6) 花寿司、の各種料理が日本から用意されたきれいな一つの入れ物に並べられ、目でも口でも楽しめる美しくかつおいしい料理でした。一部日本から調達したものを除き、当地で事前に購入したそうです。日本料理は、最近、ユネスコの無形文化遺産に登録され国際的にも人気が高まっています。外交の裏舞台でも、日本料理は日本ファンを増やすための大きな武器となっており、私も、公邸でできる限り地元米国各界の方々を日本料理と日本酒でもてなしていますが、今日の料理はその際の参考ともなりました。本日の日本料理の集いには、マイケル・コリンズ市長夫妻も忙しい中参加して頂きました。市長は最近当選したばかりで、まだ訪日したことはないそうですが、日本との交流を重視しており、地元日本人コミュニティに対して暖かい支援の言葉を頂きました。トリド市は、大学を含め最近中国の存在感が高まっていますが、日本人コミュニティの活躍も総領事館としてしっかり支えていきたいと思っています。

第70話：クリーブランド州立大学訪問

4月2日、クリーブランド州立大学を訪問し、副学長他大学幹部と昼食を交えながら懇談し、午後は、日本語のクラスを見学し学生たちと交流する機会がありました。同大学は、1964年に州立大学となった市内ダウンタウンにある比較的新しい大学です。学生数は約17,000名です。中国人留学生は100名程いるそうですが、日本人留学生はなんと学部・大学院併せて3名のみ。寂しい限りです。副学長とは、日本への大学宣伝の必要性和ともに今後地元の在留邦人や日系企業ともネットワーク化を図っていく必要性を話し合いました。午後は、大学唯一の日本語教師であるレナ・ヴィダル講師のクラスに飛び入り参加し、約2時間授業を聴講するとともに20名程の米国人学生と交流しました。総領事館の調査によれば、同大学での日本語クラスは2つ、受講生は34名です。テンポよく先生が掲げるパネルに印刷されている日本語を読み、並列した形容詞や形容動詞を使った作文の練習（例えば、きれいで静かです、大きくて安いですといった表現）、家族紹介のスピーチ、英語から日本語への翻訳等盛りだくさんの授業でした。「奇麗」といった漢字をすらすらと黒板に書く学生や上手にスピーチを行う学生の積極性や水準の高さは印象的でした。学生とのやりとりの中で、多くの学生が、小さい頃に日本のアニメや漫画、Jポップ等に素朴な関心を持ち、純粋に日本文化が好きで、日本語学習を開始したことをここでも再確認しました。あるヒスパニック系の女子学生は、”English is the language of my country, Spanish is the language of my heart, and Japanese is the language of my soul.”と答えてくれました。日米交流を支えてくれる人材が確実に育っていることを現場で実感しました。少しでも彼らの支援を何らかの形でできればと強く思いました。

第71話：ロックの殿堂博物館

4月2日、クリーブランド訪問の際に、夕方時間があつたのでロックの殿堂博物館（The Rock and Roll Hall of Fame and Museum）を参観しました。クリーブランドで最も人気のある場所の一つです。ロックの発展に大きな足跡を残した音楽家やプロデューサー等の記録や音楽、当時の舞台衣装や風俗などが保管展示されています。劇場や音楽を聴けるブースも何か所もあり、当時の音と映像を楽しめます。私は、ロックには詳しくありませんが、エルビス・プレスリーや、ビートルズ、ローリング・ストーンズ、エリック・クラプトン、ジャニス・ジョップリン、マドンナ等々ファンには興味尽きない展示が続きます。そもそも、なぜ、クリーブランドにこのような博物館があるかと言えば、ロックンロール（rock and roll）という言葉がクリーブランドでディスク・ジョッキーをしていたアラン・フリード（Alan Freed）という人物によって広められ、初期のロック・コンサートがよくこの地で開かれたからだそうです。エリー湖畔にあるひととき目立つピラミッド形の建物はI. M. ペイの設計によるもので、そのせいかパリのルーブル美術館のガラスのピラミッドを少し想起させるような建物です。入場の際に、ロックンローラーになりきってエレキ・ギター片手に写真を撮り、少し高かったですが記念に買って帰りました。



第72話：マウント・ユニオン大学での講演

4月3日、オハイオ州クリーブランドから南に1時間ほど走ったアライアンスという人口2万人余りの町にあるマウント・ユニオン大学を訪問し、副学長他大学幹部と懇談するとともに、約100名の聴衆（日本語学科学生を中心に、その他学科の学生、教師、地元関係者等）に対して、“Japanese Education and Business Relations in Ohio”と題して講演しました。日本とオハイオ州との経済、文化、教育、人的交流がいかに深いかを学生や市民の方々に理解してもらうとともに、少しでも、日本語学科の学生たちに将来のキャリアについて参考となる情報が提供できたらという願いからです。同大学は、1846年に設立された学部生2000名余りの小規模のリベラル・アーツのカレッジですが、日本語専攻を持つ数少ない大学の一つです。昨年10月現在、日本語科に登録している学生数は89名、クラスは6つで、日本人のハマコ・フルハタ＝ターナー教授と米国人のエリザベス・ベンダー講師が教えています。西語、仏語、独語、中国語、アラビア語等同大学の語学コースの中で日本語専攻は最も人数が多い由です。日本文化に対する純粋な関心から日本語を選択している学生が多数であることを改めて確認しました。講演後の質疑応答では、当地日系企業のリクルート状況や日本語専攻と日系企業就職との関係に多くの関心が示されました。日米交流の将来の大きな財産となり得るこのような人材を育て、彼らの将来の活躍の選択肢を広げていくために総領事館としても日系企業関係者や各種日本関係団体と情報共有や連携を強めながら支援していきたいと思います。なお、当日は学生だけでなく、たとえば1950年代に米軍人として日本に駐留していた地元老人も出席いただき懐かしいお話を伺うという触れ合いもありました。



（写真左：ハマコ・フルハタ＝ターナー教授と片山総領事、写真中：片山総領事を紹介するフルハタ＝ターナー教授、写真右：講演会場の様子）

第73話：内田光子&クリーブランド管弦楽団

4月3日夜、夢のようなひと時をオハイオ州のクリーブランドで過ごしました。世界的に著名なピアニストの内田光子さんが、アメリカの名門クリーブランド管弦楽団と共演、モーツァルトの協奏曲18番と19番を演奏されました。クリーブランドの管弦楽団は内田光子のためにある！その逆も然りというほど息の合った、素晴らしい演奏を聴かせてくれました。初めて聞くモーツァルト協奏曲18番、19番はモーツァルトの絶頂期に作曲されただけに、生命の息吹を感じさせる明るく勢いのある作品でした。端正で澄んだシンフォニックな響きと、内田光子さんのこれまた透明感のある美しい響きとが紡ぎだす華麗かつ繊細な調べに、春爛漫の宴へと誘われたようでした。このような素晴らしいコンサートに

招待くださったのは、QED(Quality Electrodynamics)のCEOである藤田浩之さんです。QEDは医療機器開発製造会社で、藤田さんは地元の大学で物理学博士号を取得後、同社を設立し製品の90%は輸出されているとか。長年クリーブランドに貢献され、管弦楽団の理事としても活躍されています。オバマ大統領の年頭一般教書演説にも招待されています。御著書「道なき道を行け」(小学館)を昨年出されているので興味のある方は是非ご一読ください。彼のような起業家であり人生の挑戦者が、多くの日本人の若者の中から続いて出てくることを強く期待しています。



第74話：シンシナチ日本語補習校入学式

4月5日、シンシナチ日本語補習校の入学式に来賓として出席しました。デトロイト総領事館管轄のミシガン州及びオハイオ州には全部で8つの日本語補習校があります(シンシナチ補習校は地理的にはシンシナチ市に隣接したケンタッキー州ハイランドハイツにあります。これまでの経緯から名前はシンシナチ、管轄もデトロイト総領事館です)。その内、6つの学校で本日入学式がありました。全部の学校の入学式に行くことが物理的に不可能なので、ミシガン州デトロイト地域にあるりんご会補習校の卒業式に出席したことを考慮し、本日開かれたオハイオ州の補習校では最大のシンシナチ日本語補習校を訪問することにしました。小学1年生30名、中学1年生18名、高校1年生15名の皆さん、希望と緊張に包まれた今日の新鮮な気持ちを忘れず、これから頑張ってください。このような式典で挨拶をお願いされると、生徒の年齢差が大きく、何を話してよいか戸惑ってしまいます。一つ言えることは、今後、ますます国際化する中で、現地校に通いながら週末日本語補習校の授業を受けることはかなり大変でしょうが、頑張れば子供たちの一生の財産になること、そして、そのような教育を受ける上で米国中西部は非常に恵まれた環境にあるということです。

第75話：ボーリング・グリーン州立大学での桜祭り

4月6日、デトロイトから南に1時間半ほど行ったオハイオ州ボーリング・グリーンにある州立大学で開かれた桜祭りに招待され参加してきました。同大学は、1910年設立、学部生約2万人、大学院生約3千人を擁する州立大学です。桜祭りは今年13回目で、同大学で日本語を教授しているカワノ＝ジョーンズ教授を中心に、大学日本語クラブとアジア研究プログラムが主催して行われた行事です。キ

キャンパス内に数十本植えられている桜の木は、2001年に東京の同窓生による寄贈に始まり、その後地元進出の日系企業によって追加されました。あいにく桜の開花を楽しむには季節が少し早すぎましたが、会場のホール内には数百人の参加者が集まり、両国歌の演奏や来賓の挨拶、「さくらさくら」の合唱、太鼓、武術、盆踊りや折り紙、書道、伝統ゲーム等の実演、日本料理（寿司）をそれぞれに楽しんでいました。遠くニューヨークやクリーブランド、コロムバスから駆け付けた参加者もありました。カワノ＝ジョーンズ教授のような献身的な先生の下で、日本語を学ぶ学生が育ち、このような桜祭りが毎年開かれ、地元関係者を中心に5～600人の参加者が日本に関心を持ってくれるのは本当にうれしいことです。カワノ＝ジョーンズ教授は、私財をつぎ込んで日本留学のための奨学基金も作ったと伺いました。米国社会の草の根の「力」も感じました。



第76話：ジョン・キャロル大学訪問と日本のビール醸造

4月8日、クリーブランド郊外にあるジョン・キャロル大学を訪問しました。同大学は、1886年にイエズス会によって設立されたリベラル・アーツが中心の大学で学部生は約3000名です。コンパクトながらも煉瓦造りの建物と芝生の映えた美しいキャンパスでした。高校時代AFSで神戸に留学した経験を持つロング（Susan Long）教授の案内で、副学長との懇談の他、キャンパスを案内頂きました。関西外語大、南山大、上智大と交換プログラムを持っていますが、現在、日本からの留学生はゼロの由で残念です。夜、三井ファウンデーションや国際交流基金の支援を得て同大学内で行われたアレキサンダー

（Jeffrey Alexander）ウィスコンシン大学（パークサイド）准教授による「Brewed in Japan: The Evolution of the Japanese Beer Industry」

と題した講演に出席しました（ちなみに同大学とビールとは直接関係がある訳ではありません）。ジョン・キャロル大学東アジア研究ディレクターの中野啓子先生司会の下、アレキサンダー先生から、明治以降の日本のビール生産の歴史につき興味深い話を伺いました。江戸時代にもオランダ人が持ち込んだビールはありましたが、日本での生産は、1870年、横浜でノルウェー生まれの米国人によって始まりました。これは後に麒麟ビールになります。その後、日本人の手で札幌に醸造所ができ1889年札幌麦酒株式会社に発展、後のサッポロビールに、同じ年、大阪に大阪麦酒株式会社ができ、アサヒビールにな



ります。1887 年、日本麦酒株式会社が設立されますが、このブランドはエビスビール。1906 年、後の三社は合併し大日本ビールに。戦後の分割を経て、新たにサントリー等の業者も参入。その後、1990 年代の地ビール・ブーム（余り成功していないようです）を経て、発泡酒、2000 年代の第三のビールと税制との関係か最近「ガラパゴス化」していく日本のビール産業を概観する講演でした。アレキサンダー先生は、「Brewed in Japan」（UBC Press, 2013）という著書も出されているので興味ある方はご一読ください。

第 7 7 話：アラブ系アメリカ人コミュニティ

4 月 1 2 日、デトロイト・ダウンタウンのルネッサンス・タワーにあるマリオット・ホテルで開かれた ACCESS の年次ディナーに名誉ホスト委員会の一員として参加しました。ACCESS は、アラブ系アメリカ人のための最大の組織であり、当日はスナイダー・ミシガン州知事、ダガン・デトロイト市長をはじめ約 1 7 0 0 名の出席者がありました。着席ディナーとしては、当地で NAACP（全米黒人地位向上協会）主催のディナーに次ぐ規模だそうです。ディアボーンを中心とするメトロ・デトロイト地域は全米でも最大規模のアラブ系アメリカ人コミュニティを擁しており、当地に日本を含めて 7 か国しか（総）領事館を置いていない中で、レバノンやイラクが総領事を常駐させているのも頷けます。ラフッド（Raymond LaHood）連邦政府前運輸長官とアラビィ（Fawwaz Ulaby）ミシガン大学教授が Arab American of the Year に選ばれディナーで授賞式がありました。また、アラブ系アメリカ人博物館に 2 0 0 万ドルの寄付をした篤志家の紹介もありました。多様性の織りなす活力が米国社会の力の源泉だと思いますが、総領事館としてこれら米国の各民族系コミュニティとの関係も重視していきたいと思います。

第 7 8 話：マウント・プレザントと岡谷

デトロイトから北に 2 時間半ほど走ったところに人口約 2 万 6 千人のマウント・プレザント市があります。長野県岡谷市との間で高校生どうしの文通がきっかけとなり、1 9 6 5 年に姉妹提携を結んで間もなく 5 0 周年になります。毎年高校生を数名交互に派遣しホームステイをさせています。ミシガン州では 2 7 の都市が日本の都市と姉妹提携しており（州と滋賀県との姉妹提携を入れると 2 8）、これはその内のひとつです。今年は今井岡谷市長他市議会及び市民の代表約 2 0 名が来訪され、来年の 5 0 周年にはマウント・プレザント市代表団が岡谷市を訪問予定です。私は、4 月 1 4 日、ティルマン市長の招きを受け今井市長一行に合流し、マウント・プレザント市を視察させて頂きました。まず、当地に進出している日系自動車部品メーカーのミツバの工場視察。3 0 年近く前に投資、約 3 0 0 名の雇用を地元にもたらしめています。地元市長も同行され日系企業投資に感謝の言葉がありました。ミシガン進出の日系企業としては最も北に工場を有している企業の一つです。昼は、セントラル・ミシガン州立大学を訪問しロス学長夫妻主催の昼食懇談会に出席。以前訪日した際に身体が大きいせいか大リーグ選手と間違えられ、街中でサインを求められたそうです。同大学は、学生数規模で国内トップ 1 0 0 に入る州立大学です。また、地元で最大の雇用を生み出している機関でもあります（ちなみに、2 番目はカジノ。巨

大なカジノ・ホテルがあります)。午後は、地元のスポーツ施設を見学の後、40周年記念に植樹した公園に立ち寄り、夕刻、市庁舎にて学生バンドの音楽で歓迎を受け、市長主催の行事に出席。天候の関係で新たな植樹式が建物の中で行われました。日系企業の投資と言い、地方都市どうしの草の根姉妹交流と言い、日本にとっての大きな財産であることを現場で直接感じることができました。

第79話：ダブリンの桜祭り

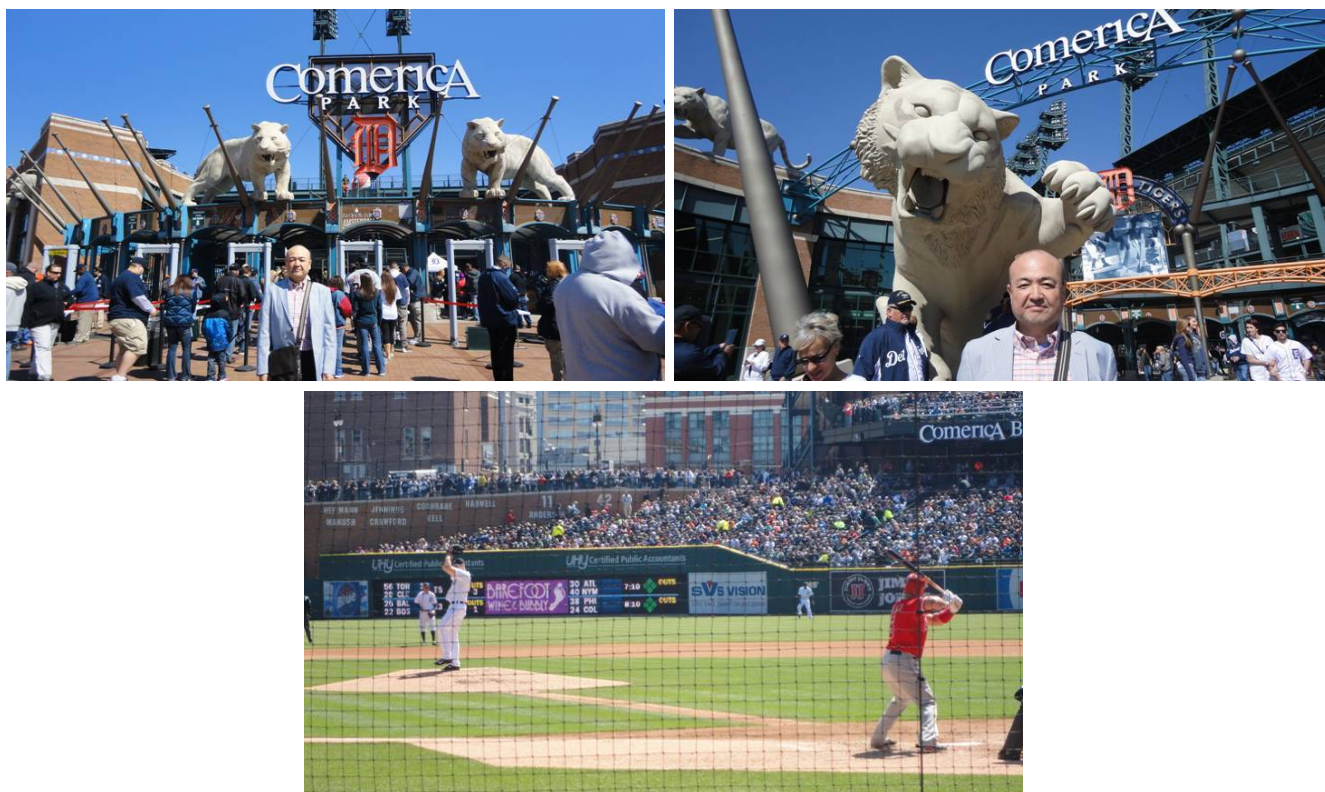
4月18日、オハイオ州ダブリンにあるヒダカUSAの工場敷地内で恒例の桜祭りが行われ、招待を受けて妻とともに出席しました。気温20度近くの春うららかな天気でしたが、あいにく桜の方は今年の歴史的な寒波のせいか、まだ蕾の状態です。1週間ほど早いようでした。それでも地元ダブリン市や日米協会幹部、大学関係者他多くの日米関係者が集まり、野外のテントで昼食をとりながら楽しい一時を過ごしました。社長の日高氏はダブリン商工会議所から2014年のパーソン・オブ・ザ・イヤーにも選ばれ、地元と日本人コミュニティの接点となって大活躍されています。総領事館の調査によれば、ダブリン市には約2000名の日本人が在住し（オハイオ州では最大）、25の日系企業事業所が存在します。その中でもヒダカUSAは唯一の工場だと聞いています。私にとって赴任7か月にして4度目のダブリン訪問となりました。日本とダブリンとの関係を更に一層緊密にしていきたいと思っています。日高さんご夫妻、ご招待ありがとうございました。



第80話：デトロイト・タイガース

4月19日、コメリカ・パークに行きデトロイト・タイガースとロサンゼルス・エンゼルス・オブ・アナハイムのデー・ゲームを見てきました。昨年9月末に赴任して以来、地元プロ・スポーツのチームであるレッド・ウイングス（アイス・ホッケー）、ピストンズ（バスケット・ボール）、ライオンズ（アメリカン・フットボール）の試合は12月に既に会場まで出かけて見たのですが、タイガースを見ないうちに昨シーズンが終わってしまい、今日が初めてでした。奮発してバックネット裏の席を購入したの

で選手のプレイを身近に眺めながらゲームそのものと共に、ホットドッグや球場の雰囲気を楽しむことができました。試合開始前の国歌斉唱や7回裏の「TAKE ME OUT TO THE BALLGAME」を歌ってのストレッチ（7th inning stretch）、日本のように鳴り物はなく自由にボール・パークでの一時を楽しむ観客といった日米の野球観戦の違いも見えて興味深いです。当日の気温は少し低かったのですが快晴でとても気持ち良く、顔が真っ赤に焼けてしまいました。次の予定があったので7回裏終了で球場を後にしましたが、ホームランを3本見ることができ、試合も5対2でタイガースが勝ちました。二度際どいプレーがあり、不利な判定を受けたチームの抗議により、相撲の物言いのようなビデオ判定で二度とも審判の最初の判定が覆ったのには驚きました。タイガースは開幕以降比較的順調で、4月24日現在、10勝8敗でアメリカン・リーグ中地区一位です。大リーグの球場に足を運んだのは、以前の米国生活を含めると、カムデンヤーズ（ボルチモア・オリオールズ）、フェンウェイ・パーク（ボストン・レッドソックス）、プログレッシブ・フィールド（クリーブランド・インディアンズ）、ヤンキー・スタジアム（ニューヨーク・ヤンキース）、ターナー・フィールド（アトランタ・ブレーブス）、PNCパーク（ピッツバーグ・パイレーツ）に次いで7か所目です。日本人選手が加入すればもっと盛り上がるのですが、今度は、タイガースの各選手についての情報も少し勉強して応援に力を入れたいと思います。



第81話：デトロイトの春

昨年11月後半から3月後半まで毎週のように雪が降り積もり、自宅の屋根、庭や周辺の道路脇にも昨年末から堆積した雪が残っていましたが、4月12日、遂に完全に消え春が到来した、と思ったら14日夜半に又々10センチ近く雪が積もり、遂に、メトロ・デトロイトにこの冬降り積もった雪の総計は94.8インチ（約2.4メートル）となり、130年前の記録を抜き、観測史上最高に。それでも、最後に

降った雪も数日で消え、最近摂氏 20 度近い気温に。19 日に行ったタイガースのデー・ゲームでは顔が赤く焼けるくらいの陽気になりました。思えば、昨年 9 月下旬に着任して以来、生活や仕事の立ち上げで忙しくしている内に秋を過ごしてしまい、数十年ぶりといわれる寒さと雪に閉ざされた長い冬を経験しただけに、待ちに待った春の到来は気持ちも明るくなります。前任地のベルギーでは、白アスパラガスの季節となり、森や公園は色とりどりの花で埋め尽くされ、日が長くなって街角のカフェテラスでは夜遅くまでビールやワイン片手に春を楽しむ人々で賑わっていました。こちらではどういう過ごし方があるのか、楽しみです。地元の人からよく勧められるミシガン州北部にも是非機会をつくって足を運んでみたいと思います。



(写真：ベル・アイル の桜（昨年 5 月当館職員による撮影）)

第 8 2 話：ダガン・デトロイト市長往訪

4 月 22 日、デトロイト市庁舎にマイク・ダガン市長を往訪しました。総領事館から市庁舎までは目と鼻の距離です。以前、レセプションの席で短時間会話を交わしたことはありますが、今回は 30 分ほどじっくりと話すことができました。ダガン市長は昨年 11 月の選挙で当選し、今年 1 月から就任しています。管財人の任期が終了する 9 月末以降、本格的な市政運営に当たることとなりますが、180 億ドル超の負債の再建計画が認められ軌道に乗ったとしても、人口の減少、高い失業率、そして税収の減少といったこれまでデトロイト市が長年直面してきた困難な課題を処理していくことは容易ではないでしょう。他方で、ダウNTOWN、ミッドTOWNの再生は着実に進んでいるようですし、若者が都市に流入し、Shinola 等の再生デトロイトを象徴するブランドも誕生しました。市長のバイタリティーで明るさを取り戻すことを期待しています。デトロイト市内に総領事館を有するのは、日本、カナダ、レバノンの 3 カ国しかありません（その他メキシコ、イタリアが領事館を設置。イラク、マケドニアは総領事館を郊外に設置）。昨年の天皇誕生日レセプションは DIA（デトロイト美術館）で開催、その他、現在、同美術館で開かれている侍展を含め各種文化行事で協力しています。また、日系学長を有するウエイン州立大学とも文化・教育交流面での協力関係にあります。デトロイト市と豊田市の姉妹提携は、1960 年に始まり、毎年、高校生の相互交流を行っています。Belle Isle の桜も豊田市や JBSD（デトロイト日本商工会）の寄贈によるものです。市長は、当然のことながら日本からの投資にも強い期待を持っていました。簡単な話では

ないかもしれませんが、デトロイトの利点や積極面を私としても日本に宣伝していきたいと思います。市長はまだ日本を訪問されたことがないそうなので、是非、近い将来来ていただき、デトロイトの復活を日本国民にアピールしてもらいたいものです。日米の政治制度の違いはありますが、デトロイト再生の行方は、日本の都市の将来にとっても決して他人事ではないでしょう。



第83話：米国の文化力

デトロイトに赴任して7ヶ月余り、この間、デトロイト、アナーバー、トリド、クリーブランド、シンシナチ等各地の美術館・博物館やコンサートホール等を訪れる機会がありました。そのたびに強く感じるのは、米国の多様な文化や上質の文化を支えている個人、財団、企業、自治体等の作り出す仕組みのすばらしさです。外国から眺める米国の文化は、一見、ハリウッド映画に代表される商業主義やグローバリズムを通じて米国主導の世界の画一化を図っているように見え、文化省の存在しない米国とは対照的にフランスのように文化多様性を国家の強力な主導の下に保護する文化政策とよく比較されます。しかし、米国内での文化の保護・育成のあり様をミクロ的に眺めていると、個人や資産家・篤志家の寄付や運営への無料奉仕活動、財団等のNPO活動、企業のフィランソロピー活動、寄付に対する優遇税制等国家の文化内容への直接の影響を極力排除しつつも、単なる商業主義ではない市民による自主的・自立的な諸活動によってこの国の文化が支えられていることがよく分かります。また、対外的にグローバリズムを推し進めているように見える米国の国内社会を見ると、世界で最も多様な人々による多様な文化が根付いていることもまた米国社会の特徴であることがよく理解できます。フランス人研究者フレデリック・マルテル氏がド・トクヴィルの「米国の民主政治（について）」（De la démocratie en Amérique）を念頭に置いて著した「米国の文化（について）」（De la culture en Amérique）（邦題は「超大国アメリカの文化力—仏文化外交官による全米踏査レポート」（岩波書店 2009年））を最近読む機会がありまし



た。これは、米国の文化がどのように機能しているかを全米35州周を回り、700回にわたるインタビューで実証的に調査した報告書です。原文・邦訳とも600頁を超える大著ですが、米国の文化の仕組みを理解する上で優れた解説書です。興味のある方に一読をお勧めします。

第84話：アジア太平洋系米国人商工会議所（APACC）

5月3日、デトロイト市内のMGMグランドホテルで行われたアジア太平洋系米国人商工会議所（APACC）の年次ディナーに出席しました。APACCは、アジアと米国の企業間のビジネスを促進し、アジア太平洋系米国人の経済的地位向上を目的に2000年に設立され、本部はデトロイト郊外のトロイにあります。今年の年次ディナーは13回目にあたります。日本企業も数社がスポンサーとなり、当日もJBSD（デトロイト日本商工会）会長他、関係者が出席されていました。当日のプログラムには、デトロイト市長、ミシガン州知事、連邦・州議会議員と並んで私からの祝意メッセージも写真入りで載せて頂き、ディナーの席でも来賓として600名の出席者の前で特に紹介を受ける等、日本のAPACCへのコミットメントを官民双方で示すことができました。他方で、当地日本人の多くは企業派遣で数年の滞在の後、再び日本に帰る駐在員及びその家族が中心で、「米国人」として当地に根を張っている他のアジア系の人々とは異なった側面があり、APACCの理事会メンバーや運営を見ると、日本人・日系人の関与は残念ながら他のアジア系に比べるとプレゼンスに弱い面があるのは否めません。当日は、ゲスト・スピーカーとして韓国系米国人女性でABCニュースNightlineのキャスターであるJuju Chang氏が招待されて出席していました。APACC関係者とは、これまでも総領事公邸に招待したりと日頃より関係を深めていますが、アジア系共通の課題につきAPACCをはじめ各種アジア系の団体と協力関係を更に深めていきたいと考えています。



第85話：フリア・ハウス・レクチャー

5月4日、デトロイトのフリア・ハウス主催の講演会がDIA（デトロイト市美術館）で行われました。フリア・ハウスは、かつて日本美術を含めた絵画の収集で有名なフリアが住んでいた家で収集した

作品は遺言により、ワシントンのスミソニアンに保管されており残念ながらここで楽しむことはできません)、現在はウェイン州立大学の一部となっています。講師は、ユキオ・リピット・ハーバード大学教授。講演は、フリア・ハウス、ウェイン州立大学、D I A、日米協会、ミシガン大学日本研究センター等の支援の下で行われました。リピット教授は、ウェイン州立大学のウイルソン学長と同様、母親が日本人です。大学卒業後に、パリのギメ美術館に2年間ほど籍を置いた際に、日本美術に開眼し、その後本格的な研究者の道を歩み始めたそうです。講演のテーマは、17世紀日本の狩野派の絵画についてでした。D I Aではちょうど侍展が行われており、狩野派の作品も何品が展示されており、時宜を得た講演となり多くの聴取者を集めることができました。狩野派は、室町時代から江戸時代まで約400年間に亘って日本の絵画を主導した一大画派だったそうですが、これまで余り知らなかった狩野派について、ここデトロイトで米国人学者から有益なレクチャーを受けることができました。フリア・ハウスでのイベント関連情報はウェイン州立大学 Merrill Palmer Skillman Institute のホームページ (<http://mpsi.wayne.edu/freer/events.php>) をご覧ください。

THE FREER HOUSE
71 East Ferry, Detroit Michigan, 48202 | 313-664-2500

SPRING
An International Landmark... A World Class Lecture Series

*In Attendance to the Realm:
the Kano School of Painters in 17th Century Japan*

SUNDAY, MAY 4, 2:00 PM
LECTURE
at the Detroit Institute of Arts,
Marvin & Betty Danto Lecture Hall, 2:00 pm
Free with DIA admission

RECEPTION & TOURS
at The Freer House, 3:30 - 5:00 pm
\$10 per person
\$5 students, AIAF and Freer House members
Pay at the door

For more information contact Rose Foster at
313-664-2509 or rmfoster@wayne.edu

See reverse for lecture & reception details

Program Host: David R. Weinberg PhD
Professor, History of Art and Architecture, Harvard University

Dr. Yukio Lippit's lecture explores the remarkable 450 year history of the Kano house of painters, the official school of painting to Japan's warlords, the Tokugawa Shogunate, in Edo-period Japan (1615-1868). The Kano school's origins, artistic developments and leading painters are explored in relation to trends in Japan's cultural and political history.

In the late 19th century, the members of the Kano school played a crucial role in introducing Detroit's Charles Lang Freer, industrialist and art collector, to the history and nature of the Japanese pictorial arts. The influence of the Kano school of painters in Freer's pioneering collection of Japanese art will be specially highlighted.

Logos: Japan America Society, Detroit Institute of Arts, Asian Islamic, LSA Japanese Studies, Americana Foundation, Blossoms, The Freer House, Merrill Palmer Skillman Institute, Wayne State University.

(Resource: The Freer House, Wayne State University: <http://mpsi.wayne.edu/freer/events.php>)

第86話：NAACPの年次ディナー

5月4日、NAACP (National Association for the Advancement of Colored People: 全米黒人地位向上協会) のデトロイト支部年次ディナーに招待を受け出席しました。デトロイト支部はNAACP支部の中でも最大を誇り、ディナーも1万人が出席するデトロイト最大の、そして世界でも最大規模の着席ディナーです。私は初めて出席しましたが、壮観でした。北米自動車ショーが開かれるコボ・センターの巨大なホールに何百と円卓が並び、部屋の4隅にはそれぞれ45名程度が座れる長方形の演壇席が設けられ、事務局長の配慮でそこに私の席も用意して頂き、ディナーの議事進行の中で参加者に紹介してもらいました。NAACPは1909年に設立された米国で最も古い公民権運動組織で、デトロイト支部は1912年に設立され、年次ディナーは1956年に開始され、今回が59回目になります。過去のゲスト・スピーカーにはゴア副大統領 (1999年)、クリントン大統領 (2000年)、ヒ

ラリー・クリントン上院議員（２００４年）、オバマ上院議員（２００５年）、ペローシ下院民主党院内総務（２０１３）等錚々たる政治家が招待され、今回は、ハーバード・ロースクールの Charles J. Ogletree, Jr. 教授でした。地元からは、Carl Levin、Debbie Stabenow の両連邦上院議員をはじめ、John Conyers, Jr.、Gary F. Peters、John Dingell といった連邦下院議員や Duggan デトロイト市長等主だった政治家が出席していました。但し、出席していた政治家は全員民主党員です。参加者の内、白人はごく一部、アジア人は、私が視認できた限り皆無でした。総領事館はデトロイト市との交流にも力を注いでおり、NAACP と今回、このような形で接点を持つことができたことは大変光栄です。これを機会に更に当地黒人コミュニティとの関係を促進していきたいと思います。

NAACP ホームページ: <http://www.naACP.org/>

第 87 話：マッキノン・デトロイト副市長

５月６日、マッキノン・デトロイト副市長夫妻を公邸にお招きして楽しい一時を過ごしました。副市長は、大学で教鞭をとっていたところをダガン市長に請われて今年１月から現職につき、市長の片腕として市の再建に取り組んでいます。１９４３年生まれ。軍役を終え、１９６５年に最初の黒人オフィサーとして市警察に就職。仕事の傍ら、一念発起しミシガン州立大学で高等教育行政の博士号を取得。その後、アーチャー市長（当時）の要請により 94～98 年まで警察署長として再び治安行政の責任者に。彼の半生を綴った著書”STAND TALL”には、子供時代や警察署就職の頃の差別との戦い、夫人との運命的な出会い、警察署長就任直後のナンシー・ケリガン（フィギア・スケート選手）の襲撃事件等が描かれています。とりわけ今日の彼を築きあげた生き方が印象的でした。父親が野球の選手（捕手）だったせいか、日本人選手を含めた野球に詳しく、お土産にタイガースのバーランダー投手（背番号 35）のユニホームを頂きました。これを着て、タイガースの応援にコメリカ・パークに次回行くのを楽しみにしています。



（写真左：マッキノン氏著書”STAND TALL”、写真右：マッキノン副市長夫妻等と共に撮影）

第88話：ホーランドのチューリップ祭り

5月7日、招待を受けミシガン州の半島西側にあるホーランドで行われたチューリップ祭りに妻と参加しました。ホーランドは名前の通り、オランダ移民によって築かれた町で、1847年カルバン派の移住が始まりだそうです。人口3万3千人の町です。教会の町としても知られグレイター・ホーランドに170もの教会があります。その他、ハインツの世界最大のピクルス工場もここにあります。地元の大学では日本語のコースもあるそうです。日本の長浜市とは友好都市関係にあります。チューリップ祭りは今年85回目を迎える歴史あるお祭りで、この間、町は観光客で賑わっています。約600万本のチューリップが町中に植えられるとか。前任地のベルギー時代に隣国オランダのキューケンホフにあるチューリップ公園やキンデルダイクの風車群を訪れたことを懐かしく思い出しました。当日は、まずホープ大学体育館での大昼食会に、市長、州知事、地元選出議員、在米オランダ大使、在シカゴ・オランダ総領事、在デトロイト・メキシコ領事等と参加し、午後、オープン・カーを連ねて何千・何万の沿道の地元市民・観光客に車から手を振りながらパレードするという恥ずかしくも名誉な経験をさせていただきました。私たちの乗った車には、日本総領事であることを示すプレートが両側に張られており、多少とも日本の宣伝になったのではないかと思います。その後、オランダから運んできたという風車を見物に行きました。肝心のチューリップの方は、歴史的な寒波の影響で開花が遅れているのが少し残念でした。ミシガンの州立大学連合の彦根の施設で日本語を学んだクリスさんがずっと同行して町の説明をしてくれました。その堪能な日本語に驚きました。



第 89 話：いけばなインターナショナルの行事

第 67 話でも紹介しましたが、当地にはいけばなインターナショナルのデトロイト・チャプター 85 があり、来年には 50 周年を迎えます。ミシガン州には他に、アナーバーとランシングにチャプターがあります。5 月 14 日は、デトロイト・チャプターの行事がサウスフィールドであり、妻共々参加しました。会場には 60～70 名ほどの生け花に関心のある方々が参集、2、3 名を除いて女性ばかりだったので少し緊張しました。いけばなインターナショナルは流派を超えた集まりで、当日も、池坊、草月、一葉など各派の先生方のいけばなのデモンストレーションを堪能しました。いけばなインターナショナルは 1956 年に米国人女性によって東京に設立され、今では 160 を超えるチャプターが世界 60 カ国・地域に広がり、約 8000 名がメンバーとなっています。日本の伝統文化に触発された米国人女性によって世界に広がり、グローバルな文化として世界各地に受容され、それが、また、日本文化への理解を促進し、世界各国・地域との友好交流を深める大きな手段ともなっています。総領事館としても強い味方を得てありがたいことです。



第 90 話：CAPA 主催文化の夕べ

5 月はアジア太平洋系アメリカ人のヘリテージ月間です。アジア系の様々な行事が行われましたが、5 月 17 日、ディアボーンのアートセンターで CAPA (Council of Asian Pacific Americans) 主催の文化の夕べ (Splendor of the East Cultural Show) が開かれ、私も妻共々招待されレセプションと公演に参加しました。CAPA は 2001 年にアジア太平洋系アメリカ人の文化振興を目的に設立され、MAPAAC (Michigan Asian Pacific Americans Affairs Commission) ともパートナーシップ関係を強化しています。アジア系移民のミシガン州経済への貢献の重要性が注目されてか、スナイダー知事もわざわざ出席されていました。日本からは、JBSD (デトロイト日本商工会) やトヨタがスポンサーとして貢献し、また、アジア諸国の中で唯一の当地常駐総領事として私が特別に紹介されたりと、日本の存在感を示すことができましたが、他のアジア系と比較すると日系アメリカ人は当地では数も少なく、CAPA の運営における存在感は希薄で、文化公演でも中国、韓国、フィリピン、インド、太平洋関連のパフォーマンスはありましたが、残念ながら日本については、フィリピン系・ポリネシア系の女性が着物らしきものをきて、「ここに幸あり」を踊りながら歌うという不思議な出し物しかありませんでした。尤も、歌は非常

に上手で、日本的な要素を公演の出し物に入れてくれた主催者には敬意を表します。今後も、他のアジア系移民が増加していくであろう中で、日系移民がそれ程増えるとは思えない中、このようなアジア系団体の活動において日本人や日系がどのような役割を果たしていくべきか、考えるべき課題です。

第9 1 話：石州流茶道デモンストレーション

5月18日、石州流怡溪会の茶道の先生方が新潟からわざわざお越し下さり、日本美術特別展「SAMURAI: Beyond the Sword」開催中のデトロイト美術館（D I A）で2度にわたりデモンストレーションをして頂きました。石州流は、裏千家等に比べると認知度が低いかもしれませんが、武家流の流儀として現在まで続いており、特に、旧城下町で盛んだそうです。他の流派と異なり世襲による伝承ではないという特徴があります。今回のメンバー・トップの先生は茶道歴65年の方で、デトロイト訪問は5回目とか。代表団7名のうち、80歳を超える先生方が2名もいらっしゃいましたが、皆さん、とてもお元気そうでした。往路のフライトが成田で4時間も出発が遅れ、デトロイト直行便にもかかわらず、シアトル経由となり当地到着時間が大幅に遅れるハプニングもありましたが、D I Aでのデモンストレーションは、多くの米国人参加者の関心を呼び、現場で茶道を習う決心をした人もいました。さむらい展にふさわしいコラボでした。このような方々がデトロイトに来ていただくのは、地元との文化交流促進のためにも非常にありがたいことであり、総領事館としても引き続き支援していきたいと思います。



第9 2 話：メイド・イン・デトロイト

最近、Shinola(シャイノラ)というブランドがデトロイトで話題になっています。もともと、靴磨き用ワックスのブランドでしたが、Fossilのオーナーがブランド名を購入、2011年にデトロイト市内のかつてGMが使っていたビルに本社及び工場を置き、腕時計や自転車、革製品、ノート・手帳などを生産しています。製造業の復活が米国政府のスローガンになっていますが、差し詰め、Shinolaは製造業（自

動車産業)を象徴する都市デトロイトの復活を占うブランドと言えましょう。また、同社はデトロイト市の復興を願い時計台を4台デトロイト市へ寄付、コボ・センターやイースタン・マーケット等に設置され、時を刻んでいます。

腕時計は500～1000ドルの価格帯、ムーブメントはスイス製で、デザインと組み立てをここで行っています。米国内ではデトロイトとNYに店舗を構えている他、オンラインで注文を受け付けています。日本でも通販サイトなどでたまに見かけますが、近い将来、海外展開の一環として日本にShinolaの店舗を開く計画もあるようです。

5月20日、MEDC(ミシガン州政府経済開発公社)のアレンジで工場見学をさせていただきました。細かい作業に従事する職人や若いデザイナーが生き生きと働いていました。雑誌TIMEによれば、昨年の同社の腕時計製造は5万個、今年は15万個を見込んでおり、2017年までに黒字化、1億ドルの売り上げを計画しているとか。党派を超えてクリントン元大統領(民主党)や地元のスナイダー・ミシガン州知事(共和党)にも愛され、女優のケリー・ワシントンのお気に入りとも伝えられています。我々が訪問する数週間前にクリントン元大統領も工場を見学したとか。デトロイト復活の支援と当地滞在記念に、奮発して皆さんも腕時計購入を考えて見てはいかがでしょうか。会社を案内頂いたPeter Shinさんありがとうございました。



第93話：スマート50授賞式

5月22日、クリーブランドで起業家を表彰する式典がありました。オハイオ州北東部に所在する企業のうち大・中・小各規模につきそれぞれイノベーション、インパクト及び持続性の3分野に秀でた50社の起業家を表彰する「スマート50」の授賞式があり、出席してきました。というのは、第73話で紹介したQED (Quality Electrodynamics) (医療機器開発製造メーカー) の藤田浩之 CEO が日本人として唯一、見事スマート50に選ばれたからです。更に喜ばしいことに小規模企業の部門で当日インパクト特別賞まで受賞されました。このような形で日本人の貢献が地元で高く評価されることは、総領事館としても誇らしく思います。新たな価値と富を社会に創造する起業家を激励し、支援し、尊敬する米国社会のありかたは、この国がアマゾンやグーグル、フェイスブック等新しいビジネス・モデルを絶えず世界に先駆けて生み出す原動力になっていることを感じました。



第94話：グランド・ラピッズと日本庭園

デトロイトから北西に2時間余り車で走ったところにグランド・ラピッズという町があります。人口19万人程度でミシガン州ではデトロイト市に次ぐ規模です。フォード元大統領が育ったところでもあり、地元のフォード博物館に埋葬されています。豊かな森林資源を生かし家具産業（最近では事務用家具）が盛んで、郊外にはアムウェイの本社もありますし、近江八幡市とは姉妹都市関係にあります。5月23日に郊外にあるマイヤー庭園・彫刻公園を訪問し、フッカー園長に案内頂きました。マイヤーはミシガンを中心に展開しているスーパーマーケット・チェーンで、セルフ・サービス販売やハイパー・マーケット形式を生み出した店として有名です。東日本大震災に際しては多額の義捐金も頂きました。マイヤー庭園は広大な敷地に温室や各種植物、彫刻（ロダンやミロ、六本木ヒルズにもあるブルジョワのク

モの彫像等世界的な作家の作品が点在しています) 等が配置され、野外劇場もあって昨年は60万人の来訪者があったそうです。ここに、現在、日本庭園が着々と建設中です。来年6月に完成すれば中西部最大級の日本庭園となります。日系人の設計により茶室も設けられ本格的な日本庭園の出現も間近です。庭園完成に先んじて来年1月からはミシガン州と姉妹県にある滋賀県の特別展示「Splendor of Shiga」も予定されています。皆さんも是非訪問してみてください。

フレデリック・マイヤー彫刻公園ホームページ：<http://www.meijergardens.org/>

第95話：マッキノー政策会合

ミシガン州北部の二つの半島が向かい合う海峡（といっても湖ですが）の東側ヒューロン湖にマッキノー（Mackinac）島という島があります。車の乗り入れが禁止され島の主要な交通機関は馬車と自転車です。京都の烏丸（からすま）のようにある程度地元のことを知らないと正しく発音できない島ですが、この島で毎年5月、デトロイト商工会議所主催の有名なマッキノー政策会合が開かれ、今年は27日～30日の日程で行われ私も出席してきました。場所は、島内随一のグランド・ホテル。1887年にオープンした有名なリゾート・ホテルで200メートルもある世界最長のポーチが特徴です。冬の期間中は湖が凍りホテルも閉鎖されますが、春から秋にかけては観光客で賑わっています。歴代の大統領も数多く訪れています。ここに、ミシガン州内を中心に、政、財、官、学、マスコミ、NPO各界の識者約1500名が集まり、講演やレセプション、食事会等を通じて学び、ネットワーキングを作るのが目的でした。今年は、時節柄、中間選挙やデトロイト復興問題が関心を集めていました。今後は日本のプレゼン得を高めるのが課題です。

マッキノー島についての情報はこちら：<http://www.michigan.org/hot-spots/mackinac-island/>

第96話：ダブリン・メモリアル・トーナメント・レセプション

5月31日、オハイオ州ダブリンにあるミュアフィールド・ヴィレッジ(Muirfield Village Golf Club)でPGAツアーのメモリアル・トーナメントが開かれるのに合わせて、ダブリン市との共催で昼食レセプションを開催し、市評議会議員（元市長）、日米協会会長、元名誉総領事、日系企業他日米の関係者と楽しい一時を過ごしました。このゴルフ場は、近くのコロンバスで生まれ育った史上最高のゴルファー、メジャーで18勝の記録を持つ帝王ジャック・ニクラウスが設計したコースです。彼は、かつて、”The longer you play, the better chance that the better player has of winning.”という言葉を残しています。私自身は、一向にうまくならずゴルフには向いていないと10数年前に見限ってしまったのは残念ですが、ゴルフは人生にも通じる含蓄があるのかもしれませんね。ダブリンは、オハイオ最大の日本人居住地（約2000名の邦人が在留）であり、このような形で地元と親善交流ができるのもありがたいことです。当日（最終日前日）は絶好の日和で、石川遼、松山英樹両選手のプレーも観戦することができました。二人は予選を通過し、トーナメントの最終結果は、なんと松山選手が13アンダーで1

位タイ、プレーオフを見事制して日本人選手として4人目の米ツアー制覇を達成しました。

2014年メモリアルトーナメント公式ウェブサイト：

<http://thememorialtournament.com/>

ミュアフィールド・ヴィレッジ：

<http://www.nicklaus.com/design/muirfieldvillage/>

第97話：歩こうアメリカ、語ろうニッポン

本年度から開始された「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」(Walk in U.S., Talk on Japan)という内閣府の広報事業があります。日米の更なる国民レベルの相互理解のために、一般公募で選ばれた参加者が親善ミッションとして米国に派遣されるものです。その第一弾として藤崎一郎元駐米大使を団長とする一行が6月初めにオハイオ州を訪問、コロンバス郊外のダブリン（2日）及びシンシナティ（3日）でパネル・ディスカッションを行いました。日本からの参加者は団長他、エネルギー専門家、起業家の女性、大学1年生といった多彩な4名。2か所の日米協会に協力頂き、地元各界約100名の参加を得て、安全保障、アベノミクス、TPP、東アジア情勢、エネルギー、日本における女性の地位や起業等日本に関する幅広い分野につき活発な意見交換が行われました。パネリストの多様性と率直な発言が良い意味で日本に関する固定観念を崩してくれたのではないかと思います。これらの地域は、もともと日本企業の進出も多く、親日的な地域ではありますが、今回の訪問団は、オハイオと日本との関係を更に深化させる上で貴重な役割を果たしました。一行は、震災を受けた石巻の公園復旧プロジェクトを推進しているムーア一家を訪問したり、各地で地元メディアの取材を受けたりと精力的に活動されました。かつての上司である藤崎大使を管轄地域のオハイオにお迎えできたのは大変光栄です。また、レセプションにおいて、サンタ・オノ在シンシナティ名誉領事（シンシナティ大学学長）の就任祝賀を併せて行うこともできました。



第98話：ホワイトパイン春のファミリーコンサート

6月1日、今年で16回目を迎えるホワイトパイン・グreekクラブ（WPGC）のファミリーコンサートがありました。あいにく私は出張で不在でしたが妻が行きました。まずは冒頭で地球上初のお披露目という団歌「WPGC 賛歌」で素晴らしい歌声をご披露。お子様向けの曲目もご準備されご家族皆さんで楽しめる工夫がされていました。ダンディで深みのある歌声に、アカペラになると更に透明感が増すところにすっかり妻は魅了されました。この日のために、女性合唱団トリリアムも友情出演。可憐で優美な歌声は、まさに会場にスマイルの花が咲いたようだったとか。今回のコンサートのために結成されたという女性の太鼓グループ朱音のパフォーマンスも加わりプログラムはさらに充実。力強さに華やかさの加わった演奏で会場を魅了。混声合唱は、男女のそれぞれの良さが混ざり合ったハーモニーの美しさが際立ちコンサートを最後まで盛り上げてくれました。出演者の皆さんが少年少女に戻ったかのように目をキラキラさせ心から楽しんでおられる様子に観客の方もすっかり心が和みました。WPGC もトリリアムもそして朱音も、ミシガンのコミュニティにはなくてはならない大切な潤滑油であることを確信しました。



第99話：日本語補習校連絡協議会

6月3～4日、メトロ・デトロイトで中西部の日本語補習校連絡協議会が開かれ、会議終了後、関係者を公邸にお呼びしてささやかな懇談会を開きました。20近くの補習校から校長先生、学校運営理事会の代表に加え、今回は、文部科学省からも担当者2名に来ていただき、有意義な情報共有と意見交換ができました。海外の日本人学校における教育環境の充実は、グローバル社会で活躍できる次代の日本人を育成する点からも死活的に重要な課題です。優秀な



教師の安定的な確保をはじめ、日本語補習校が抱えている問題を広く日本国内でも共有し理解して頂き、連携して環境整備に取り組んでいきたいと思っています。

第100話：日米協会年次ディナー

6月4日、ミシガン及び南西オンタリオ日米協会の年次ディナーがメトロ・デトロイトのオークランド・ヒルズ・カントリー・クラブで開かれ、約90名の参加を得て楽しい交流の一時を過ごしました。ミシガン州知事、カナダ総領事及び私が名誉会長を仰せつかり、日系企業 INOAC USA 社長チャック・リトル氏が会長、リザンヌ・グイン氏が事務局長を務めています。アーチャー元デトロイト市長も以前、会長を務めていたことがあり、当日もNY出張から戻ったその足で駆け付けて頂きました。また、当日は特別ゲストとしてグラン・ラピッズにあるマイヤー庭園・彫刻公園のフッカー園長が招待され、来年6月完成を目指して園内に着々と建設中の日本庭園についてのスライド紹介がありました。第94話でも触れたとおり完成の暁には中西部最大規模の立派な日本庭園となり、我々の文化交流拠点となることでしょう。当地日米協会は来年25周年を迎えます。総領事館とは二人三脚で各種の日米交流活動を協力しながら展開しています。在デトロイト総領事館管内のミシガン及びオハイオ両州には、当日米協会に加え中央オハイオ及びグレイター・シンシナティの計3つの日米協会があり、今回は、6月2日、3日、4日と連続してそれぞれの地で各々の日米協会と交流行事を行い、すべてに出席しました。我々の強い味方です。



第101話：JANOさくら植樹記念ピクニック

6月8日、クリーブランドでノースイースト・オハイオ日本人会（JANO）主催によるさくら植樹記念ピクニックがCleveland Metroparks Brookside Reservationで開かれ、妻とともに片道3時間の道のりを走って参加してきました。JANOは1991年に設立され、オハイオ州北東部に在留の約80の邦人家族（200名）及び17企業が中心メンバーとなっています。中央部（コロンバス地域）、南西

部（グレイター・シンシナティ地域）と異なり、北東部にはかつて存在した日米協会が残念ながら現在活動を停止しているので、日米交流に果たすJANOの役割は更に重要です。植樹活動は、JANOメンバーの方々がお世話になっている地域社会への感謝の証として憩いの場をつくりたいとの強い思いから1996年に始まり、既に18年目を迎えました。昨年度からは三井環境基金からの支援も得て、これまでクリーブランドに159本、アクロンに75本、計234本の桜の木を植樹されたそうです。これらの活動に対してJANOは、2012年に外務大臣表彰の授賞を受けています。当日は、前日までの夏を思わせる晴天から打って変わり、早朝から激しい雨に見舞われ心配しましたが、行事が開始される頃にはなんとか雨もほとんど止み、参加者の持ち寄る日本料理を分けて食べながら、ゲームやダンスで楽しい一時を過ごしました。私が着任してから今年1月のJANO新年会に参加するために初めてクリーブランドを訪れて以来、これが6回目の訪問になりほぼ1か月に1度のペースでクリーブランドの関係者にお会いしています。総領事館としてJANOと連携を強化してオハイオ北東部での日米交流を展開していきたいと思います。

第102話：オハイオ大学

6月10日、デトロイトから南に車で5時間余り走ったオハイオ州南部の町アセン（Athens）にあるオハイオ大学（州立）を訪問しました。Athensと言ってもギリシャのアテネとは全く関係ないそうです。同大学は、1804年に設立されたオハイオ最古の大学です。1895年には最初の日本人留学生ムラヤマ・サキタロウが卒業しているということで当時の写真を見せてもらいました。この大学には17千名の学部生と4200名の大学院生が学んでおり、外国人留学生も1700名余りいます。ちなみに、中国人留学生は600名、日本人留学生は40名だそうです。日本語の授業は17クラスもあり約180名の学生が学んでいます。当日は、日本研究者のChris Thompson先生、日本人留学生会会長の杉山さんの案内で中部大学から贈られた200本の桜並木を含め素晴らしいキャンパスを見学しました。中部大学の山田元学長から寄贈されたヤマダ・ハウスで昼食の後、Pam Benoit 副学長と会見、その後、日本語を学ぶ米国人学生、日本人留学生、日本と縁のある研究者等約25名に「オハイオと日本」と題してスピーチを行い、交流しました。日本企業の投資誘致や日本語を学ぶ学生と日本企業とのマッチングについても大学側は非常に熱心でした。帰路、コロンバス地域に立ち寄り、現地日米協会のファンド・レイジングの集まりに参加することもできました。早朝6時45分自宅発、午後10時45分帰宅、往復10時間余りの強行軍でしたが行った甲斐がありました。

オハイオ大学ホームページ：<http://www.ohio.edu/>

第103話：オハイオ州知事との共催レセプション

6月13日、コロンバスのオハイオ州知事公舎でケーシック知事と私との共催で、オハイオ州進出の日系企業代表及び州政府、JobsOhio等の経済開発公社、名誉領事、JETROシカゴ事務所長等約100名を招待したレセプションを開催しました。オハイオ州には、425の日系企業事業所が存在し、最

大の投資国として約7万人の雇用を生み出しています。今回のレセプションはこれら日系企業の投資に感謝するとともに、直面する問題点について聴取する機会として知事のイニシアチブで実現したものです。単なるレセプションではなく、小一時間、レセプション会場で知事自ら日系企業関係者から様々な意見を聴取し、その場で州政府・開発公社担当者に回答させたり、翌週にフォローアップの会議を設定したりと、非常にビジネス・マインドに富み、結果重視の知事です。人材確保に複数の企業が苦勞しているようでした。私の方からは、オハイオ州における日本のプレゼンスについて具体的な数字を示しながら説明し、また知事の訪日を招請しました（まだ訪日されたことがありません）。また、当日、ポートマン連邦上院議員（元連邦下院議員、通商代表（USTR））の地元事務所にも立ち寄り、スタッフと懇談してきました。



第104話：デトロイトりんご会補習授業校大運動会

6月14日、デトロイトりんご会補習授業校大運動会がすがすがしい快晴の下、天然芝のグラウンドで行われました。同補習校には幼稚園から高校まで約900名の生徒が在籍しており、保護者の方々等を併せると約2000名が集まる大行事でした。お世話になっている地元ノバイの教育関係者も来賓として来て下さいました。私にとっては30数年振りの運動会です。また、最初の種目では、皆さんと一緒にこれまた数十年振りにラジオ体操第一の音楽に合わせて身体を動かしました。当日は高校生がボランティアになり、徒競走から、玉入れ、綱引き、棒取合戦、騎馬戦、リレー等盛りだくさんの内容で進行

しました。幼稚園児によるかわいらしい「恋するフォーチュンクッキー」の演技もありました。小学校時代の田舎での運動会は、興奮と緊張で当日を迎えたことをよく覚えています。運動会は、町のお祭りのようなものでした。ここの生徒たちも、勉強とともにスポーツを通じて心身を更に鍛えて下さい。



第105話：デトロイト川クルーズ

6月14日夜、The Detroit Princess Riverboat に乗り、デトロイト川クルーズを楽しみました。午後6時半にコボ・センター近くから乗船し、ビュッフェの食事とキャッシュ・バーの飲み物を楽しんでいる内に7時半頃出航、ベル・アイルを越え暫く航行した後、反転して9時半頃に戻るツアーでした。夕暮れの河岸のデトロイトの街はとても美しく映えていました。GMルネサンス・センターを中心にデトロイトのダウンタウンがこれほど美しく見えたのは初めてです。帰路は、カナダ側の河岸近くを船は進みます。船内は、当日はMotown Dinner ということでモータウンのヒット曲のパレードをライブで楽しみました。ビュッフェの料理は今一つでしたが、その他は、遊覧船も結構大きく、音楽といい、景色といい、一度は乗船してみる価値はあると思います。週末を中心に運航しています。



第106話：ミシガン領事団フォーラム

6月16日、ディアボーンのヘンリー・フォード博物館の会議場でミシガン領事団フォーラムが開催され、領事団（（総）領事・名誉（総）領事）、ミシガン州政府、経済開発公社（MEDC）、商工会議所、起業家等によるパネル・ディスカッション、スナイダー知事のスピーチ及びレセプションに参加してきました。例年、州都ランシングの知事公舎でレセプションのみ開かれていたのを、今回は、領事団の要望により、より実質的な内容に変更されました。知事のスピーチでは、いつもの通りビジネス志向に立ち、移民の積極的な受け入れによる多様性の創造がミシガンの強さにつながることに強い信念で語られていたのが印象的でした。知事の前向きなイニシアチブに改めて敬意を表したいと思います。



第107話：ノバイ市公共図書館

6月19日、ノバイ市にある公共図書館を見学しました。理事会のメンバーでありかつ MAPAAC（ミシガン州アジア太平洋系アメリカ人問題委員会）の委員でもある Ramesh Verma 氏の招待で、Julie Farkas 館長とともに館内を案内して頂きました。立派な2階建ての施設で1階にはカフェも併設されています。ノバイ市には在留邦人が約3千人もおり、日本人も多く利用しているため、日本語の図書館案内パンフレットや日本語の書籍コーナーもあります。図書館は日曜日を含め7日間毎日開館しています。開館時間は曜日によって異なりますが、公共図書館なので、誰でも入館できます。訪問当日は10時の開館前でしたが、既に利用者が外で待っていました。貸し出しはノバイ市民又は提携している他市の図書館のメンバーに開放されていますが、貸し出し冊数に制限はないそうです。DVDやコンピュータ、インターネット環境も整い、とても快適な図書館です。このような施設を見る度に米国社会の基盤での強さを感じます。みなさんも積極的に利用してください。

図書カードは大切に!

様々な資料の閲覧、またサービスを受けたりイベントに参加するには図書カードが必要です。同カードがあると、図書館をより効率よく利用でき、パソコンや便利なサービスを受けることもできます。

会議室のご利用について...

ノバイ図書館には6つの会議室があります。会議室の詳細や予約は図書館事務所へご連絡下さい。

電話番号 (248) 869-7204
月曜日～木曜日
午前10時～午後5時
金曜日
午前10時～午後6時

閉館後も会議室をご利用いただけますが、事前予約が必要です。

誰もが楽しめるイベント!

大人向けプログラム	郷土資料室
時間外受取ロッカー	会議室
パソコン	カフェ
ドライブスルー窓口/返却	セルフ貸出手続コーナー
宿題サポート	高齢者向けプログラム
外国語図書コレクション	美術作品
	ワイヤレスアクセス
	児童向けおはなしの時間

他にもあります!

友の会メンバーになるには...

ノバイ図書館友の会のメンバーに参加しませんか。学習・文化センターとして図書館が重要だと思う方であれば図書館友の会のメンバーになることができます。詳細は当館ウェブサイト又は、friends@novilibrary.org までお問い合わせ下さい。

図書館情報を得るには...

ウェブサイト
www.novilibrary.org

E-ニュースレター
図書館の最新情報やイベント情報を毎月Eメールでお送りします。

「Engage!」誌
図書館のイベント情報などは金色のセクションに掲載されています。

地元テレビチャンネル
ケーブルテレビ会社のブライトハウス（チャンネル13）とAT & T/U-verse（チャンネル99）では、図書委員会会議や「Beyond Books」をご覧になることができます。

アプリをダウンロード!
図書館と繋がる新しいスマートフォンアプリを使うとカタログ検索や本の予約、開催予定のイベント確認が素早くできます。

ノバイ図書館へ

ようこそ!








月曜日～木曜日: 午前10時～午後9時
金曜日～土曜日: 午前10時～午後6時
日曜日: 正午～午後6時

45255 W. Ten Mile Rd
Novi, MI 48375
248-349-0720
novilibrary.org



Inform. Inspire. Include.

第108話：スロベニア総領事主催ナショナル・デー・レセプション

6月23日、オハイオ州クリーブランドに行き、スロベニア総領事主催のナショナル・デー・レセプションに出席しました。1991年6月の独立を記念したレセプションです。私の管轄州は、ミシガン及びオハイオの2州です。このうち、ミシガン（メトロ・デトロイト地域）には日本を含め7カ国が（総）領事館を置いています。オハイオに総領事館を持っているのは、スロベニアが唯一です。同総領事館は、オハイオの他、コロラド、イリノイ、インディアナ、アイオワ、ミシガン、ミネソタ、ミズーリ、ペンシルベニア及びウイスコンシンズの10州を管轄しています。スロベニア総領事館のホームページによると、2000年の米国国勢調査では約17万5千名がスロベニア系と回答しており、その3/4は、6つの州、すなわちオハイオ（約5万人）、ペンシルベニア（約1万5千人）、イリノイ、ミネソタ、ウイスコンシン、及びカリフォルニアに在住しています。実際にはスロベニア系は30万人～60万人程度と推計されています。移民の最初の波は19世紀から20世紀前半、そして次の波が第二次大戦後です。当日は、地元スロベニア系グループMI SMO MIの合唱もあり楽しい一時を過ごしました。スロベニア総領事には、次は是非ともメトロ・デトロイトで開催される天皇誕生日レセプションに出席頂けることを楽しみにしています。

第109話：日米野球交流とデトロイト・タイガース

米国のプロ野球チームが初めて訪日したのは、なんと1908年（明治41年）、今から106年も前のことだそうです。しかし、本やテレビで私の中に刷り込まれているのは、1934年、ベーブ・ルー

スやルー・ゲーリックを日本に迎え、沢村栄治投手が連続三振に切って取り 1 対 0 で惜しくも負けはしたものの、日本に職業野球の幕開けを予告する名勝負をやったのけたこと。しかし、その後の暗い時代の中で、沢村も戦死、日米交流の復活は戦後を待たなければなりません。デトロイト・タイガースは、1962 年に来日しています。この年は、阪神タイガースがセ・リーグで優勝した年で不思議な縁を感じます。また、デトロイト・タイガースと日本のチームとの一連の試合で、阪神タイガースの村山実投手が全日本チームの先発で登板し、日米野球の歴史の中ではじめて日本側が完投・完封で勝利を収めるといふ快挙も成し遂げています。私の管轄地域のチームとしては、シンシナティ・レッズも 1978 年に来日しています。1995 年に野茂英雄投手がロサンゼルス・ドジャースに入団して以降、本格的に日本のプロ野球選手が大リーグで活躍するようになり、また、ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）という世界一決定戦も開かれるようになりました。日米には、野球という非常に強力な交流の「武器」があることを改めて認識します。

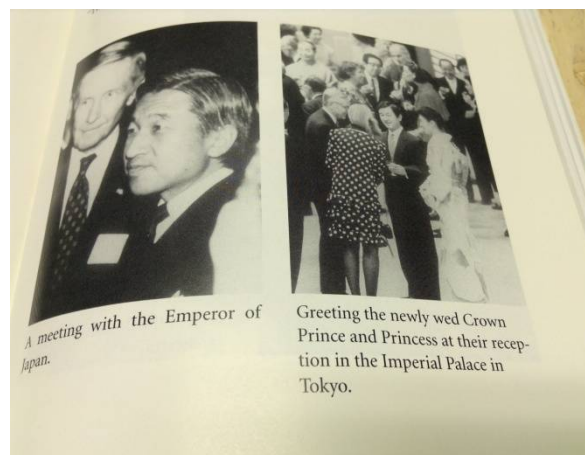
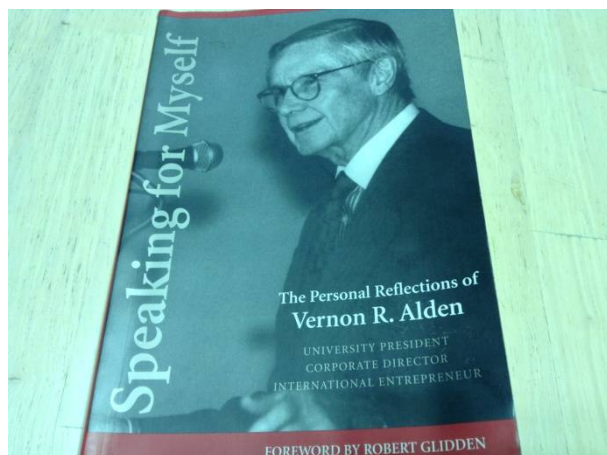
（波多野勝「日米野球史—メジャーを追いかけた 70 年—」（PHP 新書 2001 年）を参照しました。）



第 110 話：ヴァーノン・アルデン氏

第 102 話でオハイオ大学訪問の話を紹介しましたが、日本と大変深い関係にある人物が、かつてこの大学の学長を務めていました。その名は、ヴァーノン・アルデン（Vernon Roger Alden）。1923 年シカゴで生まれ、第二次大戦中、コロラド州ボウルダーにあった海軍日本語学校で日本語を学び、空母サラトガに乗船。戦後はハーバード・ビジネス・スクールを卒業し、同スクールで学部長を補佐していた 38 歳の年に請われてオハイオ大学第 15 代学長に就任。学長を務めた 1960 年代にオハイオ大学の施設や学生数の増加に大きな貢献をしました。その後、ボストン・カンパニー会長の傍ら、ボストン日米協会会長を 40 年余りにわたって務め、またその間、全米日米協会連合の会長も務めました。ハーバード・ビジネス・スクール時代は慶応大学ビジネス・スクールの設立を支援したり、カーター政権発足の際は、駐日

大使候補の最後の二人まで残り、結局マンスフィールド大使になったというエピソードも。同氏の名前を冠したオハイオ大学図書館には、1985年に授賞した旭日章の叙勲の表彰状が掲げられていました。90歳を超えてお元気と伺っています。



第111話：アッパー・ペニンシュラ旅行

6月28日～7月3日まで夏休みを頂き、5泊6日のミシガン旅行を楽しみました。危機管理のため今回は管内に留まることにしたのと、まだアッパー・ペニンシュラは足を踏み入れたことがなかったのでミシガン州内を旅することに決めました。トラヴァース・シティとマキノー島に計3泊した後、マキノー大橋を渡り、いよいよアッパー・ペニンシュラへ。しばらく走ると車内も冷房から暖房に切り替えるほどの涼しさでした。ミュージングとマーケットに1泊ずつして、タカメノン滝やスペリオル湖遊覧船でピクチャード・ロックを見学した他は、ゆっくりと自然環境を堪能したり、小さな街を散策して過ごしました。鉱山跡や灯台が往時を偲ばせます。アッパー・ペニンシュラで2万人の人口を超えるのはマーケットのみで、行けども行けども森と湖。スペリオル湖は世界最大の淡水湖で、面積は北海道を上回ります。瀬戸内海の海を見て育った私には地平線の彼方まで続く湖は湖の概念を超えていました。冬は雪に閉ざされるのですが、爽やかな青空と美しい湖と豊かな森、そして魚料理と素朴な人情の溢れるアッパー・ペニンシュラの夏は避暑と気分転換にはもってこいです。ミシガンやオハイオに居住されている皆さんも機会をつくって滞在中、是非一度アッパー・ペニンシュラを訪問下さい。メト

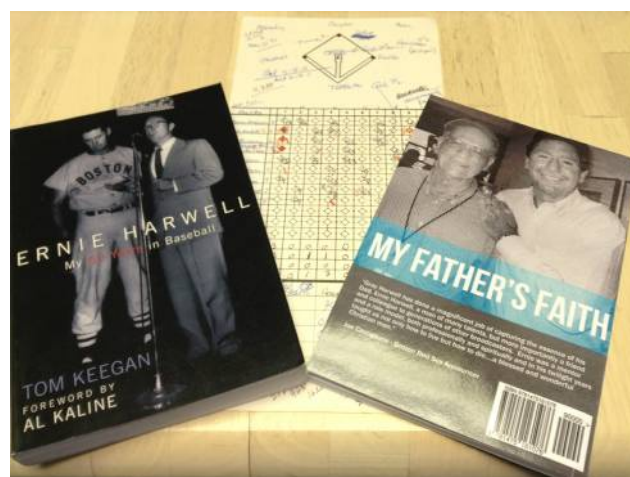


ロ・デトロイトから往復約2千キロのドライブでしたが、思い出に残る素晴らしい旅行でした。



第112話：アーニー・ハーウェル

公邸の夕食に招待したある客人から、野球放送キャスターとして活躍したアーニー・ハーウェルの署名入り写真と彼が書いたスコア・カード、それに彼の仕事ぶりを録音したオーディオ・スコアブックを頂きました。それまで、この人物のことは知りませんでした。話を聞き、後で調べたらデトロイト・タイガースのファンでなくともミシガンで彼を知らない人はいないという程の有名人でした。1918年にジョージア州で生まれ、1948年、史上初めて選手と放送キャスターのトレードという形でNYに移りブルックリン・ドジャースの放送を担当、その後、1960年からは、タイガースの「声」として2002年の引退まで約40年間に亘って、選手以上にタイガースのために貢献しました。アトランタで育ったせいで、そのアナウンスは南方なまりが特徴だったそうです。2010年、ノバイで92歳で世を去りました。彼の人生が、“Ernie”-A Play About the Baseball Legend-という舞台劇となってアメリカ・パーク近くの劇場に戻って来ているので観に行く予定です。



第113話：豊田市とデトロイト市の姉妹都市交流

豊田市とデトロイト市は、1960年に姉妹都市交流を開始して来年で55周年を迎えます。デトロイトの状況視察及び記念行事の進め方をデトロイト市長はじめ関係者と協議のために太田市長・都築市議会議長一行が当地を訪問され、7月9日及び10日、当地日系企業関係者を交えた機会を含め意見交換させて頂きました。ミシガン州と日本との間には、滋賀県と同州との姉妹関係を含む28組の姉妹都市間で交流がありますが、その中でも両市は長年に亘り交流を続けています。代表的なものとしては、毎年約10名の高校生を交互に派遣しています。55周年には、豊田市からジュニア・オーケストラが当地を演奏旅行に訪れる計画がある他、いくつかの企画があるようです。豊田市からのこのイニシアチブは、再生に努力しているデトロイトにとってきっと大きな激励となると思います。ダガン市長には、業務多忙でしょうが、是非55周年の記念すべき年に豊田市を含む日本を訪問してもらいたいものです。前回、私がお会いした際も、厳しい財政事情の中、豊田市との交流継続の重要性については十分認識されていました。姉妹都市交流は、日米の草の根交流の不可欠の要素です。最近、私から28組の姉妹都市の首長さんに手紙を書き、日本とミシガンとの交流につき最新の概要を説明するとともに、姉妹交流行事には総領事館としても積極的に参加し支援したいので是非情報の共有をお願いしたいと要請しました。豊田市とデトロイト市との関係についても、当地日系企業等とも連携しながら、その更なる発展を応援したいと思います。



第114話：デトロイト市長と領事団との意見交換

7月15日、デトロイト市庁舎にてダガン市長と当地領事団との意見交換会が開かれました。(総)領事館を設置している日本、イラク、レバノン、マケドニア、イタリアの他、20か国程度の名誉(総)領事が出席しました。いかにデトロイトとの経済関係を強化していくかが中心のテーマでした。私の方

からは、来年55周年を迎えるデトロイト市と豊田市との姉妹交流の一環で是非市長に訪日して頂き、その機会に日本国民に対してデトロイトが復活しつつある現状を直接説明することが日本からの投資を誘致する上で如何に重要で効果的か述べました。市長は訪日実現に意欲的でした。また、私から、デトロイトを激励し、かつ日本や世界の人々にデトロイト復活を印象づけるために、当地邦人社会有志が「恋するフォーチュン・クッキー」デトロイト版を鋭意作成中で近く完成予定であることを説明したところ、市長や、副市長、他の領事団も強い関心を示していました。



第115話：野洲市とクリントン・タウンシップの姉妹交流

7月15日、デトロイトから北東に約45分車で走ったところにあるクリントン・タウンシップに出かけ、地元図書館で開かれた日本祭りに出席しました。滋賀県野洲市とクリントン・タウンシップは1993年に姉妹提携して21年になります。毎年交互に市民代表団を派遣しホームステイ流を続けており、今年は野洲市の子供から大人まで計12名からなる代団がクリントン・タウンシップを訪れた機会に日本祭りが開かれました。長さんや姉妹文化交流委員会会長さんをはじめ、地元から大勢の人が集り、手作りの日本食や日本の遊び道具、書道、折り紙、着物・浴衣の着け、太鼓の演奏等様々の催しを楽しみました。野洲は、「むかで太鼓」で有名だそうです。かつて野洲に住み、むかで太鼓に魅せられ保存会会長まで務めたマッシュー・リチャードさんが、現在住んでいるクリーブランド



リ
し
提
交
表
町
ま
付



から彼の太鼓チームを引き連れて参加し、野洲からやってきた子供たちと太鼓のコラボレーションを披露してくれたのが圧巻でした。

第116話：ハイデルバーグ・プロジェクト

7月18日、デトロイト市内東部にあるハイデルバーグ・プロジェクトを見学する機会がありました。これは、2ブロックの廃屋を利用した野外芸術とも言うべき場所です。1986年にタイリー・ガイトン氏（Tyree Guyton）と彼の祖父によって始められたプロジェクトです。荒廃していくデトロイトの町並みを見て、人々の生活と地域コミュニティの改善を目指すべく、建物を塗り直したり、空き地に作品を飾ったりして、これまで世界百数十カ国の人々が見学に来たそうです。マイケル・ジャクソンやマドンナも見に来たとか。市当局の都市再開発計画のため、これまで2度閉鎖の危機を迎えたり、また、昨年だけでも6件の放火事件に遭ったりとプロジェクトは決して順調とは言えませんが、デトロイトの未来への明るい希望と創造力を示すため、関係者は困難にめげず頑張っています。ちなみに、ガイトンさんの弟は海軍軍人として佐世保に駐留、日本人の夫人と生活しています。



第117話：カラマズー市訪問

7月27日、デトロイトから西方に車で2時間半ほど走ったところにあるカラマズーを初めて訪問しました。シカゴからもほぼ同距離にあり、どちらかと言えばシカゴ経済圏により近いと言えるでしょう。この町は、今から110年ほど前に永井荷風が約1年遊学した場所でもあります。その体験は、彼の作品「あめりか物語」の一節に生かされています。カラマズー市は静岡県沼津市と姉妹都市交流を50年以上続けており、毎年交互に代表団を派遣しています。今年は子供たちを中心に沼津の代表団18名が当地を訪れ、ホームステイをしながら各地での行事に参加しています。マイリンガー姉妹都市委員会会長司会の下、ホープウェル市長や地元選出のアプトン連邦下院議員、ホスト・ファミリー他大勢の関係者が出席して歓迎の夕食会が開かれ、私も招待を受け祝意の挨拶をさせて頂きました。ミシガンには州と滋賀県との姉妹関係の他、27都市間で姉妹交流が活発に行われています。このような草の根交流の現場に呼んで頂けるのは本当にうれしい気持ちです。総領事館もできる限りの支援を行います。また、夕食会に先立ち、連邦議員、市長、大学関係者及び経済開発公社関係者と、経済、文化、教育、人物交流各方面に亘るカラマズーと日本との関係強化につき意見交換しました。

第118話：図書館交流

ウエスト・ブルームフィールド・タウンシップ図書館は、全米51の図書館の一つとして「姉妹図書館ホワイトハウス・ミレニアム計画」に選ばれ、1999年以来、淡路市東浦図書館と姉妹図書館交流を続けています。姉妹都市交流はよくありますが、姉妹図書館交流は非常にユニークではないでしょうか。7月28日、図書館交流の一環として淡路市から中高生8名を含む10名の代表団がウエスト・ブルームフィールド・タウンシップを訪れました。一行は先に姉妹都市であるオハイオ州セント・メリース市を訪問し、ホームステイ等をした後にこの町にやってきました。予定のフライトがキャンセルとなりやきもきしましたが、少し遅れて到着。夏にも関わらず気温も低く肌寒い天気でしたが、図書館理事長、館長、町長、教育長、地元高校の日本語クラブのメンバー、在留日本人等から歓迎を受け、湖に面した公園で早速バーベキューを楽しみました。一行からAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」の踊りの披露があり、地元の参加者から喝采を受けていました。同町には日本人が千名以上住んでおり、これはミシガン州では、ノバイ、アナーバーに次ぐ数です。今回、一行は淡路から持参した図書を何冊か寄贈しました。わずか2泊の滞在ですが、翌日、デトロイト・ダウンタウンやコメリカ・パークでのタイガースの試合見学も日程に入っているとか。中高生には、メトロ・デトロイトの素晴らしい思い出を作ってほしいと思います。



第119話：豊田市高校生のデトロイト訪問

夏休みは、姉妹都市交流の一環として子供たちや市長さんたちが相手方の都市を親善訪問する機会の多い時期です。豊田市とデトロイト市は1960年に姉妹都市提携を結んで以来今年で54年を迎えます。毎年、10名程度の高校生を交互に派遣し、ホームステイをしながらお互いの都市や生活、文化を学んでいます。今年は、豊田市側が訪問団を派遣する順番で、高校生8名が2名の市関係者の引率でデトロイト市を7月23日～8月7日の約2週間訪問のためにやってきました。期間中、ホームステイ家族と過ごしつつ、歴史博物館やアフリカ系米国人博物館、ヘンリー・フォード博物館、ナイアガラ滝、動物園等見学の他、ダガン市長や市評議会訪問、日系企業視察、デトロイト・タイガースの野球の試合観戦等盛りだくさんの日程でした。7月29日には、総領事館に来てもらい、デトロイトやミシガンと日本の関係、さらには総領事館の仕事について私から説明しました。将来外交官になりたいと抱負を述べていた高校生もいて頼もしく思いました。また、同日夜には、彼らとともにお世話になったホスト・ファミリーやデトロイト市担当者、日系企業の代表を公邸のレセプションに招き、日本料理を食べながら一緒に楽しい一時を過ごしました。高校生たちがホスト・ファミリーに溶け込み、彼らと親子、兄弟姉妹のように親しくしている姿を見て、嬉しく思いました。彼ら高校生は、みんな国際交流に大きな志を持って積極的に参加している素晴らしい若者たちでした。来年は、両市姉妹提携55周年を迎え、デトロイト市の高校生が豊田市を訪問する順番です。両市交流のますますの発展を願っており、総領事館も協力を惜しみません。



第120話：ピュアビック陶器工房訪問

7月31日、デトロイト・ダウンタウンから車で10分ほど東に位置するPewabic Pottery（ピュアビック陶器工房）を訪問しました。工房のヘザー・シメット館長代行の他、ウィリアム・コルバーン・フリーア・ハウス館長、専門家のトマス・ブランク氏の案内で1時間強見学させて頂きました。同工房は、メリー・チェイス・ペリー・ストラットン女史が新窯業法の発明者ホラス・コールキン氏の支援を得て、19世紀末に設立されました。工房の名前は、ストラットンの故郷であるミシガン州ハンコックのピュアビック銅山にちなんでつけられたそうです。現在の場所に移ったのは1906年。建築用タイルの生

産も始め同工房を有名にしました。工房の作品は、デトロイト市内の有名な教会や博物館、図書館、コンサート・ホール、ガーディアン・ビル等の各種建物に使用されている他、DIA、ワシントンのフリーア・ギャラリー、パリのルーブル美術館などにも展示されています。1966年、工房はミシガン州立大学に譲渡され、更に1981年、非営利団体に所属することとなり、同団体が、現在この文化的遺産の保護、継承、展示、教育等の活動を行っています。同工房は現在、国の歴史的ランドマークに選定されています。日曜日も開館していますので、興味のある方は是非一度訪問してみてください。

ピュアビック陶器工房ホームページ（英語）：<http://www.pewabic.org/>



第121話：JET壮行会

8月1日、公邸にて当館管轄地域のミシガン及びオハイオ2州から本年度のJET (Japan Exchange and Teaching Programme)に参加する62名の青年たちのオリエンテーションと壮行会を開きました。彼らは、日本への出発前日ということもあり、緊張の中にも期待いっぱいの元気な様子で一安心。JETは、日本の地域レベルで学校の英語教育指導助手や国際交流活動の補佐を1年から最長5年間してもらうプログラムで、外務省、総務省、文部科学省及び自治体国際化協会（CLAIR）の協力の下、地方公共団体が実施しています。1987年に開始して以来、6万人近い外国人が参加し、その内米国人は約3万人に上り

ます。最も成功している草の根交流と言えるでしょう。当日は、地元 J E T 同窓会や J E T 選定の面接に携わった先生方にも参加頂きました。また、総領事館にも J E T 同窓生が何名もおり、彼らも出席しました。大学で日本語を勉強した若者が大多数ですが、彼らのキャリアパスの一環としても J E T は重要な役割を果たしています。数年後、彼らの日本各地での体験を聞いてみたいものです。



第 1 2 2 話：トシコ・シモウラ氏の米寿のお祝い

8月2日、日系米国人市民同盟（J A C L）デトロイト支部会長として、また、池坊流やイケバナ・インターナショナル当地支部で長く指導に当たって来られたトシコ・シモウラ氏の米寿のお祝いがバーミングハムのコミュニティー・ハウスで開かれ、我々夫婦も、家族や大勢の友人、お花の生徒さんたちとともに出席させて頂きました。日本とミシガン州の友好親善、日米相互理解促進への同氏の長年の貢献を称えて、今年度の外務大臣表彰授与が1週間前に正式に発表されたばかりであり、私の方から挨拶でそのことに言及し米寿のお祝いに更に花を添えることができました。今回の受賞者が88名であったことも、偶然とは言え縁起良いことでした。シモウラ氏は家族や友人たち多数に囲まれ幸せそうでした。表彰状が届き次第、正式に外務大臣表彰式を主催させて頂きたいと思います。

第 1 2 3 話：インターナショナル・チャンピオンズ・カップ（サッカー）

8月2日、ミシガン大学にあるミシガン・スタジアムで、サッカーのプレシーズンマッチ「インターナショナル・チャンピオンズ・カップ」のマンチェスター・ユナイテッドとレアル・マドリードの試合を見てきました。欧州のクラブ8チームが2つのグループに分かれて先ず総当たり戦を行い、それぞれ的一位チームが決勝戦を行う形式です。試合は、香川真司選手のアシストもありマンチェスター・ユナイテッドが3対1で勝利、3勝零敗でグループAの一位となり決勝戦に駒を進めました。レアル・マドリードは敗退しましたが、最後にロナウドの華麗なドリブルを見ることもできました。プロ・サッカーの

試合を競技場で観るのは初めてで、興奮しました。ミシガン・スタジアムは、約 11 万人の収容能力を持ち、アメリカン・フットボール競技場としては最大です。当日は、109,318 人の観客を動員し、米国でのサッカーの試合で史上最多を記録したそうです。チャンピオンズ・カップの方は、8 月 4 に決勝戦が行われ、マンチェスター・ユナイテッドが 3 対 1 でグループ B 一位のリヴァプールを逆転し、見事優勝しました。



第 1 2 4 話：CAR（自動車研究センター）主催経営セミナー

8 月 4 ～ 7 日にかけて、ミシガン州トラバース・シティーにおいて CAR (Center for Automotive Research: 自動車研究センター) 主催の「2014 経営セミナー」があり、その一部に参加しました。CAR は、1970 年代後半にミシガン大学の一部としてアナーバーに設立され、2003 年、独立した非営利団体となりました。自動車産業に関する様々な問題や傾向につき国際、連邦、州及び地域各レベルでの研究を目的としています。主要な日系自動車・自動車部品メーカーも CAR の主要なスポンサーとなっています。CAR の各種活動の中で、毎年 8 月第一週にトラバース・シティーで行われるこの経営セミナーは、その旗艦的なイベントで、今年は 49 回目に当たりました。毎年米国内外から千名近い参加者を集めています。企業のスポンサーで米国各地の大学生も数

十人招待されていました。セミナーでは、トヨタ、日産、ホンダ、デンソー、ヤザキ等日系企業代表（日本人及び米国人）も各セッションのスピーカーとして活躍していました。自動車産業の中心地である当地における総領事館とCARとの関係強化、自動車産業関係者とのネットワーキングの観点から、5月のマキノー島でのデトロイト商工会議所主催政策会合に続いて私にとっても有意義なセミナーでした。



第125話：「恋するフォーチュンクッキー」デトロイト版完成！

昨年、日本の人気女性グループAKB48が歌って踊って大人気を博した「恋するフォーチュンクッキー」のデトロイト版がいよいよ完成しました。デトロイト市民を応援・激励し、ともすれば否定的なイメージで受け取られがちなデトロイトの、本当はとてとても素晴らしい面や将来への熱い思いを内外に発信していきたいとの気持ちで、この地に縁のある日本人及び米国人有志の便宜提供及び友情出演によって遂にYouTubeに公開となりました。皆さん、是非、下記リンクからご覧になって下さい。そして、日本人、米国人、更にはその他の知り合いに一人でも多く見てもらって広めて下さい。

Go! Go! Detroit!

「恋するフォーチュンクッキー」デトロイト版

<http://youtu.be/m07zUu6na34>

第126話：ジャスティン・アマシュ連邦下院議員との会見

8月12日、ミシガン州グランド・ラピッツのジャスティン・アマシュ連邦下院議員（共）事務所を訪ね、同議員及びスタッフの方々と意見交換しました。アマシュ議員は、1980年生まれで34歳の若く鋭刺とした議員でした。2010年の選挙で当選した時にはわずか30歳でした。彼の父親は中東から移民したクリスチャンのビジネスマンであり、彼はさしずめアメリカン・ドリームの体現者でしょう。彼の選挙区（第3区）には32の日系企業の工場や事務所が約6400人の雇用を生み出しています。右を含め、日本のミシガンへの貢献や日本とミシガンの関係の重要性について私の方から説明しました。同議員も日本との更なる関係強化に強い意欲を示して頂き、心強く感じました。また、安倍総理

の経済政策や TPP、東アジアの安全保障環境についても意見交換しました。同議員は、高校生の頃に訪日したことがあるそうですが、是非とも近い将来に日本を再訪して頂きたいと思います。



第127話：ジェラルド・フォード大統領博物館

8月12日、ミシガン州グランド・ラピッズに出張した際に、同市内にあるジェラルド・フォード大統領博物館を訪問し、ジム・クラッタス副館長に案内頂きました。フォード大統領は、1913年にネブラスカで生まれましたが、幼いころにグランド・ラピッズに移り住み、ミシガン大学ではフットボールで活躍しプロからも誘いがあるほどの実力でした。第二次大戦中、海軍では空母モンテレーに乗船し、フィリピン沖で台風巻き込まれ、九死に一生を得た経験もしています。連邦下院議員の後、ニクソン大統領から1973年、副大統領に指名されました。ウォーターゲート事件でニクソンが辞任の後には、1974年から76年まで大統領を務めました。2006年、93歳で逝去、歴代最長寿の大統領です。米国の大統領は、現職を退くと記念図書館を設立する慣習がありますが、フォード大統領の場合は、資料や記録を集めた図書館が母校のミシガン大学（アナーバー）に、博物館がここグランド・ラピッズにあります。日本と縁のある大統領で、1974年、現職米国大統領として初訪日、75年には、昭和天皇の米国ご訪問を大統領として迎えました。博物館には当時のゆかりの品々も展示されてあります。また、敷地内の元大統領夫妻が眠っている場所の近くに日本から寄贈された楓の木が植えられています。グランド・ラピッズに来られる機会があれば、是非お立ち寄り下さい。



第128話：デトロイトの集中豪雨

8月11日の夕方から夜にかけて猛烈な集中豪雨がデトロイト地域を襲いました。同日の降雨量は4.57インチ(約116ミリ)で、観測史上2番目の記録でした。道路は各地で水没、浸水する家屋も各地で見受けられました。ダウンタウンの事務所から郊外の自宅まで、空いているときは車で30分少しの道程も、この日は2時間45分かかりました。それでも運の良い方で、同僚の中には、4、5時間かけて通れる道を探し探しやっと自宅に夜半にたどり着けた者、帰宅を諦めホテルに泊まった者などがおり皆大変でした。私は、当日、公邸の夕食にクリーブランドからのお客2組を招待していましたが、1組はなんとか1時間半遅れで到着したものの、もう1組は運悪く車が冠水した道路上で遂に動かなくなり、近くのレストランに避難するはめになりました。水が多少引いた夜中に自家用車でなんとか救出に向かい、2組はその夜は公邸に泊まって頂くことに。昨冬の寒波と言い、今回の集中豪雨と言い、自然災害には十分気をつけねばと改めて思いました。



第129話：オリンピック・フィギアスケート選手

8月13日、ソチ冬季オリンピック日本代表として出場した2組の選手を公邸に招待して、日系企業代表や御家族とともに楽しい一時を過ごしました。1組は、フィギアスケートの高橋成美・木原龍一ペア。もう1組は、アイスダンスのキャシー・リード、クリス・リードの姉弟ペア。ともに当地のアイススケート場で練習に励んでいます。第53話でも紹介したように、デトロイト地域は、フィギアスケートの一流選手にとって聖地のような場所です。2組の選手は、最近当地で作られた「恋するフォーチュンクッキー」デトロイト版にもボランティアで出演して頂きました。本当にありがとうございます。皆さんとても素直で素敵な好青年でした。当日の日本料理で元気をつけてくれたら幸



いです。今後の更なる大活躍を当地邦人社会とともに応援していますので、頑張ってください。

第130話：サギノー訪問

8月14日、ミシガン州サギノー（デトロイトの北西約150KM）に出張し、サギノー・ヴァレー州立大学及び日本文化センター（茶室及び日本庭園）を訪問しました。学長他大学関係者と日本文化センター関係者、地元選出の政治家と意見交換してきました。サギノー市は人口約6万人。かつては、木材産業や製造業で栄え、現在は、クリーン・エネルギー等にも力を入れていると聞いています。日本との関係では、徳島市からの農業実習生の派遣を契機に、1961年に姉妹都市提携を結んでいます。サギノー・ヴァレー州立大学は、1963年に設立された州内で最も新しい州立大学で、徳島の四国大学と姉妹校提携関係にあります。昨年秋学期時点で、3つの日本語講座があり59名の学生が学んでいます。他方、日本からの長期留学生は現在3名しかいないようで少し寂しい気持ちです。その後訪れた日本文化センターは、茶室（阿波鷺能庵）の併設した立派な施設でした。サギノーに50年以上在住し、日本文化センター館長を長年務め、平成23年には外務大臣表彰を受賞したヨウコ・モスナー氏による裏千家のお点前を地元選出議員たちと頂きました。同文化センターは、姉妹都市提携を記念して徳島市の協力で作られたものであり、数寄屋造りの茶室は、京都から宮大工を招聘して建築。毎年秋に、同文化センターにおいて当館も共催の日本祭りが開催され、地元住民に日本文化を紹介する機会となっています。今年は9月21日に予定されていますので皆さん是非ご参加下さい。



第131話：ヒストリック・ベース・ボール

8月16日、野球三昧の日でした。先ず、デトロイト郊外のディアボーンにあるザ・ヘンリー・フォードにあるグリーンフィールド・ヴィレッジで行われたヒストリック・ベース・ボールの始球式を行わせてもらいました。ヒストリック・ベース・ボールというのは、野球の前身ともいうべきゲームで、1867年に制定されたルールで行われています。現在の野球との大きな違いは、グローブを使わないこと。また、ピッチャーは下手で投球します。キャッチャーは素手のせいかわん・バウンドで球を受け取っていました。球は硬式のボールと同じくらいの大きさですが、少し柔らかくできています。綴りも baseball ではなく base ball と2文字です。デトロイト地域では、2チームによるリーグ戦が6月から9月にかけて行われています。打撃戦になる傾向にあり、当日も結果は、14対12。草野球といった風情で応援客も芝生に座り、のどかな米国の風景でした。その日の夜は、コメリカ・パークでMLBのタイガースとマリナーズの試合を観戦。タイガースが見事4対2で勝利しました。試合後、球場に花火が大々的に打ち上げられ、これも非常に見ごたえがありました。



第132話：滋賀県友好親善代表団の来訪

8月22日、ミシガン州の州都ランシングにある知事公舎にて、滋賀県友好親善使節団歓迎レセプションが開かれました。ミシガン州と滋賀県は1968年に姉妹提携を結んでいます。ミシガン州内にある27の都市が日本の都市と姉妹関係にありますが、そのうち13は滋賀県の都市です。ランシングには滋賀県の事務所もあります。当日は代表団50数名のほか、スナイダー知事が忙しい中出席して頂き、双方の複数の市長、姉妹提携委員会会長、州政府関係者、滋賀県職員、ホストファミリーが集まり盛況でした。一行はこれからホームステイを楽しみます。特に若い学生にとって、今回の体験は一生の思い出になる

でしょう。これらの草の根の日米市民交流が、両国関係を根っここのところで支えています。最近私から管轄地域の日米全ての姉妹都市の首長に手紙を書き、総領事館が日頃より最大限の側面支援をやらせて頂きたいとお伝えしました。

ミシガン・滋賀姉妹州県委員会ホームページ

<https://sites.google.com/site/michshiga/home>



第133話：アーミッシュ

8月23日、デトロイトから南西に3時間程車で走ったインディアナ州ミドルベリー（Middlebury）とシブシワナ（Shipshewana）のアーミッシュの住む場所を日帰りで訪れました。アーミッシュは皆さんご存知だと思いますが、主にペンシルバニアやオハイオその他の中西部に居住するドイツ系移民で昔の生活様式を維持し、自給自足生活をしている人たちです。男性はあごひげを生やし、女性は青色や桃色の質素な服に白い帽子を被って、電気や自動車を使わず、馬車や自転車を交通手段にしています。先ず、観光客用に作られたレストランでアーミッシュの食べる、素朴ですがなかなかおいしいビュッフェの食事を取り、キルト等のお土産物屋やベーカリー、骨董屋を一通り回りました。観光用のアーミッシュの馬車も体験。実際に彼らの住む住居を眺めながら帰路につきました。意外だったのは、一般市民の生活空間とアーミッシュの生活空間が混然となっていたことです。デーリー・クイーンのアイスcream屋にもアーミッシュの家族がたくさんいました。もっと、奥地の方で隔離された生活をしているのかと勝手に想像していました。写真の通り、オーバーオールにパナマ帽を被っていたら、米国人観光客に日本のアーミッシュと間違われてしまいました。



第134話：ローレンス工科大学入学式

8月24日、デトロイト市郊外のサウスフィールドにあるローレンス工科大学入学式に来賓として招かれ出席しました。同大学は、1932年に設立された私立工科大学で学生数は約4千名。エンジニアリング、科学、数学、建築等の博士課程も設置されている大学です。サウスフィールドは日本企業の投資が1200もの現地雇用を生み出している、日本とも縁の深いコミュニティーです。同大学の卒業生

も日本企業に就職する者が少なくありません。入学式には、今期をもって引退を表明しているミシガン州選出のカール・レヴィン連邦上院議員も招待され、大学から地球市民賞を受賞しました。イラク総領事の二人の子弟はここで勉強しているとか。新入生は、短パンやティーシャツ等カジュアルな服装が中心で、檀上の大学関係者の伝統的なアカデミックな衣装との対照が印象的でした。モウドギル学長をはじめ大学幹部や来賓の市評議会メンバー等と同大学やサウスフィールドと日本人コミュニティとの更なる協力を強化することで一致しました。



第135話：日本的経営

終身（長期）雇用、年功序列、企業別労働組合、ボトムアップ、……。いわゆる日本的経営は、時代の文脈や日本経済の浮沈に応じて、積極的ににも否定的にも評価されてきました。最近、篠原健一京都産業大学教授の「アメリカ自動車産業」（中公新書）を読む機会がありました。同教授は執筆にあたりデトロイトにも頻繁に出張されたそうです。米国の能力主義と日本の平等主義がよく比較されますが、ホワイトカラーの職場と異なり、米国自動車産業のブルーカラーの労働現場を見ると、「同一労働・同一賃金」の原則が重視され、むしろ、日本の労働現場の方に能力主義・競争主義が機能しているというのは面白い指摘でした。また、日本企業の特徴とされる年功序列についても、米国の労働現場では、レイオフされる場合は勤続年数の短い労働者から、再雇用される際は勤続年数の長い労働者から行われるという年功序列主義が機能しているそうです。ホワイトカラーとブルーカラーの区別や役割がはっきりしている米国の労働形態。ホワイトカラーのみをもって日本と米国を単純に平等主義と能力主義、あるいは競争原理の有無で比較することの不正確さを考えさせる本でした。



第136話：タイガース対ヤンキース

8月28日、マッキノン・デトロイト副市長に招待頂き、今シーズン3回目のタイガース戦を観戦しました。ニューヨーク・ヤンキースとの一戦でした。同副市長の配慮で、試合前グラウンドに降ろさせてもらい、イチローの練習風景を身近に見させてもらいました。彼は、代打で登場しましたが三振に終わりました。ジーターは今季限りの引退を表明していますが、コメリカ・パークでの試合は今日が最後

で、9回表の最後の打席では相手チームにも関わらずスタンディング・オベーションでした。ジーターはミシガン州カラマズーで小さい頃を過ごし、当地にも深い思い出があるようです。前日の試合前には彼への表彰式も特別に行われました。試合は Yankees の黒田投手も前半力投しましたが、9回裏、マルティネスの2塁打、アヴィーラの決勝打で見事3対2でタイガースがサヨナラ勝ちを収めました。Yankees を地元に迎えた3連戦は2勝1敗。この調子で、カンザスシティ・ロヤルズを再び追い抜いて中地区首位でプレーオフを迎えてほしいと願っています。



第137話：デトロイト国際ジャズ・フェスティバル

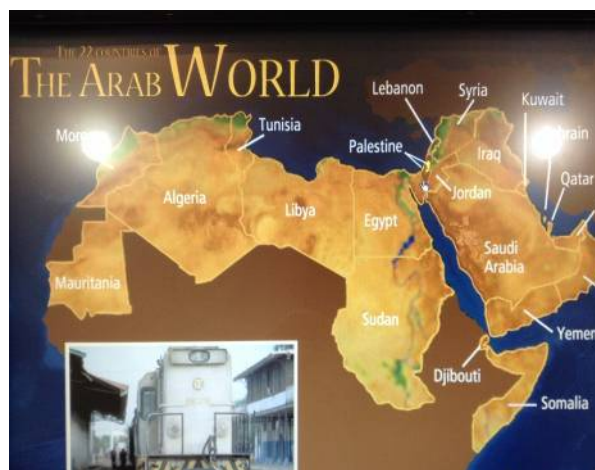
デトロイト国際ジャズ・フェスティバルが8月29日～9月1日のレーバー・デーの週末に開かれ、初日のオープニング・ナイトのパーティーと最初の演奏をダウンタウンのキャンパス・マーシャスの主会場で楽しみました。デトロイト国際ジャズ・フェスティバルは1980年に始まり、今年が35回目に当たります。市内ダウンタウンの複数の会場で開かれ、世界で最も規模の大きな無料ジャズ・フェスティバルとされています。現在は、2006年に設立された非営利団体であるデトロイト国際ジャズ・フェスティバル基金によって運営されています。以前には日本のジャズ・バンドも招待を受けて演奏したこともあるそうです。秋を感じさせる爽やかな涼風の吹く夜にデトロイト市内の屋外で聞くジャズは

なかなか風情があります。デトロイトには色々楽しめる行事や場所があります。皆さんも是非、デトロイトのダウンタウンに来て楽しんで下さい。



第138話：アラブ系アメリカ人博物館

8月30日、デトロイト郊外のディアボーンにあるアラブ系アメリカ人博物館を参観しました。米国全土には約350万人のアラブ系アメリカ人が住んでいると言われています。レバノン、エジプト、シリア、イラクから来た移民が主要な部分を構成しています。その中で、メトロ・デトロイト地域には40万人を超えるアラブ系アメリカ人が居住しており、米国最大のアラブ系人口を抱えています。特にディアボーンは人口の4割がアラブ系です。NY（37万人）、LA（30万人）、シカゴ（18万人）がこれに次ぎます。うち、約6割はキリスト教徒、25%がイスラム教徒だそうです。博物館には、アラブ世界を構成する各国の紹介、16世紀から始まったアラブ系移民の歴史、彼らの生活や活躍ぶり等が紹介されています。この博物館はアラブ系アメリカ人の歴史や文化を紹介する最初で今のところ唯一の博物館だそうです。



第139話：レイバー・デー

9月第一月曜日はレイバー・デーです。米国では連邦の祝日で、もともとは労働者のための祝日ですが、多くの米国人にとり夏の終わりを象徴する日でもあります。レイバー・デーの3連休は、夏休み最後の休日として旅行を楽しんだり、パレードが行われたり、また、バーベキューを家族や友人たちと楽しむのが通例です。子供たちにとっては、長い夏休みが終わり新しい学年が始まる季節でもあります。我々夫妻も米国人の友人宅に招かれ、バーベキューを楽しみながら、楽しかった夏にお別れを告げ、新しい季節秋を迎える心の準備を始めました。久しぶりにマシュマロを焼いてスモアを食べました。思えば昨年9月下旬に当地にやって来て間もなく1年が経過しようとしています。デトロイトの四季を一通り経験したことになります。とても充実した実りある1年でした。そして、新たに迎える1年はもっと意義のあるものにしていきたいと思う次第です。



第140話：上田埼玉県知事の来訪

9月4日、上田清司埼玉県知事一行が姉妹州のオハイオを訪問され、州都コロンバスでお迎えしました。その夜は地元日米協会幹部の参加も得て知事一行と懇談、翌日にはケーシック知事と会見され、私も同席させて頂きました。その他、埼玉県に縁のある日系企業や大学を訪問され、就職フェアや経済開発団体とも意見交換を行われ、4日～6日のオハイオ日程を精力的にこなされました。その後、デトロイト経由でアイオワ州デモインで開かれた日本・米国中西部会に赴かれました。上田知事は、毎年東京と中西部各地で交互に開催される中西部会には欠かさず出席頂いており、今回が連続して11回目の参加になります。知事自ら、この地域との絆を強化頂いていることは心強い限りです。



第141話：日本・米国中西部会

日本・米国中西部会第46回日米合同会議がアイオワ州デモインで9月7～9日にかけて開かれ、デトロイト総領事として出席してきました。日米の官民合わせて約300名の参加を得て有意義な意見交換とネットワーキングの機会を得ることができました。この会議には米中西部の内、9つの州が参加しており、南東部会とともに最も活発に行われている部会です。ジェームズ・トンプソン米側議長、茂木友三郎日本側議長(キッコーマン名誉会長)の議事の下、アイオワ、ミシガン、ネブラスカ、ミズーリ、インディアナ、ウイスコンシンンの州知事、埼玉県、山梨県の県知事、駐米大使、シカゴ総領事、各関係企業・政府・大学・団体の代表が参加され、「力強く持続可能な未来の構築に向けて」というテーマで活発な議論が展開されました。例えば、1年前、東京で開かれた前回会議に出席したのがデトロイト総領事として赴任直前の最初仕事でした。この1年、日本と中西部の関係の重要性を肌で実感した日々でした。



第142話：サウスフィールド市と日本

9月12日、デトロイトの郊外にあるサウスフィールド市のブレンダ・ローレンス市長他市の関係者を公邸に招待し、日本料理と日本酒で楽しい一時を過ごしました。サウスフィールドには、17の日系企業が投資しており、合わせて1200もの雇用を創出しています。市庁舎のロビーにはデンソーから寄贈された着物が大きく飾られています。日本企業の長年にわたる地元への貢献及び総領事館の役割につき市長から感謝のことばがありました。多様な住民によって構成されているサウスフィールドの更なる発展を祈ります。ちなみに、市長は、2001年に同市では初めての女性市長として就任されましたが、きたる11月の中間選挙では、ミシガン



州第14区から連邦下院議員選挙に立候補（民）されています。



第143話：「9. 11」と「3. 11」

「9. 11」から13年が経ちました。当日公邸の星条旗と日章旗は半旗にして改めて犠牲者を追悼しました。2001年9月11日、当時勤務していたワシントンの日本大使館執務室でCNNの生中継を見ながら茫然自失となったことを昨日のここのように思い起こします。そして、東日本大震災。9月13日、デトロイト市内の映画館で、「3. 11」で若い命を落とした米国人JETプログラム参加者テイラー・アンダーソンとモンティ・ディクソンの夢を描いたドキュメンタリー「Live Your Dream」の上映会がありました。3月のイースタン・ミシガン大学での上映会は第60話で紹介したとおりです。私にとり2回目の鑑賞となりますが、感動を新たにするとともに二人の遺志を継ぐことの重要性を再確認しました。今回も、監督のレゲー・ライフ氏、モンティの実姉のシェリー・フレデリクソン氏が、それぞれNY及びアラスカからわざわざ駆け付けて頂き、上映会終了後、観客との質疑応答に臨まれました。残念だったのは、場所が不便なせいか、参加者は30名足らずで小さな映画館にも関わらず空席も目立ちました。今後も、ミシガンやオハイオの主要な都市で上映会が行われる機会もあると思います。もっと多くの米国人、在留邦人に観てもらいたいと切に希望します。



第144話：米国のカントリー生活

9月14日の日曜日、自宅から北に45分程車で走ったミシガンのある町に住んでいる知人夫妻の自宅に招かれ楽しい秋の一時を過ごしました。お二人は共に退職後の第二の人生を楽しんでいます。隣の家が見えない田舎の広大な自宅の敷地には、森や池、野菜畑や果物の木、牛舎や鶏小屋、農機具等を保管する倉庫等が点在しています。七面鳥とともに、自宅で栽培されたトマトやニンジン、ジャガイモ、シソ、キュウリ、ミョウガといった新鮮な野菜を使った美味しい料理を頂き、自家製のパンやアップルパイを堪能しました。夕方、庭の芝生で薪で火を起こしマシュマロを焼いて、当地季節名物のアップル・サイダーとドーナツを楽しみながら、名残り惜しい楽しい秋の一日を過ごし帰路につきました。ちなみに、薪は裏の森の木を使い、器用なご主人は各種鉄の器具も鍛冶屋よろしく轆をつかって自分で作られています。おみやげに取りたての野菜をたくさん頂きました。自宅について早速そのうち枝豆を塩茹でにして、ビールとともに頂きました。美味でした。退職後の憧れの生活スタイルの一つを垣間見ました。



第145話：メキシコ・ナショナル・デー

9月16日、デトロイト市内のホテルでメキシコ領事館主催のメキシコ独立記念日204周年のナショナル・デー行事が行われ出席してきました。メキシコは日本とともにメトロ・デトロイトに（総）領事館を設置している7か国のひとつです。メキシコは、大使館とNYの国連代表部の他、なんと20の総領事館、24の領事館を米国内に置いています。ピュー・リサーチ・センターによれば、2012年現在、米国在住のメキシコ系人は3370万人、うち1140万人がメキシコ生まれの移民、残りの2230万人が米国生まれで全人口の11%を占めています。1970年には100万人に満たなかったメキシコ移民が現在1140万人に上っているのは急激な増加です。大使館・総領事館主催のナショナル・デー行事は通常レセプション形式で行われますが、今回は約200名の着席ディナーでした。総領事館の業務説明や、メキシコ人オペラ歌手の音楽映像鑑賞、メキシコの伝統的な歌や踊りのパフォーマンスも交え、予定時間を1時間以上も超過して終わりました。



第146話：ポーランド芸術センター

9月17日、帰宅の途次デトロイト市に周囲を囲まれたハムトラミクにあるポーランド芸術センターに立ち寄りました。ポーランド系は大都市を中心に全米に約1千万人が住んでいると言われており、例えばシカゴはポーランド以外では最大のポーランド語人口を抱えています。ミシガン州には約85万人のポーランド系米国人が住んでおり、ニューヨーク州、イリノイ州に次いで三番目です。我が総領事館の米国人スタッフにもいます。ハムトラミクには20世紀前半、ドッジの自動車プラントが設けられて以来、ポーランド系移民が増え、一時は市民の90%がポーランド系だったそうですが、最近では中東系や南アジア系住民におされて15%程度に留まっているようです。いずれにせよ、非常に国際色豊かな町です。そこにあるポーランド芸術センターにはポーランドやカトリックに関する各種物産や書籍が並べられており、文化講演やワークショップ等も時折開かれるそうです。1987年にはポーランド生まれのヨハネ・パウロ2世が訪米の際、この町にも立ち寄っています。店で働いていた青年(写真)のお兄さんは、今年の夏にJETに参加して訪日、今は石川県で英語教師の補佐として活躍していると聞きました。いろんなところで日本との関係があるものだと驚きました。近くにはポーランド料理店やベーカリー、カトリック教会等もあります。興味のある方は訪問して見てください。



第147話：オークランド郡と日本

デトロイト北部の郊外にあるオークランド郡のブルックス・パターソン郡長が、9月18日、当地領事団のために開いた年次レセプションに招待頂きました。同郡は多くの在留邦人が住んでいる地域で、郡内には昨年10月の時点で229の日本企業拠点があり、1万を超える雇用を創出しています。同地域では日本が最大の外国投資国です(2番目は独。最近、中国の投資も始まりつつあり、頻繁に相互訪問が行われています)。外国からの投資や外国人の生活に当たってとてもフレンドリーで便利なコミュニティーです。昨年秋、私が着任した直後に同郡長はわざわざ夕食会を開いて歓迎して頂きました。当日のレセプションはポンティアックという町にある巨大なミシガン・モーション・ピクチャー・スタジオで行われ、撮影スタジオの見学もさせてもらいました。2000人を雇用しているそうですが、デトロイト郊

外にこのように立派な映画撮影所があるとは知りませんでした。最近、ここでは「オズ はじまりの戦い」、「バットマンvsスーパーマン」や「トランスフォーマー/ロストエイジ」等が撮影されています。



第148話：赴任1周年

早いもので昨年9月20日にベルギーから直接当地に赴任して1年が経過しました。1年前には初めてのデトロイト、そしてほとんどこれまでなじみのなかった中西部での勤務ということで、総領事として大きな期待とともに一抹の不安も正直なところありましたが、期待は十分実現され、不安は全く不要でした。地元の米国人の温かいもてなしと日系企業や在留邦人の地元への貢献に支えられて非常に楽しく仕事をさせて頂いています。この1年デスク・ワークに留まらず、管轄地域をできる限り回るように努めました。ミシガン及びオハイオ両州政府をはじめ、各自治体、経済団体、各地の日米協会、日本人会、商工会、日本語補習校等各地の幅広い日米の関係者とお会いしました。数えてみるとオハイオには34回、メトロ・デトロイトを超えたミシガン各地には22回出張にでかけました。この間、訪問した日系企業は17社、大学は延べ27校、日本語補習校は延べ7校に上ります。両州を合わせるとほぼ日本の面積に匹敵します。車で往復12時間かけて日帰り出張したこともありました。しかし、まだまだ、十分管内を回り切れていません。2年目は、1年目の蓄積を元に、更に広く深くより意味のある活動を展開していきたいと存じますので、引き続きご支援をお願いします。

第149話：サギノー日本祭り

9月21日、デトロイトから北に車で1時間半くらいのところにあるミシガン州サギノー市の日本茶室・庭園で恒例の日本祭りが行われ、私も参加してきました。この行事は総領事館の文化事業の一環でもあり、地元当局、日本文化センター、日米企業、各種ボランティアとの協力により日本文化を通じて

地元との交流を図ることができました。茶道、華道、太鼓、剣道、柔術、合唱、書道、折紙、日本の遊び、日本料理、沖縄舞踊、阿波踊り等で盛り上がりました。残念だったのは途中激しい雨に見舞われたことです。サギノー市は徳島市と50年以上にわたる姉妹都市交流を続けており、この素晴らしい日本庭園と茶室もその姉妹交流の中から生まれたものです。当日は、デニス・ブラウニング市長、テッド・ホール日本文化センター理事長他地元関係者も多く参加して頂きました。また、ヨーコ・モスナー館長お疲れ様でした。ありがとうございました。余談になりますが、ホール理事長はヘビメタ・ロック・グループ「R i o t」のボーカルで、10月にはさいたまスーパーアリーナでのコンサートに出演予定とか。どおりでカッコよいと思いました。



第150話：ミシガンの自動車産業

9月23日、デトロイト市内ダウンタウンのコボー・センターでデトロイト商工会議所主催のミシガン自動車産業に関する大きな会議「2014 MICH auto サミット」が開かれ、招待を受けて参加しました。ご承知の通り、メトロ・デトロイトはビッグ・スリー（現在は世界の自動車産業の発展に伴いデトロイト・スリーという言い方が一般的になりました）の本社が置かれている場所です。2013年のミシガンの自動車生産は約250万台で米国一です。また、北米トップ100の自動車部品メーカーのうち63社がミシガンに本社を置いています。更に、ミシガンには自動車関連研究・開発（R&D）センターが375（うち外国企業が120）あります。ミシガンのR&Dビジネスの76%（89億ドル）が自動車

関連です。1964～2012年の約50年間に米国内で取得された自動車関連特許の30%近くがミシガンでとられています。これらの産業を支える人材養成としては、エンジニア専攻を持つ大学が14、大学院レベルはミシガン大学をはじめ4つあります。更に、ミシガンの優位性の一つとして地理及び交通網の発達があります。ミシガンから1日のドライブ（800キロメートル）で米国総人口の半分が住む地域に到達することができるということです。ここにいると、ものづくりを愛してやまない人々と日々接触する機会があり、日本人のものづくりへの情熱と相通じるものを感じます。そして、日系企業もミシガンの自動車産業を支えている重要な一部です。



第151話：外務大臣表彰

9月27日、公邸にてトシコ・シモウラ氏に対する岸田文雄外務大臣からの外務大臣表彰の授賞式を代わりに行わせて頂きました。外務大臣表彰は日本と諸外国との友好交流の促進に多大な貢献をなした個人及び団体に贈られるもので、今年度は全世界で88名、米国では10名が受賞しました。シモウラ氏は戦時中の日系収容所での生活という試練を経てミシガンでは日系米国人市民同盟（JACL）デトロイト支部会長として、また、お花では池坊流やイケバナ・インターナショナル当地支部で長く指導に当たられ、日本とミシガンとの友好親善や日米相互理解増進に尽くして来られました。当日は、約90名の日米の関係者が集まり、シモウラ氏の60年以上にわたる貢献を称え、受賞をお祝いしました。同氏は8月に米寿を迎えられましたが（第122話）、外務大臣表彰をこの記念すべき年にお贈りすることができ大変喜ばしく思います。末永くお元気で過ごして下さい。



第152話：タイガース地区優勝

9月28日、162試合目、シーズン最後の試合となるミネソタ・ツインズ戦。相手チームを地元アメリカ・パークに迎え、見事3対0で勝利して最後の最後でアメリカン・リーグ中地区の優勝を決めました。4年連続の地区優勝です。タイガースは今シーズンも最初から調子が良く、楽勝かと思われましたが、気がついてみると後半になって一時期カンザスシティ・ロイヤルズに首位を明け渡しました。なんとか再び首位を奪い返しましたが、27日の時点では、わずか1ゲームの差でした。最終戦でタイガースが破れ、ロイヤルズが勝つと首位決定戦が行われることとなり、ワイルド・カードに回る可能性もありましたが、最後の最後で自力優勝を決めてくれました。本当に嬉しい気分です。今シーズンは開幕直後の4月に1度、佳境に入った8月に2度、球場に行って応援しました。3度ともタイガースが勝利した試合です。この勢いで、プレーオフを勝ち抜き、リーグ優勝、そして30年振りのワールド・シリーズ制覇を期待したいものです。

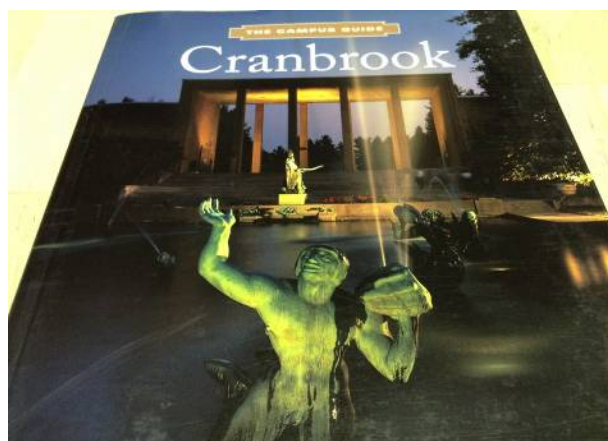
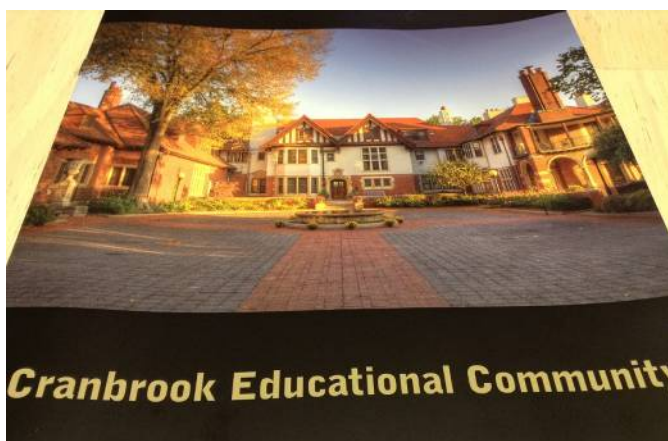
第153話：トヨタ訪問教授プログラム

9月29日、アナーバーにあるミシガン大学日本研究センターのトヨタ訪問教授プログラム（Toyota Visiting Professor 2014-15）で1年間同センターに研究に来られた中生勝美桜美林大学教授の歓迎レセプションがあり、私も駆けつけました。実は、中生先生とは古くからの知り合いで、最初にあったのは1980年代末の北京でした。二人ともまだ若く、先生は在香港日本総領事館専門調査員、私は在中国日本大使館の二等書記官でした。その後、たまにお会いする機会はありませんでしたが、こうして私の管轄地域のミシガンで再び二人の人生が交叉するとは不思議な縁です。現在、先生は原子力発電所の放射能汚染問題について日本（福島）と台湾（高山族の地域）の比較研究を行っているそうです。



第154話：クランブルック美術館

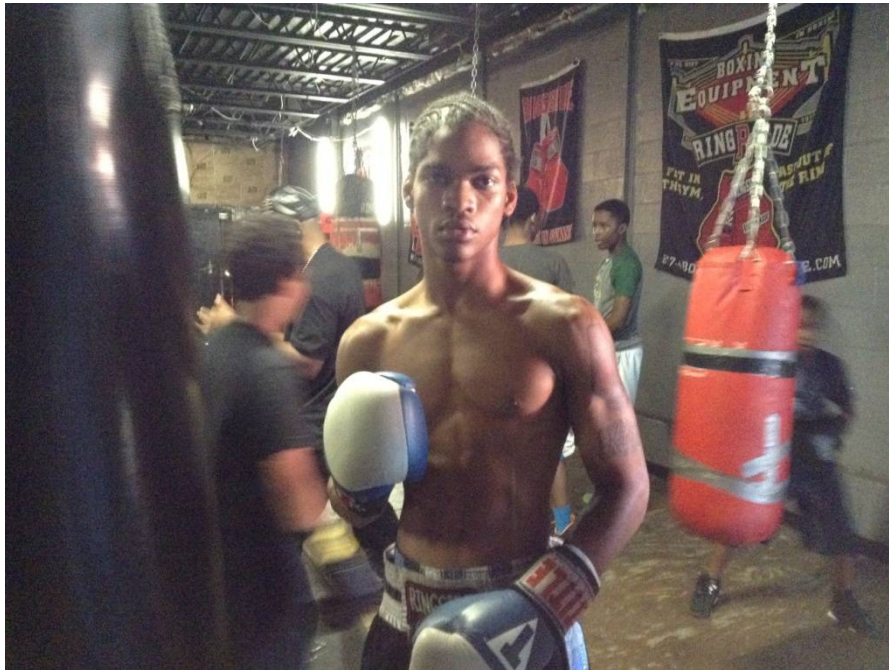
9月30日、自宅から歩いて5分程のところにあるクランブルック美術館を見学してきました。美術館がある広大な敷地はもともと「デトロイト・ニューズ」等各種新聞社を経営していたジョージ・ブース及びエレン・ブース夫妻が所有していた場所で、現在この広大な敷地には美術館の他、科学博物館、小中高校、美術大学院、寄宿舍、ブース夫妻の旧邸宅、大きな池、東洋庭園、野外彫刻等が緑に囲まれて配置されています。クランブルック教育区のDiMarco教育長、Wittkopp美術館長等の案内で美術館内の展示を鑑賞しました。美術館は1942年に設立され、この地域の現代美術の代表的な美術館となっています。また、美術大学院は米国内唯一の芸術に特化した大学院であり、日本人を含めた多くの外国人留学生も学んでいます。秋の紅葉が増す中、気軽な散策コースとして楽しめる場所でもあります。



第155話：デトロイト・ボクシング・ジム

デトロイトのダウントウンに、放課後子どもたちに授業の補習をしながら、ボクシングの練習を行うプログラム Downtown Boxing Gym Youth Programがあり、10月1日見学に行きました。約65名の生徒を受け入れています。人気が高く400名が順番待ちのリストに載っているそうです。ここではBooks Before Boxingの標語の通り、先ず勉強をきっちり行って初めてボクシングの練習ができます。子供たちはみな礼儀正しく、勉強やボクシングに没頭していました。デトロイトの子供たちに非行に走ることなく、補習やボクシングの訓練を通じて彼らの将来に希望を与えるプロジェクトです。Quicken Loans 他デトロイトに縁のある企業の寄付金によって成り立っており、授業料は無料です。マドンナやクリントン元大統領令嬢のチェルシーもここを訪れたことがあり、支援者となっているそうです。





第156話：領事団サッカー大会

当地に生活して早いもので四季が巡り、毎年恒例の行事も一通り体験しました。昨年赴任した直後に応援に行った領事団サッカー大会が今年も10月4日、5日の2日間にわたってデトロイト郊外のポンティアックにある室内サッカー・アリーナで開かれました。午前中、開幕式が開かれ、カナダ総領事、メキシコ領事等とともに出席しました。大会は、メキシコ領事館、ウェイン州立大学及び試合会場のサッカー・アリーナが主催で、今年も16チームが4グループに分かれ、先ず総当たり戦を行い、2日目に準々決勝、準決勝、三位決定戦、そして決勝戦が行われました。日本チームは、自動車関係の企業に務める駐在員が中心のレベルの高い精鋭部隊です。グループDでイタリア、ブラジル、メキシコの強豪と対戦し、3勝全勝で翌日の決勝リーグへ。準々決勝でルーマニアに勝利。残念ながら準決勝で米国にPK戦で敗れるも、見事3位決定戦で勝利しました。優勝は米国、準優勝はイタリアでした。皆さん、夜遅くまで本当にご苦労様でした。参加希望チームが多く、来年は参加国を拡大する予定だと聞きました。



第157話：ジャパン・フェスティバル2014（ノバイ）

10月5日、デトロイト郊外のノバイ高校の校舎を借りて、今年もジャパン・フェスティバルが盛大に開かれました。主催者であるデトロイト日本商工会（JBSD）、ウイメンズ・クラブ、協賛団体のミシガン・南西オンタリオ日米協会、滋賀県、協力団体のノバイ市、ノバイ教育学区の皆さん、事前準備及び当日の対応本当にお疲れ様でした。そして参加頂いた数千名の米国人、日本人、その他第三国の方々ありがとうございます。総領事館も、領事窓口の設置やJET写真展等で協力させて頂きました。日本文化に関する各種展示や催し物、デモンストレーションの他、本年は、特にカーレースNASCAR唯一の日本人ドライバー尾形明紀選手が、わざわざノース・カロライナからレースカーとともに駆けつけて下さり、屋外で車の展示・乗車、記念撮影、サイン会が実施されました。尾形選手は非常に礼儀正しいアスリートでした。在留邦人が3千名を超えるノバイにおいて、日本人コミュニティと地元との交流がこのような形で毎年継続されるのは非常に意義深いことです。



第158話：タイガースのシーズン終了

10月5日、ボルチモア・オリオールズをコメリカ・パークに迎えてのプレー・オフ第3戦。2敗した後がないタイガースでしたが、この日も調子が出ず2対1で3連敗し、2年振りのリーグ優勝を逸しました。1週間前に、リーグ戦最後の試合に勝って、劇的なアメリカン・リーグ中地区優勝を遂げたばかりでしたが、残念ながらもう一歩勢いが続きませんでした。デトロイトの野球シーズンも終わりました。来季の捲土重来を期したいと思います。

第159話：米国市民としての宣誓

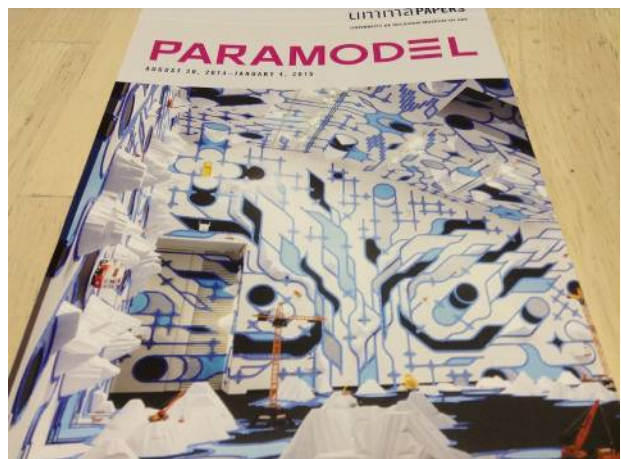
10月10日～12日、デトロイト郊外にあるサウス・フィールド市でインターナショナル・フェスティバルが開かれ、初日の10日、新たに米国市民となる人々の宣誓式が行われ、私も来賓として出席しました。サウス・フィールドはこれまでも報告した通り、国際色豊かなコミュニティで、在留邦人こそ多くありませんが、進出日系企業17社が1200の雇用を生み出しています。当日新たに米国市

民となった出席者は21カ国、約50名でした。アジアだけでもインド、パキスタン、バングラデシュ、中国、韓国、ベトナム、タイ、フィリピンと出身地は様々です。ちなみに、日本人はいませんでした。このような式に米国人以外としては唯一来賓として壇上に上がり、他の来賓とともに米国に帰化した市民に握手して「おめでとう」と述べるのは何か不思議な感じでしたが、米国社会の多様性と活力が再生産される現場を見たというのが率直な感想でしょうか。ある発言者によれば、ミシガン州には20万人のグリーン・カード保持者（市民予備軍）が居住しているそうです。



第160話：パラモデル展

今週は10月8日、9日、10日と三日連続してミシガン大学で行事がありました。最後の10日は、大学の美術館でのレセプションの後、キュレーターの及部さんに8月30日から来年1月4日の日程で展示されているパラモデルの作品を解説して頂きました。パラモデルは、京都市立芸術大学を卒業し、2001年から二人で活動を開始した林泰彦・中野裕介が2003年から使い始めたユニット名で、模型製作をテーマに作品を制作しています。ミシガン大学美術館での展示は、模型のレールとクレーン車、発泡スチロール等を展示室の六面全体を使って配置しています。現場でインスピレーションにしたがって即興で制作したと思いきや、数か月の緻密な設計の準備段階を経て、それに基づいて現場で1か月ほどかけて作品を制作したのだそうです。作品展示に当たっては、ミシガン大学日本研究センター、国際交流基金等から助成金が出ています。年初まで展示され、展示室内部からも、建物の外からも作品を楽しめるようになっていきますので、是非ご覧になって下さい。



第161話：アンティーク・ショー

10月10日、11日と地元のブルームフィールド・ヒルズの教会で毎年恒例の第51回骨董市が開

かれ、2日目に見に行きました。ベルギーに住んでいたころ、町の散策を兼ねて週末に骨董街や各地で開かれる定例の骨董市、更には特別のアンティーク・ショーによく出かけていました。欧州の骨董市に比べると歴史が新しいせいか、偏見かもしれませんが、米国の骨董品は品揃えがどうも新しく見えます。でも逆に言えば歴史が新しいだけに、骨董品に対する情熱は人一倍強いと言えるのかもしれませんね。今回の骨董市では目で楽しむだけで何も購入しませんでした。先般地方旅行した際に訪れた骨董屋でたまたま30年近く前にボストンで留学中に使っていたのと同じドイツ製の小さな真鍮の手巻き式目覚まし時計を見つけ、懐かしさがこみ上げ思わず25ドル出して買ってしまいました。



第162話：クリーブランド管弦楽団ガラ

10月11日、クリーブランド管弦楽団の理事のおひとりである日本人企業家のお招きで、デトロイトから片道3時間かけて同管弦楽団のガラ・コンサートを鑑賞してきました。Franz Welser-Most 指揮でチャイコフスキーの「胡桃割り人形」と「ピアノ・コンチェルト第1番」の演奏でした。後者では世界的に有名な中国人ピアニスト郎朗（ランラン）も出演し、聴衆からスタンディング・オベーションを何度も受けていました。いかにも中国人らしいヴィジュアルで技巧的な演奏でした。クリーブランド管弦楽団の演奏をこのホールで聴くのは2度目ですが、楽団もホールの音響も実に素晴らしく毎回感銘を受けます。このような立派な管弦楽団を維持するために財政面を含め多大な貢献されている地元の篤志家や市民に敬意を表します。



第163話：カナダ・ウインザー市

10月12日、デトロイト川を挟んでデトロイト市の対岸にあるカナダ・オンタリオ州のウインザーを日帰りで訪問して来ました。総領事館の事務所から毎日眺めている町ですが、赴任して1年余り、今日までなかなか訪れる機会がありませんでした。地形が入り組んでいて、ここはカナダの方が南に位置する面白い場所にあります。ウインザーは人口20万人の自動車産業都市でもあります。「バラの市」とも呼ばれています。通りの名前にかつてのフランスの影響が残っています。ここは、カナダでも犯罪率の最も低い町の一つに数えられています。対岸のデトロイトとはトンネルと橋で結ばれています。今回は往復ともトンネルを利用しました。全長1570メートル(5150フィート)、1930年に完成し、毎日平均1万3千台の車両が通過しています。アンバサダー橋の方は、1929年に開通、全長2300メートル(7500フィート)で、なんと民間の所有です。この橋だけで米加間の貿易額の25%を占めているそうです。現在、第二大橋の建設計画が進行中です。かつては、デトロイトからトンネルを抜けて昼にウインザーの中華料理店に飲茶を食べに行くビジネスマンもいたそうですが、「9・11」以降は国境の検問も厳しくなり、状況が変わりました。カジノでも有名ですが、その後、デトロイト市内にも3か所でわざわざ国境を越える必要がなくなりました。河岸の遊歩道から眺めるデトロイト・ダウンタウンの景観はとても素晴らしく感動しました。



第164話：カラマズー訪問

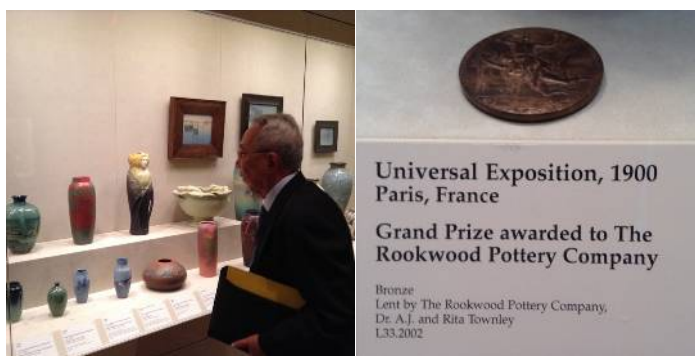
10月14日、2回目となるミシガン州カラマズー訪問を果たしました。今回は、州立ウェスタン・ミシガン大学(WMU)訪問が中心でした。まず、JUSTE(日本の中高校で英語を教える教師の研修プログラム)で半年の研修を行っている6名の先生方と懇談。米国人家庭にホームステイし、活きた英語の学習と米国生活で有意義に過ごされていました。昼は、ダン学長他日本研究者との昼食をとりながら意見交換。日本人留学生は30名程度ですが、中国人学生は約300名で、ここでも如何に日本からの留学生を増やすかを含め日本との関係強化が一つ的话题となりました。午後は、1904～05年に永井荷風がカラマズー・カレッジに留学していた際、住んでいた下宿先の旧居訪問、そして、最後に大学で「日米関係」をテーマに講演を行いました。カラマズー市は人口約7万人。沼津市とは1963年に姉妹都市提携をしています。WMUは、1903年に師範学校として設立され、現在、学生数約2万5千名の州立総合大学です。中世ヨーロッパ研究のメッカとしても有名で、毎年同大学で国際会議が

開かれています。また、慶応大学とは50年以上にわたる学術・学生交流が続いています。慶応大学から毎年1名留学生が派遣されていますが、私の友人と大学同級生の御嬢さんの計2名がこのプログラムでWMUに派遣されました。個人的にも縁のある大学です。



第165話：白山谷喜太郎

10月16日、シンシナティ出張の折に、地元で1950年代以来、一時期の帰国期間を挟んでずっと何十年も現地で生活されている田中欣二日本研究センター所長ご夫妻の案内で、シンシナティ美術館に展示されてある陶芸家白山谷喜太郎（しらやまだにきたろう）（1862－1948）の作品や資料を説明頂くとともに、彼が当時住んでいたアパートや工房（現在はレストラン）を見学させて頂きました。白山谷は、1887年（明治20年）に渡米し、シンシナティのルックウッド製陶会社に勤務、同社作品の万博での受賞にも貢献し、同社の名前を有名にしました。生涯独身でシンシナティで一生を終えました。最近のオークションでは彼の作品が約35万ドルで競売されたそうです。日本ではほとんど知られておらず、田中所長の外務省外交史料館等での調査により、旅券記録から石川県



士族と出身が記されていることを突き止められましたが、北陸での調査でもそれ以上の情報はまだ得られていないそうです。彼は、おそらくシンシナティに初めて住んだ日本人ではないかと思います。その日本人がこのような形で地元貢献していたことは同じ日本人として誇りです。

第166話：グレイター・シンシナティ日米協会ガラ・ディナー

1年前にデトロイトに着任して1ヶ月経過した頃に、初めてシンシナティを訪問し、日米協会の設立25周年ガラ・ディナーにゲストの佐々江駐米大使とともに出席したのがついこの間のような気がします。もう1年経ちました。そして10月16日には、2回目のガラ・ディナーに出席するため、片道4時間半の日帰りでシンシナティにやってきました。この間、オハイオには計36回、うち、シンシナティは5回訪問しました。オハイオ、ケンタッキー、インディアナのグレイター・シンシナティ在住の日米関係者を中心に約200名が参加し、盛大に行事が行われました。ちなみに、私の管轄のオハイオ及びミシガンには、セントラル・オハイオ、ミシガン・南西オンタリオと計3つの日米協会があります。私からは、この1年間の日本とオハイオ、特にシンシナティとの関係の進展ぶりにつき話をさせて頂きました。名誉会長の一人であるタフト元知事（タフト大統領の曾孫）もデイトンからわざわざ駆けつけて頂きました。それから、ケンタッキーの本社のあるTEMA*の永田社長兼CEOもご出席下さいました。ウェブ会長他日米協会関係者の皆様、本当に楽しい一時をありがとうございました。

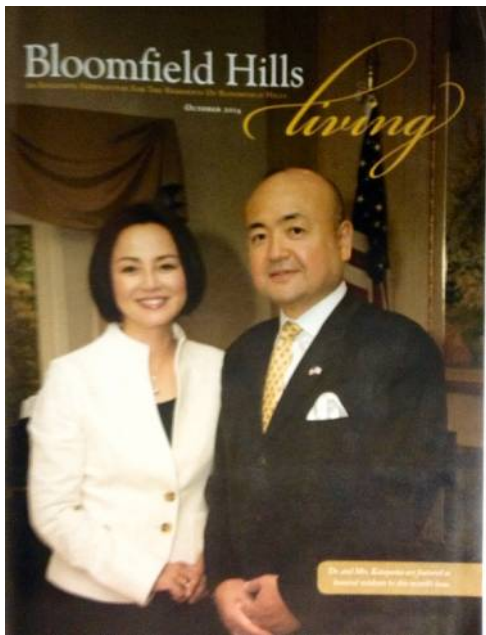
*Toyota Motor Engineering and Manufacturing North America, Inc.



第167話：地元コミュニティー誌の表紙を飾る！

総領事公邸は、デトロイト郊外のブルームフィールド・ヒルズにあります。先日、同市のハーディ市長ご夫妻他市関係者を公邸に招待した際に、地元コミュニティー誌で日本総領事館や日米交流のことを紹介したいとの提案があったので喜んでお受けしました。その後、書面インタビューや写真撮影があったので、どの程度載せてくれるのかと期待して待っていたら、何と10月号の表紙を飾っているではありませんか！ちょっと恥ずかしかったのですが、日本がこの地域との関係をいかに重視しているか、また、経済活動、文化・人的交流活動等を通じて日本とミシガン、日本と米国との関係の発展にどれほど尽力

しているかを理解してもらう上で多少なりとも役立てば幸甚です。



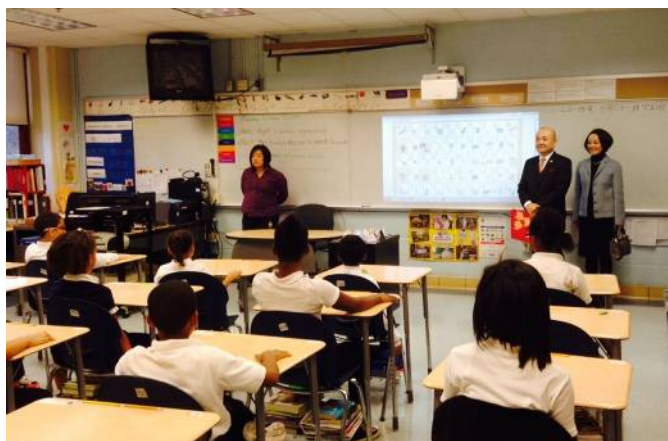
第168話：ETJプログラム

10月18日、デトロイトりんご会補習校のオープン・ハウスで、この夏、ETJ(Educator To Japan)プログラムで日本を2週間訪問して研修されたメトロ・デトロイトの4名の米国人教育関係者からの報告会がありました。ホームステイ先での日本文化体験、ホスト・ファミリーとの暖かい触れ合い、日本料理、カラオケ、日本の学校での生徒たちの礼儀正しさや給食制度、生徒たちによる毎日の校舎内清掃、街の清潔さ、世界最大の魚市場築地でのマグロの競り、京都の社寺参観、広島での原爆に対する複雑な思い等々新鮮で驚きの体験をされ、一生心の中に深い思い出として残る「日本」との出会いを5名(当日1名が病気のため欠席)がそれぞれにされたことがひしひしと伝わり、とても暖かい気持ちになりました。日本の子供たちを受け入れ、熱心に教育・指導頂いている地元の学校の米国人教師にこのように有意義な訪日の機会を提供頂いている、JBSD(デトロイト日本商工会議所)基金、デトロイトりんご会補習校、関連企業の皆様に敬意を表するとともに、このような日米の草の根で築き上げられた人間関係を、総領事館としても最大限側面支援しフォローアップしたいと思っております。是非今後情報を共有頂ければと思います。



第169話：FLICS訪問

デトロイト市内に日本語のイマージョン教育を行っている公立学校FLICS（Foreign Language Immersion and Cultural Studies School）があります。ミシガン州内で3つある日本語イマージョン教育の学校の一つです。10月21日、同学校を訪問しTodd Losie 校長や保護者代表の歓迎を受けながら、幼稚園から中学校の各教室で行われていた日本語授業風景を参観しました。子供たちは、言葉だけでなく日本の礼儀作法も学びます。彼らの中には、日本と米国の青少年相互交流事業であるKAKEHASHI Projectにて訪日した生徒もいました。小さい頃から、日本語や日本文化に身近に接している米国の若者がいることは、将来彼らが直接日本と関わりを持つか否かは別として、日本にとっても大きな財産だと思います。財政面ではいろいろ苦労もあるでしょうし、最近是中国語の普及に日本語が圧され気味な面もなきにしもあらずですが、総領事館としても彼らの日本に対する関心を維持するため、参考となる資料の提供や日本紹介事業等をFLICSに対してより積極的におこなっていきたいと思います。なお、ここでは、日本語の他、中国語、フランス語、スペイン語のイマージョン教育が行われています。



第170話：文化交流使 林英哲氏来たる

10月26日、オハイオ州ダブリンに文化庁から「文化交流使」として林英哲氏（和太鼓演奏者）が派遣され、2泊3日の日程でワークショップがデイビス中学校で行われました。私は、出張の都合で残念ながらワークショップには参加できませんでしたが、初日の歓迎会に駆け付け歓迎の挨拶をしました。今回、林英哲氏は、トリニダード・トバゴ、キューバ、米国各地を巡回する中でダブリンにも立ち寄ら

れました。文化庁の他、国際交流基金からも支援を頂いています。林英哲氏は、実は、ダブリンとは深い関係にあり、10年ほど前に数回ワークショップのために来られ、その活動がきっかけで、2004年に「ダブリン太鼓」が20名の生徒と1名の熱心な先生によって設立されました。それが、10年を経過して100名近くに大きく花開き発展を続けています。太鼓を練習することで、子供たちに熱中できる新しい対象を提供するとともに、日本文化紹介、日本ファン増加にも大きく貢献しています。林英哲氏と私は、同じ広島県出身です。また、2005年に日韓国交正常化40周年を記念して「日韓友情年」の交流事業を展開した際に、林英哲氏にも大阪や東京での音楽祭に出演頂きましたが、その際、私は外務省の文化交流課長をしていました。再び、ダブリンで接点を持つことができ光栄です。今後とも林英哲氏には、太鼓の指導や演奏を通じ、国際的な文化交流分野でのご活躍をお願いします。



第171話：フリーア・ギャラリー

ワシントン出張中のわずかな空き時間を利用して、フリーア・ギャラリーを訪問しました。フリーアはもともとデトロイトのビジネスマンで、日本美術を含め趣味で世界の美術品を蒐集していましたが、遺言でコレクションはすべてワシントンに持って行かれ、デトロイトのフリーア・ハウスには残念ながら残っていません。有名なウィスラーのピーコック・ルームもワシントンにあります。彼は日本美術を2千点以上蒐集していたそうです。でもこうして彼のコレクションがワシントン



で世界の人々の目に触れることは、結局は良かったのかもしれません。



第172話：LET'S GO BLUE

11月1日、ミシガン・スタジアムで大学アメリカン・フットボールの試合を初めて観戦しました。このスタジアムはフットボール会場としては最大規模で、毎回10万人を超える観客を動員しています。大学の所在するアナーバー市人口に匹敵する観客収容能力を持つとは驚きです。ミシガン大学理事のご招待を受け、先ず、会場横のクライスラー・アリーナ（バスケット・ボール会場）内で行われたテール・ゲート・



パーティーで昼食をとりました。昼食時やハーフタイムではシュリセル学長、ディンゲル民主党下院議員候補、大学理事や教授等様々な関係者と立ち話することができ、ミシガンの社交の場所としても絶好の機会でした。ミシガン大学オルバリンズの宿敵と言えば隣州のオハイオ州立大学バックアイズ。シーズン最後に組まれ、日本で言えば六大学野球の早慶戦というところでしょうか。州内ではミシガン州立大学スパルタンズがライバルですが、最近は分が悪く今シーズンも負けを喫しました。それから、これ



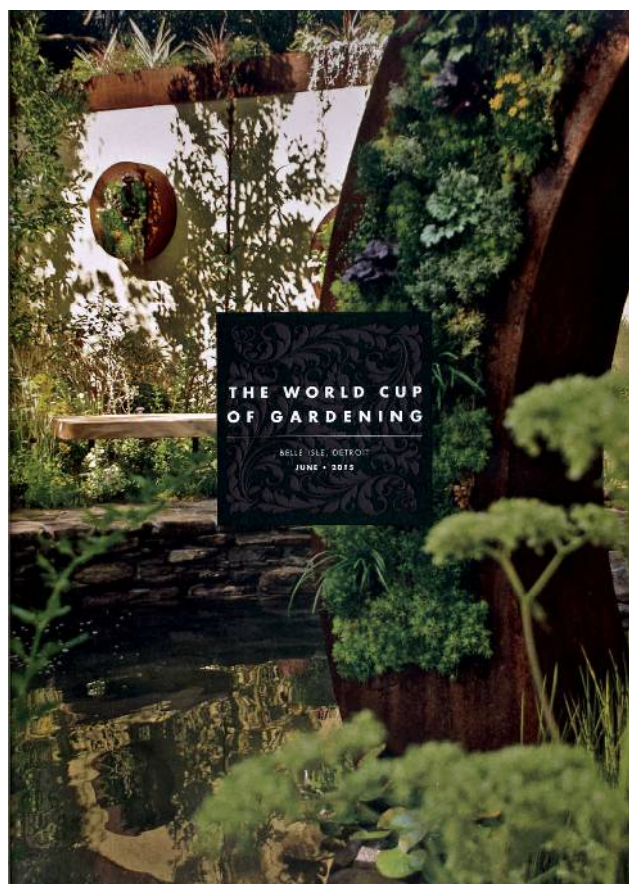
もお隣のインディアナ州ノートルダム大学とは通算勝利数や勝率で1、2位を争っています。オルバリンズは、大学スポーツのカンファレンスの一つであるビッグ・テン（といっても現在は14大学が加盟）に属しています。残念ながら、今シーズンは余り調子が良くなく、これまで3勝5敗（ビッグ・テン内では1勝3敗）で、今試合前日には大学のスポーツ・ディレクターが辞任するという騒ぎもあ

りましたが、当日は、インディアナ大学を相手に34対10で見事勝利を収めました。零度に近い寒空の中、青と黄で応援した甲斐がありました。

第173話：ガーデニングのワールドカップ

来年6月にデトロイト市のデトロイト川に浮かぶ島ベル・アイルで、ガーデニングのワールドカップ”The World Cup of Gardening”が1週間ほどの日程で開かれます。11月4日、実行委員長であり米国を代表する景観デザイナーでもあるジョン・カレン（John Cullen）氏及びマイク・マクレランド（Mike McClelland）氏が総領事館を訪ねて来られ、来年の計画についてお伺いしました。世界10カ国から著名な景観デザイナーを招待するそうですが、日本からは長崎市出身の石原和幸氏が参加予定だそうです。カレン委員長は何度も訪日し、石原氏とも親しくされています。石原氏はガーデニングの本場英国のフラワー・ショーで3年連続金賞を受賞されています。World Cup of Gardeningの機会に、当地日本人コミュニティーも参加した文化交流行事ができれば、イベントを更に盛り上げることができると思います。日本企業の応援も頂きながら、総領事館として今回の企画を側面支援していきたいと思います。

The World Cup of Gardening -Belle Isle, Detroit-: <http://worldcupofgardening.com/>



第 174 話：日系企業のデトロイト美術館への寄附

デトロイト市の破産手続の一環としてデトロイト美術館の貴重なコレクションを守るために「グランド・バーゲン」という枠組で美術館自身が 1 億ドルの資金を集めることが求められていました。米国企業や財団からかなりの額を集めることができましたが、それでも多額であるがゆえ、目標に達していなかったのですが、8 月にトヨタが、そして 11 月上旬にデンソー、アイシンをはじめ日系企業 21 社が、併せて 320 万ドル近くの寄附をコミットしました（下記リンクをご参照ください）。早速地元紙の 1 面に報じられる等反響を呼んでいます。そして、寄附の一部は同美術館内の日本コレクション・コーナー新設のための資金にも活用される予定です。メトロ・デトロイトには多くの日系企業及び在留邦人が集中していますが、実はデトロイト市内にはほとんど日系企業も進出しておらず、在留邦人も数える程です。しかし、この地域に住むコミュニティー・メンバーとして、単に経済活動のみならず、このような社会貢献活動を通じて日系企業が地元の貴重な遺産を守り、共に再興に向かって力強く協力の手を差し伸べて頂いているのは、総領事としてとても誇りに思います。関係企業の方々に改めて深く感謝します。10 年後、20 年後の復活を遂げたデトロイトの姿を皆様方と楽しみにしたいと思います。

ご参考：

デトロイト美術館プレスリリース（英語のみ）

<http://www.dia.org/news/1685/Japan-Business-Society-of-Detroit-Members-pledge-more-than-%242-Million-for-Detroit-Institute-of-Arts%e2%80%99-Grand-Bargain-Commitment%2c-Japanese-Gallery-at-the-Museum.aspx>

関連記事：

・デトロイトフリープレス Web 版（英語のみ）

<http://www.freep.com/story/money/business/columnists/tom-walsh/2014/11/06/grand-bargain-japanese-auto-suppliers/18566329/>

・デトロイトニュース Web 版（英語のみ）

<http://www.detroitnews.com/story/news/local/wayne-county/2014/11/06/japanese-businesses-back-detroits-bankruptcy-deal/18582541/>

第 175 話：ノバイ市の新しいシティー・マネジャー

11 月 7 日、デトロイトの郊外にあるノバイ市に 9 月中旬着任したピーター・オーガー（Peter AUGER）シティー・マネジャーを訪ね挨拶しました。同市市長はボブ・ガット氏で、最近、訪日されましたが、シティー・マネジャーはまだ訪日歴がなく、是非早期に訪日を実現してほしいものです。同市は、シティー・マネジャー制を採用しており、日々の実質的な市政運営はシティー・マネジャーが行っています。同氏は、以前、郊外の別の市（オーバン・ヒルズ）のシティー・マネジャーを 6 年間務めていました。ノバイ市には在留邦人が 3200 名近く住み、当館管轄のミシガン及びオハイオ両州の中では最大の在留邦人居住地域です。同市にある日本語補習校は生徒数全米 3 番目の規模、日系企業の拠点数は 80 を越え、

約1500の雇用をもたらしています。また、毎年10月に日本祭りが約3000人の参加者を集め盛大に行われています。公共図書館には、日本語書籍コーナーも設けられています。以上のことから、私も着任以来、市長、警察署長、教育長、図書館長等ノバイ市関係者との繋がり強化に努めています。先方より、ノバイ市の各種行事や活動につき、さらに広く在留邦人社会にタイムリーに伝えていきたいとの要望があり、今後、総領事館としても情報共有につきお手伝いすることとしました。公共図書館を活用した共催文化行事も展開していきたいと思っています。



第176話：デトロイト再建計画案を連邦判事承認

11月7日、スティーブン・ローズ連邦判事がデトロイト再建計画案を承認する意向を表明し、破産手続を開始して以来、16か月足らずで一つの山を越しました。これにより、180億ドルと言われる市の負債の内、約70億ドルが免除され、向こう10年に亘り17億ドルを公共サービスに新たに投入することができるようになります。退職一般公務員は、年金の4.5%削減及び物価スライドの廃止、医療保険の負担増を受け入れました。主要な債権者である保険会社は14%の償還率を受け入れました。DIA（デトロイト美術館）のグランド・バーゲンでは、日系企業も20数社が計約320万ドルの寄付をコミットし、



（写真：コールマン・A・ヤング・デトロイト市庁舎横に建つ同市の

シンボルとも言える全長7.9メートルの銅像

“スピリット オブ デトロイト”）

大きな貢献をしました。既に、路面電車の敷設やアイスホッケーチーム「レッドウイングス」の新たなアリーナ・コンプレックスの建設も始まり、故障中の街灯の取り換え、警察の到着時間の短縮、廃屋の処理等着実に復興に向かってデトロイトは進んでいます。

第177話：J E T帰国者のためのネットワーク・レセプション

11月8日、総領事公邸においてJ E Tプログラムで日本に滞在し、今夏帰国した関係者のためのネットワーク・レセプションを開きました。J E Tは Japan Exchange and Teaching Program のことで、米国をはじめ世界の若者たちを日本に招き1～5年の期間、各地の小学校や中学校で英語教師のアシスタントをしたり、地方自治体の国際交流のお手伝いをしてもらう交流事業です。1987年以来、既に6万人の若者がこのプログラムで訪日し、その半数は米国人です。今回のレセプションでは当館管轄地域のミシガン及びオハイオ両州から派遣され今年戻ってきたJ E T帰国者の他、彼らを熱心に教育頂いた各地の大学日本語科や高校の先生、J E T同窓会、J B S D（デトロイト日本商工会）、東日本大震災で犠牲になったJ E T関係者を記念して設けられたプログラムで訪日した高校生、そして、J U S T E（日本人若手英語教員米国派遣事業）にて西ミシガン大学で研修中の中学校の先生、総領事館員（現地スタッフの中にもJ E T帰国者が少なからずいます）等約60名が集まりました。ちなみに、今年夏には、この地域から新たに62名のJ E T参加者を日本に送ったところです。彼らは、日本で一生の友人と思い出に巡り合い、日米交流を草の根で今後ともしっかり支えてくれるものと信じています。



第178話：フランケンムース

ミシガン州デトロイトから北へ車で約1時間半のところにドイツ村フランケンムースがあります。11月9日、寒風荒ぶ中、1年数か月ぶりに再訪しました。そもそもこの地域の米国人の先祖にはドイツ系が多いのですが、ここは、ミュンヘンを州都とするドイツ南東部の州バイエルン地方の村を再現し

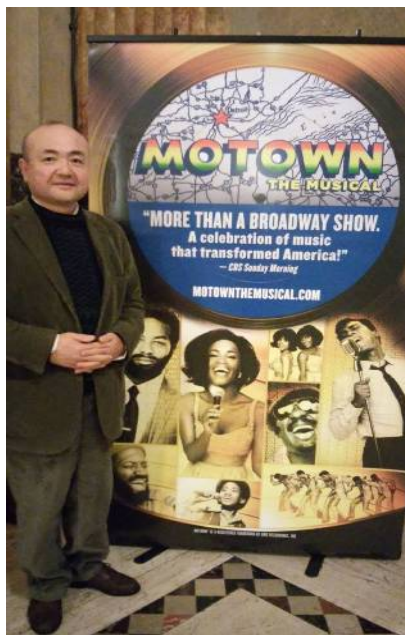
たものでオクトーバー・フェストやバイエルン（ババリア）祭り等には特に賑わいを見せています。昼食は、街中のレストランで伝統的なチキンとポテトの料理を楽しみました。近くに、ブロナーズ・クリスマス・ワンダーランドというクリスマス・グッズの店があります。前任地のヨーロッパでは、11月下旬から12月にかけて、風物詩のクリスマス・マーケットが各地で設けられ、ドイツではニュールンベルグやローテンブルグのクリスマス・マーケットも楽しみました。しかし、年中開店している常設のクリスマス商品専門店としては、おそらく世界最大規模ではないでしょうか。既にクリスマス・モードに入りつつあるせいか、広い駐車場もスペースを見つけるのが大変なくらい、来客で賑わっていました。年の瀬が近づきつつあることを感じました。



第179話： モータウン：ザ・ミュージカル

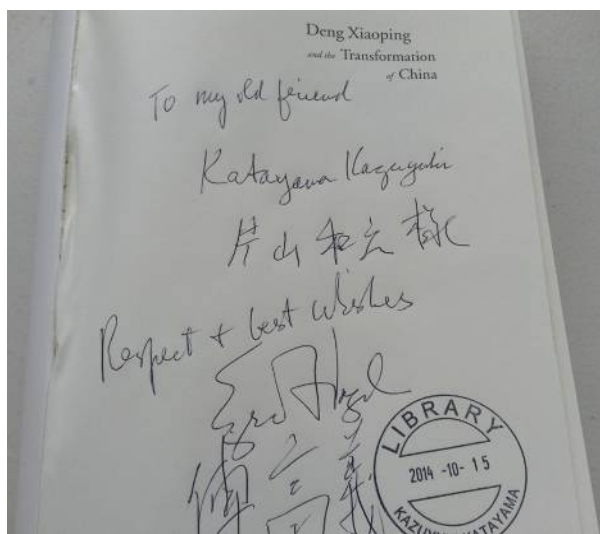
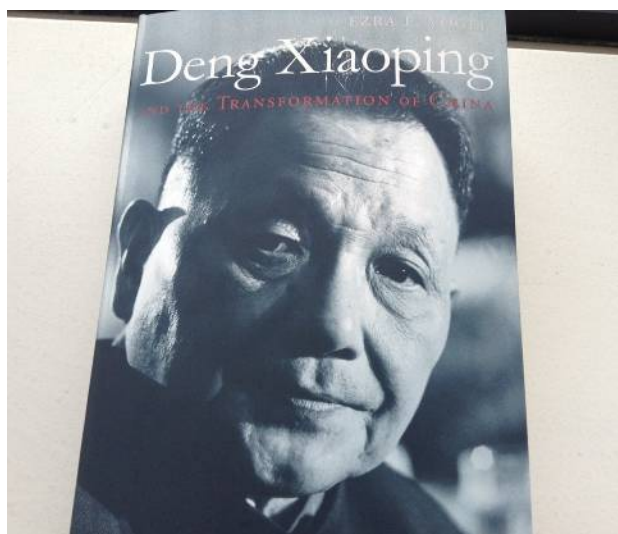
11月11日の「退役軍人の日」の夜、デトロイト市内にあるフィッシャー劇場に行き、人気のミュージカル「モータウン：ザ・ミュージカル」を鑑賞しました。1959年にデトロイトにモータウン・レコードを設立し、ダイアナ・ロス、スプリームス、テンプテーションズ、コモドアーズ、スティーヴィー・ワンダー、ジャクソン・ファイブ等を世に送った音楽プロデューサーであるベリー・ゴードー

の自伝「To Be Loved」（１９９４）に基づいて作られたミュージカルです。２０１３年にNYブロードウェイで上演されて好評を博し、今年４月から全国ツアーが開始されました。デトロイトでは、ミュージカルに参加するためのオーディションに長蛇の列ができ、地元紙を飾るニュースにもなりました。モータウン・レコードにゆかりのある６０曲程の歌を楽しむことができました。観客はみんな懐かしさとデトロイト再興への希望を込めてミュージカルに酔いしれ、一緒に歌う人もいました。デトロイトを感じた楽しい夜でした。



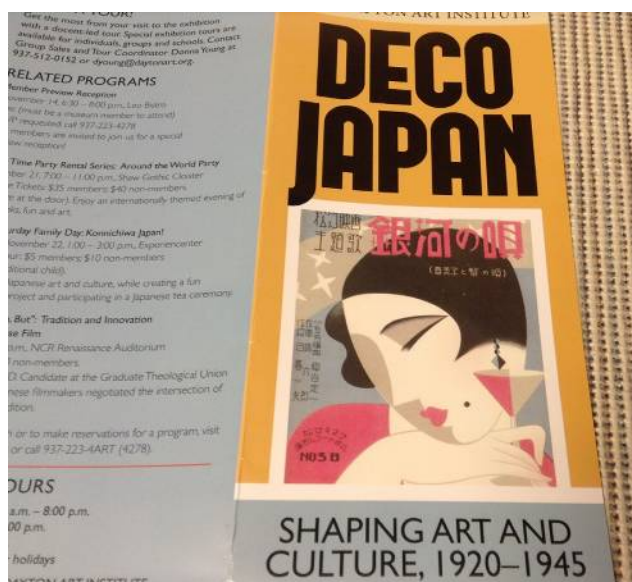
第１８０話：恩師との再会

１１月１２日、アナーバーにあるミシガン大学に出張に来られたエズラ・ヴォーゲル・ハーバード大学名誉教授を宿泊ホテルに訪ね、朝食をとりながら思い出話や将来の話を楽しくさせて頂きました。１３年ぶりの再会です。以前にも少し紹介しましたが、ヴォーゲル教授は私が１９８６－７年にハーバード大学院に留学していた時の指導教授であり、また、それ以前の日本での大学時代、同教授の著書「ジャパン・アズＮＯ１」がベストセラーになり、一躍同教授の名前が一般日本人にも知れ渡ることとなりました。同教授は、当館の管轄地域であるオハイオ州デラウェア出身でハーバードの博士課程に行く前には、地元のウエスリアン大学で学ばれていました。こうして、再びこの地で先生と接点を持つことができ大変光栄でした。先生は、１９３０年生まれで今年８４歳になられますが、非常にお元気で学問への情熱も益々盛んで頭の下がる思いです。ウエスリアン大学に寄附をされ毎年記念講演に行かれているとのことで、次回は是非その際にお迎えしたいと思います。



第181話：デコ・ジャパン展

11月12日、オハイオ州デイトンにあるデイトン美術館で開催された「デコ・ジャパン」(DECO JAPAN)展のレセプション及び内覧会に出席しました。1920年代～40年代に流行したアール・デコ芸術ですが、今回の特別展は日本におけるアール・デコ芸術に焦点を当て、絵画、ポスター、陶器、工芸品等約200点を集めたものです。アール・デコが日本に与えた影響、また、逆に日本がアール・デコに与えた影響を振り返る上で絶好の機会かもしれません。私は、前の赴任地のベルギー・ブリュッセルで1930年代につくられたアール・デコ建築のアパートに3年間住んでいましたので、特に関心を持って出かけました。私も、美術館と協力しながら、1000本の桜植樹活動を展開しているデイトン在住のアレックス・ハラ氏やボブ・タフト元知事とも連携して今回のデコ・ジャパン展の実現を応援してきました。支援を頂いた各企業の皆さん、地元市民の方々に改めて感謝致します。当地に着任してこれまでの1年間で、トリード、クリーブランド、デトロイトと各地で日本美術の特別展が開催され、今回はデイトン、そして来年2月からはシンシナティでも日本美術展が開催されます。デコ・ジャパン展は、11月15日～1月25日まで一般公開予定です。皆さん、是非この機会に足を運んで下さい。



第182話：ミシガン大学ビジネス・スクール Global MBA プログラム

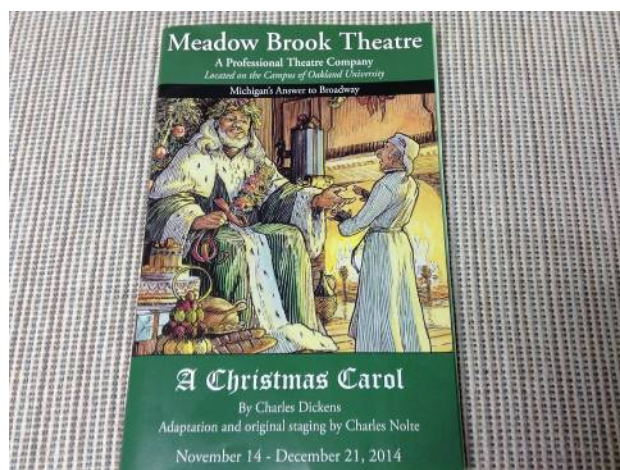
11月14日、ガラガー・ミシガン大学中国研究センター所長の招きで同センターにおいて、日中関係について講演を行いました。その際、日本企業から同大学ビジネス・スクールに派遣されている留学生何名かとお会いしました。聞けば Global MBA プログラムに参加されているとか。同プログラムは1年半の MBA コースで、アジアからの企業派遣留学生向けプログラムです。現在の学生の国・地域別構成は、日本16名、韓国11名、タイ6名、台湾6名、インドネシア5名、インド1名、中国1名の計46名だそうです。プログラムの一環として今年2～5月にかけて、韓国、日本及び中国でそれぞれ1か月ずつの研修も行ったそうです。米国、そしてアジアのビジネスを学び、社会を学び、世界中に人脈のネットワークを構築する上で、とても興味深いコースだと思います。日本人留学生の存在感が想定的に

小さくなっている中で、多くの日本人企業留学生在が活躍されていることには勇気づけられます。プログラム参加者とじっくり話をする機会をいずれ持ちたいと思います。



第183話：クリスマス・キャロル

11月15日、デトロイト北方のロチェスターにあるオークランド大学メドー・ブルック劇場で、ひと月早いクリスマス・キャロルを楽しんできました。19世紀英国の有名な作家チャールズ・ディケンズの作品「クリスマス・キャロル」を基にした舞台演劇ですが、開幕30分前から7名の役者によるクリスマス・キャロルの歌が何曲も披露され、演劇を見る前から鈴を持った観客とクリスマス気分で盛り上がっていました。冷酷で守銭奴の主人公スクルージが過去、現在、そして未来と向き合う中で新しい生き方を見つけ出す物語です。クリスマス・シーズンになると誰も心を入れ替え、他人に親切になろうとしますが、この舞台劇を見ながら私も日頃の自分本位な生き方を反省した次第です。



第184話：サギノーとサイモン&ガーファンクル

11月16日、デトロイト・シンフォニー・オーケストラ（DSO）によるサイモン&ガーファンクルの作品のコンサートをDSOのオーケストラ・ホールに聞きに行きました。本人たちではありませんが、二人の歌手も登場してオーケストラをバックにギターを弾きながら有名な曲を歌っていました。サイモン&ガーファンクルの歌は私の学生時代の好きな音楽でしたが、最近、ミシガンそして州内にある都市サギノーが「America」の歌詞の中で歌われていることを知りました。この歌は、ポール・サイモンが、恋人と米国内をグレイハウンドやヒッチハイクで回り、米国探し、そして自分探しの旅行をした経験に基づいているそうです。実際、サイモンは、1966年にサギノーに滞在し、この歌を書きあげたとか。その後、1972年にレコードが発表されました。歌詞の中に、”Michigan seems like a dream to me now” とか、”It took me four days to hitch-hike from Saginaw” という箇所があります。観客は1970年前後に青春時代を過ごした人たちが中心でした。



第185話：天皇誕生日レセプション

当地に着任して2回目となるナショナルデー行事である天皇誕生日レセプションを、11月19日、総領事公邸で行いました。1ヶ月ほど早いですが、年末の休暇シーズン及びミシガンの厳しい冬を避けるためのやむを得ない日程でした。しかしながら、全米50州すべてで気温が零下を記録する中、当日はメトロ・デトロイトも最低気温が－5℃に下がり、昼頃から雪が降り積もりました。出席者にとっては公邸にたどり着くのも大変だったと思います。それでも、183名の方々に出席頂きました。本当にありがとうございます。過去3回続けて外の施設で行ったので、公邸で行うのは久しぶりです。手狭で例年にくらべ人数を少し絞る必要があったのは残念でしたが、十分楽しんで頂けたのではなかと思います。日本企業や日本人コミュニティーのミシガン及びオハイオへのこの一年の多大な貢献、そして総領事館の活動を米国の友人たちに説明することができました。天皇陛下のご公務の様子や日本の各種広報

資料・映像の提供も行いました。公邸で行うことにより、公邸料理人の作る料理や日本料理のケータリ
ングを自由に活用することができ、日本酒や日本のビール、ウイスキーとともに日本の飲食文化を宣伝
する機会にもなりました。81歳をお迎えになられる天皇陛下のご長寿及び日本とミシガン・オハイオ
両州の更なる関係発展を出席者全員で祈念した一夜でした。



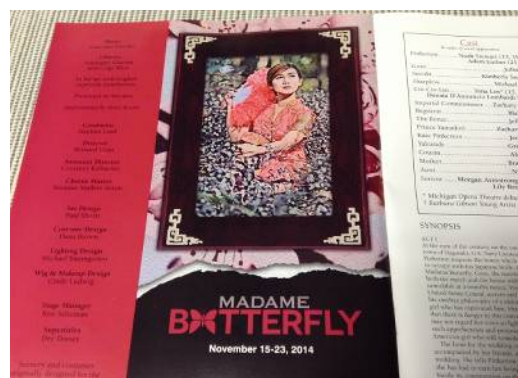
第186話：セントラルオハイオ日米協会主催セミナー

11月20日、オハイオ州ダブリンでセントラルオハイオ日米協会主催の経済セミナーがあり、ゲストとして招待を受け、日帰り出張してきました。テーマはオハイオのサプライ・チェーン。私からは、最近の日本とオハイオの関係につき話をし、ホンダのウイルビー氏、JobsOhioのタナー氏、オハイオ州立大学教授のグレイ氏の3氏より、それぞれ興味深いプレゼンテーションがありました。1日で米国人口の6割に到達できる交通の優越性を持ち、製造業が復活し、シェールガス開発が進む中、オハイオの重要性はますます高まっています。このようなことを再認識する上で、本日のセミナーは貴重な機会を多くの参加者に与えてくれました。セントラルオハイオ日米協会の地道な活動に感謝します。



第187話：オペラ「蝶々夫人」

11月23日、デトロイト・オペラ・ハウスでオペラ「蝶々夫人」(Madame Butterfly)を鑑賞しました。個人的に以前からチケットを購入していたのですが、数週間前にミシガン大学でのフットボールの試合で、偶然ウェイン・ブラウン館長と知り合いになった際、「蝶々夫人」が話題となり、私が既にチケットを手に入れて23日に見に行く予定だと説明すると、彼は座席番号を聞いてきました。23日、妻とともに座席に座って開演を待っていると、ブラウン館長がやってきて、親切にも彼のゲストとして、二階中央のボックス席に案内してくれました。蝶々夫人は、ご承知の通り、米国人ジョン・ルーサー・ロングの短編小説をプッチーニが二幕のオペラにしたもので、初演は1904年、ミラノ・スカラ座だそうです。有名なアリア「ある晴れた日に」は説明不要でしょうが、その他、「宮さん宮さん」や「さくらさくら」など日本の曲もいくつかアレンジされて使われています。西洋人が西洋人のために作った異国趣味のオペラで、筋書や舞台衣装・装置、俳優の所作には日本と中国がミックスされたりと、日本人から見ると違和感が否めないのは仕様がありませんが、普遍的な愛のテーマであり、また、蝶々さんが最後に名誉のために父親の遺品の刀で自決するシーンは、ある種日本的価値観の表現と言えるかもしれません。オペラとして十分に楽しみました。終演後のオベーションで、ピンカートン役の俳優がブーイングを受けていたのは少し可哀そうでした。



第188話：レバノンのナショナル・デー・レセプション

11月24日、デトロイトの西隣にあるディアボーンのアラブ系米国人博物館内ホールでレバノン総領事主催の独立71周年記念レセプションが開かれ、私も出席して総領事にお祝いを述べてきました。ディアボーンを中心に、この地域は米国でもレバノン系をはじめアラブ系米国人の最大居住地域です。その関係もあり、レバノンは、デトロイトに7つしかない（総）領事館の設置国の一つです。前週に一

足早く天皇誕生日レセプションを無事終了した私としては、気分も軽くレバノンのレセプションに出席した次第です。当日は、中東料理の代表とされるレバノン料理も提供され、楽しい夕べの一時を過ごしました。



第189話：サウスフィールド市主催の日系企業ビジネス朝食会

11月25日、デトロイト市の北隣にあるサウスフィールド市主催による日系企業ビジネス朝食会が開催され、出席して挨拶しました。サウスフィールド市はデンソーをはじめ17の日系企業事業所が約1,200の雇用を生み出している町です。中間選挙で連邦下院議員に選出されたブレンダ・ローレンス市長、シルヴィア・ジョーダン市議会議員、ドナルド・フラカーシー新議長（1月より市長代理）他市関係者、地元にあるローレンス工科大学ヴィリンダー・モウドギル学長、オークランド郡関係者、日系企業、JBSD（デトロイト日本商工会）、日米協会など多くの出席者を得て有意義な意見交換とネットワーキングを行うことができました。サウスフィールド市とはこれまでも報告の通り、日本人コミュニティや総領事館は良好な関係を構築していますが、今回このような形でサウスフィールド市当局が日本との関係を重視する行事開催のイニシアチブをとって頂いたことは、我々にとって非常に心強いメッセージと受け止めています。



第190話：オハイオ州立大学ビジネス・スクール

11月25日、オハイオ州ダブリンにあるオハイオ州立大学ビジネス・スクールを訪問し、日本とオハイオの経済関係について、「Japan and Ohio-Enduring Business Partnership-」と題して約45名の学生に講義をしてきました。オハイオはご承知の通り、ホンダをはじめ420社を越える日本企業が最大の外国投資を行っており、約7万人の雇用を生み出している州です。埼玉県との州・県姉妹関係の他、14の姉妹都市交流を日本の都市と行っています。オハイオ州立大学をはじめとして26の大学、16のK-12で3000名余りの学生が日本語を学習。ビジネスの観点からは、自動車を走らせて1日（600マイル）で米国及びカナダの人口の6割に到達、200以上の高等教育機関があり、600万人の良質な労働市場を持ち、米国有数の優遇税制を採用、工業生産で米国内第5位と魅力ある条件を各種備えているのがオハイオ州です。学生の中には、ホンダでインターンをしていた女性もあり、夜7時から授業にもかかわらず、熱心に質疑応答にも参加してくれました。ありがとうございます。週末の29日にはオハイオ・スタジアムで宿命のライバル、バックアイズ（オハイオ州立大学）とオルバリンズ（ミシガン大学）のフットボールの試合があります。両州を管轄している総領事として、ハムレットのような気持ちです。



第191話：感謝祭

11月27日のサンクスギビング（感謝祭）の日、米国人の友人夫妻に招待され、感謝祭のディナーを頂きました。感謝祭は、1620年にプリマス植民地に移住して来たピルグリム・ファーザーズが翌年の収穫を祝ったのが起源とされているようです。ホワイト・ハウスでは2羽の七面鳥に恩赦を与え、救済する恒例の行事 Turkey Pardon が行なわれました。七面鳥と克蘭ベリー・ソースの定番は当然ですが、ベジタリアン用に豆腐で作った七面鳥風の肉もあって、なかなかの味でした。米国人にとっては、クリスマスとともに家族が集まって過ごす休日で、日本で言えば正月の家族団らんのようなものかもしれません。北米でしか味わえない感謝祭を米国人家庭で経験できた貴重な一夜でした。28日はブラック・フライデー（商店が黒字になる歳末商



戦)、12月に入るといよいよクリスマス・モードです。その前に、この1年を総括して来年に向けての計画を練りたいと思います。

第192話：ウォルヴァリンズ対バックアイズ

この地域の大学フットボール・リーグ戦最後を飾る宿敵ライバル同士のミシガン大学ウォルバリズ対オハイオ州立大学バックアイズの試合が、11月29日、オハイオ・スタジアムで行われました。昨年までの10年間はバックアイズの強さが目立ち、10戦9勝でした。当日、スタジアムは、108,610名の観客を動員し同スタジアムの記録を作りました。結果は、第2クォーター途中までウォルヴァリンズがリードしていたのですが、実力の差か42対28で今シーズンもバックアイズの勝利。通算成績は、1897年の最初の試合でミシガン大学が勝利して以来、ミシガン大学の58勝、オハイオ州立大学の46勝だそうです。スタジアムは彼らのシンボル・カラー赤色一色で塗られていました。

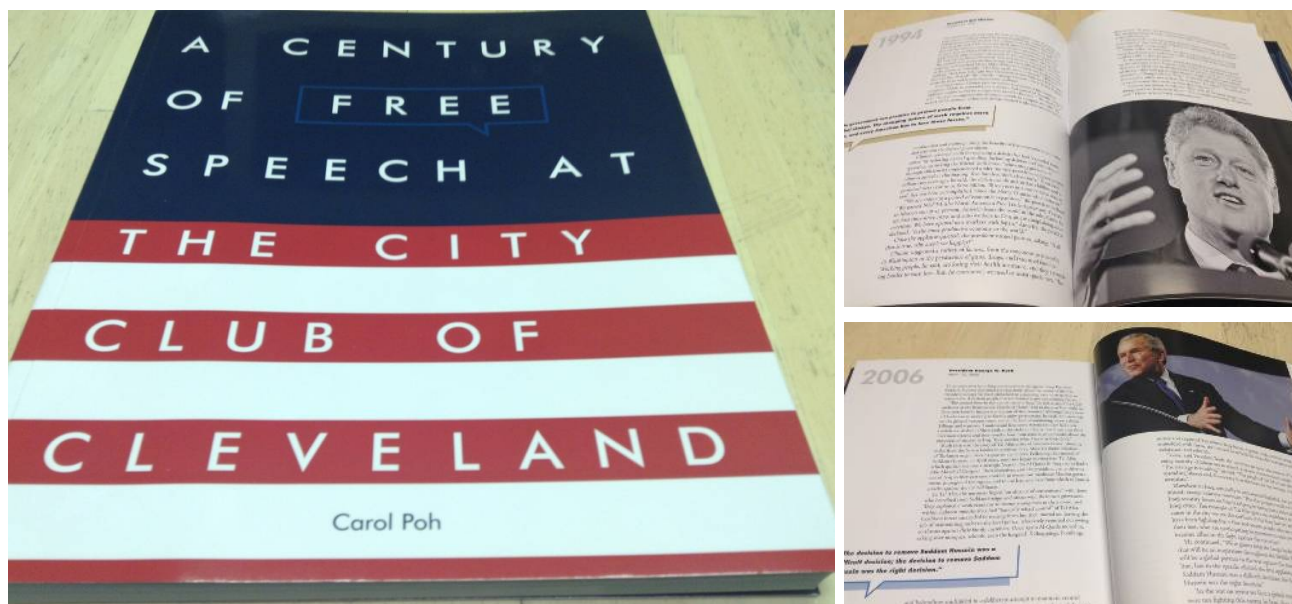


第193話：JSDウイメンズ・クラブ

12月3日、デトロイト郊外のゴルフ・クラブでこの地域の日本人女性ボランティア活動の主体となっているJSD（Japan Society of Detroit）ウイメンズ・クラブのクリスマス会に招待を受け出席しました。現在、会員は124名ということです。1991年に発足以来23年にわたり、地道に文化交流を通じて日本と地元コミュニティとの橋渡しをして頂いています。当日出席した男性は、ウイメンズ・クラブの活動を支援しているJBSD（デトロイト日本人商工会）植田事務局長と私の二人のみで少し緊張しました。ウイメンズ・クラブと総領事館とは、茶道や着付けのデモンストレーション、サギノーやノバイでの日本祭りその他、いろいろな場面で連携しながら二人三脚で日本文化交流活動を行っている重要なパートナー同士です。また、ウイメンズ・クラブは当地在留邦人の生活の便宜のために「ミシガン州生活ガイドブック」を編集しています。菅間会長はじめ会員の皆さん、日頃の活動及びクリスマス会での本当に素晴らしいプログラムありがとうございました。来年もよろしくお願いします。

第194話：シティー・クラブ・オブ・クリーブランドでの講演

12月5日、オハイオ州クリーブランドにあるシティー・クラブ・オブ・クリーブランドに招待され、「Why Japan Still Matters」と題して日米関係、日オハイオ関係そして日本の復活について約150名の参加者を前に講演しました。当クラブは1912年に創立された由緒あるクラブで、セオドア・ルーズベルト大統領に始まって歴代大統領の多くも講演しています。地元で医療機器製造会社を起業した日本人実業家藤田浩之氏及び彼の米国人の友人たちの尽力により私の講演が実現しました。コロンバス、シンシナティ地域に比べるとクリーブランド地域には日米協会もなく、日系企業や在留邦人も相対的に少ない地域ですが、そうであるが故に日本のオハイオへの貢献を正しく理解してもらい、今後の関係強化の一助になればと願っています。講演後の質疑応答では、日中関係、日本の移民政策、少子高齢化問題といった難しい質問も出ました。ラジオやテレビ放送もされたので少し緊張しましたが、日本のメッセージを何とかクリーブランドの人々に伝えることができたのではないのでしょうか。高校生も約20名招待されて来てくれました。(www.youtube.com/watch?v=ANs6rHnDGww)



第195話：デトロイト公共テレビ放送局

12月6日、ハーバード・クラブのアレンジによるデトロイト公共テレビ放送局 (Detroit Public Television) (WTVS) の Wixom にある放送施設を見学に行きました。全米公共放送ネットワークPBSの加盟社です。移動中継車、スタジオ、編集室等を見せてもらい、テレビ収録にも立ち会いました。倉庫を改造して最新の音響スタジオに作り



替えたそうです。日頃、地方公共放送は余り馴染みがなかったのですが、今後は少し意識的に見てみようかと思います。



第196話：デトロイト・ライオンズ

12月7日、デトロイト・ライオンズのプロフット・ボール（NFL）の試合をダウンタウンのフォード・フィールドに行きました。ちなみに12月7日は米国時間で73年前に真珠湾攻撃により日米が開戦した記念日です。米国ではスポーツ試合会場にしばしば退役軍人が招かれ榮譽を受けますが、この日は会場で黙祷が捧げられました。日米が破局を迎えたことを悲しむとともに、戦後70年で今日の強固な日米同盟関係が築き上げられたことを誇りに思います。さて、NFLのスタジアム観戦は2度目ですが、今シーズン初めてです。NFLは各チーム、シーズン16試合しかなく、MLBの10分の1、その内、ホームゲームは半分なので、なかなかチケットがとれません。今回は、デトロイト市のマッキノン副市長が親切にも招待してくれました。フォード・フィールドは、ミシガン・スタジアム（ミシガン大学）ほど規模は大きくありませんが、それでもインドアで6万5千人近くの収容力を誇り、当日もほぼ満席でした。迎え撃つはタンパベイ・バッカニアーズ。ライオンズが見事、34対17で勝利しました。鮮やかなタッチダウンも何度か生で観ることができ醍醐味を味わいました。ライオンズは、昨シーズンNFC北部地区で3位、2012年は4位とここ数年調子よくありませんでした。スーパーボールに出場したことも残念ながらありません。しかし、今シーズンは現在2位。残すところあと3試合。是非、この調子で地区優勝かワイルドカードでプレー・オフに進んでほしいものです。また、同会場ではマイク・ダガン デトロイト市長も別のボックス席で応援しており、途中挨拶に行きました。その時の写真です。



第197話：都市再生

最近、都市再生に関する興味深い本を2冊読みました。1冊は、矢作弘著「縮小都市の挑戦」(岩波書店)、もう1冊は、鈴木直道著「夕張再生市長」(講談社)。前者は、人口減少と産業衰退による荒廃と破綻からの再生をめざすデトロイトとトリノの試みを取り上げ、日本が学ぶべき道を示唆したもの、後者は、30代の若手市長が、かつて炭鉱の町として栄えたものの閉山し、現在は人口が1/10に縮小して破綻した夕張市の財政再建と都市の再生に取り組んでいる物語。デトロイトと夕張、規模と産業や置かれた背景に違いはあ



ありますが、ともに、かつては栄え、時代に取り残され衰退し破綻した町、そして、現在、再生に向けて模索しているという点では多くの共通点があります。また、少子高齢化の中、このままだと約半分の自治体が今後立ちゆかなくなる可能性すら予測されている日本社会にとって、これら都市が行っている努力や実験は、決して対岸の出来事ではなく、我々の将来に直結する課題を先進的に取り組んでいるということが理解できます。

第198話：スタジオジブリ・コレクション上映会

ミシガン大学日本研究センター主催によるスタジオジブリ・コレクション-30周年回顧上映会-が10月よりミシガン大学キャンパス近くの映画館で上映されていましたが、その最後の作品「風立ちぬ」(The Wind Rises)を観に行きました。宮崎駿のアニメーション映画で、零戦の設計者堀越二郎をモデルに、堀辰雄の小説「風立ちぬ」の内容も取り入れて2013年に日本で公開された約2時間の長編です。自分の人生を如何に全うすべきかを考えさせられたアニメでした。ミシガン大学は、今学期の授業が丁度終了し、試験間近ですが、当日、映画館は学生を中心に宮崎駿ファンで埋め尽くされていました。



第199話：バトルクリーク訪問

12月11日、デトロイトから西に車で2時間のところにあるバトルクリークを久しぶりに訪問しました。ここには朝食のシリアルで有名なケロッグの本社がありますが、日系企業も20社近くが投資し、6千人近い雇用を生み出している場所です。午前中、地元経済開発公社であるバトルクリーク・アンリミテッドを訪問し、総裁代行よりブリーフを受け、昼は市長他市の幹部と食事。午後、市長自ら歴史ある市庁舎内を案内して頂きました。市長室には姉妹都市高崎から贈られた大きなダルマが。その後、代表的な投資企業であるデンソーと東海理化の工場視察。夕食には、市長他日米関係者がたくさん集まって頂きました。元連邦下院議員も。バトルクリークの人々の暖かさ、そして日本企業及び邦人社会の地道で誠実な貢献を痛感した充実した1日でした。今月から来月にかけて、更に2度バトルクリークを訪れる予定があります。このような素敵な人々の住む町と縁ができて幸いです。



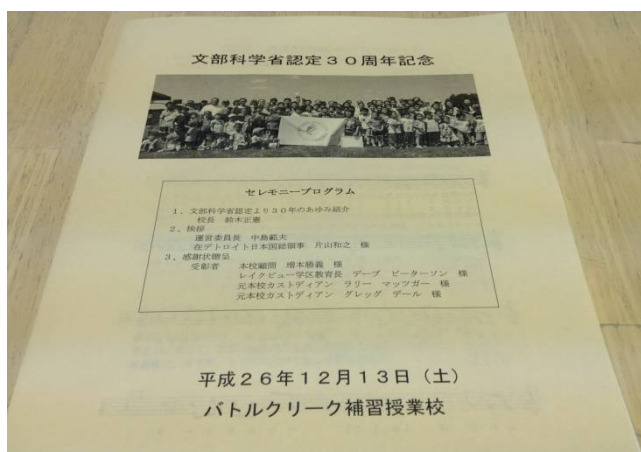
第200話：バトルクリークとデンソー

バトルクリークに出張に行った際に、経済開発公社バトルクリーク・アンリミテッドのジェイムズ・ヘティンジャー総裁代行より著書「デンソーと小さな町バトルクリークの挑戦」（日本能率協会マネジメントセンター 1998年）を署名入りで頂きました。その原著である「Small Town: Giant Corporation」(James F. Hettinger & Stanley D. Tooley, University Press of America, 1994)は、執務室の書棚に以前から置いてあったのですが、今回翻訳本をもらったのをきっかけに遅まきながら読んでみました。デンソーが80年代にバトルクリークに投資を決定する過程でバトルクリーク側が行った長年にわたる誘致活動、投資誘致に当たって重視される諸条件、日本式経営と米国式経営との相克と調整、労使問題、人種問題、地域社会への貢献活動、日本人駐在員幹部の資質、駐在員家族の生活と子弟の教育環境、地域の対日感情等々投資を巡る総合的な一つのケース・スタディーを学ぶようでした。受け入れ側の熱意と誠意、そして相互信頼関係が重要な基礎であること、デンソーとバトルクリークのケースは、その素晴らしい成功例であることがよく分かりました。



第201話：バトルクリーク補習校30周年

12月13日、ミシガン州バトルクリークにある日本語補習授業校の設立30周年記念行事が行われ、来賓として出席してきました。1980年、4名で始まった日本語教室は、1984年補習授業校として認定されました。その時の生徒数は9名。地元の支援を受け、90年代には100名を超え日本から校長先生が派遣されるようになりました。総領事館としても、現地採用講師への謝金や校舎借料への補助を含め様々な形で支援を行っています。平日は地元の学校、土曜日に補習授業校に通うことは生徒及びその保護者にとって大変な苦勞と負担があると思いますが、グローバルな人材が求められるこれからの国際社会の中で、ここで育った子供たちは、きっと将来、日本、米国そして世界のために大きな役割を果たしてくれると信じています。30周年という慶祝の中でひとつ残念なことは、最近生徒数が100名をかなり割り込む状況が継続しており、現在文科省から派遣されている校長の任期が終了する来年3月以降は、当面、後任派遣が中断されてしまうことです。予算制約の中でやむを得ない面があるとは言え、教育は国家百年の計、明日の日本を支える人材育成のかなめです。生徒数を増やす努力とともに、官民で引き続き連携して教育環境の質を落とさないように心掛けていきたいと思っています。なお、当日、補習授業校への長年の貢献に対して、増本勝義顧問、ピーターソン学区教育長等4名に対して学校長から感謝状が贈呈されました。



第202話：領事団ホリデー・ガラ

12月13日、グロス・ポイントにある歴史ある建造物である戦争記念館で年末のデトロイト領事団ガラ・ディナーがありました。デトロイトには日本を含めて7か国の（総）領事及び約50か国の名誉（総）領事がいますが、約50名の（名誉）（総）領事夫妻が出席しました。当地の領事団長はイラク総領事、全体の世話役はトルコ名誉総領事です。あいにく総領事で参加したのは我々夫妻のみでした。当日は、幹事のスイス名誉総領事夫妻の用意周到な計らいにより、とても楽しい一時を過



ごしました。マッキノン・デトロイト副市長夫妻が特別ゲストとして出席されましたが、食後、生演奏に合わせて副市長の素晴らしい歌唱を参加者一同で堪能しました。



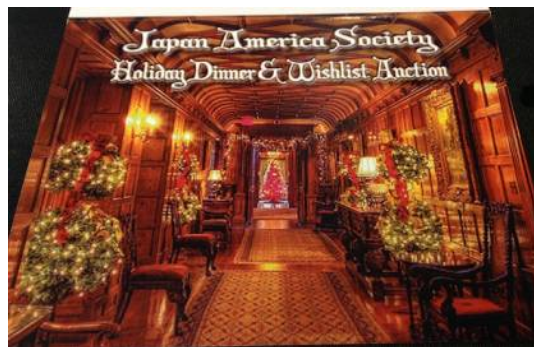
第203話：IEJプログラム2014

12月15日の夜、公邸に今年のIEJ(International Educators to Japan)プログラムに参加し、6月22日～7月3日の日程で訪日した米国の地元公立学校の校長・教師5名を招待し、りんご会（デトロイト日本語補習授業校）理事長、りんご会校長、JBSD（デトロイト日本商工会）事務局長等も交えて、訪日経験を伺いました。このプログラムは1970年代に始まったもので、日本企業の海外進出に伴い、現地公立校に通う英語の話せない日本人生徒を温かく受け入れて頂いている地元の教師への感謝とともに、日本の教育事情への理解を高めてもらうために行われているものです。日本側では現在、貿易研修センター（IIST）が事務局を務めています。今年のプログラムでは上記5名を含め、米国、カナダ、ベルギーから計24名の教師・教育委員会関係者が参加しました。日本国内では、学校訪問、日本人教師との意見交換、日本文化体験、ホームステイ、広島・京都等地方視察を行いました。JBSDは1992年から、デトロイト地域からの教師派遣のスポンサーとなっており、これまで通算160名近い米国人教師の訪日研修を支援しています。5名の米国人教師からは、日本では学校の掃除も生徒が行うこと、教師と生徒と一緒に教室で給食を食べること、生徒の礼儀と教師への敬意等が米国との対比で印象深かったそうです。米国の地元の学校で日本人の生徒を今後教える上で、今回の研修はとても有意義であったと思います。



第204話：日米協会年末ディナー

ミシガン及び南西オンタリオ日米協会恒例の年末ディナーが、12月16日、デトロイト北方のロchesterにあるオークランド大学メドーブルック・ホールで行われました。1920年代に建てられたチューダー様式の家で元は自動車メーカーで有名なダッジの所有物でした。クリスマス季節の室内の素晴らしい装飾で有名です。ディナーに並行してサイレント・オークションも行われました。チャック・リトル会長は4年の任期を終え、来年からはトヨタのブルース・ブラウンリー氏が新会長となります。当日は、私とともに名誉会長を務めているダグラス・ジョージ加総領事の他、ミシガン最大の在留邦人を抱えるノバイ市のボブ・ガット市長やデニス・アーチャー元デトロイト市長夫妻、その他大勢の日米関係者の参加を得ました。来年には協会創設25周年記念行事も予定されています。当地における総領事館の重要なパートナーである日米協会と引き続き緊密に連携していきたいと思います。



第205話：エイドリアン訪問

12月17日、デトロイトから南西に1時間半走ったところにある人口2万人余の町エイドリアンのエイドリアン大学を訪問しました。滋賀県とミシガン州・市姉妹交流行事で知り合ったベリーマン市長や大学関係者から招待を受け実現しました。まず、ドッキング学長から大学の概要を伺い、キャンパス内を案内頂きました。1859年に設立されたキリスト教に基づく私立のリベラル・アーツの大学で、約1700名の学生が学んでいます。既に休暇シーズンに入り、残念ながら学生はいませんでした。ここには日本語のコースもあり、次回は学生との交流ができればと思います。昼食では、学長他大学関係者、市長、経済開発公社代表、進出日系企業(Hi-Lex、Anderson Development(三井化学の子会社))の代表、姉妹交流プログラム関係者、教育長、在留日本人等多くの関係者に集まって頂き、訪日の思い出や、姉妹都市滋賀県守山市との中学生交流、守山市長の来訪、日本人留学生を増やす手立てなどにつき、意見交換しました。同大学は、アイスホッケーでも有名で、午後、アリーナも見せて貰いました。関係者の皆さん

から、本当に心の温まる歓待を受けました。



第206話：ホンダ・ヘリテージ・センター

12月18日、ホンダの北米生産拠点であるオハイオ州メアリーズビルに完成したヘリテージ・センターの開所式に行ってきました。ホンダは、79年から当地で二輪車を、82年からは四輪車の現地生産を始め、昨年は初めて米国からの純輸出メーカーと成りました。来年には、世界唯一のNSX生産工場もここで稼働予定です。センターには、これらホンダの歴史を現物とともに展示してある他、訓練センターも併設されています。更にホンダが手掛けるロボットや小型ジェット機も。ケーシック知事も御祝いに駆け付けていました。その後、地元メアリーズビルのジョン・ゴア・ジュニア市長と共に昼食をとり、午後新しい市庁舎内を案内して貰い、庁舎前に建設中の公園に設置されている友好都市埼玉県寄居町から寄贈された3.5トンの大きな石を見学しました。先日訪問したミシガン州バトルクリークと共に、これも日本企業の投資の大きな成功例です。



第207話：2015年（平成27年）年頭所感

皆様、あけましておめでとうございます。当地で迎える2度目の正月です。赴任して1年3ヶ月余りが経過し、公私に亘って充実した有意義な日々を送らせて頂いています。今年も、ミシガン州及びオハイオ州の米国の皆様に対して日本が信頼できる真のパートナーであること、そして、在留邦人の方々に対しては総領事館が良質の公共サービスを迅速に提供できる頼りになる存在であることを目指して館員一同尽力する所存ですので、宜しくお願い致します。



この地域で予定されている本年の注目すべき出来事を一部列挙しますと、デトロイト市再建計画の本格実施動向、豊田市とデトロイト市との姉妹都市提携55周年関連行事、またこの関連ではダガン市長の訪日を是非とも実現させたいと願っています。外務省によるダブリン市長の訪日招聘（3月）、シンシナティ美術館等での日本美術特別展（2月～）に加え、ミシガン州グランドラピッズにあるフレデリック・マイヤー庭園内の日本庭園の完成（6月）、またこの日本庭園の開園に先駆けた同州の姉妹県である滋賀の美術品展覧会（1月）も開催されます。そしてミシガン・南西オンタリオ日米協会25周年行事、スナイダー・ミシガン州知事の訪日計画、更にはより大きな文脈の中では2016年大統領選挙に向けた動きやTPP交渉妥結の行方も注目されます。また本年は第二次世界大戦終戦70周年に当たる年でもあります。日米が双方のたゆまぬ努力により築き上げてきた強固な同盟関係を再確認し、更なる発展への契機となることを願っています。

本年が皆様方にとり、また、日本・ミシガン、日本・オハイオ関係にとって実りある年になることを祈念しまして、年頭の挨拶と致します。

平成27年1月
在デトロイト日本国総領事館
総領事 片山和之

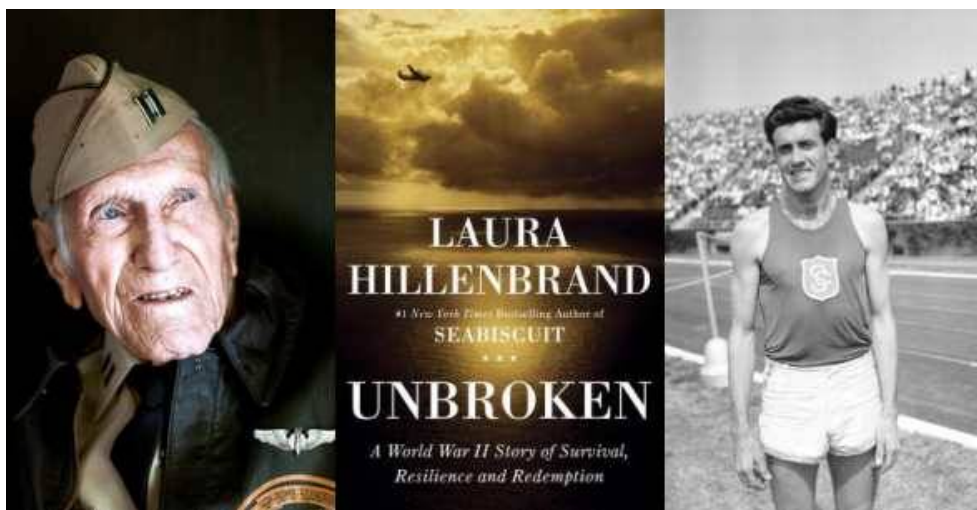
第208話：元旦の大学フットボール

昨年は雪に閉ざされた正月でしたが、今年のミシガンの自宅周辺は零下の気温ながら、雪も今のところ余り積もっていません。元旦は、日本から送られてきた真空パックのお節料理をつつきながら、大学フットボールの試合をテレビ観戦してゆっくりと自宅で過ごしました。管内の州からは、ミシガン州立大学がテキサス州アーリントンでのコットン・ボウル、オハイオ州立大学がカレッジ・フットボールのプレー・オフ準決勝戦を兼ねるシュガー・ボウル（ルイジアナ州ニューオーリンズ）に出場しました。ミシガン州立大学は、第3クォーターまで20点差をつけられていましたが、最後の最後で逆転劇を演じ42対41でベイラー大学に劇的な勝利を収めました。オハイオ州立大学（ランキング4位）も、アラバマ大学（同1位）と対戦して42対35で接戦を見事勝利。1月12日に開催される決勝戦（テキサス州アーリントン）では、ローズ・ボウル（もう一つの準決勝戦）の覇者オレゴン大学（ランキング2位）と全米大学ナンバーワンの地位を争います。残念ながらNFLの方は4日のプレーオフでライオンズがダラス・カウボーイズに20対24で逆転負けを喫してしまいました。



第209話：映画“Unbroken”

正月2日に自宅近くのバーミングガムにある映画館で”Unbroken”を観てきました。ローラ・ヒレンブランドが数年前に書いたノンフィクションを基に、女優のアンジェリーナ・ジョリーによって映画化されたものです。原作を数年前に読んでいたこともあり観に行きました。詳しい内容は、実際に本を読み、あるいは映画を見て頂ければと思いますが、差支えない範囲で簡単に説明すれば、イタリア系移民のルイス・ザンペリーニが1936年のベルリン・オリンピック陸上5千メートルの米国代表となり、その後、太平洋戦争中の1943年、B-24爆撃機搭乗中に故障により洋上に不時着して47日間漂流、日本軍の捕虜として捉えられ日本国内での捕虜収容所数か所での苦難を不屈の精神で乗り越え、終戦後帰国、戦後は「復讐」ではなく「和解」と「許し」の心を持って、収容所の元日本軍関係者何名かとも再会し、98年の長野オリンピックの際には、日本での聖火リレーにも参加。「生きて虜囚の辱めを受けず」と教育された当時の日本軍人にとって、敵国の捕虜を一般的にどう扱ったかは想像に難くありませんが、やはり映画では特定の軍曹による虐待の場面が続きます。率直な感想を述べれば、ザンペリーニ氏の戦後の活動にももう少し焦点を充ててほしかったと思います。今年は、戦後70周年。日米が歴史の試練を経て強固な同盟関係を築いたことを大きな誇りに感じるとともに、我々がそれを更に確固なものとして後世に繋げる必要性を再認識しました。なお、同氏は、2014年に97歳でこの世を去りました。



第210話：バトルクリーク日本人会新年会

1月、管内各地の日本人会・日本商工会より新年会のご招待を頂いています。ありがとうございます。物理的に可能な限り、すべての新年会を顔を出し各地の在留邦人の方々とともに新年をお祝いしたいと思っていますが、10日は、その始めとしてバトルクリーク日本人会の新年会に妻とともに出席してきました。桑村日本人会会長御夫妻、鈴木日本語補習校校長御夫妻他日本人会会員関係者150名を超える方々とお会いし、楽しい一時を過ごしました。この新年会の特徴は、日本人シェフによる素晴らしい食べきれない量の日本料理と、企業対抗のハイレベルの出し物、そして、半分以上の参加者が当たる福引です。「アナと雪の女王」と歌番組「ザ・ベストテン」の25年前のランキングをもじった出し物は圧巻でした。



第211話：北東オハイオ日本人会新年会

11日は、北東オハイオ日本人会（JANO）新年会がアクロンで開かれ、片道3時間かけて妻とともに行って来ました。北東オハイオには日米協会が現在は存在しておらず、その意味でもJANOの日米交流に果たす役割は大きなものがあります。1996年から桜植樹を継続し累計で約240本に達しています。JANOには現在、法人17社、個人180名が加入しており、当日は約65名の方々が参加されました。昨年の活動報告、本年の活動計画・予算報告等が行われ、その後、日本料理のbuffet、各人の近況報告、余興等楽しい昼の3時間を過ごし帰路につきました。総領事館との関係を日本との絆のように感じて頂いているJANOの皆さんのお役に立てるよう本年も頑張っていく所存ですので宜しくお願いします。



第212話：カレッジ・フットボールNO. 1

1月12日は、オハイオ州民にとり狂喜乱舞の日となりました。この日、大学フットボールのプレー・オフ・ナショナル・チャンピオンシップの決勝戦が10万5千人の収容能力を持つテキサス州アーリントンにあるAT&Tスタジアムを満員にして行われました。今シーズンは昨年までのシステムと異なり、ランキング上位4チームが1位と4位、2位と3位のチームでそれぞれ準決勝（シュガー・ボウルとローズ・ボウル）を戦い、オハイオ州立大学（4位）とオレゴン大学（2位）が12日の決勝に進みました。そして、オハイオ州立大学が42対20で見事オレゴン大学を破り、今シーズンの大学全米NO. 1に輝きました。バックイズ万歳！



第213話：北米国際自動車ショー（デトロイト自動車ショー）

今年も北米国際自動車ショー（デトロイト自動車ショー）の季節がやってきました。場所はコボ・センター。一般公開は1月17～25日ですが、12～13日にプレス向け事前公開、14～15日に企業向け事前公開、16日にチャリティーが行われます。日系企業では、トヨタ、サイオン、レクサス、ホンダ、アキュラ、ニッサン、インフィニティ、マツダ、スバル、アイシン、デンソーの各社が主会場に出展し、存在感を示していました。その他、業界向けにパナソニック等も展示していました。昨年はいなかった中国企業も広州汽車集団（GACグループ）がコンコースに小さなブースを設けていました。昨年の米国の自動車販売台数は1650万台と好調です。1600万台を越えるのは2006年以来です。ガソリン価格も低下しているせいか、今年の自動車ショーでは、ピックアップ・トラックやスポーツ車の発表が目立ちました。ショーの賑わいと華やかさがデトロイトの復活に繋がることを望んでいます。

注：写真は今期日本自動車メーカー社から発表された新型モデルの一部です。



第214話：デトロイト日本商工会幹部とスナイダー・ミシガン州知事との会見

1月13日、デトロイト自動車ショーが開かれているコボ・センター内の会議室でJBSD（デトロイト日本商工会）次期会長他幹部とスナイダー・ミシガン州知事、キャリー副知事他州政府・経済開発公社幹部との会見があり、私も同席しました。JBSDは基金を通じた公的団体への助成、米国人教師の本邦招聘、デトロイト美術館への寄付をはじめ各種の社会貢献事業を長年地道に行っています。多忙な知事のため会見時間は十分ではありませんでしたが、JBSDの貢献活動を直接知事他州政府幹部に説明し把握してもらうための良い機会となりました。アキレス腱を痛めて松葉づえの知事でしたが、わざわざJBSD代表に年の初めに会って頂いたことに、知事の日本とミシガンとの関係強化への意気込みを感じることができました。総領事館としても、邦人社会の手足、そして口となり在留邦人の地元への貢献を積極的に地元自治体や米国人に宣伝していきたいと思っています。



第215話：デトロイト復活の胎動（日本の雑誌への寄稿）

PHP総研の政策レビュー（PHP Policy Review）ウェブ版に、最近「デトロイト復活の胎動」と題して特別寄稿文を掲載しました。デトロイトが破綻から再生へと進みつつあるプロセスの積極面及びこの地域における日本のプレゼンスの大きさや日本との関係の重要性といった明るい面を強調し、日本の読者にこの地域にポジティブなイメージを持ってもらいたいとの思いで書きました。多くの方に読んで頂ければ幸いです。日本語の寄稿のため英語話者の方には申し訳ありません。

こちらからアクセスできます：<http://research.php.co.jp/policyreview/vol9no67.php>

第216話：デトロイト自動車ショー・チャリティー・プレビュー

1月16日、デトロイト自動車ショーの一環でチャリティー・プレビューが開かれました。これは、デトロイト地域の子供たちの福利厚生のためのチャリティーで、16日付けのデトロイトニュース紙（13A面）によると1976年以来、9千6百万ドルの基金をチャリティーで集めたそうです。そして、その半分は過去10年間で集まったとか。制度の違いにより一概に比較はできませんが、政府や自治体が一義的に行うべきと日本では考えられていることが、米国では地域のボランティア精神やチャリティー活動によって支えられていることをいろいろな場面で目にしました。自主自立、自助努力は米国社会の根幹をなす精神であることを痛感します。ところで、肝心のチャリティー・レセプションですが、職場で直前にタキシードに着替えていざ出陣の際に、なんとエナメル靴の底が抜けてしまいました。10数年前に購入して年1、2回しか使う機会がなく、メンテナンスを余りしてなかったせいかもしれません。面倒くさいので朝からこのエナメル靴で出勤していたため履く靴がなく、泣く泣くレセプションはあきらめました。でも、チャリティーの方にはちゃんと寄付したので目的は達しました。



By the numbers

Since 1976, the Charity Preview has raised about \$96 million for area charities that benefit children. More than \$45 million was raised in the last 10 years alone.

	Ticket cost	Number of tickets sold	Money raised (in millions)
2004	\$400	17,500	\$7
2005	400	17,500	\$6.9
2006	400	17,500	\$6.7
2007	400	15,000	\$6
2008	400	15,000	\$6
2009	400	6,747	\$2.7
2010	250	8,584	\$2.1
2011	250	10,649	\$2.7
2012	250	12,000	\$3
2013	300	13,069	\$3.9
2014	350	13,826	\$4.8

Sources: Internal Revenue Service, DADA

The Detroit News

（参考）

1月15日付デトロイトニュース紙（電子版）：

<http://www.detroitnews.com/story/business/autos/detroit-auto-show/2015/01/15/auto-show-gala-charities/21838485/>

第217話：トリド日本人会新年会

1月18日、オハイオ州トリド日本人会新年会にご招待頂き、妻と出席してきました。ハラ会長（トリド大学教授）、カワノ副会長（ボーリング・グリーン州立大学教授）、ジョンストン日本語補習校校長、マイコ姉妹都市委員会会長をはじめ約65名の関係者が集まりました。ここの新年会の特徴は、米国人参加者の割合が多いことと、そして、料理やデザートはポットラック形式でみんなで持ち寄ったものを頂くアトホームな雰囲気を持っていることです。とてもおいしい日本料理の数々に思わず食べ過ぎてしまいました。我々も公邸料理人に作ってもらったシュークリームを50個ほど持参しましたが、すぐなくなってしまうほっとしました。トリド大学で日本語を学んでいる大学生も沢山参加してくれ、また、ボーリング・グリーン州立大学からは学生太鼓チームが素晴らしい演奏を披露してくれました。最後に参加者全員で大きな円弧を作って東京音頭を踊り、三本締めで楽しい新年会を終え記念写真をとってお開きとなりました。本年がトリド日本人会の皆様にとり良い年でありますように。



第218話：日本語補習校の悩み

デトロイト総領事館管内のミシガン・オハイオ両州には計8校の日本語補習校があります（全日制の日本人学校はなし）。生徒はふだん地元の公立学校に通い土曜日や日曜日に補習校に通うという、本人にとっても、保護者にとっても大変な日々を送っていますが、その分、得られるものにも大きなものがあると思います。彼らは、ますますグローバル化する国際社会にあって貴重な人材となって活躍することが期待されています。理事会・運営委員会、教職員、保護者、地元関係者、生徒本人みんなが頑張っていますが、最近生徒数の減少により日本からの教師派遣が文部科学省によって中断されたり、また、逆に生徒数が順調に推移する中で現地講師の安定的な確保に苦労している学校が少なくありません。教員免許の有無は必ずしも条件ではないそうですので、補習校の講師にご関心のある方は是非直接各補習校あるいは総領事館にご照会下さい。

各補習校情報はこちらからアクセスできます：

http://www.detroit.us.emb-japan.go.jp/jp/life/schools_job.html

第219話：ブラッドリー・リチャードソン博士の逝去

1月16日、ブラッドリー・リチャードソン元オハイオ州立大学教授が逝去されました。享年86歳。リチャードソン教授は、オハイオ生まれ。ハーバード、コロンビア、バークレーに学び、東大でも研究生生活を送られました。オハイオ州立大学で日本研究及び政治学の教鞭をとられ、同大学初代日本研究所長、東アジア研究センター所長、中央オハイオ日米協会（JASCO）設立の際の理事、在オハイオ日本国名誉総領事（99-04）、旭日中綬章授賞（08）、と長年に渡り日本と米国そしてオハイオの関係発展に尽力されてこられました。私自身も着任後まもなくコロンバスで佐々江大使とともに同教授と食事をとら



せて頂いたのをはじめに、2、3度お会いする機会に恵まれましたが、今回の逝去は突然で大きなショックと悲しみに暮れています。22日、コロンバスの教会で行われたお別れの会に駆けつけ令夫人とご子息・令嬢に対して岸田外務大臣及び佐々江駐米大使の哀悼メッセージをお伝えするとともに、私からもお悔やみの挨拶をさせて頂きました。リチャードソン博士、安らかに眠り下さい。

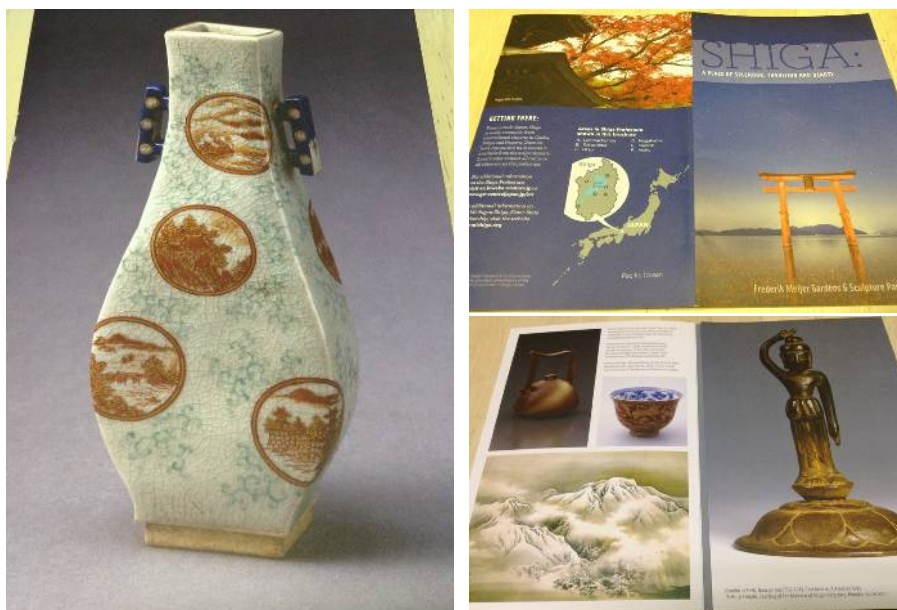
第220話：JBSD新年会

1月25日、JBSD（デトロイト日本商工会）の新年会が約450名の日米関係者の参加を得てノバイで盛大に開かれました。今年は、スナイダー・ミシガン州知事、ガット・ノバイ市長も出席頂きました。新年になって知事とJBSDの接点は、先般の会合に続いてはや2度目で、これは、ミシガン州の日本との関係重視を現すものとしてとても有難く思っています。食事後のメイン・イベントは、歌手八神純子さんの約1時間にわたるコンサートでした。70年代後半から80年代前半に高校・大学時代を送った私にとっては、懐かしい青春時代の歌手の一人で、八神純子さんの相変わらずの美しい姿と歌声に当時を思い起こしました。八神さんは、東日本大震災後の被災地でのチャリティー・コンサートにも精力的に取り組まれています。コンサートの2日前に公邸に来ていただき、夕食をとりながら歓談させて頂きました。以下はその時の写真です。日本での青春時代のスターが時間と空間を越えて今、ここミシガンで自分の隣に座っているのは何とも不思議な感動でした。



第221話：滋賀の光彩日本文化展

1月30日～8月16日まで、グランド・ラピッズ郊外にあるフレデリック・マイヤー庭園・彫像公園で「滋賀の光彩日本文化展」(Splendors of Shiga: Treasures from Japan) (国際交流基金等支援)が開催されます。それに先立ち、28日、内覧会があり出席してきました。当日は、デヴィッド・フッカー館長、羽泉滋賀県商工観光労働部長(三日月知事の代理)、公園の支援者等計約100名が集まりました。滋賀県の博物館から来られたキュレーターの方々より展示品の説明を伺い、作品を鑑賞しました。ミシガン州と滋賀県は湖つながりで長年姉妹州・県の関係を発展させており、州内と日本国内の各都市計27組の姉妹交流の中でも滋賀県の自治体が重要な役割を担っています。6月には同公園内に中西部最大規模の日本庭園もオープン予定です。このような記念すべき年に、半年以上に亘り初の海外展示となる滋賀県の75品以上の貴重な作品がミシガンで堪能できるのは大変喜ばしいことです。是非、皆さんもマイヤー公園に足を運んでみて下さい。ちなみに、この公園は、中西部で有名なハイパー・マーケット・チェーンのマイヤー一族(Meijer)のフレデリック・マイヤー氏による社会貢献事業の一環として1995年に開園されたもので、同氏からは東日本大震災の際にも多額の義援金と援助物資を供与頂きました。残念ながら2011年11月に亡くなりましたが、令夫人のレナ・マイヤー女史は茶道も嗜み日本文化に深い関心を寄せられており、茶室を含む本格的な日本庭園の建設もそのような背景があったと伺っています。



第222話：JAPIA女子部会

JAPIA(日本自動車部品工業会)北米事務所(河島哲則代表)では、年数回、加盟社の現地日本人女子職員の会であるJAPIA女子部会を開いています。前回の会合には有り難いことに妻もゲストして招待頂きました。そして、1月30日の会合は、河島代表夫妻、宮本奈都子会長他約20名の参加者、そして総領事館女性職員も含め総領事公邸に集まって頂き、本年第1回目の会合を催しました。私は、これまで香港、北京、ワシントン、クアラルンプール、ブリュッセル、そしてデトロイトと世界各地の大使館・総領事館で勤務してきましたが、現地職員の能力を十分活用している在外公館ほど、その

パフォーマンスが高いというのが偽らざる実感です。民間企業でも同じだと思います。女子部会の皆さんは、日本から派遣された駐在員とも、また、地元米国人の幹部とも違った立場で日米の間に入って様々な苦勞を日々されているのではないかと推察します。今回の会合では、昼食buffetをしながら楽しい話を聞かせて頂きました。J A P I A加盟各企業で活躍されている日本人女性の皆さんの慰勞とストレス発散、そして明日への活力の場になったとすれば幸甚です。



第223話：グランド・ラピッズ新年会

新年、管轄地域であるミシガン州及びオハイオ州各地の日本人会・商工会6カ所から新年会のご招待を頂き、その内、日程上都合のつく5カ所の新年会に出席しました。1月31日にグランド・ラピッズで行われた日本人会主催、日系企業会協賛で行われた新年会は、その最後を飾る行事でした。グランド・ラピッズ訪問は、これで4回目ですが、つい先日も郊外にあるフレデリック・マイヤー庭園・彫像公園での「滋賀の光彩日本文化展」(Splendors of Shiga: Treasure from Japan) 内覧会に出席したばかりです。グランド・ラピッズは、デトロイトに次いでミシガン州内第2の都市であり、フォード大統領ゆかりの地で彼の博物館も設置されています。6月には同公園内に中西部最大規模の日本庭園がオープン予定。完成すれば、日米文化交流の新しい重要拠点となることが期待されます。これを契機に、これまで以上にグランド・ラピッズ在住日本人、総領事館、地元関係者との間の連携を強化していきたいと思います。

なお、新年会の直前に ISIL に拘束されている後藤健二氏殺害のニュースが入ってきました。許しがたい蛮行です。新年会の冒頭、参加者で黙祷しました。私の方からは挨拶で、海外生活での安全面に改めて各自が注意を払うよう要請し、総領事館と日本人会・企業会との間でも情報共有の面でも更に緊密に連携していきたい旨述べました。

Michigan



第224話：心のプラカード 「日米架け橋バージョン from Michigan & Ohio」完成

日本の人気グループAKB48の大ヒット曲「恋するフォーチュンクッキー」のデトロイト版が完成し公開してから半年が経ちました。今度は、ミシガン州及びオハイオ州で日本語を学ぶ元気な学生さんと、日系コミュニティ有志の皆さんが心に秘めた熱いメッセージを多くの人に伝えるため、「心のプラカード 日米架け橋バージョン from Michigan & Ohio」を皆様のご協力により作成、先日ついに完成しました。

今回の動画は、前回の「恋するフォーチュンクッキー デトロイト版」に惜しくも参加できなかった学生たちのために始めたプロジェクト。日米両国間の更なる友好関係の強化に重要な担い手となるであろう若者たちを中心とした「日米架け橋バージョン」です。たくさんの方々に見てもらえるよう、本動画をシェアいただければ幸いです。

「心のプラカード 日米架け橋バージョン from Michigan & Ohio」 <http://youtu.be/wyGLmCykEGU>

第225話：埼玉県知事往訪

デトロイト赴任以来初めての一時帰国を利用して、2月9日、埼玉県庁を訪問し上田知事と執務室で地元名産の鰻の昼食をとりながら懇談させていただきました。上田知事は、2003年就任以来、東京と米中西部で交互に開催される中西部会に欠かさず出席されています。埼玉県とオハイオ州は姉妹県・州で、昨年9月にはオハイオ州コロンバスで知事をお迎えしました。サッカー、バスケット、射撃など2020年東京オリンピック・パラリンピックの会場に埼玉県が貢献される話や県内の産業など有益なお話を伺いました。



第 2 2 6 話：滋賀県知事往訪

2月12日、滋賀県庁を訪問し、三日月知事と懇談しました。知事は43歳の若さで、前職の国会議員に初当選されたのは32歳のときでした。滋賀県とミシガン州は姉妹県・州であり、27の姉妹都市の内の半分近くは滋賀県内の市町村です。今年6月にはグランド・ラピッズのマイヤー日本庭園の開園式、9月には東京で中西部会が予定されており、三日月知事にこれらの機会に再会できることを希望している旨お願いしました。スナイダー・ミシガン州知事の滋賀県訪問実現の側面支援も総領事館としてやらせて頂きたいと思います。若く、エネルギッシュな知事でした。



第 2 2 7 話：ミシガン州立大学連合日本センター訪問

2月12日、滋賀県を訪問した際に、彦根にあるJCMU(ミシガン州立大学連合日本センター)を視察し、ここで日本語を学んでいるミシガン州内15の州立大学学生や、日本人学生約40名に対して「日本とミシガン」と題して簡単に話をし、その後質疑応答や学生の自己紹介等で交流しました。JCMUは昨年25周年をむかえました。琵琶湖畔にある立派な施設で、日本に愛着を持つ学生が一生懸命学んでいる姿を見て勇気付けられました。米国人学生のみならず、ミシガンの大学に留学している中国人学生も何名かいました。みんな残る研修期間頑張って一生に残る思い出を作ってください。



第 2 2 8 話：豊田市訪問

2月13日、豊田市を訪問し、太田市長と都築市議会議員と面談しました。お二人にお会いするのは昨年7月のデトロイト以来です。今年は、豊田市とデトロイト市の姉妹提携55周年で、7月には、ダガン市長が記念行事出席のため豊田市を訪問予定です。その他、いくつかの交流事業が計画されており、総領事館も二人三脚で記念行事を盛り上げていきたいと思っています。



第 2 2 9 話：燃料電池自動車「MIRAI」（ミライ）

豊田市訪問の際に、燃料電池自動車 MIRAI（ミライ）に試乗する幸運に恵まれました。現在、東京霞ヶ関に4台、愛知県と豊田市にそれぞれ1台の計6台しか未だ利用されていない中の1台です。乗り心地は快適。10年後、20年後にどの程度普及しているのでしょうか。



第230話：日本・米国中西部会 茂木議長往訪

2月23日、虎ノ門ヒルズにほど近い新橋のキッコーマン東京本店に茂木名誉会長を訪ねました。茂木名誉会長は、ウイスコンシン州に投資し醤油工場を設立されていることもあり、日本・米国中西部会日本側議長として長年尽力されています。前回は、昨年9月、アイオワ州デモインで開催された会議でお会いしました。今年は、9月に東京(帝国ホテル)で開催予定です。スナイダー・ミシガン州知事は早々と出席を約束して頂きましたが、未だ一度も会議に出席されたことのないケーシック・オハイオ州知事の出席実現を図るべく連携していく事などを話しました。



第231話：オハイオ・ウエスリアン大学

3月2日、オハイオ州デラウェアにあるオハイオ・ウエスリアン大学を訪問し、エズラ・ヴォーゲル・ハーバード大学名誉教授が設立した基金による毎年恒例のヴォーゲル・レクチャー及び夕食会に招待を受けて参加してきました。ヴォーゲル教授といえば、日本人にとっては70年代末に出版された「ジャパン・アズ・ナンバーワン」で有名ですが、個人的には、ハーバード大学修士課程時代の指導教官としてお世話になりました。昨年11月にミシガン大学で10数年ぶりに再会した際に、彼の母校であるオハイオ・ウエスリアン大学での本件行事につき話を伺い、招待頂いた次第です。当日は、ヴォーゲル教授、子息のスティーブン・ヴォーゲル・バークレイ教授他御家族や、ジョーンズ学長、ギンジャリッチ歴史学部長他大学の研究者や学生等約70名が集まり熱心に招待教授の講演を聞きました。



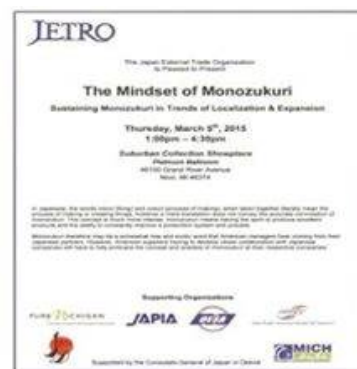
第232話：トシコ・シモウラ氏の逝去

とても悲しいニュースが飛び込んできました。当地在住の日系アメリカ人のトシコ・シモウラ氏が一時帰国中の日本で2月28日、亡くなられました。享年88歳。シモウラ氏は、戦時中は西海岸での日系人収容所生活を経験されています。戦後中西部に来られ、JACIL（日系米国人市民同盟）ミシガン支部長、池坊流ミシガン支部長、生け花インターナショナル元会長等を務められ、長年にわたり日米交流に尽くされました。その功績を称えて昨年外務大臣表彰を授賞されました。また、同じく昨年夏に、米寿のお祝いをしたのを思い出します。私が最後にお会いしたのは、確か昨年11月に公邸で開催した天皇誕生日レセプションの席だったと思いますが、その時は、とてもお元気に見えたのに本当にショックです。安らかに眠り下さい。



第234話：JETRO主催「ものづくり」セミナー

3月5日、デトロイト郊外のノバイ市でJETRO主催の「ものづくり」セミナーが開催され、本部から加藤理事、シカゴ事務所から曾根所長他JETRO関係者、日米の自動車関連企業、ミシガン州経済開発公社（MEDC）、業界団体（JAPIA、OESA等）など関係者が集まり、「ものづくりのマインドセット」、ローカル化と拡大の中でのものづくりをどうやって維持していくかというテーマで半日間の議論が行われました。私は冒頭の挨拶と前半部分に出席し、夜、公邸で日米の関係者を招待して懇談をさせて頂きました。日米、それぞれにアプローチの仕方に違いはあっても、ものづくりにかける情熱と言う点では共通点があることを再認識しました。また、当地に進出した日系企業と米国人エンジニア・労働者との関係についてもいろいろ学びました。米国製造業の復活が叫ばれる今日、非常に良い場所とタイミングでのセミナーだったと思います。



第235話：木村慶應大学教授の来訪

3月6日、イースト・ランシングにあるミシガン州立大学で木村福成慶應大学教授による日本経済、特にアベノミクスやTPPに関する講演があり、アジア研究センター関係者や学生を中心に活発な議論が交わされました。木村教授は、ウィスコンシン大学で経済学博士号を取得し、米国の大学でもしばらく教鞭をとられていました。最近では、ERIA（東アジア・アセアン研究センター（ジャカルタ））の主任研究員も務めておられます。当日は、ユーモアを交えた説得力ある流ちょうな英語でTPP支持の立場から話をされ、聴衆に強い印象を与えていたようでした。日本から、木村教授のようにもっと多くの発進力のある学者に来てもらいたいと思います。



第236話：オハイオ日本語スピーチコンテスト

3月7日、ダブリンで第16回オハイオ日本語スピーチコンテストが開かれ、昨年に引き続き、共催者そして審査員の一人として出席しました。勝ち残った高校生、大学生の部それぞれ10名の精鋭が、非常にレベルの闘いを繰り広げ、採点で順位をつけるのも大変な仕事でした。様々なテーマのスピーチを聞きましたが、日本や日本語への熱い思いが伝わってきて感動的でした。昨年、初めてオハイオ州立大学が全米で15カ所しかない日本語能力試験の会場となったのは、当地日本語学習者にとって朗報でした。これを機に更に多くの学生が日本語に関心を寄せることを期待しています。



これを機に更に多くの学生が日本語に関心を寄せることを期待しています。毎回強い支援や運営をして頂いているJASCO（セントラルオハイオ日米協会）、オハイオ州立大学日本学生会、COJAC（セントラルオハイオ日本商会）、オハイオ州立大学日本研究所、オハイオ日本語教師会、ダブリン市、国際交流基金等の各団体や地元で寄付を提供して頂いている皆様に改めて感謝申し上げます。

第237話：領事サービス向上のためのアンケート調査結果

この度、皆様の協力を得て、在デトロイト総領事館を含む、在外公館を対象に領事サービスに関するアンケート調査を実施しました。

2014年10月1日現在、300名以上の邦人が居住する地域を管轄している150の世界中の在外

公館を対象として計19,224件の回答を頂きました。当館管轄のミシガン・オハイオ両州には25,700名余りの在留邦人が居住されていますが、アンケート回答件数は811件（前年627件）と、150在外公館の中で5番目に多い数でした（全米2位・前年は6番目）。利用して頂いている多くの方々に回答を頂き、この場をお借りして感謝申し上げます。

ちなみに、1位から5位は、英国、NY、マレーシア、上海、デトロイトにある大使館乃至総領事館です。在外公館全体についての結果概要を申し上げれば、前向きに評価する回答が、「公館がどこにあるかすぐわかりましたか」に対して78%、「入館時の対応」につき68%、「領事窓口の対応」につき78%、「電話の対応」につき74%、「ホームページの内容」につき63%、「メールマガジンの配信内容」につき75%といった結果でした。当館についての結果も、右に類似した結果でしたが、領事出張サービスへの評価が高かった反面、場所のわかりにくさで皆様にご迷惑をおかけしているようです。商業ビルの構造上の問題がありますが、標識等の設置について商業ビル側と検討する等少しでもわかり易い工夫を今後ともしていきたいと思えます。また、当館の所在地がデトロイトにあり、不便だとして、在留邦人が多く居住する地域（Novi等）へ移転して欲しいとの要望も寄せられましたが、当館はミシガン州及びオハイオ州両州を管轄していること、デトロイトは依然としてミシガン州内の最大都市であり、米国三大自動車企業（デトロイト・スリー）及び、全米自動車労連(UAW)の本部があり、その他政治、経済、メディア、大学、各種団体等における当地の主要拠点や草の根レベルでのアプローチ等を総合的に判断し、現在、デトロイト市内ダウンタウンにあるルネッサンスセンター（GM本社ビル）内としておりますところ、ご理解を頂きたいと存じます。

今回の調査結果を踏まえ、窓口や電話対応を含め、領事サービスの一層の改善に努力していきたいと存じます。個別のご意見について対応可能なものは意識的に改善していきます。なお、今回の調査結果概要については、外務省のホームページに掲載されていますのでご関心のある方はそちらもご覧下さい。外務省：領事サービス向上・改善のためのアンケート調査結果のページ：

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/.../tokei/questionnaire/index.html>

第238話：第18代大統領ユリシーズ・グラント

ユリシーズ・グラントと言えば、南北戦争の際に北軍の将軍として活躍し、後に第18代大統領（1869～77）となった人物ですが、デトロイトに住んだことのある唯一の大統領だそうです（ミシガン州では他にフォード大統領がいます）。デトロイト・フリー・プレス（3/12）によれば、彼がウエストポイント（陸軍士官学校）を卒業し、デトロイトで軍務に従事していた1849～50年にかけて住んでいた家が、このたび都市再開発の関係で市内の別の場所に移されるそうです。もともと、場所が移るのは今回が初めてではないようです。戦争時代の活躍に比べ、大統領時代の評価は必ずしも高くありませんが、当時、1872年にワシントンを訪れた岩倉使節団とも会見しています。



第239話：デトロイトりんご会補習授業校卒業式

夏時間になり、ここ1週間で積もった雪もだいぶ解け春の気配を感じる季節となりました。そして、日本語補習校の卒業式・入学式の季節がまた巡って来ました。当館の管轄内のミシガン・オハイオ両州には8つの日本語補習校があります。今回、第一弾として3月14日に当地ノバイにある管内最大のデトロイトりんご会補習授業校の小学、中学、高校の卒業式に出席してきました。幼稚園を含め同校には900名を超える生徒が通っています。今回、小学68名、中学24名、高校2名の生徒が旅立ってきました。来賓として彼らの前途に期待するメッセージを伝えてきましたが、緊張の中にも将来に向かって希望あふれる若者たちを身近に見るのはとても嬉しく、こちらにも元気をもらいました。日本と米国の二つの文化・社会の中で教育を受けた彼らは、きっと将来、日本、米国、そして世界の中で大きく羽ばたいていくと思います。これから3月、4月に行われる各地の日本語補習校の卒業式・入学式に物理的に可能な限り出席し、直接激励しお祝いしたいと思います。



第240話：第22回ミシガン日本語クイズボウル

3月15日、イプシランティにあるイースタン・ミシガン大学で、総領事館も共催し今年22回目になるミシガン日本語クイズボウルが開かれ、出席してきました。州内14の中高校から46チームが参加し、私が出席した当日午後は、レベルに応じた5つのカテゴリーでそれぞれ2チームによる決勝戦が行われました。特に上級クラスはなかなかのハイレベルでした。数年ごとに各大学が持ち回りで会場になっていますが、このクイズボウルは、日本語を学んでいる中高生に具体的な目標やインセンティブを与えるとともに、問題作成や審査を行う大学の日本語科の先生にとっても、自分たちの大学では日本語をどのように学べるか中高生に宣伝する機会にもなり、日本語学習を促進する重要な役割を果たしていることを感じました。ミシガンでは現在、6,100名を超える学生・生徒がK-12及び大学で日本

語を学んでいます。イースタン・ミシガン大学をはじめ関係する先生がた、学生の皆さん準備ありがとうございました。



第241話：デトロイトりんご会補習授業校永年勤続者表彰式

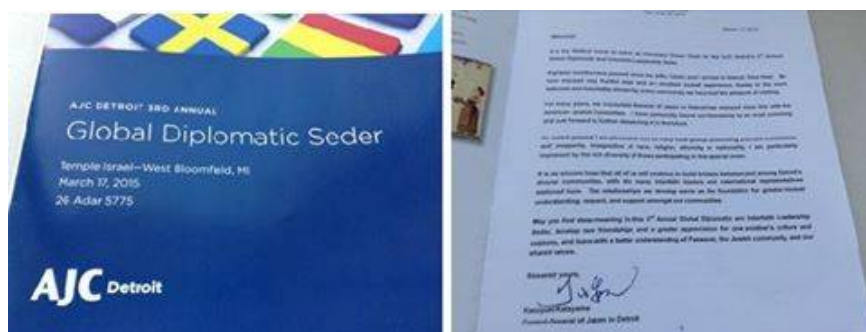
3月16日、総領事公邸でデトロイトりんご会補習授業校に長年勤続された現地採用講師の表彰式を行いました。アレンジや費用は学校側の負担で、公邸を表彰式の場所として提供し、江川理事長からの表彰状授与の後、直接私も対象者に記念品をお渡し、また、現地講師・職員の方々に直接感謝と慰労の言葉をお伝えする機会となりました。今回の対象者は、勤続20年以上の方をはじめ15年、10年そして5年の方で、出席されたのは20数名でしたが、その他の現地採用講師の方々を含め計50名近くに来て頂いた他、父母会や理事運営委員会、親子教室、そして総領事館関係者も加わり100名近い規模の盛大なレセプションになりました。在外公館では、優秀な現地スタッフをいかに活用しているかでそのパフォーマンスが大きく左右されます。そのことは、企業や学校でも同じだと思います。40数年前に数十名でスタートした補習校も、今や900名を擁する有数の学校となりました。補習校のこのような発展は、多くの現地採用講師・職員の方々の地道で情熱溢れる生徒への指導や学校事務によって支えられているということを再認識しました。総領事館も、公舎借料や現地採用講師の謝金の一部を補助していますが、引き続き最大限の支援を行っていきます。



第242話：「過越」のディナー

3月17日、地元のユダヤ系団体AJCの招待を受け、ウエスト・ブルームフィールドにあるイスラエル寺院で開かれたユダヤ教の「過越」にかかる外交 Seder デイナーに出席しました。昨年も出席しましたが、この1年の当館及び日本人コミュニティとユダヤ系コミュニティの関係強化を反映してか、今回はディナーの名誉議長として招待を受ける光栄に恵まれました。パンフレットの冒頭に挨拶文を寄稿したほか、当日のディナー冒頭、私の方から挨拶で、当地における異なった文化・宗教間の共存、日本人とユダヤ人がともに戦争の惨禍から立ち上がり、米国の同盟国として価値を共有しながら協力していること、過去1年の日本とイスラエルの首脳相互訪問を含む関係緊密化、私の郷里福山にある施設ホロコースト博物館のこと（創立者の牧師が40年以上前の欧州旅行中にアンネ・フランクの父親（オットー・フランク）と偶然出会ったことが設立のきっかけになったこと）等を挨拶で言及しました。Sederの特別料理をユダヤ人の歴史に思いを馳せながら、約80名の出席者（地元ユダヤ系コミュニティ代表、当地領事団等）と頂きました。

<https://www.facebook.com/cg.j.detroit.jp?ref=bookmarks>



第243話：大学での講演

今週は、2つの大学を訪問して学生や教員に対して講演を行いました。まず、3月16日にオークランド大学で「日本とミシガンの関係」について、次に、3月19日、ミシガン州立大学で「日中関係」について話しました。ともに50名ほどの熱心な参加者を前に、緊張しながらも話に熱が入りました。このような活動を通じて、地元の米国の若者や研究者に日本の外交政策や日本と地元との関係についてより正確に把握をしてもらい、日本語学習者を増やし、戦後70年を経て堅固な同盟を築き上げた日米関係を改めて認識して頂くきっかけになれば幸いです。1年半前に当地に赴任してから既に延べ40を超える大学を訪問しました。時間のある限り、ミシガン及びオハイオの各地の大学や団体の要請に応じて何う用意がありますので、気軽に総領事館に声をかけて下さい。



第244話：チリコシー市訪問

デトロイトから車で4時間あまり、オハイオ州南部にあるチリコシー市を3月20日訪問しました。人口2万人強の小さな町ですが、最初の州都が置かれたところ。この地域を管轄する南部オハイオ経済開発公社のクリス・メインゴールドCEOのアレンジにより今回の訪問が実現しました。先ず、進出日系企業 YSK Corporation を訪問。主にアルミダイカスト製品等を生産している自動車部品メーカーで約180名の雇用を生み出しています。昨年進出25周年を迎え、工場拡張の予定だそうです。

また、Adena Mannsion というトーマス・ワージントン第6代州知事のために建てられた邸宅を見学した後、夜は、地元選出州上院議員、下院議員や市長、連邦議員スタッフ、経済開発公社関係者等15、6名と懇談の機会を持ちました。皆さん日本企業の地元への貢献を高く評価していたのが印象的でした。

今回の訪問を、日本と現地との更なる強い結びつきに繋げていきたいと思います。



第245話：ローゼンバーガー・オハイオ州下院議長との朝食会

3月21日の朝、コロンバス市内でローゼンバーガー・オハイオ州下院議長(共)から朝食会に招待され懇談しました。議長は、1981年生まれの歴代で最も若いオハイオ州下院議長です。空軍に12年務め、ブッシュ政権やロムニーの大統領選キャンペーンにも関係していました。私から、最大外国投資国である日本のオハイオにおけるプレゼンス、そして、議長の選挙区(91区)にも6箇所日系企業の拠点があり、2千人以上の雇用を創出している事などを説明しました。議長からは、日本との関係の更なる強化につき強い意欲が示され、まだ一度も日本に行かれたことがないそうで、是非、機会を見て訪日したいとの話がありました。



第246話：コロンバス日本語補習校の卒業式

3月21日、補習校の向かいにあるワージントンの地元高校の講堂を借りて、コロンバス日本語補習校の卒業式が盛大に行われました。今回は、小学生40名、中学生30名、高校生4名が旅立って行きました。卒業生が一人一人凛々しく証書を受け取るの姿を見ていると、彼らが社会人となる頃には、更に厳しさを増すであろう日本を取り巻く内外の環境の中で、立派に舵取りをしてくれるであろうと希望が持てました。来賓の一人として出席されたスコット・ホルムズ市長は、昨年初訪日されましたが、強い印象を受けてこられたそうです。知日家の市長をはじめ地元の温かい支援によって日本語補習校は成り立っています。



第247話：在留邦人数・日系企業進出等調査結果

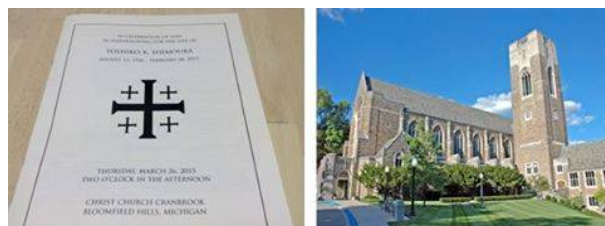
毎年行っている在留邦人数・日系企業進出等の最新調査結果が判明しました。昨年10月現在、ミシガン州進出日系企業拠点数は487箇所（対前年比+6）、雇用数38,339名（+552名）。オハイオ州はそれぞれ422カ所（-8）、70,985名（+1,464名）で、両州とも大部分が自動車関係ですが、最近着実に雇用創出数も増えています。在留邦人数も、ミシガンが12,828名、オハイオ州が12,843名とほぼ拮抗しながら近年増加傾向です。日本への関心の高さは、学校教育での日本語学習者数にも反映されています。昨年秋学期時点で、ミシガン州では高校以下で56校・4,091名が、大学では17校・2,038名が日本語を勉強しています。オハイオ州では、それぞれ、16校・860名、25校・2,251名です。両州で約1万名近くの学生が学校で日本語を勉強しているのは将来の日米関係を考える上で勇気づけられる数字です。オハイオ州のK-12レベルでは更に拡大の潜在力があると思います。

各調査結果は当館ホームページからご覧頂けます。

こちら：http://www.detroit.us.emb-japan.go.jp/index_j.htm

第248話：トシコ・シモウラ氏のメモリアル・サービス

3月26日、公邸にほど近いクライスト・チャーチ・克蘭ブルックでトシコ・シモウラ氏のメモリアル・サービスが行われ、たくさんの関係者が集まりました。シモウラ氏は、1926年にカリフォルニアに生まれた日系アメリカ人で、戦時中には日系人収容所での苦難の経験もされました。カリフォルニア大学バーレークレーを卒業。ミシガンに移り住んで以降は、日系米国人協会（JACL）デトロイト支部長、イケバナ・インターナショナル・デトロイト支部長等の活動を通じて、日米文化交流の懸け橋となり、また、日系米国人の地位向上のために尽力されました。昨年、米寿を迎えられ、また、長年の貢献に対して岸田外務大臣から大臣表彰を受けられ、ますますお元気に活躍されている矢先の一時帰国中の突然の死に、ただただ驚きと哀しみを禁じ得ません。シモウラ氏のような先人の地道な努力により、日本とミシガン、そして日米関係が戦後70年を経て今日のような堅固な同盟関係へと発展したことを改めて痛感しました。シモウラ氏の遺志を継いで関係の更なる発展に努めたいと思います。



第249話：ミシガン日本語スピーチコンテスト

3月28日、ノバイ市庁舎でミシガン日本語スピーチコンテストが開かれました。今年は、コンテスト開始20年目になります。高校の部5名、大学の部10名の計15名の予選通過者が、それぞれ熱戦の火花を散らしました。日本旅行や日々の自身の体験を織り交ぜながら、日頃の学習の成果を元気よく発表した高校生出場者に続いて、特に大学の部は、とてもレベルの高い内容でした。アニメとひきこもり、カプセルホテルの経験、日本留学中に度々警察に誰何された話、平家物語に感動した話等多岐にわたる硬軟様々な話題を印象的にまとめて、説得力を持って語りかける学生たちに感動しました。日本に興味を抱き日本語を勉強してくれている彼らに感謝するとともに、可能な限り側面支援したい気持ちです。スピーチコンテストに協力頂いているJBSD、ミシガン日本語教師会、当地日米協会、国際交流基金、デルタ航空などの各団体に改めて感謝します。来年は、もっと多くの高校生の挑戦を楽しみに待っています。



第250話：ノバイ教育基金ガラディナー

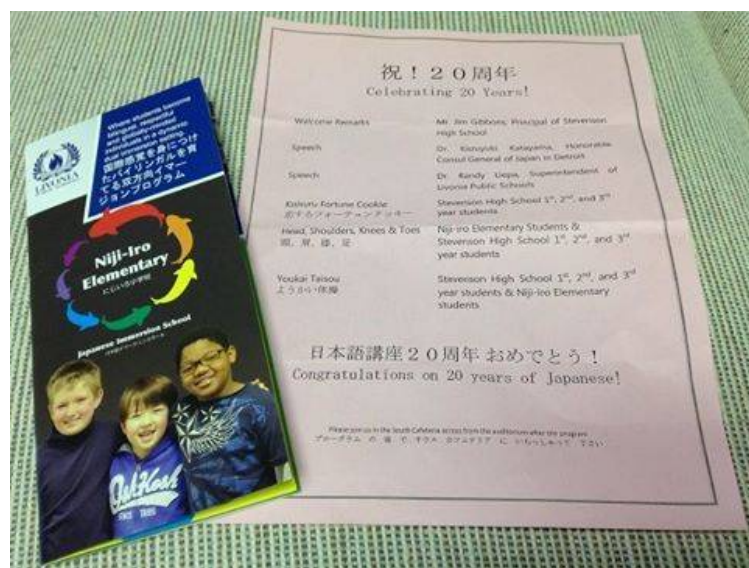
3月28日、昨年に引き続きノバイ教育基金のグリーン・ガラディナーに出席し、基金へのささやかな協力を行うとともに、挨拶の機会を得て、日本人コミュニティを代表して地元教育関係者及びそれを支えている地元の人たちに感謝のメッセージを伝えました。ノバイの在留邦人は3千3百名、約400名の子 弟が地元の公立学校に通っている他、ノバイの学校を借用して運営している日本語補習校には幼稚園から高校まで約900名の生徒が通っています。このように、ノバイは管内最大の在留邦人居住都市として日本人に素晴らしい教育環境を提供して頂いており、同じコミュニティの一員として我々日本人も官民あがて 最大限当地の教育環境の更なる向上のため、地元の米国人と協力しながら引き続き努力していきたいと考えています。



第251話：スティーブソン高校（リボニア）日本語コース設置20周年

3月31日、デトロイト郊外の町リボニアにあるスティーブソン高校に日本語コースが設置されて20周年の記念式典に出席して祝辞を述べました。リエパ 学校区教育長、ギボンズ校長、テイラー先生、日本語を学んでいる高校生、教育委員会委員、保護者、そして日本語イマージョン教育を行っているリボニア学校 区にある「にじいろ」小学校の生徒も交えて楽しい一時を過ごしました。生徒（現在20数名が同高校で日本語を勉強）の日本語学習への関心と先生の長年にわたる情熱に支えられて20周年を迎えたことは、総領事館としても大きな喜びであり、可能な限り支援していきたいと思います。スティーブソン高校はミシガン州の日本語スピーチコンテストやクイズボウルの常連校です。

また、にじいろ小学校は昨年開校されましたが、全米でも30に満たない日本語イマージョン教育の小学校です。にじいろ小学校が使っている校舎には、かつてヒノキ・インターナショナルというイマージョン教育のチャーター・スクールがありましたが、同校も来学年からファーマントン・ヒルズに場所を移して再開すると聞いています。ミシガン州にはK-12で56校、大学で17校で日本語コースが開設され6,100名の学生が学んでいます。将来の日米交流を担う貴重な人材です。



第252話：領事団サッカー・トーナメント関係者を招待したレセプション

4月1日、領事団サッカー・トーナメント関係者を公邸に招待してレセプションを行いました。このトーナメントは、メキシコ領事館、ウエイン州立大学、会場となるポンティアックのサッカー・アリーナが共催で毎年秋に開かれており、昨年は第7回を重ね、16チームが出場しました。日本チームは主に若手企業駐在員より構成されていますが、以前も報告したとおり水準の高いチームで昨年のトーナメントでは3位に輝きました（優勝は米国チーム）。本レセプションは、日本チームの健闘を称え、大会関係者に感謝し慰労する目的で日本チーム、上記3共催団体の代表、そして組織運営責任者等を招待しました。日本チーム、是非 今年は優勝して下さい。応援しています。



第253話：クリーブランド日本語補習校入学式

4月4日、クリーブランド日本語補習校の入学式に行ってきました。幼稚園6名、小学一年生7名、中学一年生5名、高校一年生3名。幼稚園児から高校生までを前に気の利いた話をするのは、大学で講演するより難しいですが、入学式では、彼らの初々しい姿にいつも感銘を受けます。義務教育生徒が100名を割っているので、現在文科省派遣の先生はいませんが、斎藤校長以下の現地講師(全て女性)や大谷運営委員長、佐坂次期委員長他運営委員会や保護者、地元関係者に支えられしっかりと運営されています。最近、日本の青少年読書感想文全国コンクールで、同校及び同校生徒が受賞するという快挙もありました。入学式後の総会冒頭、保護者の方々に総領事館の活動報告をさせて頂きました。朝4時半に眠い目を擦りながら起床して駆けつけましたが、お蔭で、道中、月食を車中から眺める貴重な経験もす



ることができました。

第254話：ミシガン州立大学、惜しくも準決勝で敗退

4月4日、インディアナポリスでNCAA（全米体育協会）主催男子バスケットボール大会の準決勝が行われ、ミシガン州立大学スパルタンズは惜しくも デューク大学に61対81で敗退しました。大会は、トーナメント方式で、レギュラー・シーズンの成績優秀校68校が4つの地区で先ずトーナメントを行い、各地区優勝校4校がファイナル・フォーとして準決勝、決勝を戦う形式で、計7回戦のトーナメントです（但し、60校は2回戦から）。スパルタンズはレギュラー・シーズンではビッグ・テン・コンファレンスの3位に甘んじていましたが、全米大学一を決めるトーナメントは準決勝戦まで4回勝ち抜いてきていました。ちなみに、スパルタンズは過去2回（1979年、2000年）優勝に輝く強豪チームです。79年の優勝時は、マジック・ジョンソンが中心メンバーでした。今回は、優勝まで今一歩でしたが、来シーズンを期待しましょう。バスケットにしるアメリカン・フットボールにしる、最近ではウォルヴァリンズ（ミシガン大学）よりスパルタンズの方の活躍が目立ちますね。



第255話：マキノー島のグランドホテル

iTunes で映画「Somewhere in Time」(ある日どこかで) (1980) をレンタルして鑑賞したら、舞台がミシガン州マキノー島にあるグランドホテルでした。スーパーマンでも有名だったクリストファー・リーヴとジェーン・シーモアが主演の映画で、リーヴ扮する脚本家が、1980年の「現代」から1912年にタイムスリップし、シーモア 演ずる女優に会いに行く話です。映画では、脚本家がシカゴから車を運転するといつの間にかグランドホテルに着くことになっていますが、実際のマキノー島は一般車の乗り入れが禁止されており、対岸の半島の駐車場に車を止め、フェリーで島に到着、島内は馬車や自転車交通手段です。グランドホテルは、マキノー 島を代表するホテルで1887年にオープン、1989年には、国の歴史ランドマークに指定されています。特に有名なのがフロント・ポーチで世界最長、660フィート（200メートル強）あります。冬期はヒューロン湖も氷結し、閉鎖。営業は5月から10月末頃までです。私も昨シーズンに出張と個人旅行で 二回マキノー島を訪れ、一回は、グランドホテルに宿泊しました。かつて多くの日本人にとって海外旅行が夢であった時代、「兼高かおる世界の旅」というテレビ番組で世界各地を旅していた兼高かおるさんもこの地を再訪したい場所として特に推薦されていると読んだことがあります。費用が少し張りますが、まだ行かれていない方は、一度記念に泊まられては如何でしょうか。



第256話：オハイオ州立大学での講演

4月7日、オハイオ州コロンバスにあるオハイオ州立大学日本研究所に招かれ、学生・教員等約40名に対して、最近の日米関係及び日本とオハイオの関係について、特に日本語を勉強している学生の励みになる話に焦点を当てて講演しました。1年半前に赴任してから、既に延べ30程度の大学を訪問しました。若い人達と触れ合い、意見交換するのはいつも刺激的です。また、講演の機会を与えられると、特定テーマについて、自分の考えを整理する上でも良い機会となります。講演後の質疑応答では、海外の日本研究強化のための最近の日本政府の取り組みや人口減少の中での移民政策などのなかなか難しい質問も出されました。



第257話：内田光子&クリーブランド管弦楽団（昨年に続き）

4月9日、昨年に続き、今年もQEDの藤田浩之CEO（クリーブランド管弦楽団の理事であり、このコンサートのスポンサー）の招待により、クリーブランドのコンサートホールで行われたピアニスト内田光子氏と同管弦楽団の共演によるコンサートを堪能しました。同管弦楽団は、NYフィルハーモニック、シカゴ交響楽団、ボストン交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団とともに米国の5大オーケストラ(Big Five)の一つに数えられています。クリーブランドもデトロイト同様、かつて栄えた産業が衰退し都市再生という共通の課題を抱えている都市ですが、この管弦楽団といい、美術館といい、優れた文化遺産を保有していることは大きな強みです。確か、年始めのニューヨーク・タイムズの日曜版に、2015年に訪れるべき世界の都市ベスト50だったか100だったかの中にリストアップされていたと記憶しています。この晩は、モーツァルトのピアノ協奏曲第6番、交響曲第34番、ピアノ協奏曲第26番を堪能しました。また、コンサートの前に、ホール内のレストランで藤田CEOやGary Hanson同管弦楽団団長（Executive Director）他関係者と食事をしながら談笑し、コンサート後には楽屋で再び内田光子氏と少しお話する光栄にも浴しました。インターミッションでは日本人楽団員ともお話できました。全部で5人の演奏家がクリーブランド管弦楽団で活躍されているそうです。



第258話：デトロイト公共図書館

4月10日、デトロイト公共図書館を訪問し、館長やファウンデーション理事長他より館内を案内してもらいました。同図書館は、1865年に設立され今年150周年を迎えました。1865年といえば南北戦争の終わった年です。この本部の他、市内に22の支部が点在しているそうです。蔵書数ではミシガン州内でミシガン大学図書館に次ぐとか。1920年代に建てられた現在の建物は、当時のデトロイトの繁栄を反映してか荘厳なつくりで、壁や天井、ステンドグラス等に巧みな細工が施されています。書籍の他に、貴重な文物も保管しており、「大草原の小さな家」で有名なローラ・インガルス・ワイルダーの自筆草稿や、チャールズ・ウォーレン(Charles Beecher Warren)大使(ミシガン州ベイシティー出身。1921-22年に駐日大使)が日本人から贈られた花瓶、デトロイト・タイガースの解説者として地元では知らぬ人はいないアーニー・ハウエルが生前持っていた野球関連のグッズを図書館に寄贈してできた特別コーナー(ちなみに、イチローから贈られた署名入りの本とグラブもありました)等なかなか興味深い貴重な物も置いてあります。識字率の低い市内の子供たちへの取り組みにも力を入れています。ウッドワード・アベニューを挟んでデトロイト美術館(DIA)の真正面にありますので、是非立ち寄ってみてください。貸し出しは市民か会員でないとできませんが、館内入場は誰でも可能です。



第259話：トリド日本人補習校入学式

4月11日、オハイオ州トリドにある日本人補習校の入学式に出席しました。今春の管内補習校の一連の卒業式・入学式に出席する行事としては最後になります。小学一年生5名、中学一年生11名、入学式の新鮮な気持ちを忘れないで頑張ってください。式の後で、小学高学年、中学・高校生の2グループとそれぞれ意見交換の場を持ちました。同校は、義務教育生徒が100名に達していないため文部科学

省から校長の派遣を受けていませんが、現地採用教師の熱心な指導と 関係する企業に支えられています。総領事館からも校舎借料や教師給与の一部補助を行っています。世界各地に日本人の子供達が生活しています。彼らにしっかりと日本の教育を受ける機会を与えることは、将来の日本にとって本当に大事なことだと思います。ちなみに、この学校の校歌「勇気」は、かつて「あみん」で活躍した岡村孝子さんによって5年ほど前に作られたものです。



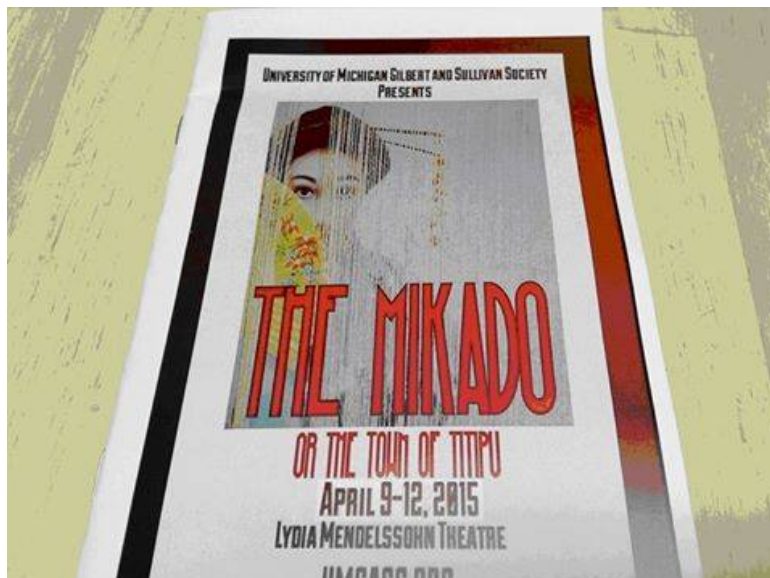
第260話：中部州日本語教師会年次会議

4月11日、オハイオ州フィンドレー大学で開催された中部日本語教師会年次会議に来賓として出席しました。国際交流基金や当館の調査によれば、海外、米国そして管内のオハイオ、ミシガン両州の日本語学習者数は、着実に増えていますが、細かく見ていくと色々な課題が見えてきます。中国語学習者が増えるのは歓迎ですが、それが、日本語学習者数に負の影響をもたらさないよう環境整備をする必要があります。全米日本語教師会会長の田伏先生(イースタン・ミシガン州立大学)のプレゼンでは、その他、日本語教師の高齢化、ポストの減少、大学授業料の高騰、インターネット学習等技術の変化への対応等克服すべき問題が指摘されていました。大使館・総領事館との連携協力の必要性を強調されましたが、当館としても日本語教師会、地元関係当局、学校、日系企業とネットワークを強化して、支援を最大限行います。フィンドレー大学訪問は、二度目ですが、会議の前に、フェル学長とも御自宅で再会し楽しくお話しした他、埼玉県の派遣で来ている日本の大学生3名とも意見交換できました。今回の訪問及び会議のアレンジに尽力頂いた川村先生に感謝します。

第261話：オペレッタ「ミカド」

4月12日、アナーバーにあるミシガン大学ギルバート・アンド・サリバン・ソサエティーによるオペレッタ「ミカド」が同大学リディア・メンデススゾーン劇場で上演され、地元ハーバード同窓会のアレンジに参加して観に行きました。ミカドはもちろん日本の天皇のことですが、日本の首都はティティプー、皇太子はナンキ・プー、恋に落ちた美しい娘はヤムヤム、彼女の後見人はココと、日本人にとっては違和感のある名前のオンパレードで(ティティプーについては「秩父」という説もあるそうですが)、

作品中の服装や所作も日本人から見れば突っ込みどころ満載ですが、19世紀末に初上演された同作品は、日本の真の姿を描くことが目的ではなく、ジャポニズムが流行した当時の英国で、日本を借りながら、実は、英国社会の階級制度や官僚主義を揶揄したもののようです。楽曲では、「宮さん、宮さん」もいきなり冒頭で出てきます。ギルバート脚本、サリバン作曲の二幕物のオペレッタですが、ミシガン大学ギルバート・アンド・サリバン・ソサエティーによる上演の故か、慣例により上演前に起立による「God Save the Queen」の斉唱があったのには驚きました。上演後、アナーバーの町を少し散策しましたが、美しく広大なキャンパスと歩いて楽しめる街並みのあるこの町はいつ来てもとても魅力的です。



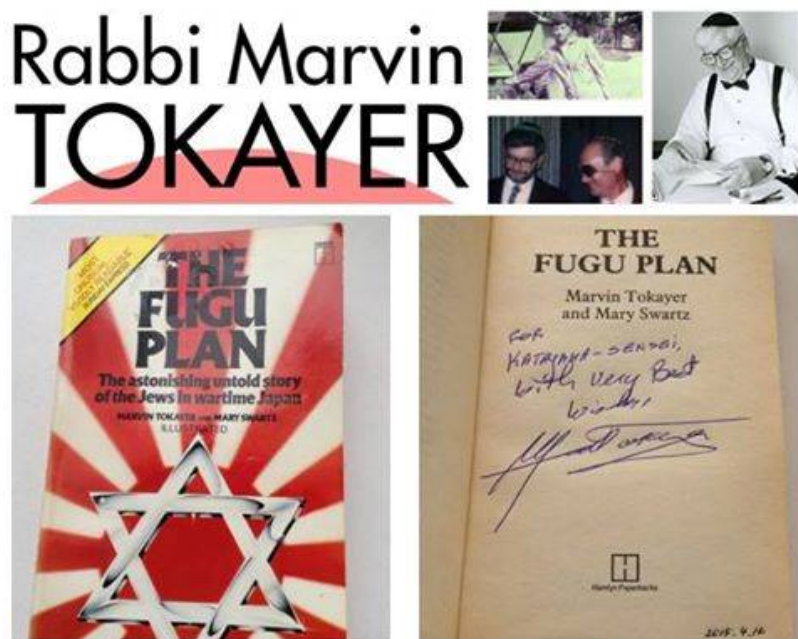
第262話：JASCO年次レセプション

JASCO（セントラルオハイオ日米協会）の年次レセプションが、オハイオ州コロンバスで行われ、昨年に引き続いて出席してきました。JASCOは、今年春で設立18周年を迎えました。日本語スピーチコンテストや、経済セミナー、日本政府派遣のミッションの現地での受け入れ、レセプション等、各種日米交流事業のこの地域での要として、また、当館管内（オハイオ、ミシガン）にある3つの日米協会の一つとして総領事館と二人三脚で活動して頂いています。当日はキンザー会長、庄司次期会長、福澤事務局長はじめ日米協会関係者の他、JobsOhio（オハイオ経済開発公社）、オハイオ最大の在留邦人居住都市ダブリン市長他日米の多くの関係者に来て頂きました。皆さん、日米交流に日頃より尽力頂き本当にありがとうございます。



第263話：ラビの講演

4月16日、ウエスト・ブルームフィールドにあるユダヤ・コミュニティー・センターでラビのマーヴィン・トケイヤー氏による杉原千畝のビザ発給や旧満州 国へのユダヤ移民計画(いわゆるフグ計画)等についての非常に興味深い講演がありました。ユダヤ系の友人夫妻に招かれ、私たち夫婦も参加し、ラビの隣に席 を用意して頂きみなさんの前で紹介を受けました。トケイヤー氏は、かつて米空軍に所属して福岡板付空港で勤務しており、その後、ラビとして 60-70 年代 の日本に 10 年近く生活されました。私は、高校時代、彼の著した「日本人は死んだ」という本を読んだ記憶があり、40 年近くを経て著者とデトロイト郊外で お会いするのは不思議な縁です。80 歳近くのお歳ですが、とてもエネルギッシュで、当時のユダヤ難民が置かれた状況、杉原千畝の決断、日本政府のユダヤ植 民計画、米国ユダヤ組織の反応、日露戦争でのユダヤ系資本家シフの役割、日本人の一般的なユダヤ観などにつき、ユダヤ系を中心とする米国人の聴衆にとっても 深い印象を残す講演内容でした。第三者をして日本を語らしめることのインパクトを感じる講演でした。聴衆の中には、父親が杉原サバイバーであった方もおり、涙ながらに日本への感謝をして頂き、胸にジンとききました。



第264話：在外公館長表彰

4月17日、オハイオ州ダブリン(在留邦人 2200 名を抱えるオハイオ最大の邦人居住都市)にある HIDAKA. U. S. A. で恒例の桜を見る会が開か れました。青空の広がる心地良い春の日和で、しかも、昨年は、厳冬のせいで桜の花を愛でることがほとんどできませんでしたが、今年は工場の敷地に植えられて いる 100 本以上の桜の多くが美しい花をつけて満開でした。日高義博社長は、当地に進出して約 26 年間にわたり本業のビジネスのみならず、地元との交流 活動に努められ、工場の敷地を開放して地元関係者を招待して毎年桜を見る会を開催されています。昨年には、ダブリン商工会議所から”2014 Business Person of the Year” にも選ばれました。私がダブリンに出張する際にも、市長他地元要路との関係構

築を手助けして頂いています。今回、桜を見る会開催の機会を捉え、最近外務省の招きで訪日したキーン市長同席の下で、日高社長に在外公館長（総領事）表彰を行わせて頂くことができました。日高社長、今後とも日本とセントラル・オハイオとの交流のために力を貸してください。



第265話：BGSU 桜祭り

4月18日、オハイオ州ボーリング・グリーンにある州立大学(BGSU)で恒例の桜祭りがありました。今年で14回目を数えます。前日訪れたダブリンでは満開でしたが、同じオハイオでも少し北に位置するBGSUではまだ少し早いようでした。しかし、会場のホールでは700名を越す参加者で満員でした。書道、折紙、伝統的な遊び、餅つき、太鼓、武道、日本舞踊、寿司、茶道など日本文化盛り沢山の行事でした。大学当局、日本語を学ぶ学生、市政府、その他の関係者に感謝します。特にカワノ＝ジョーンズ教授の長年に亘る献身的な取り組みなしにはこの行事の発展と成功はなかったと思います。カワノ先生に改めて敬意を表します。参加者の皆さんは、春の週末、しばし日本文化に触れた一夜を過ごされたのではないのでしょうか。



第266話：ACCESS 年次ディナー

4月25日、デトロイト市内ダウタウンにあるマリオット・ルネッサンス・センターで ACCESS (Arab Community Center for Economic and Social Services) の年次ディナーが催され、昨年に引き続き私も実行委員会の名誉委員に名前を連ね、当日の行事に出席しました。今年は44回目で、毎年約1700名の参加者で賑わうそうです。ジョン・ディンゲル前連邦下院議員、ブレンダ・ローレンス連邦下院議員、マイク・ダガン市長等多くの要人も出席していました。メトロ・デトロイト地域は米国でも有数のアラブ系人口を抱え、特に集中率では全米一です。ACCESS は、低収入の家族や新たな移民の生活を支援し、アラブ文化への理解を促進することによりアラブ系米国人コミュニティの発展を目指す組織です。社会、健康、教育、芸術、雇用、法律、医療等のサービスを提供しています。この地域は、多くの異なった民族による多様性によって社会がダイナミックに発展している米国が凝縮されている場所と言えます。



第267話：DACクラブハウス100周年

DAC (デトロイト・アスレティック・クラブ) は、デトロイト市内にある米国を代表する社交クラブの一つですが、もともと1887年に青年スポーツマンのグループによってウッドワード通りに設立されました。その後、1915年にネオ・ルネサンス様式の現在のクラブハウスがマディソン通りに開かれ、最近1年ほどのリノベーションを経て、このたびクラブハウス100周年を迎えました。クラブハウス内にはレストラン、バー、レセプション会場、会議室、図書館、宿泊施設、プール、ジム等各种揃っており、色々な行事が行われます。シーズン中にはタイガースの試合をここからも眺めることができます。試合前には裏庭で テールゲート・パーティーも開かれます。私も当地に着任してまもなく、クラブを見学し、会食や当地要路とのネットワーク構築に有益と考え、推薦人を得て面接を経て個人的に会員となりました。現在の会員数は4千名を超えています。4月25日の夜、その100周年を記念する盛大な行事がクラブハウス内で行われ 参加しました。DEC (デトロイト経済クラブ)、デトロイト商工会議所とともに、各分野で活躍しながらデトロイト地域を支えている人々の集まりです。



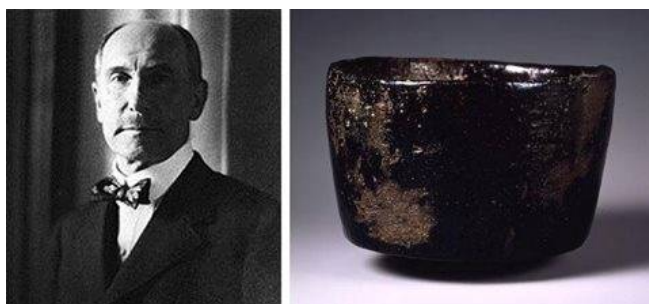
第268話：山中商会とチャールズ・フリーア

NY在住のジャーナリスト朽木ゆり子氏をフリーア・ハウスが招聘し、4月26日、DIA（デトロイト美術館）で山中商会とチャールズ・フリーアについての講演が開かれました。朽木氏にはフェルメールやゴッホをはじめ美術にまつわる多くの著作がありますが、その中で、「ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝 を欧米に売った美術商」（新潮社 2011）は、当日の講演に直接関わるテーマでした。山中商会（山中定次郎）は、明治から戦前にかけてロックフェラー等 世界の富豪に日本の美術品を販売した会社で、一時はNY、ボストン、ロンドン、パリ、北京、シカゴ等に支店や出張所を持っていました。フリーアも同商会の重要な顧客でした。残念ながら、日米開戦で資産は処分されコレクションはすべて売り払われたそうです。朽木氏は7年間の取材を通じて、上記書物を著しましたが、直接作者から話を伺う貴重な機会でした。英語での講演は初めてだそうです。スライドを使用して、非常に興味深い啓発されるプレゼンテーションでした。ブラウンリー日米協会会長、中畔JBSD（デトロイト日本人商工会）会長他、多くの関係者が集まりました。なお、講演に先立つ24日、公邸に朽木氏 他フリーア・ハウスやDIA関係者を招待し楽しく刺激的な夕食会の一時を持たせて頂きました。



第269話：フリーアと光悦

京都市北区に江戸時代の芸術家本阿弥光悦ゆかりの光悦寺という寺院があります。そこに、デトロイト出身の実業家でワシントンのフリーア・ギャラリーで有名なチャールズ・フリーアの顕彰碑が立っています。光悦は、俵屋宗達、尾形光琳とともに琳派の創始者のひとりですが、フリーアは、特に光悦の作品の愛好者で、フリーア・ギャラリーにも彼が収集した光悦の茶碗等が収蔵されています。彼は、来日の際に、よく光悦寺にある光悦の墓に参っていたそうです。フリーアは1919年に亡くなりますが、光悦の作品の価値を見出した米国人として、境内には、彼の顕彰碑が1930年に建立され、当時のキャッスル（William Castle, Jr.）駐日米国大使が除幕式に訪れています。それから85年が経ち、現在は、石碑も苔むし、木々に覆われてお寺の関係者も知る人が少ないと聞いています。デトロイトのフリーア・ハウスでは、顕彰碑の整備事業を支援し、完成の暁には可能であればキャロライン・ケネディー大使に式典に参列して頂くよう働きかけようとの動きが始まっています。是非、顕彰碑が再び整備され、デトロイト出身のフリーアと光悦との関係が日米の国民に再認識されたと心から願います。



第270話：アルデン B. ダウ 科学美術博物館の展覧会

4月25日、世界最大級の化学メーカーであるダウ・ケミカルの本拠地があるミッドランド市内のアルデン B. ダウ科学美術館で「Integrated Patterns: Structured Abstraction」（統合されたパターン：構造化された抽象化）と題する展覧会のオープニングが催されました。タイトルは、難解ですが、要は一つのモチーフやパターンを反復したり組み合わせたりしながら抽象的な作品に仕上げられたものです。展覧会を見学した人によれば、アーティストの閃きや、モチーフや素材の取り合わせの意外性にハッとしたり、新しい発見があって、ユニークで楽しいそうです。その展覧会に今回ミシガン在住の日本人アーティスト・山下 ランカー弘子（Hiroko Lancour）氏の作品も展示されています。彼女は長年勤めた米企業を退職後、2014年、Wayne State University で美術の修士号を取得。心にいつも温めてきたアーティストとしての出発を果たしました。彼女の作品は、刺し子や染め物といった日本の伝統工芸の要素がより現代的に洗練された形でよみがえったようで、畳の日本間に飾っても違和感のない素敵なものだといいました。展覧会は6月26日まで。私も機会を見て是非拝見したいと思います。ミッドランドでは、他にダウ・ケミカル創始者の息子で建築家である Alden Dow の建てた The Alden B Dow House and Studio があり、全米歴史的住居のトップ25にも選ばれたそうですので、併せて見学されたらどうでしょうか。



第271話：田中欣二氏への叙勲

シンシナティ地域在住の田中欣二氏（シンシナティ日本研究センター所長）に対して、このたび、日米相互理解促進への功労として旭日双光章の授賞が決められました。おめでとうございます。デトロイト総領事館管内から叙勲の対象者が出たことをとても喜ばしく、また、誇りに思います。勲章伝達式は5月15日に外務省において行われ、引き続き宮中にて天皇陛下への拝謁が予定されています。田中氏は、1981年に同センターを設立し現在も所長を務められている他、シンシナティ商工会議所日本特別顧問、日本語補習校の初代校長等の重職を通じて地元社会及び日本人コミュニティに貢献されました。同氏は、また、シンシナティゆかりのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）や陶芸家白山谷喜太郎についての研究を続けられその数々の成果を発表されています。私も昨年シンシナティを訪問した際に、田中ご夫妻の案内でいろいろな話を伺い、ゆかりの場所を見学するなど勉強させて頂きました。今後ともご指導をお願いします。



きよくじつそうこうしょう
旭日双光章

第272話：カナダ総督の来訪

デイヴィッド・ロイド・ジョンストン・カナダ総督がデトロイトに来訪され、4月29日、デトロイト美術館（DIA）でカナダ総領事主催のレセプションが行われたので私も出席しました。カナダ総督は、国家元首であるエリザベス女王のカナダにおける名代です。立法権は議会、行政権は首相や内閣にあるので、総督の実際上の権限は限定されています。形式上女王に任命されますが、実際は、カナダ首相の指名に基づきます。過去、総督は英国系白人男性から、最近は、仏系、女性、アジア系、黒人系とカナダ国民の多様性に配慮した人選が行われているようです。ジョンストン総督は第28代で2010年に就任されました。いくつかの大学のロー・スクールで教鞭をとり、大学の学長も務めた法学者です。慣例上任期は5年が目安だとか。レセプションの席でご挨拶したら、かつて学長時代に訪日されたことがあり、そのことを懐かしく話されていました。



第273話：アジア太平洋系米国人月間

5月は、全米で「アジア太平洋系米国人月間」（Asian Pacific American Heritage Month）とされています。この月には、多様なアジア太平洋系の人々が暮らしているミシガンでも関連する各種の文化・伝統行事が予定されています。その最初の日である5月1日に、公邸に60名を越える各種アジア太平洋系団体（MAPAAC, APACC, CAPA, JBSD, JETRO 等）の代表や州政府関係者を招待し、レセプションを行いました。日系米国人は当地では少数ですが、在留邦人は州内に1万3千名近く住んでいます。このレセプションが、同じコミュニティの一員である日本人のアジア太平洋系米国人への連帯と協力を示すものとして参加者に受け取って頂けたら有り難いです。ちなみに、5月が選ばれたのは、最初の日本人移民（ジョン万次郎）が米国に到着したのが1843年5月、また、主に中国人労働者によって建設された大陸横断鉄道の完成が1869年5月ということが背景にあるそうです。



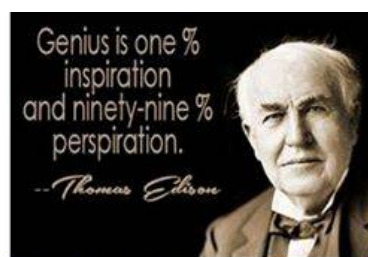
第274話：オハイオのアーミッシュ村

5月2－3日、一泊二日でアーミッシュ村を訪ねてきました。オハイオ州ホームズ（Holmes）郡は、人口4万2千人余りの州中央部に位置する郡ですが、ここを中心に、その周辺部にかけて4万人近いアーミッシュが居住しており、「アーミッシュ・カントリー」と呼ばれています。ペンシルベニアとともに、アーミッシュの入植地が最も集中している地域です。コミュニティの中心ベルリンをはじめ、ミルズバーグ、ウォールナット・クリーク、チャーム、マウント・ホープ等の小さな町や村では、処々に質素な服装と黒い馬車（バギー）のあるアーミッシュの牧歌的な生活が垣間見られます。観光客が集まるので、工芸品展や骨董屋、蚤の市や伝統的な料理店等も集まっています。晴天で気温も27度くらいまで上がり、とても気持ちの良い田園気分を味わいました。



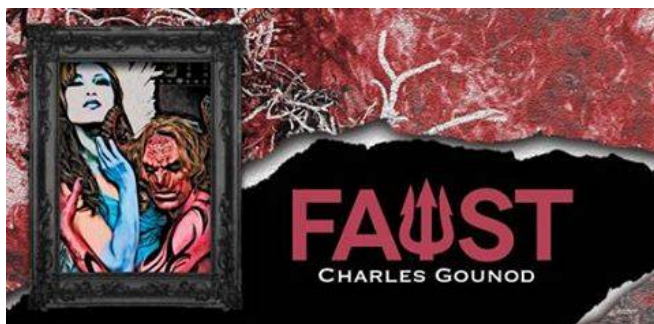
第275話：トマス・エジソンとオハイオ

オハイオのアーミッシュ村を訪ねる途中、道路標識に「トマス・エジソンの生家」の看板を見つけ、時間があつたので案内に沿って、大きな道はずれ Milan（マイラン）という人口1500人足らずのとてもチャーミングな小さい村に到着しました。エジソンは、この村で7人の子供の末っ子として1847年に生まれ、7歳まで住んでいました（ミシガン州ポートヒューロンにもその直後に移り住んでいます）。後に自動車王となるヘンリー・フォードは、19世紀末にエジソン電燈会社の社員であつた時があり、二人の間には生涯交友があつたそうです。エジソンの生家は、レンガ建てのこじんまりとした平屋で、その隣が博物館になっています。残念ながら、到着した時間が早すぎて中を見学することができなかったのは残念でした。ちなみに、マイラン村は、京都府八幡市と友好都市提携を結んでいます。両者にはエジソンが八幡産の竹をフィラメントに使って白熱電球の実用化に成功したという縁があります。



第276話：オペラ「ファウスト」

5月3日、我々夫妻は、フランス名誉総領事の招待を受け、あるフランス人CEOの自宅で、近くデトロイト・オペラ・ハウスで上演予定の「ファウスト」に出演する男女4名のオペラ歌手を呼んでのプレビューに参加しました。自宅のサロンに50名程の客を招待してこのような催しをやるなんて日本人と発想が違いますね。住んでいる家の規模も収入も違いますが。ファウストは、シャルル・グノーが作曲した全5幕のオペラで、初演は1859年。元になったのは、言わずと知れたドイツの文豪ゲーテのファウストの第一部です。オペラの方は、フランス語です。ちなみに、このオペラは、日本で最初に上演されたオペラだそうで（1894年）、その日、11月24日は、日本では、「オペラの日」とされているそうです。劇場以外でオペラのさわりを鑑賞したのは初めてですが、歌手のつばきが飛んで来そうな距離での迫力は凄かったです。



第277話：安倍総理の米国公式訪問

安倍総理は、4月26日から5月3日まで米国を公式訪問し、ボストン、ワシントンDC、サンフランシスコ、ロサンゼルス各地を訪問しました。28日にはワシントンで日米首脳会談が行われ、会談終了後、「日米共同ビジョン声明」が発出され、総理とオバマ大統領は共同記者会見に臨みました。前日の27日には、ニューヨークで開かれた「2+2」（日米の外務・防衛閣僚間の会議）において、新たな安全保障環境を踏まえ、「日米防衛協力のための指針」いわゆるガイドラインが18年ぶりに改定され、「切れ目のない」日米防衛協力の強化が盛り込まれました。そして、今回のハイライトの一つは、29日に行われた日本の総理として初めての上下両院合同会議での演説でした。「希望の同盟へ」と題されたその演説は、総理が若い頃、留学及び駐在で触れた米国社会への熱い思い、過去の戦争への痛切な反省と、戦後70年を経て日米がその過去を克服して強固な同盟関係を築き上げてきた歩み、戦後の繁栄を生んだ我々の共通の価値を世界に根付かせるためにもTPP交渉を日米が主導していかなければならないこと、そして、農業改革等の各種改革、「積極的平和主義」に基づく国家及び人間の安全保障等様々な問題を総理自ら心を込めて500名を越える連邦議員、招待客そして、メディアを通じて米国民に語りかけ、大きな感銘を与えました。「米国が世界に与える最良の資産、それは、昔も、今も、将来も、希望」です。まさに、日米同盟は、「希望の同盟」です。



上下両院合同会議における安倍総理の演説のリンク

<動画>

<http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg11689.html?c=01>

<演説原稿>

(日本語版) http://www.mofa.go.jp/mofaj/na/nal/us/page4_001149.html

(英語版) http://www.mofa.go.jp/na/nal/us/page4e_000241.html

第278話：ベル・アイル島の桜

デトロイトと対岸のカナダのウインザーの両都市の間をデトロイト川が流れていますが、その中にデトロイト市に属するベル・アイル島があります。この島には、デトロイト市と豊田市との姉妹提携30周年を記念し、豊田市とデトロイト日本商工会（JBSD）が1994年に寄贈した100本の桜があります。その後、害虫のために枯れた木もあるようで、昨年11月に新たに120本近くの桜がボランティアによって植えられたり、従来の木と取り替えられたりしました。桜の保存のために市当局やボランティアが尽力して頂いたことに感謝します。他方、かつて日本が友好親善のために寄贈した歴史が十分関係者に認識されていなかったのか、昨年11月の新たな植樹活動について、日本総領事館や豊田市、JBSDには事前連絡がなく、植樹を実施したことが地元の新聞報道で報じられて初めて我々の知るところとなったのは、少し残念でした。また、2012年からベル・アイル島でのカーレ・レースが復活し、その設営準備と花見シーズンが重なってしまい、桜祭りを行うことができないのも残念です。5月4日に訪問した際は、桜の花は満開でした。ベル・アイル島の桜が再び日本とデトロイトの友好のシンボルとして再認識されることを切に願っています。



第 2 7 9 話：ホーランドのチューリップ祭り

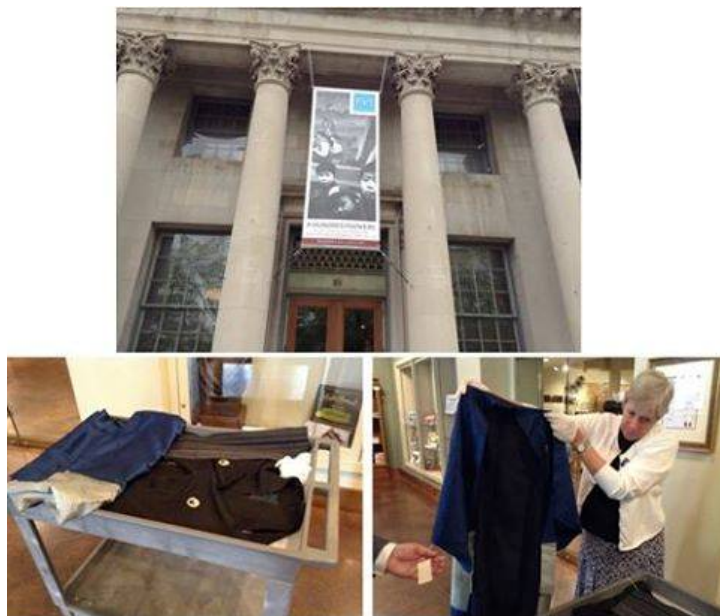
5月6日、今年もミシガン州ホーランドで開催されたチューリップ祭りに招待を受けて参加してきました。昨年は冬が厳しかったせいか、十分チューリップを堪能することができませんでしたが、今年は、天候に恵まれ街中の通り沿いに各色のチューリップが所狭しと咲いていました。ダイクストラ市長、スナイダー知事、地元選出のホイゼンガー連邦下院議員、オランダ総領事、メキシコ領事等数百人を招待した昼食会が、ホープ大学体育館で行われ、午後、何千・何万もの観客の前で市内パレードがあり、我々夫妻も車に乗って沿道に手を振りました。市長夫妻には先週公邸に来て頂いて親しくお話をした直後でもありましたので、このチューリップ祭りは特別でした。市長は夏には長年住んだホーランドを離れ、シカゴ郊外で大学の学長になられるそうです。昨年に続き今年も案内をして頂いたクリス・スティーブソンさん、本当にありがとうございました。



第 2 8 0 話：ホーランドの美術館と最初の日本人留学生

5月6日、チューリップ祭りに参加するためホーランドを訪れた際、午前中の時間を利用して市立美術館を訪問し館長さんの案内で展示品を見学しました。1階にはホーランドの歴史が展示され、その中には第二次大戦中の西太平洋での日本軍との戦いに関する展示もありました。2階には17世紀を中心としたオランダ美術や家具等が展示され、レンブラントのスケッチもありました。また、中国の1950年代の「百花斉放」時代に訪中したカメラマンの貴重な特別写真展も催されていました。そして、我々が訪問するという事で、特別な所蔵品を取り出して見せて頂きました。それは、1870年に最初にホープ大学に留学した3人の日本人留学生の一人（小諸出身）である Ryaso Tagawa という人物が、当時の

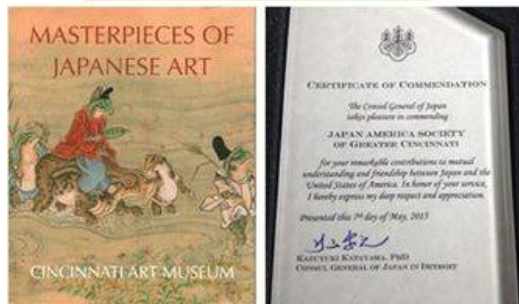
学長に贈った着物でした。保存状態が良く、とても140年以上前のものとは思いませんでした。ホープ大学は、1851年に開学したキリスト教系の大学で、明治学院大学とも留学生の交換を行っています。このようなところにも日本との繋がりがあるのを知って嬉しくなりました。



第281話：グレイター・シンシナティ日米協会の桜祭り

5月7日、シンシナティ美術館で、地元日米協会主催の桜祭り行事が約100名の出席者を得て盛大に行われました。我々夫妻も招待を受け、デトロイトから車で片道4時間半の道のりを日帰りで行って来ました。つい3週間前には、トニー・ウェブ会長他ボード・メンバーに公邸に来て頂き、夕食をとりながら楽しく意見交換させて頂いたばかりです。美術館では、キュレーターのハウメイ・ソン氏の尽力により、所蔵している日本の美術作品の特別展示、

「Masterpieces of Japanese Arts」が8月末まで6ヶ月間開催中で、食事会の前にそれらの作品を堪能しました。日本語を学ぶ高校生が一生懸命日本語で作品を説明してくれました。また、食事の後には太鼓の演奏も。支援を頂いた各企業の皆様にも感謝申し上げます。日米協会の要請で、平安時代の日本文化についての話を仰せつかり、学生時代、もう少し教養を身につけるべきであったと後悔しています。また、この機会を利用して、グレイター・シンシナティ日米協会の25年以上の長年にわたる日米交流と親善への貢献に対して、私より、総領事表彰をさせて頂きました。



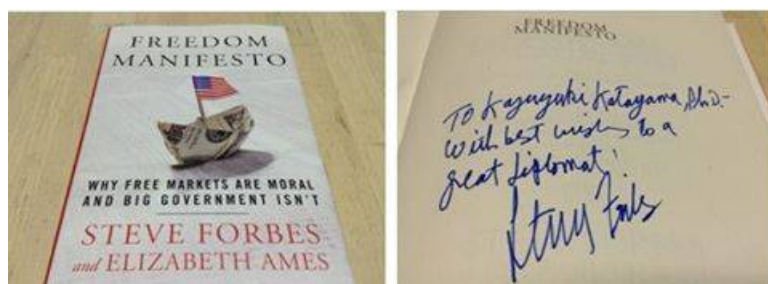
第282話：いけばなインターナショナル・デトロイト支部50周年

5月8日、いけばなインターナショナル・デトロイト支部（チャプター85。ローレン・ポール会長）の50周年記念行事が郊外の教会で行われ、我々夫妻も 出席し、私からお祝いの言葉を述べるとともに、同支部が長年、いけばなという日本文化を通じてコミュニティーの交流活動に貢献してきたことを称え、総領事 表彰を行いました。また、50周年を記念して、ノース・カロライナから池坊流の鈴木笑子教授を招聘し実演が行われました。この記念すべき行事に、本来最も 大きな貢献者として参加すべき人がいないのは本当に寂しいことです。以前、デトロイト支部会長を務め、昨年米寿をお祝いするとともに、外務大臣表彰を授賞 されたトシコ・シモウラ氏は、日本滞在中の2月末に突然亡くなりました。戦時中、収容所生活も経験されたシモウラ氏のような方々の献身的な活動がチャプター85をここまで育ててきたのだと思います。50周年をお祝いするとともに、シモウラ氏に改めて追悼の意を表したいと思っています。



第283話：スティーブ・フォーブズ

長者番付や世界企業ランキング等で世界的に有名な経済誌「フォーブズ (Fobes)」の会長兼編集長、スティーブ・フォーブズ氏を囲んだ少人数の朝食会 が5月9日、デトロイト郊外のバーミングダムで行われ、モウドギル・ローレンス工科大学学長の招待で私も出席させて頂きました。フォーブズ氏が同日行われた 同大学卒業式の主賓として招待された機会にこの朝食会がアレンジされました。フォーブズ氏は、1996年と2000年の大統領選挙の際、共和党の候補者の 一人として予備選挙に参加したこともあり、話の中心は2016年の大統領選挙でした。内容については事柄の性格上差し控えますが、これから、長い米国の政治の季節が始まります。なお、フォーブズ氏は年に2, 3回は訪日されるそうです。



第284話：今シーズンのタイガース初観戦

5月9日、今シーズン初めてコメリカ・パークに足を運び、タイガースの試合を観戦しました。相手はカンザスシティ・ロイヤルズ。1回表、先頭打者にいきなりホームランを打たれ、不吉なスタートでした。途中何度かチャンスがありましたが、生かし切れず、結局2対6で負けてしまいました。試合前は、タイガースがアメリカン・リーグ中地区で首位でしたが、逆転されロイヤルズを追う立場になりました。まだ、ペナント・レースは始まって1か月、今後を期待しましょう。



第285話：共和党の歴史とミシガン州ジャクソン

共和党は、1854年に民主党員によって議会に提出された「カンザス・ネブラスカ法案」に反対する良心的ホイッグ党員と自由土地民主党員による奴隷制反対連合に起源を持つと言われています。カンザス・ネブラスカ法案は、新たに設置されるカンザス及びネブラスカ両準州での奴隷制採用に道を開く内容を持つものでした。同年3月にウイソコンシン州リボンで奴隷制反対派の集会が開かれ、新たな政党名を「共和党」とすることが提案され、同年7月6日、ミシガン州ジャクソン近郊で最初の州規模の共和党大会が開かれ、初めて党綱領及び候補者名簿の採択が行われたそうです。共和党創設の時期にミシガン州も大きく関わっていた訳です。



第286話：ワインズバーグ・オハイオ

オハイオ出身の作家シャーウッド・アンダーソンの作品の一つに「ワインズバーグ・オハイオ」（1919）があります。オハイオ州の架空の田舎町ワインズバーグを舞台にした22編の短編からなる小説で、この作家が有名になるきっかけとなった作品です。日本においても早くも1933年には、「ワインズバーグ物語」として翻訳出版されています。講談社文芸文庫の「ワインズバーグ・オハイオ」（小島信夫・浜本武雄訳）の解説によれば、「ヨーロッパ文学から離れて、土着派のマーク・トウェインなどと併せて、アメリカ文学として独立した画期的作品。…ヘミングウェイ、フォークナーなどに多大な影響を与えた。…人々の生活、精神の内面を描き、現代人の孤独や不安といった現代文学の主要テーマをアメリカ的背景のもとにとりこんだ」というアメリカ文学史上重要な位置を占める小説です。オハイオにある田舎町を想像しながら読んでみて



は如何でしょうか。

第287話：シンシナティと「武士の娘」

越後長岡藩の武士の娘として生まれた杉本鉞子（すぎもとえつこ）（1873－1950）は、婚約していた貿易商の杉本松雄と結婚するために、1898年、シンシナティに渡ります。ウィルソン家にお世話になりながら、通算12年をそこで過ごすことになります。娘二人に恵まれますが、夫の突然の死や一時帰国等を経て子供の教育のために再び米国に戻り、NYのコロンビア大学で日本語や日本文化を教えます。1925年に英語で出版した自伝「A Daughter of the Samurai」（武士の娘）は、当時、フィッツジェラルドの「偉大なるギャッビー」やヘミングウェイの「日はまた昇る」とともにベストセラーとなり、後に7カ国語に翻訳されたそうです。現在の日本でそれほど知られていないのは残念です。シンシナティで知り合ったウィルソン夫妻の姪であるフローレンス・ウィルソンとは、日本及び米国で苦楽を共にし一生の恩人となりました。現在、杉本夫妻とフローレンスは青山墓地に隣同士で眠っているそうです。近く、NHKの番組で鉞子とフローレンスの絆が放送される計画もあると伺いました。



第288話：ミゲル・カブレラ

5月13日、デトロイト経済クラブが主催する毎年恒例の昼食会がありました。これには、タイガースの主立った選手、監督、ジェネラル・マネージャー、オーナーが顔を揃えます。選手が各テーブルに座りますが、私のテーブルにはなんとミゲル・カブレラが。ベネズエラ出身の選手で、2008年のシーズンからタイガースで活躍しています。2012年には、三冠王を達成しました。これは、タイガースではタイ・カップ以来103年ぶり、MLBでも45年ぶりだそうです。通算安打は2,200本を越え、ホームランも400本にあと少しです（13日現在396本）。耳にピアスをして、蝶ネクタイを締めたなかなかおしゃれな出で立ちでした。前日勝利したせいか、選手はみんな明るかったのが何よりです。



第 2 8 9 話 : CAPA と APACC の行事

以前紹介したとおり、5月にはアジア太平洋系米国人月間です。その関連で、15日及び16日にそれぞれ CAPA（アジア太平洋系米国人協議会）及 APACC（アジア太平洋系米国人商工会）の年次行事がありました。前者は、アジア太平洋系各民族の文化行事で、今年は日本及び日系を代表して太鼓とオペラ蝶々夫人の素晴らしい披露もありました。後者はブラック・タイ又は民族衣装の華やかなディナーで毎年活躍しているアジア太平洋系米国人をゲスト・スピーカーに招いていますが、今年のゲストは、日系のビジネスマンで IWグループの創業者ビル・イマダ氏でした。日本人の理事も最近加わりました。当地は、残念ながら日系人が余り多くありませんが、昨年と比べて、このようなアジア太平洋系の活動に対して日本のプレゼンスが増したのは喜ばしいことです。JBSD（デトロイト日本商工会）もアウトリーチを従来以上に活発化しています。私も、パンフレットにお祝いのメッセージを寄せたほか、当日は、州選出議員他と共に現場で紹介して頂きました。



第 2 9 0 話 : 松山英樹選手との朝食会

5月19日、オハイオ州ダブリンにある Muirfield Village Golf Club でダブリン市主催の松山英樹選手との朝食会が開かれました。松山選手は、昨年ジャック・ニクラウス設計のこのゴルフ場で開かれたメモリアル・トーナメントで見事優勝しました。その際にギャラリーに日本人が多いのにびっくりしたそうです。それもそのはず、ダブリンは、2千名以上の日本人が住むオハイオ最大の在留邦人居住都市です。今年のメモリアル・トーナメントを2週間後に控えるこの時期に地元の日米関係者との交流のために来て頂き感謝します。松山選手にとってもこのような触れ合いの機会はこれまで余りなかったようです。フロリダを拠点に米国ツアーで転戦している松山選手ですが、今年のマスターズでは11アンダーで単独5位と活躍を続けています。当日は、キーナン市長、キンズラー日米協会会長他大勢の方が松山選手の応援に駆けつけました。松山選手へのインタビューを挟んで楽しいひと時を過ご



しました。

第291話：ジェラルド・フォード図書館

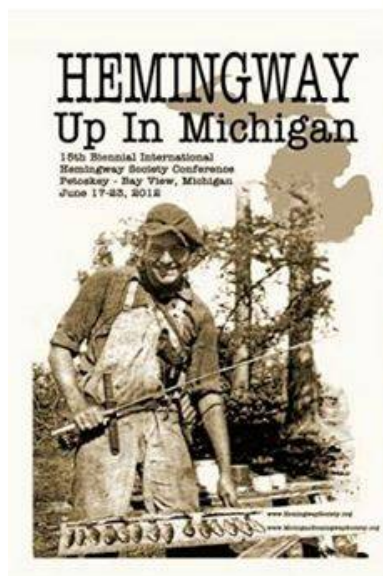
歴代米国大統領は、任期終了後、縁のある場所に自分の名前を付した記念図書館を建てます。これは、フランクリン・ルーズベルト大統領が、歴代大統領に関連する公文書を残すために始めたもので、1955年に法制度化されました。現在全米14カ所にあります。オバマ大統領も最近シカゴに建設することを決めたことが報道されていました。ミシガンは、第38代大統領ジェラルド・R・フォードゆかりの場所であり、出身大学のミシガン大学(アナーバー)に図書館が、また、育ったグラント・ラピッズに博物館があります。2つに分かれているのはここだけのようです。博物館の方は昨年訪れたので、5月22日、図書館を訪問しました。この図書館は、1981年に開館しました。フォード大統領夫妻の生い立ちや、ニクソン大統領辞任を受けてフォードが大統領に就任した1974年から77年までの大統領及びホワイトハウスの関連文書やインタビュー、記録等が保管されています。



第292話：ヘミングウェイとミシガン

アーネスト・ヘミングウェイは、シカゴ郊外のオークパークに医師の父親と声楽家の母親の間に長男として1899年に生まれました。青少年時代、家族は夏になると、ミシガン湖を挟んで対岸のミシガン州ペトスキ近くのワルーン湖畔の別荘にやってきて過ごしたそうです。ヘミングウェイといえば、私の中では、第一次大戦やスペイン内戦の際に欧州に出かけて行ったり、「失われた世代」として1920年代のパリ左岸のモンパルナス辺りで貧しいながらも夢多き生活を送ったイメージや、フロリダやキューバでの海の男の印象が強いのですが、北ミシガンでの若い頃の思い出もヘミングウェイの人格を形成するのに少なからず影響を与えたようです。メモリアル・デーの3連休を利用して、デトロイトから西北に車で3時間半ほどのところにあるゆかりの地を訪問しました。ホートン・ベイのジェネラル・ストア(「Up in Michigan」に出てきます)、ペトスキの歴史博物館(元駅舎)、ペリー・ホテル(19世紀末に建てられたホテル。ヘミングウェイも宿泊)、シティー・パーク・グリル(ヘミングウェイがビリヤードを楽しんでいたレストラン)、ポッターズ・ルーミング・ハウス(ヘミングウェイが一時下宿していた家)、ハーバー・スプリングスの駅舎跡など、ヘミングウェイの足跡を辿りました。特にヘ

ミングウェイ・ファンという訳ではありませんが、現在公開されているヘミングウェイの旧居3つ（オークパーク、キューバのサンチャゴ・デ・パウラ、そしてフロリダ州キーウエスト）の内、これまで前二者を訪れることができて、ここミシガンとまた接点を持てしく思います。



できました。そこでヘミングウェイとまた接点を持てることができ嬉

第293話：メアリーズヴィル友好庭園のオープニング

5月29日、オハイオ州メアリーズヴィルの市庁舎向かいにあるパートナーズ公園の一角に同市と埼玉県寄居町の友好庭園が正式にオープンし、ゴア市長の招待を受けその式典に出席しました。地元からはこの地域を選挙区とするジョーダン連邦下院議員他多くの関係者や市民が、寄居町からは井部副町長他2名の代表団が参加し、舞台での音楽や歌のパフォーマンスや各種食べ物の屋台が出て、夜遅くまで賑わっていました。メアリーズヴィルには30年以上前からホンダの自動車製造プラントがあり、寄居町にも数年前にホンダの工場が進出しています。オハイオ州と埼玉県は姉妹州・県ですが、メアリーズヴィルと寄居町も友好都市関係を発展させています。ジョーダン議員の選挙区内には、56の日系企業事業所が約2万7千500名の雇用を生み出しています。ゴア市長他市の代表団は、今年9月に東京で開かれる中西部会にも出席予定です。



第294話：オハイオ沖縄友の会20周年

5月30日、コロンバスで「オハイオ沖縄友の会」(カズミ・マカウスキー会長) 20周年記念行事が行われ、同会長から事前に祝賀メッセージをお願いされたのですが、直接現場でお祝いを述べたく出席してきました。オハイオ沖縄友の会は、沖縄出身者を中心に、2世、3世に沖縄文化を引き継ぎ、地域との交流を図るために1995年に設立されました。現在会員は340名近くです。当日は、太鼓、三線、武道、歌、踊りと盛り沢山のプログラムで、シカゴ、ワシントン、テキサス、カリフォルニア等遠路からも多くの参加者を得て、数百人の集まる賑やかな集いでした。途中、翁長沖縄県知事の祝辞が紹介されたあと、私も挨拶させて頂きました。沖縄と私の出身県広島は、日系アメリカ人社会でも二大グループと聞いています。私自身沖縄は20年前に出張で一度行ったきりですが、個人的な思いの強い場所です。来年10月には那覇で第6回世界ウチナンチュ大会が開催予定とのことです。



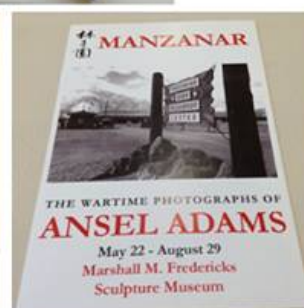
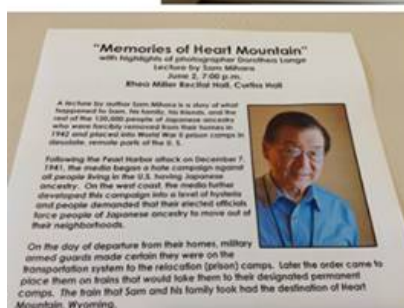
第295話：ニューアーク日本庭園の再開式典

オハイオ州ニューアークに50年前に作られた日本庭園が1800エーカー（7km²）の広大な森林公園（Dawes Arboretum、1929年設立）の中にあります。当時京大で造園学を学んだ中村一（まこと）講師に設計を依頼し、1965年の開園式には武内龍次駐米大使が出席して挨拶したことが地元紙の一面に報じられていたくらいなので、日本庭園はとても珍しかったのでしょう。今回、50年の風雪により、90年代初めについて2回目のリノベーションが必要となり、なんと50年前に設計した中村京大名誉教授に再びアドバイスを請い、同名誉教授は昨年直接指導のために再訪されました。私は、5月30日、再開式典に招待を受け出席し、挨拶とテープカットをしました。100名近くの支援者や市長さんが出席しましたが、その中には50年前の開園や当時滞在していた若い頃の中村教授を懐かしく語ってくれる地元の人もいて感動しました。このような歴史を有する日本庭園の再開式に日本を代表して出席できてとても光栄です。今後、日本文化紹介や地元との交流の象徴となるよう邦人社会とも協力して日本庭園を盛り立てて行きたいと思ひます。



第296話：日系人収容所写真展

5月22日～8月29日の期間、サギノーにあるサギノー・ヴァレイ州立大学マーシャル・フレデリックス彫刻美術館にて、写真家アンセル・アダムズによるマンザナル日系人収容所の1943年当時の写真50枚を中心とした特別展示会が開催中です。この関係で、美術館がワイオミングのハート・マウンテン収容所生活を体験した日系アメリカ人サム・ミハラ氏を講演のために招聘し、6月1日にバシヤンド大学学長主催の夕食会が自宅で行われました。我々夫妻も招待されたのでその機会に写真展を見学しました。当時、西海岸に住む約12万人の日系人が、10カ所の収容所での生活を強いられました。1943年頃はある程度落ち着いてきたのか、展示写真の中には収容所の日系人に対する求人広告があり、その中に現在私が住んでいる総領事公邸のあるミシガン州ブルームフィールド・ヒルズでの家事手伝いの求人があったのには驚きました。米国政府は、1988年、戦時中の行為を合衆国憲法に保障された市民の権利に違反したとして公式に謝罪、一人当たり2万ドルの補償を日系米国人関係者に対して行いました。サギノー方面に行かれる機会があれば、是非この写真展に立ち寄って下さい。戦後70周年の今年、日米関係の不幸な時期を振り返る観点からも意義深いと思います。



第297話：ミシガン・南西オンタリオ日米協会25周年

6月9日、デトロイト美術館（DIA）リベラ・コートにてミシガン・南西オンタリオ日米協会（JASMSO）25周年を祝う記念行事が特別ゲスト佐々江賢一郎駐米大使の出席を得て盛大に行われました。当日は、ブラウンリー会長、アーチャー氏（元デトロイト市長。旭日中綬章授賞）、リトル氏等会長経験者やガルガロDIA会長、バルーア・デトロイト商工会議所会頭、関係企業代表、カナダ領事等約150名の参加を得ました。JASMSOは日米加3カ国にまたがる交流を促進している点で非常にユニークです。当地では総領事館もJASMSOと二人三脚で各種の文化交流活動を協力しながら実施しています。大使からは、安倍総理の最近の訪米を踏まえた日米関係について講演をして頂きました。私の方からは、JASMSOの長年に亘る友好親善への貢献に対して「総領事表彰」をさせて頂きました。また、大使には、行事に先立つその日の午後にデ



トロイト市再開発の現状を視察頂きました。デトロイトが今、元気に生まれ変わろうとする姿を大使にも実感してもらえたのではないかと思います。

第298話：マイヤー庭園・彫刻公園日本庭園のオープニング

ミシガン州グランド・ラピッズにあるマイヤー庭園内に日本庭園がオープンし、6月10日夕刻、関係者約550名を招待した大規模の記念ディナーが行われました。また、それに先立つ当日午後に日本庭園内に完成した立派な茶室を使用し、ミシガン州と姉妹県にある三日月滋賀県知事が裏千家の方々と共に茶会を主催され、我々夫妻もご相伴にあずかりました。滋賀県産抹茶、信楽焼の器や花瓶、地元茶人の書等を知事自らが紹介する中、マイヤー家他地元関係者、佐々江駐米大使、スナイダー・ミシガン州知事等の関係者が茶会を楽しみました。

その後は、ホイチ・クリス氏設計の日本庭園を散策。同公園内の施設では、ちょうど滋賀県の貴重な文化財の特別展”Splendors of Shiga”も行われており、まさにミシガンと日本の関係の深さ・広さを象徴する行事でした。今後、この中西部最大級の日本庭園が地域の日米文化交流の一大中心となるよう、我々も邦人社会・地元社会と協力してもり立ていきたいと願っています。皆さん、是非、この新しい日本庭園を訪問下さい。



第299話：デトロイト・シティFC

デトロイト市には、メジャー・リーグ・サッカーを1部とすると4部リーグに属しているデトロイト・シティFCがあります。6月17日、オーナーの一人である Sean Mann 氏の招待を受け、夜に市内の天然芝グラウンドで試合を観戦しました。彼とは、毎年10月に行われる領事団サッカー対抗試合の関係で知り合いました。デトロイト・シティFCのニックネームはLe Rouge (ル・ルージュ)。伝説で赤という意味ですが、デトロイトがもともと仏移民に端を発していることにきています。現在ル・ルージュは中西部地域グループでトップを走っています。当日はコロンバスのCrew College Programとのエキシビジョン試合でした。4大プロスポーツ（野球、アメリカンフットボール、バスケット、アイスホッケー）に比べるとサッカーは米国内ではまだマイナー感がありますが、1994年にFIFAワールドカップが米国で開催され、また、女子ナショナル・チームはご承知の通り世界トップの実力をもっています。子供たちの間でのサッカー人口は非常に高く、米国でもいずれ人気の



スポーツになる日が来るのではないかと思います。ちなみに、試合の方は、前半早々にル・ルーージュが先制しましたが、相手方が3点を連取し結局1対3で負けてしまいました。それでも素晴らしい試合と熱心なサポーターの応援を堪能した夜でした。

第300話：米日カウンスル

米日カウンスルは、日米関係をグローバルな視点で強化するための日系アメリカ人主導の非営利団体で、2009年に設立されました。2012年からは、トモダチ・イニシアチブの実施を支援するために日本にも米日カウンスルが設立されました。トモダチ・イニシアチブは、東日本大震災の後、その復興を支援する観点から米日カウンスルと在京米国大使館の官民パートナーシップとして生まれ、次代の日米リーダー育成のための教育・文化交流を推進しています。6月18日、アイリーン・ヒラノ理事長（故ダニエル・イノウエ上院議員夫人）が用務でデトロイトに訪れた機会に、トモダチ・イニシアチブ関係者や当地日系人、日本人ビジネス・コミュニティ代表を公邸に招待して懇談しました。デトロイト地域の日系リーダーの人たちと総領事館や在留邦人コミュニティとの関係がいろいろな場面で強化されつつあるのは喜ばしいことです。総領事館としてもこのようなネットワークを大事にしていきたいと思っています。



第301話：スロベニアのナショナル・デー・レセプション

6月19日、クリーブランド市庁舎ホールにて、スロベニア総領事主催のナショナル・デー・レセプションが行われました。スロベニアは、オハイオ州に唯一存在する外国領事館です。スロベニアは1991年、旧ユーゴスラビアから独立、2004年にはNATOとEUに加盟。2007年からはユーロを導入しています。日本は、2006年にスロベニアに大使館を設置、スロベニアの方は1993年に東京に大使館を開設、日本は、スロベニアの外交の要10カ国の1カ国に位置付けられています。人口200万人強の国ですが、両国間には大きな懸案もなく、友好関係を強化してきており、2013年には秋篠宮同妃両殿下のスロベニア御訪問も実現しました。ズマ



ウク総領事は、この度任期を終え本国に帰ることとなり、このレセプションは彼の送別会でもありました。昨年の天皇誕生日レセプションには、わざわざ3時間以上もかけてやって来てくれました。本国での活躍を祈念します。

第302話：アルデン・ダウ・ホーム&スタジオ

6月24日、世界最大級の化学メーカーであるダウ・ケミカルのお膝元ミッドランドにあるアルデン・ダウ・ホーム&スタジオを訪問しました。アルデン・ダウ（1904－1983）はダウ・ケミカルの創設者ハーバート・ダウの息子で建築家。短期間ではありますが、フランク・ロイド・ライトの下で見習いをしていたこともあるそうです。ここは、彼の仕事場兼自宅でした。当日は、フリーア・ハウスのウィリアム・コルバーン館長の紹介で、クレイグ・マクドナルド館長とボランティア・ガイドのランディ・カワキタさんが、丁寧に館内を案内して下さいました。1936年に作られ、その後増築したもので、建物の中は複雑に入り組んでいますが、人工の池を配置し、自然の中に溶け込んだ落ち着いた佇まいをしています。1989年には国の歴史的ランドマークに選ばれています。アルデン・ダウには日本の友人もあり、日本文化への関心も高く、日本関連の書籍や美術品が部屋に残されていました。彼の設計にも日本の要素が多少反映されているような気がします。ミッドランドは豊かな自然に囲まれたとても素敵な町です。皆さん、是非訪れて見て下さい。



第303話：藤田浩之氏への総領事表彰授賞

6月30日、クリーブランドで藤田浩之氏に対する総領事表彰授賞式を行いました。藤田氏は、早稲田大学在学中の1980年代後半に米国に留学、そのまま米国に滞在し、クリーブランドのケース・ウェスタン・リザーブ大学で物理学の博士号を取得。2006年には地元で医療機器開発製造会社QEDを設立しました。起業家として成功を収め、フォーブス等で新興企業起業家として選ばれ、オバマ大統領の一般教書演説の特別ゲストとしても招かれる栄誉を受けました。また、ブリツカー商務長官顧問を務めたりして活躍されてい



る他、クリーブランド管弦楽団やクリーブランド財団の理事等も務められ、社会貢献活動が続けられています。今回、藤田氏の長年にわたる日本と米国、特にクリーブランドとの間の友好親善交流への貢献に対して、総領事表彰を行ったものです。藤田氏が地元クリーブランドで出会い、人生に大きな影響を与えた素晴らしい友人たちが大勢授賞式に来て頂きました。藤田氏の生き方については、御著書「道なき道を行け」（小学館 2013）に綴られています。ご関心ある方は是非お読み下さい。藤田さん、引き続きコミュニティー活動及び日米交流のためにご活躍下さい。

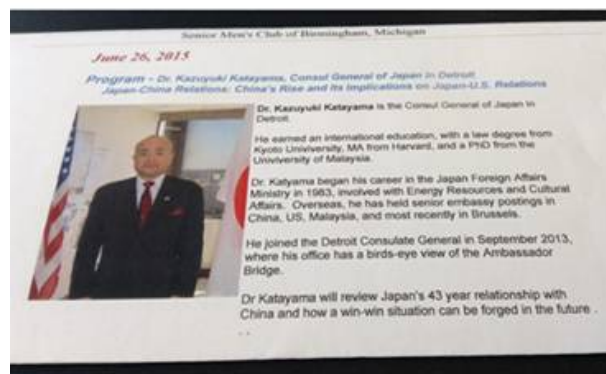
第304話：経団連ミッションのオハイオ訪問

今般、経団連ミッション3グループが米国を訪問されましたが、その内の1グループ（団長：石原邦夫経団連副会長、日米協議会会長、東京海上日動火災保険 相談役）約25名のミッションがオハイオを訪問され、7月1日、州都コロンバスのステイト・ハウスにてメアリー・テイラー副知事（共）及びジョイス・ベティ連邦下院議員（民）とそれぞれ会見した他、地元マスコミのインタビューを受け、経済開発公社であるJobsOhio関係者との懇談を行いました。副知事及び議員からは日本企業の投資に対して深甚なる謝意表明がありました。ジョン・ケーシック知事との会見は都合により実現しなかったのは残念ですが、同知事は7月下旬に大統領選挙への参加を正式に表明すると報じられています。私は、デトロイトから事前にコロンバスに赴き一行をお迎えするとともに、会見の前に、一行に対して最大外国投資国である日本とオハイオの関係やオハイオの投資先としての魅力、今後の課題等についてブリーフィングをさせて頂きました。政界・官界要路の当地への出張が少ない中で、経団連の重要なミッションがオハイオに立ち寄って頂いたことは、こちらで働いている日系企業関係者及び総領事館としても大きな励みになります。このミッション派遣を機会に、経済関係を含め両者の関係が更に発展していくことを期待したいと思います。



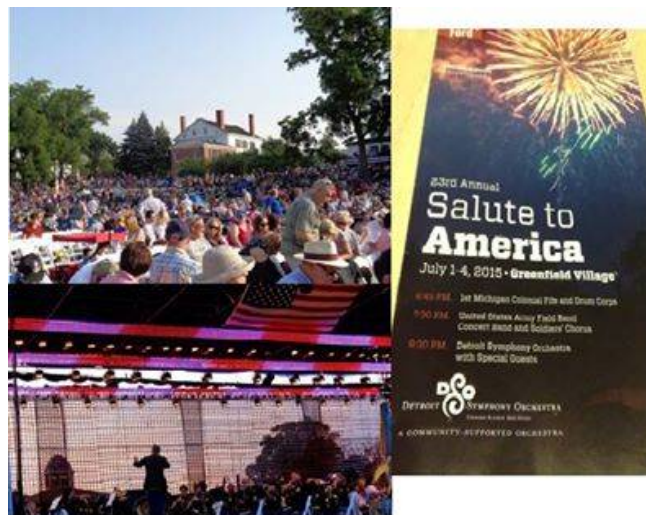
第305話：バーミングハム・シニアメンズ・クラブでの講演

6月26日、公邸から近いバーミングハムの町にあるシニアメンズ・クラブの昼食講演会にスピーカーとして招かれ、約150名の参加者に対して、「日中関係：中国の台頭と日米関係に与える意味」と題して講演しました。同クラブは1957年に設立されました。現在約750名の主に退職した男性が会員となっています。バーミングハムは、車社会のミシガンにあって、アナーバー等とともに歩いて楽しめる数少ないシックな街並みをもつ地域の一つです。滋賀県栗東市と姉妹都市関係にあります。当日は時間が限られ、十分な話と質疑応答ができず残念でしたが、講演後、何人かの参加者から最近の日中関係や、東シナ海・南シナ海 の情勢、東アジアの安全保障環境、米国のコミットメント等についていろいろな質問を受けました。



第306話：独立記念日の野外コンサートと花火

7月4日は、米国建国239周年。前日、ディアボーンにあるフォードのグリーン・フィールド・ヴィレッジで行われた野外コンサートと花火のタベ「Salute to America」を見に行きました。コンサートは、デトロイト交響楽団と陸軍軍楽隊の合同によるもので、椅子席や芝生を埋めた観客は約9千名に上りました。天気にも恵まれ夏の夜を音楽と花火で楽しく過ごしました。ベルギーにいた頃は夏郊外のシャトーで催された野外コンサートや野外オペラによく行きました。米国でも、前回勤務の際に、ボストン郊外のタングルウッド野外音楽祭やワシントン郊外の日産パビリオン（当時の名称）でのフォーク・コンサートを楽しんだ記憶がありますが、この夜のコンサートはまた格別でした。



第307話：フォード・ハウスでの野外コンサート

先週のグリーンフィールド・ビレッジに引き続き、夏を彩る野外コンサートと花火のタベに行ってきました。今回は、デトロイト郊外セントクレア湖畔にある 広大なフォード・ハウスでのデトロイト交響楽団による映画音楽に使われたクラシックの野外演奏。フォード・ハウスは、ヘンリー・フォードの息

子エドゼル・フォードとエレノア・フォード一家が 1920 年代末に家建てて子供を育てた場所で、今は博物館と公園になっています。この日も天候に恵まれ、芝生の上でピクニックとコンサートを楽しんだ後の締めは夜空に乱舞する花火。夏の風物詩を堪能しました。



第 308 話：アメリカン・フットボール世界選手権

第 5 回アメリカン・フットボール世界選手権が、7 月 9 日～18 日の間、オハイオ州カントンで開催されています。カントンは、フットボールの殿堂があります。NFL の前身である American Professional Football Association がここで創設されたこと等が背景にあります。当初、スウェーデンのストックホルムで行われる予定が急遽変更となり、今回の参加チームは 7 カ国（日、米、メキシコ、仏、豪、韓国、ブラジル）と変則的ですが、過去日本は第 1 回と第 2 回で優勝しています。第 3 回からは、米国が参加し 2 回連続して優勝しています。米国チームは大学生から一線級とは言えませんが、それでも各国との実力差は大きいようです。7 月 12 日、日本チームの応援に出かけました。この日の対戦相手は米国。試合前に日本チームの選手・コーチ陣にお会いして激励し、主催者の招待により試合を観戦、ハーフタイムには ESPN ウェブ放送のインタビューを受け、日本でのアメリカン・フットボール人気についても少し紹介しました。試合終了後には当日の日米夫々の MVP にトロフィーを授与する役目を仰せつかりました。試合は、43 対 18 で米国が勝利しましたが、日本チームも善戦しました。



第 309 話：米国西海岸への旅行

米国に初めて赴任したのは 1986 年、今から 29 年前でした。ワシントンの大使館で手続を終え、スタンフォード大学のサマー・スクールが始まるまで 2 週間程時間があつたので、グレイハウンド・バスで何泊かしながら大陸を横断しました。その際に、立ち寄ったのがグランド・キャニオンやサンフランシスコの町でしたが、今回、夏休みを利用して久しぶりに再訪しました。まだ 20 代半ばの若い時代で冒険精神は旺盛でありながら、ファースト・フード店での注文もなかなか覚束ない程度の英語力に新たな生活への不安もいっぱい頃を思い出し、懐かしさがこみ上げて来ました。同時に、多少の冬の厳しさ

を我慢すれば、ミシガンの生活環境や自然環境が素晴らしいことも改めて感じました。あと2週間程でこの生活ともお別れだと思うと本当に寂しい気持ちです。



第310話：デトロイト市長の訪日

ダガン・デトロイト市長夫妻一行が7月下旬、訪日されました。その実現のために側面支援してきた総領事館としてもとても嬉しく思います。豊田市との姉妹都市提携55周年記念行事（7月26日）出席のため、同市を訪問するとともに、東京では、宇都（うと）外務政務官との会見（28日）、在京米国大使館主催 昼食会に出席、その他、工場視察や記者会見・インタビュー等の忙しい日程をこなし、訪日は成功裏に終了しました。市長就任後初めての外国訪問に日本を選んで頂いたことに、市長の日本のこれまでの貢献に対する感謝と今後の期待が表れていると感じました。デトロイト市再建の過程で、日本企業の市内への投資を如何に誘致できるかが我々にとっても今後の課題です。今回の訪日に当たっては、マッキノン副市長をはじめ、市政府関係者、日米協会、デルタ航空等の関係者の支援も頂きました。



第311話：東北大学とケース・ウェスタン・リザーブ大学の学術協力協定調印式

7月29日、クリーブランドにあるケース・ウェスタン・リザーブ大学（CWRU）において、同大学と東北大学とのデータサイエンス等の最先端分野の学術協力協定の調印式が、スナイダー学長及び里見学長により両大学関係者同席の下で行われ、私も出席するとともに、挨拶を行い、また、署名式の立

ち会いを務めました。日本から下村文科大臣の祝辞も紹介されました。現在、文科省ではスーパー・グローバル大学プロジェクトの下、世界の代表的な大学と日本の大学との協力を積極的に推進しており、2020年までに世界のトップ100の大学に日本から10大学が入ることを目指しています。この協力協定もその一環と言えます。CWRUは15名以上のノーベル賞受賞者を輩出している世界的な大学であり、東北大学も5名の受賞者が卒業乃至研究に従事していました。私は、過去2年足らずの間に管内の大学を延べ43回、訪問し、講演や学長・副学長との会見、日本語科教師・学生との交流を行いました。今回のCWRU訪問が最後になりそうです。



第312話：JET参加者の壮行会

7月31日、その翌日に日本に向けて出発するミシガン及びオハイオ関係のJET参加者約50名の壮行会を公邸にて開催しました。約2年前に赴任して以降、JET参加者の壮行会及び帰国歓迎会は4回目で、残念ながらこれがデトロイト総領事として最後のJETレセプションになりました。毎回、この壮行会では、緊張の中にも日本での新たな生活への期待に胸を膨らませている多くの米国人青年を見ることができ、日本でやりたいことを熱っぽく語ってくれる彼らの目の輝きが忘れられません。今後数年間の彼らの日本滞在は、彼らの人生をも大きく変えるかも知れない貴重な経験となることだと思います。20代中頃に中国及び米国に留学した私自身の経験に照らしてもそう言えます。皆さん、日本で素晴らしい経験をして下さい。8月3日の東京でのオリエンテーションには、4年半前の東日本大震災で尊い命をなくしたJET参加者テイラー・アンダーソンの弟さんが参加されていたのをニュースで知り、本当に感動しました。



第313話：豊田市ジュニア・オーケストラ親善代表団の来訪

豊田市とデトロイト市との姉妹都市提携 55 周年を記念して、豊田市ジュニア・オーケストラのメンバー16名と関係者（団長：豊田彬子市国際交流協会理事長）がミシガンを訪れ、8月6日にはデトロイト交響楽団（DSO）のコンサートホールにてDSOの若手オーケストラと、また、8日には、ミシガン大学ヒル・オーディトリウムでパイオニア高校との合同演奏会がありました。4日、総領事公邸にて彼らの歓迎レセプションを日米の関係者を交え約80名で盛大に開きました。マッキノン副市長も駆けつけてくれました。次代を担う若者たちが音楽を通じて交流することは素晴らしいことだと思います。10年、20年経ったら、豊田市とデトロイト市は更にどのように発展しているのでしょうか、そしてこれら若者の将来を考えると希望が湧いてきます。

なお、7日、改めて副市長を往訪し離任挨拶をした際に、両市姉妹交流事業の柱である高校生の相互訪問実現につき長年にわたる貢献を称え、ローズ・ラブ市職員に対して総領事表彰を行いました。私が着任して6人（組織）目の受賞者です。



第314話（最終回）：離任レセプション

急な転勤辞令を受け8月13日に当地を離任、一旦帰国して22日に上海総領事として赴任することとなりました。もう1年はいるものと思っていたので非常に心残りです。デトロイト総領事としての2年近くの間、皆様から頂いたご支援とご協力に改めて感謝いたします。7日に公邸にて離任レセプションを開き、220名以上の方に出席頂きました。また、10日にはスナイダー知事に離任の挨拶をしました。

今回は、3回目の米国生活でしたが、中西部は初めての経験でした。日本と中西部（管轄地域ミシガン州・オハイオ州）との関係の重要性、日本企業をはじめとする在留邦人社会の地元貢献、デトロイト復活の胎動、米国社会の多様性と自助精神、そして何よりも価値を共有する日米同盟関係のかけがえのな

さを痛感した日々でした。

中国赴任は留学を含め5回目になりますが、毎回北京でしたので上海生活は初めてです。上海総領事館の管轄地域には6万2千名を越える在留邦人が居住し、2万社以上の日系企業が進出しています。また、在上海総領事館の査証発給件数は世界一で昨年は87.4万件、本年も前年の3倍近い伸びで増加中です。日中関係の政治的な難しさに加え、在留邦人や進出日系企業の規模の大きさに身が引き締まる思いです。

外務省同期の和田充広（わだ みつひろ）が後任の総領事です。私同様、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願いいたします。ミシガン及びオハイオの皆さん、本当にお世話になり有り難うございました。一生忘れることのない多くの印象深い思い出を胸にデトロイトを後にします。

